

最弱騎士の運命踏破

bear大總統

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

剣術の才も。魔力の才も。全てが誰よりも劣っている。心も弱く、技もなく、身体にも恵まれなかった。

伐刀者であるかどうかすら疑わしいと言われた。諦めろと誰もが言った。

そんなすべてに彼は——百鬼紫苑はだからどうしたと吐き捨てる。才能がない？ 技が身に付かない？ 身体が脆弱？

それがどうした。そんなもの《努力》で覆せ。天才が努力しているならそれ以上に努力しろ。

凡才が血が滲む程研鑽を重ねるのならそれ以上に研鑽を重ねろ。

決意を持って突き進め。後ろなど要らない。自分には前さえあればいい。

最強になるため。最強でありつづけるために。

世界に自分の憧れこそが、世界最強だと示すのだ。

※基本は日曜日の0時更新です スランプになれば話は別

一章

目次

第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
263	255	238	226	216	201	191	183	167	154	144	137	126	114	103	90	77	66	55	37	20	10	1

閑話

第24話

二章

第25話

第26話

第27話

第28話

第29話

第30話

第31話

276

294

308

319

335

350

362

374

一章 第1話

春。

それは人々の新たな日々が始まりを告げる季節だ。桜の花弁は風に乗って、人々を歓待するように踊っている。そんな中、スーツの麗人——新宮寺黒乃は校門の前で紫煙を吹かす。

「……さて、そろそろ時間だとは思うが……」

彼女はこの学園——破軍学園の理事長を務める女性だ。そんな彼女自ら、わざわざ春期休暇期間中に校門の前で出張ってきているのは、とある人を待っているからである。

それは彼女の友人であり、彼女が理事長を勤めるこの学園の臨時講師である西京寧々……ではなく、彼女と彼女の師——南郷寅次郎が自分に対して推薦してきた人物だ。

なきりしおん
(百鬼紫苑……か)

自分はその名前を聞いたことはなかったが調べてみれば、一度はこの学園に入学したこともあったが、そう日が経たずに自主退学をした。しかし一年後に上記の西京寧々の推薦（とはいっても、彼女が破軍学園の臨時講師を勤める際の交換条件として出されたものだ。認めなければ自分は講師を断ると新宮寺に言った）によって破軍学園二年に編入。

「——ツツツ?!」

彼について思索していたところ、あまりにもおぞましい剣気の暴風が彼女の側を通り抜けた。穏やかな風に揺られていた木々はへし折れんばかりに揺れ、そこで身を休めていた鳥たちが一斉に空へと——眼前に迫る脅威からいち早く逃げようと飛び立っていった。

彼女は半ば反射的に己が魔導騎士と呼ばれる所以の二丁拳銃型霊装——《エンノイア》と《プロパトル》を構え、殺気の原因にその銃口を向けた……が、それは杞憂に終わることになる。なぜならそれは、

「すみません、新宮寺理事長」

殺気を放った相手の手には武器は握られておらず、それどころか相手が頭を下げたからだ。

白く染まった短髪、その奥から覗くのは血色と闇のようなオツドアイ。身長は男性の平均身長よりも少々小さいだろうか、それでも衣服の下にはおぞましいという言葉が温く感じるほどの鍛練によって鍛えられた鋼の肉体があることを容易に想起させる。

この男こそが彼女の待ち人であり——現在日本に三名しかいない^{デスベラード}《魔人》が一人、百鬼紫苑だ。

《魔人》

それはその存在が稀少な伐刀者の中でも、さらに稀少な存在だ。通常の人間と伐刀者を区分するものは魔力と呼ばれるエネルギーをその身に宿しているか否かであるが、その総量は自身の可能性——いわゆる運命と呼ばれるものに決定づけられ、生涯不変とされている。しかしその運命を踏破し、魔力上限を引き上げた存在——それが《魔人》と呼ばれる存在だ。

そして彼の特異性はそれだけには収まらない。

(曰く、現在連盟が確認している中で最も総魔力量が少ない伐刀者……)

紫苑はその量が平均的な伐刀者の十五分の一なのだという。

前述の通り、魔力とは伐刀者にとっての可能性。RPGのキャラのレベル上限を思い浮かべてくれればわかりやすいだろうか。お互いがレベル1の時ならばいざ知らず、どれだけ鍛えようともレベル15で頭打ちの人間とレベル100まで自身の可能性が残されたもの、どちらが勝利するかを考えれば明白だろう。お互いが戦いの中で成長しようとしても、レベル15の者にはレベルアップの可能性が残されていないのだから、差は益々広がっていくばかり。

だが《魔人》化とはその上限を乗り越え、16にレベルアップしたようなものだ。運命という絶対不変のルールを破壊し、それに縛られる事がなくなった存在を《魔人》と呼ぶ。

ならば彼には、レベル上限という絶対的な壁を——自分には超えら

れなかった壁を打ち壊すに値する理由があるはずで……。

「……新宮寺理事長？」

白髪の少年——紫苑に声をかけられ気付く。自分が長い間、彼を放りっぱなしで思考の海に潜っていたことに。

「申し訳ありません。いきなり無礼なことをしてしまつて。重ねてお詫び申し上げます」

「……いや、いいさ。どうせ寧々の差し金だろう？ 大方、お前の強さをわからせてやれ……というところか？」

「わかるんですか？」
「付き合いが長いからな。それに、それなりに人を見る目はあるつもりだ」

伊達に一学園の理事長に就任はしていない。いきなり殺気を向けられたときならばともかく、すぐさま謝罪をしてきた事。加えてその声音で彼が本意でないことはわかった。ならばそれをけしかけた人間が背後にいる考えるのが自然だろう。

「こちらこそ急に呼び出してすまないな」

「それは別に構いませんが……まだ始業式は先では？」

「ああ。ヴァーミリオン皇国第二皇女、ステラ・ヴァーミリオンが今日来日することは知っているか？」

「……そういえばそんな事を寧々が言っていたような気がします」

ステラ来日のニュースを聞いて、寧々が騒いでいた記憶が微かにあった。その時の寧々は酪酊していて、構うだけ時間の無駄だと相手にしなかったのだが……。

「それならいい。彼女が来日した目的は我が校への入学——言わば留学でな。彼女をここまで案内する道中の護衛をしてもらいたいだ」
「……道中の護衛、ですか？ しかしそれならば理事長だけで充分では」

新宮寺黒乃。彼女もまた世界中に名を轟かせた騎士だった。

日本が所属する《魔導騎士連盟》——以下《連盟》——が主催する魔導騎士興行KOKにて元世界三位、おおよそ四つに分類される異能の中で最も稀少な因果干涉系能力《時間》を操る騎士。《世界時計》と

ワールドクロック

呼ばれた天才がステラを迎えるならば自分は必要ないだろうと紫苑は言うが、

「いや、そういうわけにもいかん。私はあくまでも彼女を歓待する役割で護衛はまた別に用意する。……ある程度外聞を取り繕う必要はあるんだ、お前には面倒をかけるがな」

「いえ。それは問題ないんですが……俺は、あまり護衛には向かないと思いますよ」

そう、紫苑は別に護衛を引き受けることそのものに問題があるわけではないのだ。紫苑を破軍学園に編入させるために寧々がかなり強引な手段を取ったと寧々から聞いていたので、それに対する負い目もある。しかし……紫苑には欠陥がある。しかも東京のような都市部で発露する致命的な欠陥が。

「その辺りは気にしなくてもいい。寧々から話は聞いているし、運転手にもちゃんと話を通して道は選んで貰っている。それに大した手間ではなかったしな」

とはいったものの、紫苑の欠陥は周りの人間が少しばかり注意してやれば特に問題にはならないものだ。新宮寺が言った通り通るルートさえ気を付けていればいいだけのものであるし、容易に避けられるもの。

ステラには不思議に思うかもしれないが、東京の案内も兼ねていると言えばとりあえずは納得して貰えるだろう。

「……わかりました。理事長が問題ないのなら、俺も特に言うことはありません」

「助かる。道中では私が理事長に就任したことでの変更点も話そうと思っていたからな。一応、入学式でも説明はあると思うが、聞いてくれ。直近でお前にも関係のあることだからな」

彼女の言葉に紫苑は頷き、一緒に黒塗りの高級車に乗り込んだ。それを確認した運転手が車を走らせる。

「さて、早速ではあるが私が掲げる方針は完全な実力主義、徹底した実践主義だ。魔力の総量など関係なく、その者の純粋な戦闘力のみを重んじる。……昨年のようなことはもう二度と起こさせん。その為

あの手のクズはすべて掃討した」

「昨年の事——それは紫苑が文字通り巻き込まれた事故というのは、実践教科を受講するための最低能力水準というありもしない規定を勝手に作られた事による授業からの閉め出しだ。

それはたつた一人の騎士を破軍学園から卒業させないための、日本の騎士社会における名家からの圧力であつたが、紫苑はその一人の騎士よりも魔導騎士としては劣っている。

だが彼は前述の通り日本国籍を持つ三人の《魔人》の一人という、非常に重要な立場にある。だというのに何故巻き込まれたのか——それは非常に単純で、《魔人》の存在を知らない者による暴走だ。

《魔人》の存在は世間一般には隠匿されている。

その領域の存在を知つた強欲な指導者が、強制的に《魔人》に至らせようとすれば伐刀者の人権は非常に軽んじられる事になるからだ。

故にその存在を知っている人間は《魔人》本人と国家元首、加えて《連盟》の各国の支部長に限られている。

そのため紫苑が巻き込まれるような基準が設けられ、それを当時の破軍学園理事長が承認したことによつて、紫苑もまた実践授業から閉め出されることになつたのだ（その件について紫苑本人はあまり気にしていないのだが）。それでも面倒が避けられるに越したことはない。

「助かります」

「まあ、お前のような存在がいなくても今までの破軍には問題があつたからな。それを改善するための第一歩として、寮の部屋割りを大幅に変更した。出席番号も性別も一切関係なく力が同じ者同士を同じ部屋にしている。そしてお前も同じだ。言うまでもないことではあると思うが、男女間でのトラブルが起きないようにお互いに気を付けろよ」

「わかりました……?」

「大丈夫か? 本当に……」

男女間のトラブルと言われても、いまいち思い当たっていない紫苑に新宮寺はため息をつく。少し常識に疎いところがあるとは聞いて

いたが、まさかここまでとは。

「菓子折りとか持つていった方がいいんですかね？」

「いや、別に要らないと思うぞ……」

そんな会話をしているうちに、二人を乗せた車はステラ・ヴァーミリオンがいるであろう空港に到着した。

「お前は私の後ろに控えてくれていればいい。彼女から話しかけてこない限り何も喋らなくていいからな」

「わかりました」

そこまでコミュニケーションが得意なわけでもない紫苑にとって、彼女の言葉は非常に助かるものだった。

ステラ・ヴァーミリオンがいるであろう空港はマスコミ関係者が埋め尽くしていた。まさにそれは人海と呼ぶに相応しい。

「失礼、道を開けていただききたい」

だがそれに一切怯むことなく新宮寺は人の海を掻き分け——辿り着く。

燃え盛る炎を体現するかのような紅蓮の髪に、真紅の宝石をそのまま嵌め込んだような瞳は、紫苑の淀んだ左目とは比較にならないほどに美しい。纏うのは故郷であるヴァーミリオン皇国の礼装だろうか。ヴァーミリオンの名に恥じぬ紅蓮の生地は、紫苑のような衣服の知識に疎い者でも明らかに高級なものだと理解できる。

そして何よりも——彼女の身体から吹き出す桁違いの魔力。

(これが……世界最大の魔力量か……！)

彼は表には一切出さないものの、自分と比べる事自体があまりにも烏澁がましい運命の寵愛に感嘆する。自分では那由多の時をかけようともそれほどの魔力を宿すことはできまい。

運命に愛された生まれながらにして頂きにいる少女。

彼女を斬れば——自分の剣が更なる高みへと至れるだろうと確信し、心の奥底で禍々しく口角を歪めた。

そんな彼の思惑など知りようのない新宮司黒乃は、彼と同じく表には出さないものの、心底安堵していた。ここで彼女に斬りかかるということはしないだろうとは信じていたが、それでも剣気を彼女に当て

るくらいの事はしてもおかしくなかった。

(その時は彼女に頭を下げなければならなかったが……)

彼女が想定していたよりも、紫苑は自制が効くらしい。最初のあれは本当に寧々がけしかけただけのようだ。

だからといって初対面の相手に剣気を飛ばしてくるのは如何なものかと思わないでもないが……いや、ある意味素直というべきか。とりあえず寧々に会ったときは文句のひとつでも言ってみようと思いに決める。

「これから三年間よろしくお願いします。理事長先生」

「ああ。……さて、立ち話もなんだ、早く学園に向かうとしよう」

思考を断ち切り、新宮寺は車へと先導する。自分に背中を向け、再び人混みを掻き分ける新宮寺の背中を見ながらステラは思考する。(わからないわね……)

彼がマスメディアに向けての名目上の護衛であることは瞬時に見抜けた。当たり前だ。元世界四位の《世界時計》に相当する騎士などそうそういない。

しかしいくら名目上と言ったとしても、それなりの箔がなければ意味がないだろう。破軍には他にも《雷切》など名の知れた騎士がいたはずなのに、わざわざ伐刀者であるかどうか疑わしい彼を連れてきたのだろうか。

……しかし今の彼女にわかるはずがない。彼女はまだ知らないのだから。異能の力を覆すにたる研鑽を積んだ、非才の者達を。そして自らの後ろに立つ白髪の男がそのひとりなのだという事を。

それを知ることになるのはもう少し、先の話になる。

■ ■ ■

ステラ・ヴァーミリオンの護衛——その役目が果たされることは当然なかったのだが——を終えた紫苑は、すぐさま日課である訓練を行った。普段ならば日が登ってすぐくらいに行うのだが、上記の用件があったのでそれもできなかった。

軽く二十キロのランニングを終え、自らの霊装を用いた素振りから頭の中との虚像と演習を重ねる。

それらを終えれば服は汗を多く吸い、何かのトレーニングに使えるのではないかと、いうくらいに重くなっている。

そこから水分補給を行ったあと、さらに続けるかと考えたが、ここでひとつ思い出す。

「そういえば今日同居者が来るんだったか……？」

聞き流して、あまり覚えていないが、そういえばそんな話を新宮寺がしていたはずだ。そしてそれは今日だった……と言っていたような気がする。恐らくではあるが。

しかもそれは異性であるという。だというのにこのような格好で出会すのは不味いのではないか？ 少なくとも彼の数日前までの同居者であった寧々は、自分が汗だらけで彼女に会うと不快そうな顔をしていた。なら一応不快感を与えない格好でいるべきではないだろうか？

「……シャワーくらいは浴びておこうか」

どうせ今日から一緒の部屋で暮らすのだ。服自体は気にしなくてもいいはずだ。そもそも選べるほどの種類がないが。

それに汗が気持ち悪かったのも、約半分増しのトレーニングに疲労が溜まっていたのも事実。ここで汗もろともそれを洗い流してしまおうと、彼は自室の鍵を開け再び鍵を閉める。

そして下着をタンスから引っぱり出し、洗濯機に自分が着ていた服一式を乱雑に投げ込んだ。

普通の親ならば文句のひとつの言いそうな物だが、彼の保護者も同じくらいにずぼらだったので、それを指摘する人間はいない。そもそもこの部屋には彼以外いないが。

そう——確かにいなかったのだ。彼がシャワーを浴びている途中までは。

彼が浴室の扉を開ける。

すると目の前には——ひとりの少女がいた。

女性としては平均的な身長。およそ一五〇センチ半ばほどだろうか。

濡れ羽色の髪は長めのボブほどで整えられており、その群青色の瞳

は驚愕埋め尽くされ、透き通るような白肌は羞恥によるものだろう、まるで林檎のように真っ赤に染まっている。

着ているのは破軍学園の制服なので、おそらく自分の同居者だろう。

「な、ななな……!!」

「……?」

少女の口から意味をなさない声が漏れるが、紫苑はただ首を傾げるだけで終わってしまう。これが普通の男であれば、突然風呂場から全裸の男が出てきた事でパニックに陥っているとわかるのだが……何度も言うとおりに、彼は育ってきた環境が悪かった。

だから理解できない。男の裸で女は恥じらうのだという事実が。男の裸で恥じらう女性を知らないから。

「すまん、下着穿きたいんだが……そこをどいてくれないか。着替えられない」

「き、」

「き……?」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア——ツツ!!」

だがそんなもの少女は知ったことではない。

彼女は女性の本能として叫ぶ。残念でもないし当然である。

第2話

「なるほど……」

所変わって破軍学園の理事長室。最低限の装飾ながらも、確かな気品を感じさせるその部屋の床に、ふたりの男が正座で座らせられていた。ひとりは黒髪の柔和な男——黒鉄一輝。そしてもうひとりは白髪の男——百鬼紫苑である。

ふたりは共に女性の悲鳴を聞き付けた寮の警備員に、痴漢の現行犯としてこの理事長室に連行されてきたのだった。そしてそんな彼らに尋問をしているのは、この部屋の主である新宮寺黒乃だ。

彼女は新学期が始まる前から早々に問題を起こしたこの問題児から話を聞くと、ふう……と深い溜め息と共に紫煙を吐き出した。

「とりあえず黒鉄。お前は言い逃れのしようがないな。完全に女の敵だ、お前は」

「あの時は最適解だと思ったんですけどね……」

「相手の着替えを見てしまった代償として、自分も脱ぐことで相殺しようとした……控えめに言って馬鹿だろ」

「はい……面目次第もございませぬ……」

「で、百鬼。正直に言ってお前の場合は完全に事故で、完全に落ち度はない状況だったわけだが……最低限、前を隠すなりの対応をしたらどうなんだ……?」

「そういうものなんですか?」

シャワーを浴び風呂場から出た瞬間に異性と鉢合わせする。そんな状況は紫苑にはどうしようもできない状況だっただろう。しかし、それでも前を隠すなりの対応ができたはずなのだ。少なくともそうしていれば、このように理事長室に連行されるようなことはなかっただろう。

しかし、紫苑にはそんな対応は思い付かない。

「は……?」

「寧々と一緒に暮らしている時もそういう事がありましたけど、寧々は俺の裸を見たところで何とも思っていないようでしたよ。逆の立

場は注意されましたが。それが普通じゃないんですか？」

なぜなら彼は知らないのだから。男の裸を見て女性がパニックになるなど。

紫苑の言い分にあんぐりと口を開くと同時に新宮寺は納得する。

彼にとつて女性の基準はすべてが西京なのだ。だから西京が問題にしていることは、世間一般でも特に問題ないだろうと判断している。

西京が自分の裸を見たところでなにも感じていないのなら、世間一般の女性も特に問題としないのだろう。だから隠す意味など、必要があるなどと全く思わなかった。だから隠さなかった。

一輝のように下着姿の少女を見てしまったパニックでした行動ではなく、完全に無知から来るもの。知らないのだから行動のしようがない。

つまりは彼の常識の疎さと彼を育んだ周辺環境の劣悪さが、ここまです態を悪化させてしまったのだ。それにしたって非常識が過ぎるが。

(いくら戦えようとこれでは苦勞するだろうな……)

彼には戦闘技術ではなく、世間一般の常識を教えねばならないと誓う新宮寺であった。

「いいか百鬼。最初に言っておくが、寧々を普通の女性の基準にするのはやめるんだ。あいつは相当ずれている」

「はあ……」

「そして女性は自分の裸体を見られるのは勿論だが、突如として異性の局部を見せられることにもひどく拒絶反応を示すんだ。だから今後は……まず、そのような事態になることそのものを防ぐべきだが、もし起こってしまったら最低限局部だけは隠せ。それだけでだいぶ対応としてはマシになる。わかったか？」

「わかりました」

(……本当に素直ではあるんだよな)

何度も言うが、彼はただ知らないだけなのだ。ゆえにそれに対する対処法さえ知れば、もうそのようなことは起こさないだろう。

しかしあの寧々と暮らしてきた事はこの非常識さに勿論関連しているのだろうかしかし、ただそれだけで普通は身に付けているだろう知識の欠落など起こりうるものだろうか？

———そこもこれから知っていかねばならないだろう。

さて、と彼女の視線は再び一輝に戻る。

「百鬼と西園寺は本人達の話し合いによってなんとかなりそうだが……お前に関しては本当にやってくれたな、黒鉄。……とはいえ、やってしまったものはしょうがない。男の度量を見せろよ」

「……男ってなんでこう都合がいいときにはばかり利用されるんでしょうね」

ぼやくも、自分に問題があったことは事実。それに自分も事故とはいえ、彼女に対して恐怖を確かに刻んでしまったのだから謝罪をするのは当然である。

「……失礼します」「失礼します」

扉をノックする音と、声が重なる。

開けて入ってきたのはふたりの少女。

ひとりは当然ながらステラ・ヴァーミリオン。そしてもうひとりは紫苑が洗面所で対面した黒髪の少女だ。

よくよく見てみればふたりとも容姿が非常に整っている上に、制服の胸元を押し上げるふたつの山もなかなかの大きさだ。流石にステラの方が大きい。

しかしその様子は異なっていた。ステラの目元が赤く腫れているのに対し、新宮寺が西園寺と呼んだ少女は申し訳なささ羞恥で紫苑と顔を合わせようとしない。それもまあ、仕方ないことだが。

「その……悪かった」

紫苑は少女の前に立ち、頭を下げる。

「信じてもらえないだろうが、その……ああいう時にどういった行動をとればいいのか、わからなかった。そのせいで、不快な思いをさせてしまったと思う。それでもけじめは、ちゃんとしてくれる」

視線は泳ぎ、言葉は詰まる。こういつたときにどうすればいいのか、わからないから。それでも誠意だけは込め、頭を下げる。

それに対し少女は――、

「ぶっ、あはははは……」

笑った。小鳥が囁くように美しい声で。

それに当然ながら紫苑は眼を見開く。当たり前だろう。罵声を浴びせられたりするだろうところに、前述のような反応をとられたら。

それがなおおかしいのか、彼女の笑いは止まらない。

「いや、その……すみません。物凄く深刻そうな顔をしてるのがおかしくて……あはは……」

「怒って……ないのか……?」

「当たり前じゃないですか。確かに……だいぶ恥ずかしかったりはしましたけど、あなたに落ち度は全くないんですから」

むしろこちらが謝らなければなりません、と少女は頭を下げる。

「改めまして。西園寺^{さいおんじしおり}栞と申します。こんな事がありました、よろしくお願ひします」

「……百鬼^{なきりしおん}紫苑だ。その……よろしく」

「ちよつとシオリ!」

円満にふたりが和解（和解と言っても紫苑が一方的に気にしていただけなので、和解というのは相応しい表現でないかもしれないが）しようとしていたところに待ったをかけるのは、もうひとりの痴漢被害者、ステラ・ヴァーミリオンである。

「はい、なんででしょうか」

「いいの、そんなに簡単に許して! そいつ、シオリに痴漢したんでしょ!」

「いいえ?」

少女――栞はステラの言葉に明確な否定を返す。

「確かに……その、私が百鬼さんの裸を見てしまった事で反射的に叫んでしまつて、彼が痴漢した様に扱われてしまいました……先ほど言ったように彼に一切の落ち度はありませんよ?」

「え……?」

「そもそもそんな事態になつてしまったのは、私が不注意に洗面所に入つてしまったからです。私がしっかりと確認してさえいれば今回

の事件は防げたことですし、彼にはどうしようもできないことでした。もしステラさんは自分がお風呂から上がった瞬間に異性とばったり出会ったような状況で、『あなたがなんとか防げ』と言われてそれができますか？」

「そ、そんな事できるわけないじゃない！」

「でしょう？ 私にも不可能です。だから彼をこれ以上攻めるのはお門違いではありませんか？」

それに、と彼女は続ける。

「ステラさん、あなたは先ほどふたりで離しているときに黒鉄さんが悪い、と捲し立てていましたが……本当に彼だけが悪いのでしょうか？」

「……どういふこと？」

ステラの言葉に僅かながら怒気が混ざる。つい先ほど——新宮寺が一輝と紫苑に説教を行っている間、少しではあるが会話（というにはあまりにもステラの一輝に対する文句が多く、葉はそれに相槌を打つような一方的なものだった）をした時には、肯定的な態度を示してくれていたのに、とでも思っているのだろう。

気持ちもわからなくはないが、と葉は続ける。

「勿論黒鉄さんがステラさんの下着姿を見て、そして自分も脱いだことはあまりにも度しがたく、あなたの眼には確かな恐怖の象徴として刻まれたことでしょう」

うぐつ、と一輝の口から苦悶の声が漏れる。フォローしてくれるのではないかと思えば急に口撃が飛んできたのだから当然だろう。しかもそれは事実であるため、否定もできない。

「大体の事情は聞きましたけど……その上で言わせて貰えばあなたに落ち度が一切なかったのかといえば、そうではないでしょう？」

「そんなわけないじゃない！ 私の着替えを覗いたのも、全部こいつが——」

「そう、着替え。その着替える場所に問題があったのではありませんか？」

「着替える場所……？」

「はい。私が聞いた限り、あなたはリビングで着替えていた。これは間違いありませんか？ 黒鉄さん」

「う、うん。間違いないよ」

ステラの嘘である可能性もありえなくはなかったのですが、葉は一輝にも同じ事を聞く。それにいいでしょう、と頷く。

「ステラさんは空港から礼装を纏っていたから、学園の制服に着替える。それは自然なことでしょう。……しかしこの学園の寮は玄関からリビングを隔てる扉はないですよ。だからこそ玄関の扉を開けた黒鉄さんはリビングで着替えていたステラさんの下着姿を、それはもう思いつきり見てしまったと。……もしリビングではない別の部屋で着替えていたらどうなっていたでしょう？」

「……！」

「当然お分かりですよ？ そう、少なくとも外出していた黒鉄さんと着替え中のステラさんが避けようもない状況でばったり、というような状況にはならなかったでしょう。黒鉄さんは靴を脱ぐ際にステラさんの靴があることに気づき、誰かいるのではないか、と呼び掛けることができたわけではありませんか？」

「そ、それは……」

ステラがたじろぐ。

葉が言うことはまづこうことなき正論であったから。

「確かにひとりの乙女として、見ず知らずの男性に下着姿を見られたことは怒ってしかるべき事でしょう。黒鉄さんの対応があまりにもひどかったのは事実です。……しかし、これから一緒に生活していくんです。ここはひとつ、『どちらにも問題があった』という事で水に流しませんか？」

「ちよ、ちよつと待って！ 一緒に暮らすってどういうことよ!? ここいつが私の部屋に間違つて入ってきたんじゃないの!!？」

「え？」「は？」

そこで葉と黙って彼女の話を聞いていた紫苑の声が重なる。

……どうにも話が食い違っている。葉はこれを同室で生活する男女間のトラブルだと思っていたが、この様子では異なるらしい。

「あー、ヴァーミリオン。少しいいか」

「……何かしら」

「今年度から理事長が新宮寺理事長に変わったことで、この学園の方針が大きく変わったことは知っているか？」

「確か……完全な実力主義。徹底した実践主義……だったかしら」

「そうだ。じゃあその一貫として出席番号も性別も何も関係なく、実力の近い者同士を同じ部屋に割り当て、その結果異性と同室になった者達が数組存在するという話は？」

「……………え？」

長い、本当に長い沈黙の後、ステラの口から漏れたのはそんな間拔けた声だった。

——なるほど、よくわかった。今回の事件の諸悪の根元が。

それはステラの着替えを偶然とはいえばつちり見てしまい、あろうことか自分も脱衣するという非常識極まりない行動に移った黒鉄一輝でもなければ、自分の着替え中にルームメイトが帰ってくる可能性を一切考慮にいれず、不注意にもリビングで着替えたステラ・ヴァーミリオンでもない。

この惨事を生み出した元凶、それは。

「あなたが全部悪いんじゃないですか理事長……………」

破軍学園理事長、新宮寺黒乃である。

「あわや日本とヴァーミリオン皇国の国際問題になるところだったんですよ、どうしてくれるんですか……………」

「こんなにも真面目な人が何故寧々の友人をやれているのか不思議だったか……なるほど、納得した」

寧々も大概だがこの女も相当ぶつとんでいるらしい。伐刀者として規格外の面々はどこかおかしくなければ気が済まないのだろうか。

「中々に嫌な納得のされ方だが……しかし、これは決定事項だ。いくら他国の皇女様とはいえ、学園のルールには従って貰うぞ」

「そんなこと言ったって！　もし問題が起きたらどうするんですか!?」

「そんな事もう起きているだろう。しかし、先ほど西園寺が言った通

りお互いに注意し、尊重し合えば再発は防げる筈だ。それとも、ヴァーミリオンはどんな間違いが起きるといえるのかな？ 私にはわからないなあ」

「そ、それは……！」

「何泥酔したオッサンみたいな絡み方してるんですか。……それに、組ませるなら僕と百鬼くんが組ませれば良かったんじゃないですか？ 同じ魔力がないもの同士なのに……それをなんで留年生の僕が世界最高の魔力量を誇るステラさんと組むことになってるんです？」

「それはシンプルにお前達は学年が違うからだよ。百鬼は編入で二年だからな。そうしたときに魔力量の低すぎで一年ではお前が、二年では百鬼が余ったところ、ちょうどいいところにヴァーミリオンと西園寺が入ってきてくれたから、これ幸いとくつつけたわけだ」

納得してくれたか？ と言う新宮寺にそんなわけないでしょうっ！ と語気を荒げるステラ。そんな様子を見て新宮寺は首を振る。

「やれやれ、これでは埒が開かないな。……なら決闘で勝った方が部屋のルールを決めればいいんじゃないか？ それなら文句はあるまい？」

見かねた新宮寺が解決策を差し込む。

正々堂々と勝負をし、勝った方が意を通す単純明快なもの。伐刀者同士の揉め事があつた際に用いられる、古来から行われてきた常套手段だ。

「それはいいね。そうしようよ、ステラさん」

「はあ!？」

一輝の言葉にステラは驚愕で返す。

「え？ そんなに嫌だった？」

「そうじゃなくて！ あんた、魔力量が少なすぎて進級すらできなかったんでしょ!? そんなあんたがAランクに勝てるわけじゃないじゃない！」

その言葉に一輝は納得を示す。確かに自分は魔力が無さすぎて、進級することができなかった《落第騎士》だ。そしてそれに見合った、伐刀者の中でも最低ランクであるFランクに収まっている。

そんな自分が世界最強の才能を持つステラに挑むなど無謀を通り越して愚行だ。

だが、と彼女に対して否定の言葉を返す前に――、

「――それはやってみなければわからないだろう」

と彼女に対して明確な否定を返したのは、静観していた百鬼紫苑だ。

「なんですって……!?!」

「確かにお前の才能は世界最高だ。魔力など俺や一輝と比較することすら烏澁がましい。だが……戦わずに自分よりもこいつは弱いと決めつけるのは時期尚早じゃないか？　もしかしたら自分を打ち倒す強者かもしれないだろう」

「そんなわけないでしょうっ！　戦うまでもない！　いい!?　魔力とこののは伐刀者としての絶対序列！　覆すことなんてできないの！

時間の無駄よ!」

「なら何故そんなにムキになる？　戦えばいいじゃないか。お前にとつてFランクなんて、とるに足らない雑魚なんだろう？　ならさつさと叩き潰して部屋のルールを決めてしまえばいい。違うか？　それとも――」

一輝と戦うのが怖いのか？　と彼が付け足せば、彼女は自身の髪と同じくらい顔を真っ赤に染めて――、

「もうあつたつたまきた!!　この平民ども!!　Fランクの分際でこの《紅蓮の皇女》に喧嘩を売るだなんて!!　その白髪の男も!!　こいつをぶつ倒したら次はあんたの番よ！　首洗って待ってなさい!!」

「ああ、わかった」

「使うなら第三訓練場を使え。許可は私が出しておく」

覚悟してなさいよね、フンツツ!!　と彼女は一切の比喩なしに炎を吹き出しながら理事長室を後にする。

「……………本当やってくれたよね、百鬼くん」

しばらくの間、沈黙が支配していた理事長室で、それを破ったのは一輝だった。彼は紫苑に対してじと……と、抗議の目線を向けるが、そんなものはどこ吹く風だ。

「問題ないだろう。お前ならあの程度の天才、容易に勝てるだろう」

「容易について……簡単に言ってくれるよね」

「確かに魔力量は超一級品だがその他はたかが知れてる。おまけに相手はこつちを侮ってくれているときた。どれだけ天才だろうと実戦経験の少ない上に、こちらを最初から下に見てくる井の中の蛙なんて、お前の掌で踊らせられるだろう。それにいずれは勝つ必要があるんだ。それが少し先になったか、今になったかの話だろう。なに、勝てばいいんだ」

「……うん。そうだね」

そう勝てばいいんだ。そうすればお互い水に流す……とは言えないまでも、互いに生活しやすくはなるだろう。

紫苑の言うことは何一つ間違っていない。

「あの、水を差すように申し訳ないんですが……」

「ん、どうした。西園寺？」

「ステラさんが来たのは今日なんですよね？ 理事長は第三訓練場の使用許可を出すとおっしゃってましたが……そもそも彼女、それがどこにあるのかわかっているんですかね？」

私はわかりますが。と栞は付け足したところで再び理事長室に沈黙が席巻する。

「ああ……西園寺、悪いがヴァーミリオンを追いかけて案内してやってくれないか？ たぶん道に迷っていると思うから……」

案の定、無人の校舎内で右往左往していたステラを栞は第三訓練場まで連れていった。

なんともまあ締まりの悪い事である。

第3話

——結論から言ってしまうえば。

ステラ・ヴァーミリオンは黒鉄一輝に敗北した。それも文句のつけようもない完全敗北で。それはFランクがAランクに勝てるわけがないという油断もあったが、決定的な要因としては実力差というシンプルな理由だ。

そも、ステラがヴァーミリオンから日本に留学してきたのはヴァーミリオンには自分と同等の力を持つ者が存在しないため、更なる強者を求めてやってきたという事らしく、それは言い換えれば自分と同じくらいの強者と戦ったことがないということになる。

つまりは紫苑が指摘した通り、同等の敵との実戦経験が著しく少ないのだ。

それに対し黒鉄一輝は、一部では負け戦の百戦錬磨と評される男だ。相對するもの全てが格上であり、そのほとんどに勝利を修めてきた一輝にとって彼女は言ってしまうえば良い鴨であったのである。

……とはいえ、彼も自身の伐刀絶技（いわゆる必殺技のようなもの）の代償として、長時間気絶することになったのだが。

さて、そんな無惨な敗北を喫してしまったステラ・ヴァーミリオンと紫苑の戦いが行われることはなかった。彼女が目覚めるまでの新宮寺黒乃が止めたことが要因としては大きいだろう。……まあ、それでもと言ったステラに新宮寺が折れ、近日中に予定を組むと言い、予定の擦り合わせを行っている間に彼女と一輝の妹である黒鉄珠雫が教室をまるごとひとつ吹っ飛ばしたことで、一週間の自室謹慎と共にその機会は流れたが。

そんなこんなあり、紫苑と葉が破軍学園に入学してからかれこれ一週間と少しの月日が流れた。

■ ■ ■
「はあ……はあ……つ、疲れました……！」

げっほ、ごっほ！ と咳き込みながら、葉は道路に踞る。その姿は破軍学園の制服でも私服でもなく、市販されているジャージ姿。洒

落つ気など欠片もない格好であるというのに、それがひどく魅力的に見えるのは彼女の美貌がなせる技であろう。

「お疲れ。ほら、飲めるか？」

そんな彼女にスポーツ飲料の入ったペットボトルを差し出すのは、彼女のルームメイトである百鬼紫苑だ。彼は黒のタンクトップに黒のハーフパンツのジャージというシンプルな出で立ちだ。しかしその肉体は肉食獣のように鍛え上げられているおかげか、実際よりも一回り二回りほどは大きく見える。

差し出されたそれを「ありがとうございます」と礼を言つて受け取り、中身を凡そ1/3ほど一気に飲み干した。

「それにしてももう吐かずに二十キロ完走か。あと一週間くらいはかかると思つてたが」

「百鬼さんに……気を遣わせるわけにもいきませんので……」

息も絶え絶えで彼女は言う。

——そもそも何故彼らが一緒に二十キロもの長距離を一緒に走る事になったのか。それは彼らがルームメイトになった翌日、早朝からトレーニングに出掛けようとした彼を葉が呼び止め、良かったら自分もやらせて欲しいという形で始まった。

初日は半分も行かないところで倒れた。そこで二日目からは彼女のペースに合わせ速度を落としていたのだが、迷惑はかけられないから先に行つてくれと言われ、そのまま走り続けたらいつまで経つても来なかつたので道を戻つていった時に道の端で踞っている葉を発見。

そこから三日目、四日目と徐々に走つた距離を伸ばし、時間を縮め、そして一週間目にしてついに紫苑とほぼ変わらないペースで完走したのだつた（完走自体は一昨日からできていたのだが、着いた途端に胃液を吐いていた。これでは完走とは彼女自身は言いがたかつたものである）。

「俺がこれをこなすのに二年近くかかったのに、比べれば随分早いさ」

「それ何歳くらいの話です？」

「確か……七歳くらいだな。これくらい走れるようになったのは」

「それ、百鬼さんの方がおかしいですよ」

フルマラソンのおおよそ1/2を走れる七歳児が居てたまるか。

「そういえばなんで俺の日課に付き合うなんて言ったんだ？ お前は魔術に重きを置く伐刀者だろう。こんなことするより、魔術の訓練をした方が伸び代はあるだろうに……」

自身の伐刀者の能力が攻撃性を持たない上に魔術にも録に頼れない紫苑は、全伐刀者の中でも五指に入るほど武術に片寄った者だが、葉はともそうとは思えない。なにせ彼女からは武芸者特有の雰囲気を感じないから。能力も知らないため断定はできないが、現在の伐刀者に共通した、魔術に特化した訓練を行ってきた騎士だろう。

そんな彼女が自分の日課をこなしても、実力の伸びはあまりないと思うのだが……、

「一概にそうとは言えませんよ。黒鉄さんや百鬼さんのようなクロスレンジ特化の騎士と戦うときは、どうしたって体力勝負になってしまいますし。それに体力というのはないよりもあつたほうがいいでしょう？」

まあ一輝や紫苑は伐刀者というよりは剣客と言った方がいいだろうが。一輝に至っては魔力を用いた伐刀絶技がひとつしかないのだから尚更である。

「まあ、それは確かに……」

「それはそれとしてひとつ聞きたいことがあつたんですけど、いいですか？」

「ああ。なんだ？」

「百鬼さんの服って……何着くらいあるんです？」

前述の通り、紫苑と葉が一緒の部屋で生活し始めてかれこれ一週間くらいが経つが、葉が見た紫苑は制服姿と今のような格好だけだ。お洒落もへったくれもない……どころか、普通に生活していくのすら困るほどの服のレパートリーの少なさ。

流星にこれだけではないだろうとは思いますが……。

「制服だろ。それに今着ている服に同じようなのがあとワンセット……あと冬用の……って感じだが」

「それだけですか!?! 外出用の服は？」

「これで済ませてるが……」

「……………なるほど」

嘘だろう、という気持ちが隠しきれない。今までどうやって生活してきたんだ。今まで同居していたという西京寧々は一体何をやっていったんだ。あまりにも問題がありすぎる。

いくらお洒落に疎いものでも、もう少し服くらい持っているだろう。彼の強さへの渴望のほんの一パーセントほどでも、世間一般的な常識に合わせようという意識に向けてくれないだろうか。

(これはいけません……………！)

私の目の黒いうちはそんなことは許しはしない。新宮寺理事長にも一般教養というものを教えてやってくれ、と頼まれているし、なおかつ……………、

(こんなにも磨けば光りそうなのに……………勿体ないです)

百鬼紫苑当人は意識したことがないだろうが、彼はかなり顔が良い。一輝のようなどこか可愛げがあるわけでもないが、凛々しく、それでいてどこか儂げなその魅力に惹かれる者も多いことだろう。それを純日本人離れた白髪に赤と黒のオッドアイという容貌が拍車をかけている。

しかし洒落気ゼロの今のままでは宝の持ち腐れだ。

だが……………如何にして彼にお洒落に興味を持って貰う、とまではいかなくても、最低限意識して貰えるだろうか。

彼はひどく、それはもう本当にひどく常識に疎いだけで、それが必要なことだと理解すれば、それを実行するだろう。

しかしそれでは意味がない。それではただの思考停止だ。可能ならば自分でこうした方がいいのではないかと考えられるようになって欲しい。

さて、どうしたものか……………。

——そこで葉の中の豆電球が光った。

「百鬼さんは七星剣舞祭で優勝を目指していらっしやいますよね」

「…………… ああ、それがどうした？」

七星剣舞祭。

それはここ、破軍学園を含めた伐刀者を育成する機関——騎士学校。日本に七つある騎士学校の生徒の中から日本一の騎士を決めようという、国家の祭典だ。そこで優勝することができれば《七星剣王》の称号を獲得でき、その栄誉はその後の人生を大きく左右するだろう。

多数の学園が能力水準（一般的には伐刀者のランク付けがそれに相当する）で出場選手を選定しているのだが、破軍学園と関西にある武曲学園では学内予選を勝ち残った者が出場権を獲得する、選抜戦方式をとっている。

「七星剣舞祭で優勝すれば……というよりは、出場したら、ですかね。百鬼さんは当然話題に上ることでしょう。史上初のFランク騎士の出場ですから。そうなれば当然……それに嫉妬する輩も出てきます」

「……？　つまり、どういうことだ？」

要点が掴めない、と首をかしげる紫苑。

それはそうだろう。彼にとってはなんの脈絡もない話をされたのだから当然だ。

「くだらない事であなただを叩く輩も出てくるという事です。まるで重箱の角をつつくような、本当にくだらない事で。そんなくだらない事で……あなたの剣技が侮辱されることもあるかもしれません」

「……！」

それに紫苑は明らかな反応を示す。

彼は自分が使用する剣術に対して並々ならぬこだわり……もはや執着とも言えるそれを持っている。少なくとも葉はそう感じた。

自分は剣術はすこしかじった程度で、あまり詳しくはないがそれでも彼が自分の剣技をとっても大切に想っている事は彼の鍛練を見れば誰でも理解できることだろう。

「それは……」

「腹立たしいですよね？　そこで先の話に繋がるわけですが、つまりはそんなやつかみが反応してくるものをひとつひとつ潰していこう、という話なんですよ」

「それで服か」

「はい。服に多少の気を使うだけで第一印象はかなり良くなりますからね。それで私生活が乱れている、なんてやつかみは消えるでしょう」

「なるほど……」理ある」

ある種の有名税のようなものと納得する。

自分が剣の道を歩み始めかれこれ十一年。その年月をずっと研鑽に費やしてきたからわからなかったが、そういうただ強いだけでは認められない人々がいるというのは盲点だった。

「しかし俺はそういうのはさっぱりだぞ」

知っていればこんなことにはなっていない。

「そこはお任せください。これでも年頃の乙女ですので。服選びはお手伝いしますよ。……まあ、その代わりと言ってはなんですが……」

「……? どうした?」

「私もお付き合いたいところがありまして、ピザ屋なんですけど」

「ピザ屋?」

「はい。近くのショッピングモールにあるところで、父にその割引券を貰ったんですけど……下調べを試みたらそれが結構量が多くてですね……」

「なるほど。食べるのを手伝えれば良いのか」

これまでの生活でわかったことのひとつではあるのだが、葉は紫苑に比べて食べる量がかなり少ない。

これは紫苑が自身の身長わりに（おおよそ百六十センチ半ばほどである。男性の平均身長より少し低めくらいか）大食漢であるからで、それは並の食事量では現在のウェイトを維持できないからであるのだが……閑話休題。

それに対し葉の食事は女子の平均を出ない。そんな彼女がピザなどというカロリーも量も多い料理を持て余すのは至極当然と言えた。

「ええ。お願いできますか?」

「ああ。それぐらいなら」

なにせ食事を一緒にとるくらいだ。した手間でもないし、自分の服を選ぶのにわざわざ付き合ってくれるのだ。それぐらいお安いご用である。

「それで、それってどこにあるんだ？」

「えーつと……ここですね」

彼女がスマートフォン代わりにもなる破軍学園の生徒手帳で示すのは、学園のほど近くにあるショッピングモールだ。交通の便も良く、すぐ近くには駅もある。

これならば休日である今日は大変賑わっていることだろう。

「今から行きますか？ ふたりともシャワーを浴びていく必要はありませんけど」

「そうだな……現地集合にしないか？ 俺はもう少し鍛練していきたい」

「わかりました。そっちの方が雰囲気出ますしね」

「雰囲気？」

「なんか……デートっぽくないですか？」

にこり、と微笑む葉に紫苑の心臓は跳ねる。何故ここまで顕著な反応になってしまったのかは本人にもわからないが……。

「……付き合ってもないのにデートって言うって良いものなのか？」

「デートの定義って男女ふたりが一緒に出掛けることらしいですよ。それに従えば立派なデートです。とまあ、冗談はさておき。私は適当な場所で時間を潰しておきますので、着いたら連絡ください」

「ああ、わかった」

そんなこんなでデートと言って良いのかわからないふたりの一日が始まった。



「お買い上げありがとうございます。またのご来店をお待ちしておりますー！」

店員の声に見送られて紫苑と葉は服屋を出た。

「これで多少は並んでマシになったかね」

現在彼が着ているのはロング丈の白のTシャツに黒のニット、デニムパンツ。紫苑の身体にフィットするような形になっているので、さりげなく男らしいパーツのアピールができている……らしい。紫苑にはさっぱりわからないが。

これらの服は先ほどの店で購入してきたものだ。これらを買う前は破軍学園の制服を着ていたのだから、それに比べればかなり周囲から浮かなくなっただろう。

「ええ。ちゃんと似合ってますよ」

そう言う栞はストライプのTシャツにデニムジャケット、濃緑のロングスカートという出で立ち。それらの服が栞の大人びた雰囲気をさらに引き立てている。

「少し早いですけど昼食にしますか?」

時間を見れば時刻は午前十一時。昼飯時と言うには少し早い、あと少し経てばどこの店も客で一杯になるだろうという時間だ。

「そうだな。もう少し経てば混んでくるだろうし」

「じゃあさっさと行きましようか。こっちはです」

言われ、ついていった先には食欲をそそる匂いが漂ってきた。

かなり盛況ぶりで、前述のように昼食時とは少し早いのに列ができているほどだ。

「……こういう店って近くに食べる場所があるもんじゃないのか?」

「こっこって持ち帰りだけなんですよね。百鬼さんは近くのベンチを確保してきてくれませんか?」

「俺が並んで来ようか? ピザ、大きいんだろう?」

「百鬼さんこういうの慣れてないでしょう?」

確かに彼はこういった外食の経験が少ない。しかもこういう店は一際不馴れであり、どんな事をしでかすかもわからない。

「ここは大人しく栞に任せよう。」

「わかった。場所はまた連絡する」

「ええ。何が良いたかありますか?」

「こういうのは良くわからんからな。……肉が多いやつで」

「ふふっ、男の子ですね。了解しました。少し待っててくださいね」

列に並ぶ葉を見送ったところで、紫苑はどこか座れる場所を探す。幸いなことにふたりが丁度かけられるようなベンチが空いていたので、そこに座り、葉に連絡する。そこで「ふう……」と溜め息をついた。

今日はあまりに不馴れな事ばかりをしたせいか、ひどく疲れた。体方面では余裕なのだが、精神的なそれがまるで重りのようにのし掛かる。

それは葉と店員があれもこれもと次々と服を選んで、着せてきてというまるで着せかえ人形のような扱いを受けたからなのだが……わざわざ自分のために付き合ってくれたのだ、それぐらいは甘んじて受けた。

葉が帰ってくる間は少しゆつくりしようと目を閉じる。

「ねえ、そこのお兄さん」

近くで声がする。しかし自分ではない誰かに向かって言っているのだろう。気にすることはないと無視を決め込み、さらに背もたれに身を預ける。

「ねえ、無視しないでくださいよ。白髪のお兄さん」

「……………あ？」

そこまで言われて目を開ける。するとそこには一人の女性が立っていた。世間一般で言われるような美貌の持ち主であろうことは間違いないのだが……葉を見て感覚が麻痺しているのだろう。紫苑の心にあまり響くことはなかった。

「……………何か用ですか」

「いえ。ひとりなのかなーと思ひまして。良かったら私とお茶なんてどうですか？」

「いや。人を待ってるので」

——それは世間一般でいうナンパと呼ばれるものだった。しかし紫苑からすれば人が疲れている時に突然話しかけてきた初対面の人間であり、有り体に言ってしまうえば『なんだこいつ』といった感想だった。

「そんなに邪険にしないでくださいよー。いいじゃないですか、

ちよつとくらい……駄目ですか？」

——そんな状況を葉は遠目で見て「ああ……」とすぐに状況を察した。というのも、予想ができないことではなかったためである。

紫苑本人は全く自覚がないが、彼は容姿には恵まれた方である。一流のアイドルやモデルなどと比べれば劣ってしまうが、それでも鍛え上げられた肉体と合間って魅力的に映るのは事実。今までは壊滅的なファクションがそういった輩を退けていたが、それが葉のコーディネートによつて一新された今、ああいった積極的な女性から彼を守るものは何一つとしてない。

それに彼は今回のような状況に巻き込まれたことがないため、対処法も全くわからない。ほとほと困り果てた彼は周囲に視線を向けるが、自分には気づいていないようだ。

(これはなんとかしなければいけませんね)

多少席を探す手間が増えたとしてもやっぱり一緒に並ぶべきだったか、と後悔しても後の祭り。

さつさと紫苑にねちっこく絡む女を追い払ってしまおう。

「——紫苑さん、どうしました？」

女が振り返り、紫苑が助かったと安堵した表情を見せたが、困惑も見せた。おそらくは普段と呼び方が違うことだろうが、突っ込まれれば面倒なことになってしまう。

ここは私に任せてください、とアイサインを送る。

「すみません、何かご用ですか？」

「いえ……その……失礼しました」

思つたよりあっさりとな女は引き下がって、去っていく。

それを見送って、葉はふう……と小さく溜め息をついた。

「災難でしたね、百鬼さん」

「よくわからなかったが助かった。ありがとな。それよりピザは？」

「焼き上げるから少し待っていて欲しいと。できたらこのアラームが鳴るので、今度は一緒に取りに行きましょうか。あんな手合いに絡まれるのも面倒ですし」

「本当にな。俺はあの人の顔に見覚えはなかったが、どつかで知り

合ってたのか……?」

やはり自覚はなかったのか。

「百鬼さんはナンパされてたんですよ」

「ナンパ……? ナンパってあのナンパ?」

「百鬼さんがどのナンパを思い浮かべているかはわかりませんが、一般的には男性が見知らぬ女性を口説くナンパですね」

「……………あの人も見る目がないな。俺より良い男なんてそこら中にいるだろうに」

「そんなことはないでしょうけど……でも、今後ああいう事があつたら『彼女がいる』とかはつきり言った方がいいですよ。少なくとも私と出掛けているときくらいは」

「……………付き合っていないぞ?」

「嘘も方便、ですよ。実際に付き合っているかどうかはさしたる問題ではありません。彼氏彼女に第三者から見えれば、それでいいんですよ」

「そういうものか」

「はい、そういうものです。さて、今度は一緒に行きましようか。またあんな輩に絡まれれば面倒ですから」

「ああ」

——その後は多少雑談をしながら、ふたり並んで昼食を済ませた。

「ふう、ごちそうさまでした。予想以上に旨かったな」

「本当に。こんなショッピングモールのテナントじゃなくて、ちゃんとした店があつても不思議じゃないくらいでした。……ただ百鬼さんが頼んだのは私にはちよつとくどかったですけど」

紫苑が食べたのは照り焼きチキンピザだったが、その肉とマヨネーズなどの具材がてんこ盛りで、葉は一切れ貰っただけで満足してしまった。

自分は比較的野菜が多めの物を頼んでいて助かった。ただそれでも量が多くて、三割ほど紫苑に手伝って貰ったのだが。

「なあ、本当に奢りで良かったのか?」

「はい。割引券のお陰で財布のダメージも最低限で済みましたし。そ

の代わり、また一緒に出掛けたときは何か奢ってください」

「ああ。それぐらいなら」

何気なく次も一緒に出掛ける約束をしてしまったが、彼女と出掛けるのなら楽しそうだ。どこか彼女には不思議と気を許してしまえるような、そんな独特な雰囲気纏っていたから。

「さて、これからどうする？」

「帰るのは勿体ないですよ。何か良いところありましたかね……？」

栞と喋りながらふと、視線を向けた先。そこを歩いていったふたり組の男に紫苑の目が縫い付けられる。

「……う？ どうしました？」

「いや、あのふたり組。歩き方がおかしくないか？」

顎でしゃくられ、栞もそちらを見る。

そのふたり組は一見すればただの旅行者のように見えた。一般人が見ればその印象は変わることにはなかっただろう。しかし紫苑と栞は確かな違和感を感じ取った。

そのふたりはリュックサックを背負っていた。それだけならば前述のように旅行者か、あるいは登山帰りなのではないかと思っただろう。

しかし問題はその男達の歩き方だ。リュックサックのサイズとそこに収納されているだろう荷物を鑑みれば、身体の各所にかかっている負荷があまりにも大きい。

栞が小さく溜め息をついた。

「……食後の運動にしては些かハードなことになるかもしれませんね」

「確かに。……尾行けるぞ」

栞は頷き、彼らはその男達の後続に続いた。

無論、ただの憶測。万が一の予防線を這ったに過ぎない。

何、自分達の憶測が外れれば杞憂だったと笑って、改めて休日を謳歌すれば良い。

——やがてそのふたりは男子トイレに入ってしまった。そこで紫苑

は葉に見張りを任せ、中へと入っていく。

入ってすぐに聞こえたのはガチャガチャという——金属が擦れるような音。杞憂では済んでくれなかったらしいと、彼は心の中で溜め息をつく。

『ははっ、テンションあがんなあ、おい。早くコイツをぶっばなしてえよ』

『あんま勝手なこと済んじゃねえぞ。客は人質にするって言われてんだろ?』

『わかってるつつの。ただ抵抗されたらこつちだってそれなりの手段をとらなきゃなんねえだろ? ひひひっ』

下衆な欲望が孕んだ言葉を変えながら、戦闘用の装備を纏って男達はトイレの個室のドアを開けた。

——だが、少なくとも彼らの悪意が民間人に届くことはない。

百鬼紫苑が戦闘態勢をとって待機している。その時点で男達の運命は決まっている。

紫苑が放つ神速の太刀が男達の意識を刹那のうちに刈り取った。

悲鳴など上がるはずもない。彼らから見れば自分達が個室の外に出たら一人の男がいた。ただそれだけが見えただけだっただろう。

首を仮初めの刃で断たれた男達は、なんの支えもなく床に倒れこんだ。

「済みましたか?」

「ああ。《幻想形態》で斬ったから気絶してるだけだが」

《幻想形態》——伐刀者の《霊装》の形態のひとつで、それによって攻撃を受けた場合、傷を負う代わりに体力や精神力と言ったものを削る事が可能である。

「《解放軍》の《信奉者》ってところか」

「わかるんですか?」

「ああ。前に駆り出されたときに全く同じ装備を見た。となると目的は金か。しかし敵の規模が掴めないことにはどうにも……手間だが叩き起こすか」

「いえ。それは必要ありません。百鬼さんは新宮寺理事長に連絡を頼

めますか？」

彼女から差し出された電子生徒手帳はすでに新宮寺へのコールがなされていた。電子機器全般の扱いが苦手だと、この一週間でわかっていったが故の気遣いだろう。

幸いなことに電話はすぐに繋がった。

『百鬼か？ 西園寺はどうした？』

「西園寺が少し立て込んでいるので俺が代わりに状況の説明を。……近所のショッピングモールで《解放軍》と出会いました」

『なんだと？ 敵の規模は——』

「敵の総数は二十六名。《信奉者》二十四名に全体の指揮をとる《使徒》が一名。能力は《罪と罰》。左手で受け止めた攻撃を《罪》として吸収し、それを《罰》として右手から放出する《反射》の亜種ですね。それとは別口の傭兵、連盟基準でのB〜A級相当が一名いますが能力は不明。目的は百鬼さんの推察通り金品と身代金の要求で、人質をモール内のフードコートに集めるようです」

「——だ、そうだ」

『……流石だな』

「これから俺達は事態の鎮圧に動きます。なので」

『ああ。『百鬼紫苑』と『西園寺栞』の学園外での《霊装》の使用を許可する。諸々の連絡は私に任せておけ。……わかっているとは思うが一番優先すべきなのは民間人だ。あまり無茶はするなよ』

頷き、紫苑は電話を切ってそれを栞に渡す。

「さて、そうは言ったもののどうするか。客を人質として扱うなら当面の安全は保証されるだろうが、問題はB、Aランク相当の傭兵だな。人質を守りながらそいつと戦うのは手間だぞ」

「……百鬼さん。その敵の居場所さえ掴めれば、人質側の敵を制圧している間足止めしておくことはできそうですか？」

「能力の相性差如何によるが……寧々や南郷先生クラスなら倒せはせずとも、最低足止めくらいはできるだろうな」

「比較対象のスケールが大きすぎますが……頼もしいですね」

片や環太平洋圏最強と言われる《重力使い》に、第二次世界大戦で

最も苛烈だった戦場を無傷で乗りきり、日本人で唯一中国で開かれる《闘神リーグ》の優勝者。

これ以上に頼もしい言葉はない。

「だが、それも居場所がわかればの話だ。俺にそんな芸当はできないぞ」

「ええ。しかし私にはできません。少し待っててくださいね」

葉が目を閉じる。

そしてそのまま彼女の魔力が、僅かに放出され、そして……。

「——見つけました」

と、そう言った。

「本当か？」

「ええ。それらしき魔力の持ち主を見つけました。このショッピングモールの3階のカフェテリアにいますね。今は動いてないですからティータイム中なんでしょうか」

「そこまでわかるのか……？」

「はい。私の魔力制御技術はAランク相当ですので。そのなかでもこういうた索敵は得意ですから」

その代わり真正面からの戦闘技術は百鬼さんに十数段は劣りますけど、と彼女は苦笑して、

「私は一足先にフードコートに向かって、タイミングを見計らい、人質の救出及びフードコート内の敵の制圧を行います」

「それで俺は奴らが雇った傭兵の足止め、可能なら撃破だな」

ふたりは頷き合って、

「あまり無茶はしないでくださいね」

「ああ。お前も」

トイレ前で別れ、それぞれ目的地に向かった。

■ ■ ■

「♪」

無人のショッピングモール内を一人の男がいた。

顔は平々凡々。くすんだ金髪に中肉中背の身体。すれ違ったとしても、数秒後にはなんの気にも留めなくなるようなそんな男が鼻唄を

歌いながら、歩いている。

「ああ、気乗りしねえなあ」

その男——カイン・オズボーンこそが此度のシヨツピングモール襲撃に雇われた男だった。

「なんで俺が小遣い稼ぎなんかにつき合わなきやいけねえんだよ、かつたりい」

こんな退屈な仕事だとは思わなかった。もっと大暴れできるかと思つたのに。しかしこんなつまらない仕事を引き受けるくらいには、オズボーンは金欠だった。

「やっぱギャンブルでスツたのが駄目だったなあ。いやいや、でもギャンブルで稼いだ金で女を抱くときはさいつこうに気持ちいいからなあ……」

昔ながらの性分はどうしようもならないと、彼はタバコを吹かし、床にタバコを捨てようとしたとき——タバコの火が突如として消えた。

ただ、それだけだった。それだけであつたのに彼が咄嗟に首を自身の魔力で守つたことは称賛に値するだろう。事実、守っていなければ死んでいただろうから。

「……チツ。仕留め損ねたか」

「——ツツ！ 誰だ!!」

その刺客は自分の上、四階の廊下から跳躍してきた。

異常なまでに白く染まった髪に、不気味な血色と闇色のオツドアイ。洋服は民間人と同じだが、その右手には闇色の鞘に収められた一振の日本刀。

そして何より、その全身から薫るのはひどい悪臭。それを嗅ぐだけでオズボーンの全身は震え出す。その原因は……恐怖だ。

自らの戦場で鍛え上げられてきた、第六感が自分に告げている。

——オマエ タタカエバ シヌゾ と。

(何を馬鹿な！)

よくあの下手人を見る、カイン・オズボーン。

齢は二十歳にもなっていないだろうガキ、それも自分が感じ取れる

魔力はほとんどない。それこそ自分が能力を使いきった後の残りカスとそう変わらないほどの少ない魔力だ。

あんな敵が脅威足り得るはずがない。そうだ、今のはたまたま不意打ちをとられたから、自分が過敏になっているだけなんだ。

そう自分に言い聞かせる。

その間に

「《瀧華一刀流繚乱勢法》——百鬼紫苑。推して参る」

一人の鬼が、眼前敵を必ず斬るといふ必殺の宣誓を行った。

第4話

——落ち着けツツ!!

オズボーンは自らを律する。

確かに不意打ちで殺されかけた事は事実だが、それほどまでに優位な状況であつても自分は死ななかつた。それは百鬼紫苑と名乗つた男が見た通りの魔力しか持つていない事は確定的に明らかであり、自身の魔力総量を欺く技術（一般には迷彩と呼ばれる技術であり、自身の魔力行使を隠蔽するものである）を用いている可能性は著しく低い。

手間をかけるまでもなく、一撃で敵を倒すことが出来るだろう状況でそのような愚を犯すほど目の前の男は弱くない。

ならば油断をしなければ自分が勝てるはず。それほどまでに自分と彼の魔力量のは天と地ほどの差がある。

（最初の一撃で仕留められなかつた teme の才能のなさを恨むんだなア！）

運命に決定付けられた絶対序列。その最も低い場所にいるだろう男を嘲笑しながら、オズボーンは自らの伐刀絶技を発動させ目の前の敵を蜂の巣にしようとすする。

が、それよりも早く。

——オズボーンの左腕が宙を舞つた。

「……………へ？」

間拔けな声が漏れる。

目の前には刀を抜いた百鬼紫苑。少し遅れて爆発音のような何かが響く。それが床を蹴つた音だとわかつた。左腕から自分の命が零れていく。痛みが左腕から脳に突き刺さり、混濁する意識を無理矢理覚醒させてくる。

「ひぎつ、ああああああああああああ!!」

絶叫が溢れた。踞り、左腕を反射的に押さえようとするが——それよりも早く紫苑の振り下ろしが頭上から襲いかかる。

それに一切の音はない。無音の、必殺の魔剣。それがオズボーンの

命を刈り取らんと振るわれるが——そこは熟練の傭兵だ。魔力を放出し、自分の身体を空中に放り出すや足から着地。

左腕がなくなつたことでバランスを崩しそうになるが、それをすぐさま立て直し、伐刀絶技を発動させる。

「《一騎当千：突撃銃》オ!!」

肉が爆ぜるような音がした。次いであるのは金属が擦れ合うような不快音。

オズボーンの身体から出現したのは、漆黒の銃身。詳しい種類などは生粋の剣客である紫苑はわからなかつたが、それが何かは知っていた。それは数ある銃の中でも一般的な部類であり、解放軍の男達も装備していた——アサルトライフルである。

「死にやがれええええ!!」

無数の金属音がモール内に響く。オズボーンの姿が見えなくなる程の魔力光が瞬き、紫苑を貫かんと咆哮をあげた。

戦場を丸々蜂の巣にする魔力の銃弾は、普通の銃弾よりも遙かに威力が上だ。しかもオズボーンの銃弾は着弾した瞬間に爆発する。その爆発によつて紫苑が盾にした柱を爆発によつて粉碎し、その向こう側にいるだろう男諸とも瓦礫と血の海で埋め尽くしてやろうと。

やがて柱が倒壊し、紫苑を肉の塊にしてやつたと確信したところでオズボーンは自身の身体から突き出たアサルトライフルを、身体の中に収めるとふう……と溜め息を吐いたところで——彼の鼻は嗅ぎとつた。

それは彼と対面したときにも感じた同種の死臭——その諸悪の根元が未だに自身に牙を向けようとしているという、確かな啓示。

反射的に背後を振り向いた。

そこには——

「——《八重樫》」

一切の表情なく、ただ敵を斬ろうとする悪鬼の姿があつた。

赤黒く、禍々しい瘴気を纏つた黒刀が背中からオズボーンを切り裂こうとする。回避は間に合わない。彼は自身の能力によつて身体に鎧を纏い——否、身体そのものを強度な魔力で覆われた鎧に変じさせ

ることによってその一撃を塞ごうとする。

オズボーンが今まで培ってきた戦闘経験と、いつもそこに転がっていた死体達と同じ運命を辿るかもしれないという環境下が、辛うじてオズボーンの命を繋いだ。

だがそれも無傷では済まない。

《瀧華一刀流繚乱勢法》の絶技のひとつ——《八重樫》による一撃が甲冑を切断し、肉体を深く切り裂いた。げぼおあ、という血反吐が吐き出されるがそれでもオズボーンの闘争本能は、目の前の脅威に対する最適解行動をとった。

「こんのお……クソ野郎がアアアアアアアア!!」

突如として出現した光の球。そこから発せられる光が、それが爆ぜたことによる轟音が紫苑の神経を駆け抜ける。しかしそれだけには終わらない。

鎧を破るようにして彼の肉体から出現したのは大口径のバズーカ砲だ。超至近距離からの砲撃、それに対して紫苑は一切の焦りを見せることなく、彼の霊装の鞘の形状を変化させ攻撃を防ぎきる。

——しかし砲弾は防ぎきれても、衝撃までは防ぎきれない。天井に叩きつけられる寸前まで吹き飛ばされるが——それを紫苑は一切苦にしない。

紫苑は空中で体勢を制御し、再び三階の廊下に着地する。

既にオズボーンの姿はない。数々のテナントが並ぶ大通りから逸れていくように血痕が付着しているが、それは徐々に量を減らし、やがてその赤い雫はなくなっていた。

「自分の身体を《武装》する事で血を止めたか」

紫苑は僅かな交戦——それは蹂躪と呼ぶのが相応しかったが——の間に大方相手の能力を掴んでいた。

相手の能力は概念干涉系能力《武装》またはそれに類する力。最初は肉体から武器を生成する能力かと思ったが、それは鎧によって肉体を守ろうとした事から、武器だけではなく盾などの防具も産み出すことも可能。先程の光の球は閃光弾スタングレネードを模したものだろうか。

しかし先程の戦闘からわかるように……紫苑はオズボーンは攻撃

を一切苦にしない。圧倒的な速度、神の領域に達しつつある剣技を以て異能の力を真正面から蹂躪する。

それこそが最速にして最強の超攻撃特化型剣術——《瀧華一刀流繚乱勢法》の真骨頂なのだ。

「そろそろ西園寺の援護に行くか」

逃亡したオズボーンの事は一切気にも留めず、紫苑はフードコートの方へと向かう。しかし——

「死にさせええええええええ!!」

物陰からオズボーンが攻撃を行おうとする。

そう彼は逃亡などしていなかったのだ。柱の影に隠れ、自分は恐れをなして逃げたと錯覚させ、完全に油断した紫苑に不意打ちを叩き込むために。

彼が失った左腕から生やした武装は、戦闘用ヘリなどに装備されているガトリング砲だ。秒間千を超える、文字通りの銃弾の雨は、放たれば脆弱な紫苑の魔力の盾など容易に貫くことが出来るだろう。

そう、放たれば。

——最初からこうなると決まっていた。

オズボーンは最初紫苑と対面した際に恐れを抱いていた。そしてそれは一時的に鼓舞されてはいたものの、ずっと凝りのように残っていた。それが左腕を切断されたとき、上半身を大きく切り裂かれたときにその恐れは。

決定的であったのが先程の閃光弾からの、バズーカ砲による吹き飛ばしだ。

あれは明らかに逃げの一手にして明らかかな愚行だ。

無論それが体勢を立て直すための一手で、それが普通の伐刀者であれば悪くない手であっただろう。

しかし相対している男は百鬼紫苑——日本において最年少で《魔人》の境地に至った真の怪物だ。

以前にも語ったと思うが、通常の伐刀者と《魔人》は一線を画す存在である。

そして《魔人》を魔人たらしめる要素のひとつは因果干涉系能力者

でなくとも、因果に干渉する力を持つことだろう。

それは《魔人》そして《魔人》に近づいた者達からは《引力》と呼ばれる力である。

伐刀者が運命に縛られ、決定付けられる存在であるとするならば《魔人》は運命をねじ伏せ、運命を決定付ける存在であると言える。

ゆえに優秀な伐刀者ではあるが《魔人》でないオズボーンは、紫苑が決定付ける運命に制縛される。

紫苑が『必ず殺す』と確かな意を持ち、オズボーンが『俺はこの男に負けるかもしれない』と思つた上で相對したのならば、運命は一切の過程を必要とせず、必然の終わりへと結ばれる。

その結果――、

オズボーンの身体が左右に一刀両断された。

一切の悲鳴も上がることなく、ただ死の運命がオズボーンの肉体に顕現した。

どちらやりと音を立てオズボーンの肉体が倒れる。血が溢れ出て、白い床を赤い池が汚していく。

明らかな致命傷。生命活動が行われていない事は火を見るより明らかなこと。それでもなお紫苑は、

――

オズボーンの死体を切り刻む。何度も何度も刀を振るい、肉を撒き散らし、脳髓をぶちまけてもなお切り裂き続ける。動くはずもない死体に対し、過剰な程に何度も、何度も刃を突き立てる。

……五分ほどそうしていただろうか。オズボーンとの交戦時間よりもなお長く霊装を突き立てていた紫苑は、ようやくと『オズボーンは確実に死亡した』と納得し、フードコートへと向かった。

■ ■ ■

ところ変わって同じモール内のフードコート。

そこにはおよそ十人ほどの《信奉者》が集い、人質達を囲んでいた。その中でも特徴的な姿を持つものがひとり。

《信奉者》の武装した姿のなかではひどく浮く法衣に左右の指につ

けられた趣味の悪い、派手な指輪。《信奉者》を率いる《使徒》にして、此度のシヨツピングモール襲撃の首魁であるビショウである。

そして彼と向き合うのは燃え盛る炎のような髪を持つ少女——ステラ・ヴァーミリオンである。

彼女は紫苑達と同様に友人達と一緒に、このモールに遊びに来ていた。しかし彼らとは違い、テロリストの襲撃を予期できなかった彼女は分断され、もうひとりの友人と共に人質のなかに紛れていた。

機を見てテロリストの鎮圧しようと思ったところで、思わぬハプニングが起こる。人質の子供がテロリスト達に反抗的な態度を示したのである。リーダーとは違い、理的でなかったテロリストのひとりはその子供に銃を向け、それをステラが防いだところで——現在に至る。

「クククつ、まさか一国の皇女様が紛れていらつしやったとは。これは運が良いの悪いのか……」

「御託は良いわ。あなたも首魁だというなら、飼い犬の首輪くらいちゃんと着けていたらどうなの」

「くくつ、そりゃあ耳の痛え話です皇女様。しかしですねえ、そのガキがウチの仲間にアイスぶん投げたって事実はなんも変わらねえんすわ。罪には罰を……ちゃんとケジメをつけさせる必要はありやす。そこんどこ、どうですかねえ？」

「……何が言いたいの」

「いえいえ、大した事じゃあございやせん。皇女様にはガキに代わって、頭下げてもらおうって話ですわ。……全裸で、土下座してねえ！

ひひやひやひやひや!!」

(あの、クソ野郎——!)

三階から下の様子を伺っていた黒鉄一輝は、歯を噛み砕かんとする程の怒りが湧いた。あのクソ野郎を今すぐに斬ってやりたいという殺意が吹き上がる。が、

「やめなさい、一輝」

一輝の隣で同じく様子を伺っている長身の美少年——有栖院風が制止する。

「でも、有栖……！」

「気持ちにはわかるわ。でも敵はあそこだけにいる訳じゃない。BとAランク相当の敵がいるって言うていたでしょう。百鬼紫苑って人が交戦中らしいけど、その人が逃す可能性もあるんだからここは耐えなさい」

同じくモール内に居り、敷地外での霊装の使用許可の申請を行った以上、新宮寺からの情報も渡っている。

敵の規模や首魁であるビショウの能力。そして現在、同じ破軍学園の生徒である百鬼紫苑が有栖の言った敵と交戦中。そして彼のルームメイトである西園寺葉が、モール内の敵を無力化しながらこちらに向かってきているのだという。

有栖院の《影》の能力が隠密行動に向いている能力であったとしても、彼女の尽力がなければ敵と交戦する可能性もあつたかもしれない。

しかし……、

「その心配はない」

「——ツツ」

突如として背後からかけられた声。それにふたりは肩が跳ねる。しかしこの声を一輝は知っていた。

「百鬼くん……！」

それは白髪の鬼、百鬼紫苑であった。

「敵は？」

「斬った」

一輝の問いに紫苑は端的に返す。

新宮寺に連絡してから五分ほどしか経過していかないにも関わらず、Aランク級の騎士を相手に勝ちをもぎ取ってきたというその強さに一輝は舌を巻く。

「流石だね」

「じゃあ残りは……」

「あそこの11人だけだ。だが俺達の役目はないだろう」

「どうしてそう言い切れるの？」

「西園寺はこのモール内全域を索敵し、的確に敵の位置を特定できるくらいに魔力制御が優れている。なら——」

これほど絶好の機会を逃すわけがないだろう。そう言う紫苑に「勿論ですよ」と言わんばかりに、西園寺葉の攻撃が始まった。

音も、光も、前兆と呼べるものは何一つなかった。

ビシヨウは断言できた。

《信奉者》のおよそ半数——ここにいない全員が音信不通となっていたため、このモール内にステラ・ヴァーミリオン以外の伐刀者がいることは明らかだった。そのためステラを凌辱してやろうとは考えていたものの、それでも周囲に対して気を配っていた。いつでも敵を迎撃できるように備えていた。

だというのに——自身を除く《信奉者》全員がなんの前触れもなく、地面に倒れ込んだのだ。それも人質のなかに紛れ込ませていた者すらだ。

そしてその攻撃は自分にも及んだ。

眠いのだ。

これほど緊迫した状況で、敵の迎撃をしなければならないと脳は覚醒を促していると言うのに、それでも眠い。思考が鈍り、身体感覚が愚鈍になっていく。今すぐ地面に横たわりたい。そんな欲望がふつと沸き上がっているのだ。

幸いなのは目の前の敵が状況に困惑して、自分に襲いかかってこないことだろうか。しかしそんなことすらどうでもいい。早く夢の中に旅立ちたい。

「あら、まだ立っているんですね。これぐらいで眠ったかと思いましたが」

目蓋が落ちた僅かな視界でその下手人の姿を捉えた。

ストライプのTシャツにデニムジャケット、ロングスカートという出で立ちの、ステラに勝るとも劣らない美少女だ。

「でもいい加減逆らうのも限界でしょう？　もう落ちてしまった方が楽だと思えますが」

彼女と目が合う。前述の通り、自分の目蓋は落ちかけていたのに、

なぜかそう断言できた。そしてその瞳は青く、引きずり込まれるような感覚を覚えた。まるで深淵に誘われるように……、

「——《眠りの魔眼》」
スリーピングアイズ

ビシヨウが意識を保っていられたのはそこまでだった。彼の意識は夢の中に引きずり込まれ、喪失した。

■ ■ ■
ビシヨウの身体もまた他の兵士達と同じように事切れ、まるで糸の切れたマリオネットのように地に倒れた。

——葉がオズボーンとの交戦を紫苑に任せ、《信奉者》及びビシヨウの制圧に乗り出したのはひとえにお互いの能力を考慮したが故の事である。

今までの生活の中で紫苑は一对一の真正面からの戦闘を、そして自分は大人数の制圧を得意とすることはわかっていた。そのため自分は紫苑付近にいる《信奉者》を眠らせ、オズボーンとの戦闘に妨害が入らないようにした後、シヨッピングモール内を巡回していた半数の敵を眠らせたあとに拘束。そしてステラが気を引いてくれているうちに残った敵を制圧したのである。

「シオリ！」

「奇遇ですね、ステラさん。そしてお久しぶりです。この一週間前にヤンチャしたかと思ったら次はテロリストと遭遇ですか。運がありませんね」

「そんなことはどうでもいいのよ！ あいつら、殺したの!？」

「いえ。眠らされているだけですよ」

ステラとの問答していると後ろから割り込む声——それはゴスロリ服を纏った小柄な少女のものだった。

「あなたは……」

「黒鉄珠雫と申します。お兄様がお世話になりました。それにここでも……」

「いえ、そんなことは。降りかかった火の粉を振り払っただけですし大した手間でもなかったですしね。それよりも百鬼さんが心配ですが……」

その時、とんつという軽い音が三つほどモール内に響いた。

それぞれ百鬼紫苑、黒鉄一輝、有栖院風である。

「百鬼さん、お怪我はございませんか？」

「掠り傷ひとつない。……が、服が汚れた。これなら制服のままであれば良かったな」

「ああ……」

交戦時のものだろう。黒いニットに乾いた付着してしまっている。

「汚れ、取れるか？」

「問題ありませんよ。私にお任せください」

「そうか。頼りになるな」

「いえいえ」

（随分と呑気な……）

珠雫は二人を見てはあ、とため息を吐くが同時に栞に脱帽する。

それは栞の魔力制御技術だ。ここに集められていた人質はおよそ五十名。そこからの確に敵のみに魔術を命中させ、あろうことか人質に紛れていた者すらも鎮圧してみせた。しかも、視界外の攻撃でだ。

——間違いなく自分と比肩する、またはそれ以上の技量だ。少なくとも自分には同じ事をしろと言われてもできないだろう。

「しかしこの解放軍の方も運が悪かったですね。まさか襲撃をかけたショツピングモールで七人の伐刀者と出会すなんて」

「え……？」

今ここにいる伐刀者は一輝、珠雫、ステラ、有栖。そして紫苑と栞だけのはず。

なのに七人とはどういうことだ。

ほら、と栞が言えばなにもなかった空間が輝き始め、鱗が剥がれ落ちるように景色が変わる。

するとそこには中肉中背の少年と、その後ろに隠れている少女がいた。

少女の方は知らなかったが、男の方を紫苑と一輝は知っていた。

「……何故、僕の能力を暴けたんだ」

「いえ。私の能力を発動したときにあなたが居た場所は、なにもな

かった筈なのに人らしき反応があったので。何かしらの魔術を使つて隠れているのだろう、と思っただけですよ」

「そうか。埤外の魔力制御力にその素敵能力……百鬼のルームメイトに選ばれるだけはあるということか」

「桐原くん……来ていたんだね」

彼の名は桐原静矢。昨年首席入学者にして、七星剣舞祭の代表者でもある男だ。

彼は一輝の事を無視して、紫苑に視線を向ける。そこには確かな憎悪が燃えていた。

「会いたかったよ、《黒鬼》百鬼紫苑」

「そうか」

「ふふ。僕程度、眼中にもないってことか。それはそうだよ。去年、僕は君を前にして一秒も立っていられなかったから。……君が学園を自主退学したって聞いたときは、正直落胆を隠せなかったよ。でも、どうしてかな。いつか戻ってくるんじゃないか——いや、絶対戻ってくる。そんな確信があったんだよ。事実、君は戻ってきた。昨年よりも更に強い力を携えて」

桐原には見える。

特に殺気を向けてきているわけでもない。だというのに彼の背後に佇む、こちらを睥睨する黒き鬼神が。

「僕は強くなった。君に勝ちたい——いや、勝つ。そう決意して一年間。毎日毎日努力した。血反吐も吐いた。嘲笑するクラスメイトからの視線にもずっと耐えてきた。……それも今年で終わりだ。君に勝って、僕は取り戻す。尊厳も、名誉も。君に奪われた何もかもを！」

最後の方は半ば悲鳴になっていた。

当たり前だ。

桐原にとって百鬼紫苑という男はトラウマそのものなのだから。相対しただけで膝が笑っている。アイツに向ける笑みはひきつっていないだろうか。

百鬼紫苑との決闘に敗北してから一年間。桐原に押された烙印は

『世界最弱の騎士に負けた男』だったのだから。そこからの毎日はずっと悲惨だった。

彼を慕っていた女達は軒並み掌を返し、教師陣達からの陰口や嫌みは桐原の心を確実に切り刻んでいた。自分は首席入学者だったというのに、まるで落第生のような扱いをずっと受けた。

屈辱の日々だった。雪辱に塗れた日々だった。しかし彼は折れなかった。この借りを絶対に返してやると、これまでの数倍の鍛練を毎日毎日重ね続けた。

「生憎、初戦は君とは当たることができなかつたが……僕と当たるまで負けるんじゃないぞ。君を倒すのは僕なんだからな」

「ああ。お前も油断はしないことだ」

桐原はふん、と鼻を鳴らして去っていく。その震える手を、後ろに立っていた少女に覆い隠してもらいながら。

そのタイミングで複数名の警察がフードコートに駆けつけた。新宮寺が呼んでくれたものだろう。

調書を作るから署まで同行してほしい、という責任者の言葉に従って紫苑と栞は責任者についていった。

——警察から解放されたのは日が傾いた時だった。

空が橙色に染まり、鳥が家に帰れと促すようにうるさいくらいに鳴いている。

「今日は色々ありましたね。ただ遊びに来ただけだったのに」

「……たぶん俺と一輝のせいだろうな」

「え、どうしてです?」

「俺と一輝は運が悪いからな」

伐刀者のステータスには運というものがある。運も実力のうち、という言葉があるが、実際に戦闘において僅かな天運すらも戦況を左右しえるのだから当然と言えば当然だが。

その六段階で評価される伐刀者のステータスにおいて、一輝は最低のF、そして紫苑においてはF-という最低評価の更に下をいくほどには恵まれない。

そのふたりが集まれば、まあこうなるだろうという紫苑に葉は苦笑して、

「まあ物は考えようですよ。今回の事件で報奨金も貰えましたし、新宮寺理事長から代休も頂けました。その時間を更に鍛練に当てることもできます。ほら、一概に不幸だとは言えないんじゃないですか？」

「西園寺は前向きなんだな」

「どうせなら良い方向に考えようとしてるだけです。何事も悪い面ばかり見ていたらずつと気分が沈んでいきますし」

ね？　と言う葉にそれもそうだと紫苑も返す。しかし同時に自分にはできない考え方だとも。

そんなときだった。

「キヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

「——ツツ!!」

女性の悲鳴が聞こえた。反射的にふたりはそちらを振り向いた。

叫んだのは中年女性だ。その先には彼女の子供だろう、ひとりの少女が、落ちかけている踏み切りのなかに囚われようとしている。

カンカンカン、と警告機がけたたましく鳴り響き、前からは音を立てて電車が迫ってきている。

「——ツツツツ!!!」

「百鬼さん!!」

紫苑は地面を蹴る。それは刹那の間に最高速に至り少女を救わんと突貫する。

その横顔は何かの強迫観念のような物が滲んでいて——思わず、叫ばざるを得なかった。彼をそのまま行かせてしまっっては、良くないことが起こる。そんな予感がしたから。

しかしそんな事を紫苑自身は意に介さず、アスファルトが靴の形に歪むほどの脚力と魔力制御で踏み切りの下を潜り抜け、少女を抱き抱える。そしてそのまま転がって踏み切りから少女を救いだした。

そしてそれから一秒と経たずに電車は踏み切りを通過していった。

「ハア……ッ!　ハア……ッツ!!」

肩で息をし、身体からは汗を吹き出して止まらない。オズボーンと戦ったときよりも遥かに消耗している。それは自分以外の誰かの命がかかっていたからか、それとも……、

「玲、玲！ 怪我はない!？」

「う、うん……大丈夫……」

「ありがとうございます！ あなたが居なければ娘は……!」

「いえ。今度はちゃんと見ていてあげてください」

頭を下げて、去っていく親子をふたりは見守る。

無用な心配だったか、そう思い駆け寄ろうとしたときだ。

——突如として紫苑が地面に踞った。

「百鬼さん!？」

「ハア、ハア……うおえ……!」

腹の中身を路上にぶちまけ、「ヒュー、ヒュー……」と苦しげに呼吸を繰り返す。顔には脂汗が滲んでいて、粗方腹の中身を吐き出したであろうにまだええずきは止まらない。

吐き気、そこから伴う嘔吐に異常なほどの発汗に呼吸困難——代表的な外傷後ストレス障害の症状だ。

一体何故——いや、そんなことを考えている場合ではない。

「早く、病院に……!」

「……いや、だい、じょうぶ……」

掠れ、苦しげな声でそれを制止したのは紫苑本人だった。

「大丈夫って、それが大丈夫なわけが!」

「すぐ、おさまる……悪い、水、貰えるか……?」

栞はショップینگモールで購入した水が入ったペットボトルを差し出した。彼はそれを受けると、ズボンのポケットから何かの錠剤を取り出すとそれを水で流し込んだ。

「悪い、迷惑かけた。もう、大丈夫だから、早く」

帰ろう、と一歩前に踏み出せば足元がふらついて、危うく転倒しそうになる。それを詩織は支える。

「すぐに大丈夫になるわけないでしょう……! ほら、一旦休みましょう」

「でも、またお前に迷惑かけ——」

「そんなことどうだっていいですから!!」

紫苑の言葉を彼女は怒号で遮ぎる。

「私に迷惑がかかるとか、どうでもいいですから……!! もう少し自分を労ってください……!」

「……………悪い」

「……………落ち着きましたか?」

先ほど助けた子供が遊んでいたのだろう、公園のベンチにふたりはそちらを腰掛けていた。

「ああ。悪い、水……………」

「気にしなくて良いですよ。安いものでしたし」

背凭れに体重を預け、黄昏時の空を見上げ、ふう……………と深く息を吐く。そして……………

「……………電車が怖いんだ」

紫苑は語り出す。彼としては話すつもりなど欠片もなかったのだが、一度溢れたものは止まらなかった。

「もう、十一年も前の話だ。関西の方で大規模な電車脱線事故があった」

「それは……………」

栞も五歳、または六歳頃の話だ。忘れていてもおかしくはなかったが、忘れられないほどにその脱線事故は未曾有の被害を出した。乗客のおよそ六割が死亡し、二割が重傷。しかもその脱線した電車は住宅街に突っ込んだことも、被害を拡大した要因であった。

「俺もその事故に巻き込まれそうになってな」

「巻き込まれそうになった……………?」

「ああ。俺は巻き込まれなかった。精々突き飛ばされた時にできたかすり傷程度だったよ。でも……………俺を庇ってくれた人は、無事じゃすまなかった」

「……………」

「その人は——たきはなかわる瀧華薫」

「瀧華って……」

「ああ、俺が使う《瀧華一刀流繚乱勢法》の創始者だ」

といつても《瀧華一刀流》から派生したものだから、創始者というのは微妙なところだけだな、と紫苑は続ける。その声は——その人に対する想いが溢れんばかりに詰まったものだった。

「あの、その薫さんは……」

「いや、死んではいない。ちゃんと生きてるよ。——ずっと眠ったままだけだな」

もう傷は完治した。脳にだつて異常はない。どこから見たって健常体のそれとなんら変わらない——だというのに何故か目を覚まさない。医者も何故彼女が目を覚まさないのか全くわからないらしい。「生きてるだけで幸運なんだ。生きてくれればいつか目を覚ますから。もう十一年も前の話だ。いい加減立ち直るべきなんだ。もう終わったことなんだ。でも……ッ」

声がひきつる。嗚咽が混ざり、眼からは大粒の涙が溢れる。

「怖くて仕方がない……電車を見ただけで、走る音が、聞こえてくるだけで、身体が震える。あの日の景色が、浮かんでくる。薫姉かわるねえが、俺の前で吹き、吹き飛んで、血を流して、それで……それで……!!」

「百鬼さん……!」

頭を抱える。浮かび上がってくる過去の惨劇から目を背けるように、強く目蓋を閉じて頭を振った。見たくない、もう嫌だ。あんな地獄に遇いたくない。

嫌だ嫌だと半ば狂乱する紫苑を、葉は強く抱き締めた。

「落ち着いて。……ここにあなたを傷つけるものは何もないですからね。大丈夫……大丈夫……」

深呼吸してみましよう、と言う葉の言葉に従って、紫苑は大きく息を吸う。吸って……吐いて……。吸って……吐いて……。それを数分は繰り返しただろうか。

落ち着いて、ようやく紫苑は言葉を絞り出せた。

「……あれも、嘘だったんだ」

「あれ……とは?」

「今日の、用事があるから、先に行つてくれって言つただろ……？あれも本当は、電車を避けたかっただけだったんだ。こんな事になるから……」

「……」

「でもそれも無駄だったな。結局お前に迷惑をかけた。本当に、情けない……お前が怒るのも当然のことだ」

「……ええ。そうですね。私は確かに怒っています。けど」

栞は一息置いて、続ける。

「けどそれはあなたが思っていることは全く違いますよ」

「え……？」

紫苑は思わず顔を上げた。

「まず聞きたいんですが、どうして紫苑さんは『自分は電車が苦手だ』つて教えてくれなかつたんですか？」

「いや、それは……お前に迷惑がかかるから。そんな俺なんか勝手な都合にお前を付き合わせてちゃ……」

「まずそこです。いつ私が『あなたの勝手な都合に付き合わされて迷惑だ』、なんて言いましたか？」

「それは……」

全く言っていない。栞はこれまでの紫苑に対して、一度もそのような事を言っていない。

「それに今回ショッピングモールに出掛けたのは、私が百鬼さんの服の少なさをなんとかしたいと思ったからです。それにあろうことか私がつっていた割引券をなんとか消費したいから、と思ったこともあります。……ほら、全部私の勝手な都合でしょう？」

紫苑さんは服を増やす必要性なんて全く感じていなかったでしょうし、私のわがままに付き合つて一緒に食事をとる必要も全くなかつたわけですから。……なのにどうして付き合つてくれたんですか？」

「……迷惑だと、感じなかつたからだ」

「そうでしょう？ それと同じですよ。私は今回の件で、あなたに迷惑をかけられたなんて全く思っていない。……心配は、しました
が」

「……悪かった」

「もういいんですよ。他に苦手なものありますか？」

「いや、大丈夫だ。こんな風になるのは、電車だけだ」

涙でグシヤグシヤになった顔を紫苑は拭って立ち上がる。もう大丈夫だと、栞に示すように。

「帰ろう。俺のせいで遅くなった」

「……ええ。そうですね」

第5話

——西園寺葉は、どぶんと水に沈むような感覚を覚えた。

辺りは真夜中の海のように——いや、月明かりがない分夜よりも暗い。完全な黒で覆われた海のような場所に彼女の身体は浮かんでいた。

だが、息苦しくはない。当然だ。ここは海などではないのだから。

ここは《夢》の中だ。彼女の異能は時たま、このように彼女自身が夢だと認識できる夢——所謂、明晰夢を彼女に見せる。大体の場合はただそれだけで終わるのだが、今回はそうではないという直感があった。

——眼下で炎が燃えている。

電車の脱線事故だろうか。電車は住宅街に突っ込み、多くの悲鳴と絶叫が彼女の耳を突き刺すが、その光景はどこか朧気だ。まるでピントが合っていない写真のようである。

その理由を彼女は知っていた。

それらの景色は、この夢を見ている者にとっては些事に過ぎないからだ。言ってしまうまでも良い事であったり、記憶が朧気だからきちんとした輪郭を帯びていないのだ。

『薫姉！ 起きてよ、薫姉ツツ!!』

そうした曖昧な夢の中で、唯一はつきりとした形となっている場所があった。

そこにはひとりの少年がいた。黒髪黒瞳の、一般的な日本人の容貌。あどけなく、平均よりも少し整っているその容姿は、涙や鼻水でぐちゃぐちゃになっている。

そしてそんな少年に揺さぶられているのは、自分と同じくらいの年齢をしたひとりの少女だ。右腕はあらゆる方向に折れ曲がっており、右の横腹は肋骨が粉碎されているのだろう、大きく凹んでいる。頭からの出血も酷く、生きていたところで虫の息だろう事が火を見るよりも明らかだ。

やっぱりか、と葉は思う。今日の事から、予感じみたものは感じて

いた。

年齢も、容姿も、雰囲気も大きく異なる。されどこの夢にいる人物を——性格に言えば少年の事を知っていた。

これは百鬼紫苑の夢だ。

暗転し、場面が切り替わる。

夜の病院だ。月明かりが病衣を纏っている紫苑を微かに照らしている。

そんな暗がりでも電気もつけずに、紫苑がテレビを真つ直ぐと見つめている。音声も遠く、テレビから発せられる音が何を言っているのかはよくわからない。

けれどテレビの映像だけははつきりと見えた。

それはひとりの少女が刃を振るう光景だった。伐刀者同士の試合だろう。少女が振るう刃は自身に迫る雷撃を払い落としながら、対戦相手だろう男へと突貫する。そしてそう時間も経たずに男を斬り伏せ、喝采を浴びる。

その剣技は、紫苑が普段振るう剣技と酷似——いや、全く同じ剣技《瀧華一刀流繚乱勢法》だった。

『……俺がこの剣を』

世界最強にするんだ。

真夜中の、誰も聞くことのない宣誓は夜の闇に消えていった。

場面が切り替わる。

彼が刀を振るっている。いや、訂正しよう。振るうという表現はあまりにも合っていない。言うなれば刃に振るわれているような、そんな光景だった。お世辞にも子供の棒振りごっここの域を出ない——否、その域にすら達していないあまりのもお粗末なそれだった。

しかし彼の瞳は、動きは、真剣そのものだった。間違いなく彼はごっこ遊び、などという理由で剣を振るっているわけではなかった。

というのも彼が振るっていた剣術は、《瀧華一刀流繚乱勢法》の剣筋にいくつか類似点が見られたのだ。しかしそれを見抜くのは並大抵のものではなく、洞察力に極めて優れた彼女だからこそそれに気付け

たと言つていいだろう。それほどまでに……彼の剣は杜撰で、愚鈍で、弱々しかった。

——才能がないことは、誰の眼にも明らかだっただろう。

そしてしばらくして、看護師らしい女性が彼を連れ戻しにやってきた。体力を著しく消耗し、尚且つ病み上がりと言つていい彼は一切の抵抗が許されず、ベッドへと連れていかれた。

場面が切り替わる。

彼女が目にしたのは、和風建築の一軒家だった。庭は以前は整えられ、見事な植物が出迎えたのだろうが、それは見るも無惨な姿になっている。ここ数ヶ月の間、手入れがされていなかったのは確実だ。

夢の中の幼い紫苑は、鍵穴に鍵を差しして扉を開ける。そこで彼女は玄関の表札に『瀧華』と書いてあることに今さら気がついた。

彼は玄関を上がり、それに葉も続いていく。そこで彼女の嗅覚は不穏な臭いを嗅ぎ取った。

——それは腐臭だった。それも食べ物が腐った匂いに極めて類似しているが、それとは違うとはつきりわかるそれ。彼女はこの特有な匂いを知っていた。以前嗅いだことがあったからだ。

この臭いは——人の死の臭いだ。以前、腐乱死体に出くわしたことがあったから気付けた。最悪のイメージが頭をよぎるが——イメージどころではないほぼ確実なことなのだけれど——紫苑を止めることはできない。あくまでもこの夢の主、見ている人間は紫苑であつて彼女は彼が見ている夢の観客でしかない。見ることはできても、夢そのものには一切干渉できないのだ。

だからこそ彼は紫苑の後ろを歩いて、彼と一緒に夢の世界を見ていくことしかできない。

そしてふたりはその臭いの根元へとたどり着くことができた。できて、しまった。

——そこにいたのは、否、あつたのはひとりの男の死体だ。年齢はおよそ40代後半〜50代前半ほどの男性。非常に筋肉質であり、生前はひどく厳格な人だったのだろうと思わせる顔つきと体つきだ。

そんな男が、ダイニングキッチンで首を吊っていた。腐臭からもわ

かる通り、彼は確実に死亡しており、男の死体の回りをハエやウジなどの羽虫が飛び交っていた。

それを半ば認識できていないのか、紫苑はダイニングキッチンテーブル。彼が首を吊っている真横ほどに置かれていた紙に視線をやつて、それを手に取った。

『漣雁燕漣ヨ漣帙〉漣』

彼の脳が拒絶したのか、紙に書かれている内容を確認することはできなかつた。文字化けし、それはまるで意思を持つかのようにふよふよと浮かび、四方八方に飛び去った。

そんなときに、葉は聞く。

何かが崩れ去るようなけたたましい音。それが彼の心があげた断末魔だということを理解するのに、さほど時間はかからなかつた。

場面が切り替わる。

最所の頃から身長も伸び、体つきも男性のそれになってきた彼が剣を振っている光景だ。しかしそれは最初に見たようにひとりで振っているのではなく、どうやら模擬戦相手がいるようだ。顔の形や輪郭こそひどく曖昧で、影のように見える。そしてそれを見ている人間がふたり。ひとりは禿げ頭の好好爺めいた杖を持つ老人に、赤い着物装束を着崩した幼女。そこだけははつきりとしていて、そのふたりを彼女は知っていた。

『南郷寅次郎に……西京寧々……?』

それは日本を代表する魔導騎士のふたり。彼らが師弟関係にあり、南郷寅次郎が自分の見込んだ騎士を自分の弟子にすることは有名な話だったが、まさか紫苑も弟子のひとりだったとは。

それにしても彼の戦術からは南郷寅次郎の気配は感じないけれど、それも彼の《瀧華一刀流繚乱》——いや、瀧華薫への想いを考えれば当然か。彼は小さかつたため、今もその想いを自覚はしていないのだろうが彼の彼女への想いは恋慕に近い。そんな彼女の剣術を会得しようとする彼が、彼女以外に由来する技術を取り込もうとするとは思えなかつた。

やがて紫苑の持つ霊装が弾き飛ばされ、南郷から彼の敗北が告げら

れた。

それが幾度も幾度も——数にして千は越えるほどに繰り返された。場面が切り替わる。

更に彼は大きくなった。齢にして12ほどだろうか。

彼の剣は更に精錬され、対戦相手だろう影を《幻想形態》である霊装で叩ききった。影から赤い光が溢れだし、地に伏せる。南郷からの勝利が告げられ、西京寧々からは称賛されるも彼の表情は暗かった。

それも、夢を見ている葉にはわかった。彼の心を埋めるのは焦りだ。どれだけ戦つても、どれほど鍛練を積んでもこれ以上強くなれなくなっていた。彼は今、壁にぶつかっていたのだ。

しかし彼は愚直に努力した。いやそれしか知らなかったと言つていいだろう。彼は「次！」と吠え、別の影と向かい合い、剣を交えた。それにも勝利する。

次、勝利した。さらに次、勝利した。その次、勝利した。

そうして幾度も幾度も幾度も勝つて、勝つて、勝ち続けた。そんな時だった。

ぎちり、と。

重く堅い鎖が、どこかで擦れるような音がした。

場面が切り替わる。

そこは今までの光景とは違って、非常に現実場馴れした光景だった。

そこは吹雪が吹いていた。しかしその雪は黒く、そのひとつひとつが刃であるかのように彼の身体を突き刺した。そしてそれらがもたらす厳冬もまた、彼の身体に牙を剥いた。

その痛みに彼女もまた顔をしかめた。100%とまでは言わないが、彼が味わう痛みが観客である葉にも襲いかかってくるからである。

そんな時だった。

カンカンカンカン、という音がこの黒い世界に響き渡った。

その瞬間、吹雪は少しだけ大人しくなり周囲の様子が明らかになる。そこは線路の上だった。踏み切りが降り始め、彼の目の前から風

が、彼が真剣な眼差しに気圧され、彼らは出ていった。

『なあ紫苑、今からお主の身に起こったことを説明する。落ち着いてきいてくれ』

『……………はい』

『お前に起こったことは……………《魔人》化の兆候だ』

寧々は説明する。

伐刀者が自身の可能性を極めきり、それでも足りないかと手を伸ばした時になれる存在であること。そうなったときに起こる事の全て。

そして紫苑が見た夢は、そうはさせまいと運命が必死になつて見せた絶望であること。運命の外に至るということは、運命の保護下から出ていくということ。

『《魔人》……………』

『そうじゃ。……………しかし寧々も説明したが、《魔人》になるということ
は運命の外に出るということ。その先では今まで出会わなくてもよ
かった厄災と出会うことに繋がる。だが、運命の内にいる限りそこ
は相応の幸福が保証される』

『相応……………』

『《魔人》になれるからといって、その先に踏み出さなきゃいけないわ
けじゃねえ。事実、お前と同じところに至りながら引き返した人間
だっている。先に進むか、引き返すか。決めるのは、お前だ』

『俺は……………』

夢の中の彼らの説明を、栞は静かに聞いていた。

それは彼女にとって既知の事であったからだ。

なにしろ……………寧々が言った『《魔人》になれたのに、そこで引き返
した人間』こそ西園寺栞であったからだ。

『……………先に、進みます』

『そう、か。……………ならば《魔人》の先達としてひとつ教えておこう』

ピツ、と南郷は人差し指を立てる。

『俺は絶対に勝てる』、そう信じるんじや』

『俺は絶対に勝てる』……………』

『そうじゃ。自分を信じろ。今まで積み上げてきた努力を信じろ。そ

ここに賭けてきた自分自身の想いを信じる。自分は負けないと吼え続ける。さすれば……運命は必ず引きちぎれるじやろう』

『……わかりました』

そうして、彼の運命を引きちぎる戦いが始まった。

二回目。惨敗。葉が数えられる内で5000を越えるほどに繰り返され、その全てが一切の抵抗を許すことなく轢き殺された。

三回目。惨敗。3000を越える挑戦をしたが負け続けた。しかし夢の中で自身の霊装を展開することに成功。最後の辺りでは電車に向かつて刀を振り下ろしたが……その全てが呆気なく蹴散らされた。

四回目。刀を振り下ろしたが、前日と同じくその全てが呆気なく砕かれた。その後、彼は起きて刀を振るった。次こそは負けはしない、そう決意を抱いて剣を振るった。

そうして……黒星の個数が二万を越えた頃、電車を僅かではあるが刃を立てることに成功した。

しかしその代償は極めて大きかった。

彼の黒かった髪は尋常ではないストレスのせいかその大部分が白く染まっており、満足に睡眠を取れていないせいか目元には隈が濃く刻まれている。そして眠ろうと思えば、あの電車に轢き殺され続けるのだから満足に眠ることもできず、運命への戦いを迫られる。

そんなことを続ければ、紫苑の心が再び砕かれるのは時間の問題だろう。それに……葉は、自分の運命に挑み続ける彼の姿を直視できなくなっていた。

当然である。自分が逃げ出したところに彼は挑み、そしてその先へ至らんと必死に努力を続けている。どれだけ打ち砕かれようとも、敗北を喫しようとも、立ち上がり、そして前へと進んでいく。その姿が……彼の表情が、あまりにも痛々しくて。

もうやめてくれと何度懇願しただろう。

彼がどうしてそこまで努力しなければならない？ どうしてそこまで傷つかなければならないのだ、と彼女は誰かに問うわけでもなく彼女の口から溢れていた。

すでに運命に挑み続けて一週間。電車に轢殺された回数には3万を越え、その痛みを、心の絶叫を、葉の心は受け止めている。もはや紫苑ではなく、葉の心が限界だった。

自分が動けるのなら、今すぐにでも彼を助けることができるのに、と。自身の力の無さを呪い、通算3万5195回目の事だ。

彼が刀を振り上げる。

その一刀は、これまでのそれとは大きく異なると一目にわかった。ギチギチ、と彼が握る霊装からは霊装自身が悲鳴を上げるような音が聞こえ、全身の筋肉が彼の外見とは比べ物にならないほどに隆起。それに彼を縛り付けている運命の鎖もまた、軋んでいた。

彼の目からは恐れが消えていた。ただ振り上げた刀を振り下ろすことしか考えない、そう如実に語っていた。そして――、

『――』

彼が小さく呟くと、刀を振り下ろす。

それは一瞬ではあるが何も起こっていないのではないかと錯覚させ……次の瞬間、電車は先頭から最後尾まで一刀両断され、彼の足を縛っていた運命の鎖もろとも叩き切った。

瞬間、場面は切り替わる。

場所は雪原だった。以前のような黒い雪が降っているというような異常事態はなく、されど身を刺す寒さだけは彼の心の中で体験した地獄のそれとは一線を画すほどに冷たい。

その雪が当たった場所が瞬間に凍りつくのではないかという、絶対零度を思わせる白の中で唯一燃え上がっている物があった。

それは――《鬼》だった。《鬼》としか言えない何か、その雪山の上に身体を赤黒い炎を、瘴気のように纏いながら佇んでいた。そして……彼が立っている場所が、積み上げた屍の上だと気がつくのにそう時間はかからなかった。

屍から溢れた血は赤黒い河を作り、無数の屍は彼女が見上げなければならぬほどの山を作っていた。

屍山血河の頂にて佇む鬼神と目があった。瞬間、彼女自身の意識が浮上していくような錯覚を覚えた。

第6話

「ハアツ……ハアツ……」

ひゅー、ひゅー、と。

彼女は息と呼べるのかも怪しい呼吸を何度も繰り返した。やがて落ち着いたのか、最後に深呼吸をひとつし、状況の把握に努めた。

百鬼紫苑の夢の中で最後に目があつた怪物、そして自分の心を抗いようのない恐怖の奔流で呑み込んだ悪鬼。あれの正体は——《百鬼紫苑》、その成れの果てだ。

感じた魔力の波長、右手に握られていた黒い靄を纏う日本刀——あれは間違いなく、彼の霊装だ。ならばあの鬼神が彼だということは間違いないのだが……どうも彼女には信じられなかった。あの百鬼紫苑が、あんな化け物であるとは思えなかった。いや……思いたくなかったと言った方が正しいのか。

そんな時だった。

洗面所の方から、極めて小さいが物音がしている。外部からの侵入者であれば、たとえ夢の観客になっていたとしても葉が気付かないわけがない。ということは必然的に……、

「……百鬼さん？」

「ああ。……悪い、起こしたか？」

同居人である紫苑である。

彼は顔を洗ったのか、手にタオルがありそして……顔色はお世辞にも良くない。いや、良くないどころではなく最悪と言つても良いほどだった。

だがそれも仕方のないことである。夢の中とは言え自身のトラウマと2万回以上相對したのだ。夢の当事者ではない葉にもトラウマになるような光景であつたのに、当事者に耐えろというのは酷な話である。最終的に乗り越えたものの、それでも彼の傷跡を再び決めるには十分すぎた。

「……また、吐きましたか？」

彼の夢の事に触れようか迷つたものの、彼女は触れることにした。

それには、不可抗力とは言え、彼の夢を覗き込んでしまったことを謝りたいという彼女自身の想いも多分に含まれていた。

そんな彼女を見て彼は苦笑する。

「わかるものなんだな。そういう術すべに長けているのか」

「いえ、今回は、違います。その貴方が見ている夢を一緒に見てしまつて……能力の影響なんです。申し訳ありません」

「そう、か……」

彼女の能力は紫苑の知るところではないが、《眠り》に類する概念干涉系能力だろう。概念干涉系は自分の能力に対する解釈次第で無限に出来ることの幅が広がっていく。

そして《眠り》に密接に関係する《夢》もまた彼女の能力の範疇に収まるのは道理だ。

「どう思った？」

自分に頭を下げていた葉に、紫苑は問うた。それが彼女に問うては唐突な質問だったのだろう。何しろ彼女は夢を盗み見た立場、文句のひとつでも飛んでくるかと思っていたのに、いざ問われたことは自分の夢に対する感想だったのだから。

「それは……」

惨かった。見ていられなかった。それが彼女の想いだった。

自分の友人が大切な人を失った絶望に慟哭し、絶叫し、そして彼女の剣術を世界で一番のものとするべく、もがき、足掻き、苦しみ、血反吐を吐き、そして万を越えるほどの死を乗り越え《魔人》となるまでの軌跡。

運命を呪い、運命に絶望し、運命に憤怒し、運命に憎悪し、運命に振り回され続け、そして運命の制縛を叩き斬った男の半生。

その過程で抱いた想いの全てが、葉の中に流れ込んできていた。

どうしてそこまで努力できる？ どうしてそこまで苦しみながら、逃げることもせずに運命に挑み続けられたのか。

自分には決して彼と同じような事をする事はできない。

運命を乗り越えてまで手にしたいものが、今の自分にはないから。それこそが運命を超えて行ける資格を得ながらも、それを行使したか

否かの差なのだ。

そしてだからこそ、そんな軽々に彼の半生を見届けた感想が言えなかった。運命の先へ行く扉の前から逃げ出した……《魔人》になつていない自分が、そんなことを言う資格はあるのか。

その沈黙をどう思つたのか、彼は笑つた。いや……嘲笑した。

その嘲笑が、自分に向けられた物ではないと彼女はすぐにわかつた。その刃のような嗤いは、彼自身に向けられたものだったのだ。

「無様だつただろ？」

「……………は？」

彼女は紫苑の吐いた言葉を理解するのに、しばしの時間がかつた。それほどまでに、彼の言葉が信じられなかった。

無様……？ 無様と言つたのかこの男は。自分のことを？ あれ

ほど努力した自分を、この男は無様だと？

「そんなことは……………」

「だつてそうだろう？ 俺は……何も成し遂げられていないんだから」

彼の半生は敗北に塗みれていた。

ずっとずっと負け続けて、そしてようやく勝てたと思えば、勝つた先で再び負けて。

「一体どれほど負ければ気が済むのか。本当に自分が嫌になる」

「それでも……あなたは努力したじゃないですか。努力して……強くなつたでしよう？」

「それでも結果は出せてない」

葉の言葉を、紫苑はバツサリと否定する。

「努力してたら認めてくれるのか？ 努力してたら負けようが良いつてののか？ ……違うだろ。結果が全て、成し遂げた事が全てだ。」

お前だつて俺の夢を見たならわかつてるだろ。十一年、十一年もあつたのに、俺はあの人の剣を世界最強の剣技にできていない。それが何故か。ああ決まつてるさ」

紫苑は葉に捲し立てるように言う。

いや、それは彼女に向けられた言葉ではなかった。その言葉は、そ

の刃は彼自身に突き立てられたものだった。

「……俺が弱いからだよ。才能なんて何もなくて、愚図で、愚鈍で、そのくせ捨てるべきものも捨てきれない愚かしさが、現状を生んだんだ。そうだよ、そもそもあの時捨てていけば良かったんだ」

「何を……」

「命だよ。俺はあの時……」

「薫姉に助けなんて求めずに、あの時死んでいけば良かったんだ」

「それは違う——ッ！」

彼の言葉を彼女は真つ向から否定する。

あの夢の光景から、瀧華薫が彼を庇って事故に巻き込まれたのだというのは想像できたことだった。だが、

「あれは事故だった！ 確かに多くの人が巻き込まれましたが、それでもあそこに誰かの意志が介在していたなんてことはない！ あなたは被害者なんですよ、なのに……っ。どうしてそんなことを言うんですか!？」

「……俺のせいなんだよ。俺があのととき、薫姉に早く綺麗な景色を見せたかって先走ってたんだ。待って、ってあの人は言ってくれてたのに、言うことを聞かずに。だから……俺に向かって脱線した電車が突っ込んできたんだ。その時に言ったんだ、言っ、しまったんだよ。……『助けて、薫姉』って。

そんなこと言ったら、薫姉はただじゃすまないって分かってたのに。テメエの命惜しきでそんなこと口走ってさ。結果はこのザマだ。世界最強になれる筈だった人は十一年間も眠ったままで、残されたのは世界で一番伐刀者の才能がないって言われてた子供だ。……どっちが残るべきだったか、なんてすぐにわかるだろ？ それにさ、言われたんだよ」

「誰に、何をですか」

「薫姉のお父様に」

瀧華薫の父。

《瀧華一刀流》の継承者であり、瀧華薫の師であり、そして——瀧華薫が植物状態に近い状態になり、そう経たずに自宅で首を吊っている

た男。

彼女が十一年間経過したいまでも眠っているということは、もう二度と目覚めないかもしれないと聞かされていたんだらうか？

それを聞いて思い出すのは、首を吊っていた部屋の机の上にあった一枚の紙だ。夢の中では文字化けしていて、到底読めたものではなかったがそれでも彼には見えていたのだろうか。

『お前のせいだ』

「——ってな」

「——ツツツ!!」

それを聞いたとき、栞は怒りでどうにかなってしまいそうだった。

お前のせいだ、だと？

ふざけるのも大概にしろ。

恋慕の情を抱いていたであろう人を、目の前で理不尽に奪われた年端も行かない少年にかける言葉が。

事故から十一年経過した今でもそれに縛られ、電車の姿を見ただけで嘔吐するほどに深い傷を負った彼にかける言葉がそれなのか。

だからといって紫苑ほどつらくない、などと断ずるつもりはない。

そもそも、自分は家族を失うという絶望を味わってきていない人間だ。そんな自分が瀧華薫の父の気持ちや、紫苑の気持ちや、理解できる、などと思うこと自体が思い上がりだ。

だからといってそれはあまりにも……

「酷すぎるでしょう……!」

「……お前は本当に優しいな」

まるで自分の事のように怒ってくれる。自分が味わったように悲しんでくれる。

今日だってそうだ。自分のためにわざわざ時間を割いて、ショッピングモールまで付き合ってくれて。そこで服を買うときの助言だった。以前にそんなことをしたのは……一体どれほど前の事だっただろう。

「でもな。当然の事なんだよ。薫姉が意識不明になってから、瀧華家は崩壊した。薫姉のお母様は娘がそんな状態になったことで精神が壊れ、お父様は自殺した。その事で門下生は全員辞めた今、俺以外に《瀧華一刀流》を使う人間はいない。」

……俺が終わらせたのはひとりの剣士生命だけじゃない。これからも当然のように幸せを享受する権利があつた家族と、ひとつの流派が俺のせいで取り返しをつかないことになったんだ」

「でも……それでもっ！ あなたの無事を喜んでくれた人達はいるんじゃないんですか?! ご両親や、あなたのご友人が……」

「……ああ、いたな」

「いた……?」

「お前は不思議に思わなかったか？ 俺はこの十一年間、暴拳をずっと続けてきた。俺みたいな無才は暴拳をしなければ天才達に勝てないからだ。それでも……それが万人に受け入れられることではないとわかっている」

そう言われて、気付いた。言われてみれば当然の話だった。

出会って一週間程しか経っていない自分ですら、彼の暴拳に止めてくれと懇願したのだ。ならば——彼の友人が、両親が、彼の行いを止めない筈がない。

「だから——俺は捨てたよ。両親と過ごした記憶も、顔も、名前も捨てた。俺の中に両親や友人に関する記憶は何一つとしてない」

「なんで、捨てたんですか……?」

彼の能力ならば——出来るのだろう。

彼の能力は概念干渉系能力《努力》。必死に努めれば、人間の可能な範疇であれば何もかもを為せる力。それが……意図的に特定の記憶を封じるように《努力》したなら可能になるのだろう。……為し得て、しまふのだろう。

「簡単なことだよ。そうしなければ俺は世界最強になれないからだ。」

《瀧華一刀流繚乱勢法》を世界最強の剣技にできないからだ」

何度も言うように自分には才能がない。

黒鉄一輝のように魔の女神には見放されていても、剣の神の寵愛に

賜れていれば話は違っていただろう。だが自分の魔の才は彼未満の劣等で、剣の神からも見放された。その上、武において重んじられる『心』『技』『体』——そのどれもが不足している。

ならば、どうするか。

簡単だ。

他者が強さ以外に割いている物を削ぎ落とし、強さに変えるしかない。

家族、友人。

不要だ。『心』の弱い自分はそんなものを備えていれば縋つてしまふ。そうやって縋つて、咽び泣いている間に他者はどれほど前に進む？ 泣いている暇はない。それは無駄だ。切り捨てろ。

心の絶叫。

耳を傾けるな。その声が届かぬよう耳を塞げ。それを聞いてしまえば立ち止まってしまふ。自分は弱いから。愚かだから。一度でも聞こえてしまえば、絡まれる。前に進む邪魔となる。切除しろ。

想い描くは一振の刀^{はがね}。

無駄を削除し、強さ以外の全て切り落とした一振の刀。

折れることなく。朽ちることなく。錆びることなく。

零れることなく。弛むことなく。曲がることなく。

己の身体も、心も、彼女の剣を世界で一番のものとするためだけの器としなければ。そうしなければならぬ。

もし一度、立ち止まって、泣いてしまったら。——自分は二度と、立ち上がれない気がするから。

(だったら……)

彼の言葉を聞いて思う。

己を一振の刀としろという紫苑。心の絶叫になど耳を傾けるな、家族も友人も切り捨てろという紫苑。そうするべきだと言っている紫苑の顔が……。

(どうして、そんなにも泣きそうな顔をしているんですか……！)

痛みに耐えかねて、今にも泣き出しそうな子供の顔そのものだったから。

苦しいと、そう思っているからではないのか。

一振の刀になどなりたくない、思っているからではないのか。

自分が無駄だと切り捨てたもの、それを本当は切り捨てたくはないのだと。本当は手放したくなどなかったと、そう思っているからではないのか。

そして、思う。

夢の中で邂逅した百鬼紫苑の成れの果て。赤黒い業火を纏った鬼神。彼があんな風になってしまったのは——彼がこの心の絶叫に、押し潰されてしまったからではないのか。自分の心にかかる重圧に耐えられず、心がとりかえしのつかないほどに砕け散って、その果てに狂ってしまったがための姿ではないのか。

——あんな化け物にさせてたまるか。

あんな《鬼》になんてさせてたまるか。

ならば……自分はどうすれば良いのだろう。彼をあんな怪物にさせないために、自分にできることはなんだろうか。

そう考えて、気付けば栞は——紫苑の顔を自分の胸に埋めていた。

「……………は？」

紫苑は自分の状況を理解することができなかった。

彼女の女性特有の柔らかさと、柑橘系の香りが心地良い。だがなぜ自分は彼女に抱き締められているのか。それがわからなかった。

栞の白魚のような指が、紫苑の白骨のような髪を掻き分けながら撫でる。そこからは……彼女の慈しみが、これでもかというほど伝わってきた。

「いや、西園寺…………？」

「…………あつ！ いや、ごめんなさい…………気付いたら、抱き締めて…………」

彼女としても自分の行動に驚いていた。しかしそれでも彼女の抱擁は解かれることなく、それどころかさらに抱き締める力を強めた。

「…………紫苑さん、私に全部吐き出してみませんか？」

「え、いや…………」

「あなたと私はまだ出会って一週間しか経っていませんけど…………それ

でもわかることはあります」

「わかるって、何が……」

「——あなたが苦しんで、自分の限界なんてとつくの昔に超えてしまっていること」

「……！」

そんなことはない。そう否定しようとした口がいうことを聞かなかった。言葉はつつかえ、自分の想いは正しく紡がれなかった。

ただひとつ、言葉を発することが筆舌に尽くしがたい程に難しく思えた。

「ねえ、紫苑さん。泣きたかったら泣いて良いんですよ」

「……ッ、そんな、事ない。俺は泣きたくなんか」

「苦しかったら、苦しいうって言うって良いんですよ」

「そんなこと、言うていいわけが……」

「自分よりも苦しい人がいるから。だから苦しいうって言うてはいけない……ですか？」

その通りだ。

——だって自分より苦しんだ人がいるのだから。

自分の愚かな行いで、取り返しのがたないことになった人達がいるのだから。だから声などあげては行けないのだ。苦しいなんて、言う資格は自分にはない。

「……じゃあ私が許します。あなたは、『自分は苦しかったんだ』って言うって良いんですよ」

「そ、んな。無茶、苦茶だ。お前の許可があつたら、言うて良いって負うのかよ。言ったら、俺は強くなれるのかよ……？」

「苦しいうて言えば強くはなりはしないでしょうね」

彼の言葉を、葉はぼつさりとして否定する。だが、彼女は自分の否定の言葉に「でも」と付け足した。

「……でも、誰かに吐き出せば多少は楽になれますよ。自分の心に背負った重荷を、多少軽くすることはできます。そうやって心の負担を切り捨ててはみませんか……？」

「でも……お前に、俺の、何が……」

俺の何がわかるんだ。

論点のすり替えだ。彼女の言葉に応えては、どんどん外堀から埋められてしまうから。自分の心が決壊してしまうから。己の心の内に必死に押し止め続けた『弱い自分』が溢れてしまうから。

だから彼女の言葉には応えず、意地の悪い、されど稚拙な言葉で返す。故に――

「――あなたがずっと頑張ってきたんだって知っています」

こうして容易く返されるのだ。

「あなたが事故に巻き込まれたばかりで、まだ安静にしていなければいけないかった時期から必死に努力していたことを知っています」

「……あ」

「薫さんのお父様に、あんなに酷い言葉を掛けられて、普通なら何もかも投げ出してしまいそうになるのに、それでも努力をしてきたことを知っています」

「う……あ、ああ……」

「南郷先生のお弟子さん達と戦い続けて、最後には勝ち続けるくらいに強くなったことを知っています」

「……うぐっ……ひぐっ……」

「その努力の末に《魔人》になったことも知っています」

「ああ……ああ……！」

「だから……私は断言できますよ」

さらに抱擁を強めた。

カーテンの隙間から覗く、月からも彼の泣き顔が見えないように、強く。最強を志し、最強でなくてはならない彼の弱いところを誰にも見せないように。

「あなたは、ちゃんと成し遂げてるんだって。だから……今日は泣いてしましましょう。大丈夫……誰も見てませんから」

葉は自分の胸元から啜り泣くような声が聞こえてきたのを確認すると、目蓋を閉じ、そして自分の魔力で自身の耳の周辺を魔力で覆った。

――自分と彼は、まだ出会って一週間しか経っていないのだ。その

ような相手に、これ以上弱った姿を見せるのは彼にとっても屈辱だろうと判断したためである。だからこそ彼女は、天井を透かした先にある星を眺めながら、耳は彼の泣き声が聞こえないようにと遮断して、それでも彼の頭を優しく撫でる手は決して止めなかった。

そうしてどれほどの時間が経っただろう。

自分が着ている寝巻きが彼の涙などでぐちゃぐちゃになって、しかし新しく濡れることはなくなった時に、彼女は魔力の耳栓を外した。すると自分の胸元からは規則正しい寝息が聞こえてきていた。

「……………」

つい、笑みが溢れてしまう。

彼の顔は自分の涙などでくしゃくしゃになってはいたけれど、それでもずつと見違えた良い顔になっていたから。これでこそ、自分が胸を貸した甲斐もあるというものだ。

栞は、「礼儀正しくはないけれど……………」と彼を起こさないように、寝巻きで優しく顔を拭いてあげる。

そこで、どうやって彼をベッドに戻してあげようか……………と考えたところで、彼女の脳に名案が浮かぶ。

——栞は自分が使っていたベッドに彼を寝かせると、洗面所で自分が先ほどまで着ていた衣服を全て脱いだあと、新しいものに着替えた。

そして彼を寝かせたベッドと一緒に布団にくるまり、彼の呼吸がしやすいように気を遣いながら彼を抱き枕にした。

「……………おやすみなさい。良い夢を」

そう小さく呟いて、彼の頭をそつと撫でながら眠りについた。

第7話

——すぐ近くから聞こえてくる筈の歓声が、やけに遠くから聞こえてくるように思える。

紫苑は自分の緊張を自覚し、「ふうう……」と大きく息を吐いた。自分の不安を心から追い出すべく、決して広いとは言えない選手控え室の中でストレッツチを繰り返した。

その時だ。こんこん、と扉が軽くノックされる。一体誰だろうか。真っ先に自分の保護者であり、破軍学園非常勤講師でもある西京寧々。あれは非常に大雑把な性格ではあるが、それでいて観察眼にも優れている。自分を心配して、発破をかけてくれたとしてもおかしくはないが……。

『紫苑さん、西園寺です。入って良いですか?』

彼女の声を聞いたとき、羞恥と得も言われぬ感情が彼を襲った。しかし、わざわざ来てくれた彼女を自分がそんな状態だから帰ってくれというわけにも行かず、「ああ」と返して部屋の中に招き入れた。

「失礼しますね」

そういつて彼女は控え室に入ってくる。精錬された所作だ。彼女の育ちの良さを思わせる。一週間で見慣れた、とは言えないまでも何度も見てきた筈なのに、何故か視線が縫い付けられたように彼女に惹き付けられる。

しかしそれとは別に、疑問もあった。

「……試合は良かったのか?」

そう、予定では彼女は第一訓練場で選抜戦の第一試合（紫苑がいるここは第三訓練場の控え室だ）が入っていた筈。相手は三年生・クラノクの雷使い菅茂信。今年の七星剣舞祭においても出場が期待されていた、決して油断して良い相手でもないのだが……。

「はい。私が無名であったことが幸いしまして、すぐに眠らせることができました。私の能力は真正面からの戦闘には向いていないのですから、最初が通じなかったら怪しかったですね」

彼女の言うとおり、栞の能力である《眠り》はどちらかというとな

意打ちなどで有利に働くため、今回の試合のような真正面からの戦闘は不得手な部類に入る。しかも能力のからくりもわかりやすく、対策も講じられやすい。次からはこう易々と事は運ばないだろう。

次の試合が憂鬱ですよ、と苦笑する栞は「まあ、私の話はどうでも良いとして」とぼつさりと話の流れを断つ。

「紫苑さん、この二日間私の事を避けていたでしよう？」
「うっ」

紫苑が痛いところを突かれたと呻く。

——紫苑が彼女の胸の中で涙を流してから、一日が経過していた。月曜日から始まった選抜戦も二日目に入り、明日ぐらいで参加者全員が一度は戦うのではないかという見通しだ。

そして選抜戦中は授業が大幅にカットされるため、普段ならば必ず同じ教室で過ごす二人が会う機会もめっきりと減った。

それでも同室ならば必然的に会うだろう、と思われるかもしれないが、栞が起きたときには彼の姿はなかった。その上昨日の夕方に彼女の生徒手帳には『今日は寧々のところに泊まる』という連絡が入っていただけという始末。

これを避けていると言わずになんというのか。

「いや、それは。そのどんな顔して会えば良いのかわからなくて。それに寧々に捕まったのはまた事実で……」

しどろもどろになりながら答える紫苑に、栞はくすくすと囁するように笑った。そしてそのあと……、

「——良かった」

と、安堵の表情を見せた。

「西園寺……？」

「紫苑さんがあんな経験が初めてで、私にどういう態度をとれば良いのか計り兼ねているのはわかってましたから。ひとまず静観しておこうとは思っていたんです。ですけど……試合の前にはどうしても顔を見ておきたくて。でもその心配はいりませんでしたね」

彼の表情は——見違えた。

これまでは傍で見えていなくては壊れてしまいそうな危うさがあっ

た。それが今は、なくなつた……とは言えないまでも遥かにマシになつた。彼が努力して得た強さはそのままに、前述した危うさだけがかなり切除された。

「……これなら私が胸を貸した甲斐もあつたというものです」

「……それで思い出したんだが。俺を抱き枕にする必要はあつたのか？」

「私って何か抱いてないと安眠できないんですよ。これは恩に着せて抱き枕にする事を許してもらうしかないな、と思ひまして」

そう、彼女にしては珍しい悪戯好きな猫のように笑う。……それが、自分に負い目を感じさせないようにする気遣いだというのも、今ではわかる。

「これを機会に、時々抱き枕になつてくれても良いんですよ？」

「勘弁してくれ」

そんなことをやられてしまえば自分の心臓が持たない。ただできえ彼女に抱き締められてから目覚めたあと、心臓がこれまでになくらい早鐘を打つたのだ。あれがもう一度二度あるなど、御免被る。

『——時間になりました。二年、百鬼紫苑選手。入場してください』

「時間……ですね」

「ああ」

紫苑は立ち上がり、剣気を迸らせた。彼を起点とし、空気が痺れる。これから対峙する相手を考えればそれも当然だろう。

彼の此度の敵は現在破軍学園最強の名を持つ、黄金の雷を纏う女剣士。

《雷切》東堂刀華。

決して油断していい相手ではない。破軍学園最強の名は伊達ではなく、去年の七星剣舞祭でベスト4という成績を持つ生粋の実力者だ。

だというのに、どうしてだろうか。

——不安が微塵もない。

「西園寺」

「はい。なんですか？」

「……ありがとう。助かった。——勝ってくる」

「……！ はい、ご武運を」

右手を軽く上げて、リングの方に向かっていく紫苑を葉は見守った。

◆◆◆

「——ただいま戻りました」

「ああ、おかえり。どうだった？ 様子は」

葉は彼を見送った後に、客席に戻ってきていた。そこには黒鉄一輝、ステラ・ヴァーミリオン、黒鉄珠雫、有栖院凧と先日のショッピングモール襲撃事件を解決した面々が揃っていた。

葉は彼のところに行く前に、彼らに自分の席の確保を頼んでいたのである。

「杞憂でしたね。勝ってくる、と言われましたよ」

「凄い自信ね。でも大丈夫なの？ 相手はこの学園最強の騎士なのに」

そう言うのはステラ・ヴァーミリオンだ。それに同調するように珠雫も有栖院も頷く。彼らは紫苑と話したことが一回か二回ほどしかない。だからこそ彼らは伐刀者の社会的地位がFランクという最低クラスであること、そして彼が黒鉄一輝がステラ・ヴァーミリオンを打ち倒したようなジャイアントキリングを先日成し遂げたということくらいしか知らない。

故にこそただのFランクではないと重々承知はしているが、彼の身体的な能力・戦闘力については依然として不明なのだ。

「それは見てのお楽しみ、という事で。……といっても私も剣術には疎いですから。黒鉄さんの解説に期待してますよ。よろしくお願いますね」

「あはは、うん。期待に応えられるように頑張るよ」

『さて、お待たせしました！ 選抜戦二日目の試合も今回でいよいよラストの試合を開始させていただきます！ 実況は引き続き私、月見と折木——』

『じゃなくて、ウチ。西京寧々がやってくよお。よろしくう〜』

『うつそ!? 西京先生!? 折木先生はどうしたんですか!!?』

『さつき廊下で血イ吐いてたよ。あまりにもしんどそうだったからウチが変わったってわけ。それと個人的にこの試合は超、超、ちよーろー楽しんでたからね。ウチの弟弟子、妹弟子の対決だからさあ。——さあ紫苑、目にももの見せてやんなあ!!』

『あ、ちよつと勝手に進めないでくれませんか!!?』

「——ああ」

ぐだぐだな実況解説など些末なことだと、百鬼紫苑が入場してくる。その瞳は静謐に満ちた湖が如く。一切の無駄な力みはなく、ただ自身の対面から出てくるであろう敵の方を見据えている。

『ああもう！ 赤ゲートより姿を現したのは、二年、百鬼紫苑選手!!』

実は昨年度に入学していましたが、去年の五月中に自主退学しており、公式戦への出場記録は一切なし！ あまりにも謎に満ちたこの学園二人目のFランク騎士！ 先日のショツピングモール襲撃事件において、Aランク級相当の戦士を斬ったと噂されていますが、それが真実なのかどうかはこの試合で明らかになるでしょう!!』

彼が出てきたときから、実況が紹介するまでの間、つい前までは歓声が高まっていた歓声はついぞとしてあげられることはなかった。それは彼が胡散臭いということは勿論あったけれど、それ以上にこの会場のほとんどの人間が、彼女に期待を寄せているからだ。

『対するはこの昨年度の七星剣舞祭のベスト4にして、この学園最強の騎士。あまりにも強烈すぎたゆえ、そのまま彼女の異名にもなった神速の魔剣《雷切》。此度もその伝家の宝刀が、敵を打ち倒すのか——!! 三年、東堂刀華選手で——え?』

歓声が高まろうとしていた観客席、そしてそのボルテージをさらに引き上げようとする実況者。その全てが、彼女の様子を見て沈黙した。

その姿は、彼女を知っている者からすれば異様だった。

これまでの東堂はその身に確かな戦意を持っていたが、それを決して表に出すような騎士ではなかった。だというのに今の彼女はどうか。

全身には、バチツ、バチツという音をたてながら抑えきれない魔力が溢れ出ている。そしてそれ以上に溢れ出す殺気が、会場中に放たれ、観客達を否応なしに黙らせる。

「……一年間、待ちました」

「ああ」

わずかに言葉を交わす。

西京が言った弟弟子妹弟子という関係。そして彼が破軍学園を去ってからの事。東堂には語りたいたことが色々あった。が、彼の前に立った瞬間、それらが、言葉が不要なものだと思えた。

——語るのならば、剣で。

彼が先の言葉に答えるようにそう発したような気がしたのだ。そして自分がそう受けとることを、彼は確信していたのだろう。ふはっ、と普段は見せないような野蛮な笑みが零れる。

彼らは共にリングの開始線上に立つと、己の魂の具現を呼び出した。

「来て、《鳴神》」

「咲け、《亡華》」

——その形状は共に鞘に納められた日本刀。

しかし与える印象はまるで対極。

東堂刀華の霊装《鳴神》が熟練の刀匠が鍛え上げた、美しき日本刀であるとするならば。

百鬼紫苑の霊装《亡華》は地獄に降り積もった怨嗟が呪いとなって、日本刀の形になったように思える。現に《亡華》は赤黒い靄のようなものを纏っており、それは一時として同じ形状を保っていない。

共に臨戦態勢。

それを確認した審判が、頷き、実況の方に目をやる。

『それでは——試合開始!!!』

実況が戦いの火蓋を切った。その瞬間、

「——《建御雷神》」

黄金の雷が会場を覆い尽くし、瞬間、まさに雷がリングに落ちたような轟音が響き渡り、観客達がリングの姿を確認できるようになった

頃には——百鬼紫苑が会場の壁にまで吹き飛ばされていた。

そしてリングの上に立っているのは——《雷切》。

『な、なんととおおおお!? 会場中を覆い尽くすような雷が走った瞬間、百鬼選手がリングの外にまで吹き飛ばされていたあ!! 私、実況を任されておきながら何が起こったのかを、さっぱり理解できませんでしたあ! 西京先生、先ほど東堂選手は一体何をしたのでしようか?』

『んー、つつてもやったことは単純だぜ? とーかが紫苑に向かって全力で突っ込んでいったんだよ。イメージとしちゃ、レールガンがわかりやすいかな。まあ、あいつは自分自身を弾丸のしたただけどき。でもな——』

「……狸寝入りなんてしていないで、早く上がってきたらどうですか?」

彼女の言葉を引き継ぐように、彼は倒れ伏す紫苑に向かって語りかける。見た目の派手さに対して、東堂の表情は暗い。

(防がれた……!)

それは先ほどの一撃が、彼には到達していないと確信していたからだ。自身の持つ刀から伝わってきたのは肉を貫いた感触ではなく、硬質な何かに阻まれたようなものだった。その上彼は、衝撃の瞬間に後ろに跳躍することで、幾分か衝撃を減らした。

観客の多くは知る由もないことではあるが、彼の霊装である《亡華》は刀の形状を持っているものの本質的には『霧型霊装』と呼ぶにふさわしい代物だ。故に刀の形など見せかけでしかない。

その特性を活かし、先ほどは刀と鞘の形状を自分を覆う球のように変化させ、《建御雷神》を防御してみせた。

「……さっきの技は知らない技だな」

「《建御雷神》。原理は先ほど西京先生が説明してくださった通りです。生半可な霊装であれば貫けるほどの威力は持っているんですが……」

《建御雷神》は彼女の習得した伐刀絶技の中で随一の威力を誇る技。そも威力は彼女の言うとおり、生半可な霊装であればそのまま砕ける

ほど。そして紫苑は総魔力量の少なさが災いして、彼女の言う生半かな霊装に相当する。だというのに碎けなかった……それは彼がそれを瞬時に判断し、かの一撃を防ぐ最適解を叩き出したからに他ならない。

「一枚の盾で防げないというのなら、盾を何枚も重ねればいい……単純だが、真理だろうか？」

「違いありません」

「それで……反動はもう収まったか？」

——見透かされていた。

そう、《建御雷神》には明確な弱点がある。それが反動だ。

その技は強力無比であるため、それに見合った反動が襲いかかってくる。しばらくは満足に利き手を動かせないほどの衝撃が襲いかかってくるのだ。しかしこれでもかなりマシになった方で、昨年までは腕の骨が砕け、肉が割け、といった有り様でもではないが使い物にならなかった。

(状況はあまり良くありませんね……)

《建御雷神》は初見殺しじみた……けれど自分の渾身を込めた技だった。彼の知らない技で、彼が剣を振る前に終わらせてやろうという一撃。確かに見た目は派手だったが、その実、彼には何一つ痛撃を与えられていない。

だが——

(簡単に勝てるなんて考えていません)

流石に《建御雷神》で仕留められなかった場合の事を考えていなかったわけではない。

次点の策はある。だが、それを敢行するには大きなリスクを伴う事は刀華は百も承知だ。

東堂は眼前の相手を見据える。

——百鬼紫苑。

剣にも魔術の才能もなにもなかった男。されどその全てを血が滲むようなという言葉すら生温い努力で覆した、努力の鬼才。

彼の剣術はもはや人間のそれを超えて、神の領域にすら肉薄してい

る。剣術のみであれば自分は数段劣っているのは間違いない。

だがそれは剣術のみであればの話。自分の雷の魔術と、南郷寅次郎仕込みの剣術であれば彼に迫ることもできよう。

改めて刀華が剣を構えた、その時だ。

眼前から迫る『死』に刀華は気づいた。

「フツツツ!!」

それを辛くも彼女は抜刀術で叩き落とした。刀を伝って衝撃が彼女の全身を駆け巡る。その技を、彼女は知っていた。

それは《瀧華一刀流繚乱勢法》の絶技のひとつ。飛翔する不可視の刺突——《鳳穿花》ほうせんか。

その刺突は並みの銃弾よりも早く敵を刺し穿つ、紫苑の持つ数少ない遠距離攻撃だ。

その技を撃つた意図を彼女はすぐに察する。

(抜かされた!)

そう、それは実況も言った自身の伝家の宝刀……《雷切》を殺すための前座の一撃。

《雷切》は言ってしまったえば《鳳穿花》を迎撃したときに使ったのと同じ抜刀術だ。そして抜刀術の名の通り、刀を鞘に納めてから抜き放つ一撃であるからこそ既に抜いた状態であれば使用することができない。

本命は——、

「シィ——!!」

烈帛の気合いと共に繰り出される《亡華》そのものによる剣閃だ。それを刀華は辛うじて迎撃する。

『あああつと! ここまで百鬼選手仕掛けたア!! 東堂選手から離れた距離から刺突を繰り出したかと思いきやすぐに突っ掛け、霊装を使つた一閃! は、速い!』

『いや、一閃じゃねえ。一撃だけなら刀華は軽く迎撃できる筈だ』
刹那に遅れて響くのは都合五つの刃と刃が奏でる音色。

瞬きする間に繰り出された速さは神速と呼ぶに相応しいものであり、既に常人の眼に止まることはない。実況を任されている月見は勿

論、この場所に来ている者の大多数はそれを追うことすらできなかった。

それを追うことができたのは――、

「速いわね……まさかあの生徒会長が、迎撃するのでやっとなんて」
「ああ。流石の剣筋だ。僕だって真正面から戦ったら勝てるかどうか怪しいね」

黒鉄一輝やステラ・ヴァーミリオンと言った近接戦闘にも優れた傑物だけだった。

有栖院凧や黒鉄珠雫も十分に傑物と言っている者達だが、彼女達はどちらかと言えば魔法戦を得意とするため彼らの剣を追うことはできなかつた。

「しかも東堂さんが複数の伐刀絶技を併用してようやく迎撃できているのに、紫苑さんは基礎的な魔力放出の技術によってあそこまでの速さを実現できているということ。剣術のみならず、魔力制御技術も極めて優れていますね」

「でも西園寺さん。彼の魔力制御技術はステータスではD―となっていた筈です。そのステータスは平均的、いえ並みよりは下回っている筈では……？」

「いや、それは違うな黒鉄妹」

珠雫の疑問に答えたのは、いつの間に来ていたのか、一輝達の横に立っていた破軍学園の理事長である新宮寺黒乃だ。

「破軍学園の……というよりは連盟の魔力制御技術の測定方法は、魔力伝導の良い素材で作られた特殊な粘土を、手を使わず魔力放出のみでこねくり回すことだ。その精密さによつてステータスを決定している」

「あ……」

それにはつとしたように珠雫が顔をあげた。

魔力を放出し、瞬間的にパワー・スピードを上昇といった技術――先程からも出てきた、世間一般で魔力放出という技術は普通の伐刀者ならばいざ知らず紫苑や一輝のような総魔力量が平均を大きく下回るような者にとつてはロスの多い運用法とされている。

現に一輝が紫苑と同じように自分の魔力を運用しようと思ったのなら、二、三回ほどでガス欠になってしまっただろう。

だから彼は魔力を運用するために伐刀絶技という枠を作り、その枠の中に魔力を注ぐことによって非常に効率良くそれを運用している……が、それはそうするしかなかったと言っても良い。

《二刀修羅》という極めてピーキーな伐刀絶技を運用するためのだけの訓練を行い、その他全ての時間を一輝は武術を修める事に費やした。

だが、紫苑は違った。

「気付いたようだな。アイツは自分の魔術の素養が絶望的だと知っていたが、そこから目を背けなかったんだろう。そして《努力》した……『できないのであればできるようなればいい』と」

一輝のように剣術の才能があったのなら、魔術を捨て、剣の道を極める事に腐心したのだろう。

だが、彼には何もなかった。投げ所にできるような才能など、何も。しかし何もなかったからこそ、彼は剣も魔術もどちらも極める事ができたのだ。

「しかもまだ《瀧華一刀流》しか使っていません。……これからですよ。《瀧華一刀流繚乱勢法》の真骨頂は」

「シオリは知ってるの？ アイツの使う剣術……」
「ええ。」

——《瀧華一刀流》。開祖は瀧華想蔵。瀧華家は元は黒鉄さん達のご実家、黒鉄家の分家であり、そのルーツは黒鉄家に伝わる旭日一心流と薩摩藩士・薬丸兼陳が編み出した薬丸示現流に持つとされ、そこに彼の思想が取り込まれ完成した剣術です。

その特徴は圧倒的な速さと剛撃。現在東堂さんが彼の剣を防ぐのに精一杯になっているように、そもそも相手に剣を振らせることなく圧殺することを主眼に置かれ、その攻撃的な性格から『超攻撃特化型剣術』と呼ばれています。そしてそこに《瀧華一刀流》剣士・瀧華薫が自身に合うように改良したものが、彼の使う《瀧華一刀流繚乱勢法》です」

「改良？」

「そこからは僕が引き継ぐよ。《瀧華一刀流繚乱勢法》はさつき西園寺さんが言ってくれた瀧華薫さんが《瀧華一刀流》に自身の伐刀者としての異能を組み込んだものなんだ。その能力は……《倍化》だ」

「《倍化》……？ 《倍化》ってあの《倍化》よね？ ウチのクラスではカガミが使う……」

《倍化》

その名の通り、物の数を増やすことを可能にする能力だ。それは主に無生物に及び、生物には自身を除いては使用できない。使用法は前述した物の数を増やす事、そして自分に使う場合は主に分身といったものがオーソドックスである。

概念干渉系に分類される能力ではあるが、その中では珍しくオンリーワンの能力といったわけではなく、先程ステラが言ったカガミ——破軍学園新聞部部长・日下部加々美もまた《倍化》能力の使い手だ。「うん、日下部さんなら修練すれば《瀧華一刀流繚乱勢法》を使えると思うよ。」

話を戻すね。瀧華薫氏は剣の才能は**ずば抜けていたけど、魔術の才能は平均より下で、分身という術を使うことはできなかつたんだ**。だからこそ彼女は自分を増やすのではなく、**斬撃や間合いを《倍化》させることに主眼を置いた**。それが自分の能力と自分の剣術を噛み合わせる術だと確信したからだ」

斬撃の数が増える。間合いが伸長・短縮される。

それだけ聞けば地味だと思うかもしれないが、クロスレンジ近距離の戦闘においてその『それだけ』がどれほど凶悪なものであるか。

しかもそれが『超攻撃特化型剣術』と謳われる《瀧華一刀流》に加わるのだ。そんな剣術の使い手と剣戟を成立させる事がどれほど困難なことか、一輝は理解していた。

「それにしても、西園寺さん詳しいね。僕の解説なんて要らなかつたんじゃないかな」

「まさか。私が知っているのは彼の剣術……それも歴史や成り立ち、理念と言った知識だけです。深奥の、剣客のみが理解できる領域

についてはさっぱりですよ」

葉は肩を竦める。

その横で考え込んでいた珠雫が「あの……」と声をあげた。

「百鬼さんの能力は《努力》であった筈ですよ。ならどうして……《倍化》能力を前提にした《瀧華一刀流繚乱勢法》が使用できるんですか？」

「それは私が答えようか」

と言ったのは新宮寺である。「といっても、これは百鬼の保護者である寧々から聞いた話なんだが」と前置きした上で続ける。

「私も信じられなかったのだが……アイツは己の《努力》によって、《倍化》の異能を後天的に身につけたらしい」

「後天的に別の異能を!?! そんなの信じられるわけが……」

「ああ。私も信じられなかった。だが事実だ。それは南郷先生も保証していることらしい。」

……あらゆる不可能を己の研鑽によって覆し、道理を踏み潰し、突き進む。それがアイツが生来から持っていた唯一の伐刀絶技――

ブルスウルトラ
《運命踏破》だ」

新宮寺がそう言ったとき、目の前のリングで試合が動いた。

第8話

—— 一際激しい鋼の音色。

それが会場中に響き渡ったとき、東堂刀華が自身の必殺の領域から叩き出され、たたらを踏んだ。

「くっ……」

『つと、東堂選手！ クロスレンジから追い出されたア!! 東堂選手、何もさせて貰えない！ 防戦一方！ そこを百鬼選手が追い立てるウ!!』

数十合と繰り返されてきた剣戟。それを辛うじて成立させているのは、東堂の雷の異能——それを利用し開発した伐刀絶技によるものだ。

相手の脳の電気信号を読み取り、相手の取ろうとする行動全てを先読みする《リバースサイト閃理眼》と雷の魔力を全身に流すことによる身体能力強化《疾風迅雷》。それを常時発動させ、ようやく剣を交えていることができています。

対し、紫苑は葉が言ったように《瀧華一刀流》で相手をしていた。《努力》によって後天的に身につけた《倍化》の異能——それを使わない、何年もかけて作り上げた堅牢な基礎の上に、同じく幾年もかけて積み上げてた今までの彼の研鑽の成果。

稲光を纏う東堂に比べれば決して派手な代物ではない。されどその飾りつ気のない、努力の果てに会得した質実剛健な剣こそ彼の真の強さであった。

「ハア……ハア……」

荒い息を吐く。

《亡華》に作られてきた傷跡から零れる血液が、少女の周りに赤い斑を作る。

これまで繰り返されてきた火花の応酬で、東堂は彼に幾度も切り裂かれていた。決して致命傷と呼べるような傷ではないが、それらはじくじくと彼女の脳に確かな痛みを訴えていた。

そしてこれまでの自分の剣は悉くが彼の肉体に達する前に弾かれ、

薄皮一枚切り裂くことも叶わぬ始末。

だが、己の弱さに齒噛みする時間すら目の前の剣士は与えてくれない。

「シィ——ッ！」

一呼吸の間に距離を詰め、烈帛と共に繰り出される一閃。その所作は戦いの途中であるというのに、見惚れるほどに美しい。

「ヤアアアツツ!!」

だがそれを東堂もまた叩き落とす。それと同時に自身の魔力を、刃同士がぶつかり合った瞬間に彼の肉体へと注ぎ込む。

僅に鈍る剣筋。だがそれを些事だと言わんばかりに、その剣技は更に激しさを増す。そのひとつひとつを彼女は細心の注意を払い、か細い糸に針を通すように雷撃を彼の身体に流し込む。

この伐刀絶技とも呼べない雷が、彼女の命を繋ぐ綱の役割を確かに果たしていた。これがなくては、今頃彼女は地に倒れ伏していただろう。

だが彼がこれに適応し、自分の素っ首を跳ね落とすのにさほど時間はかかるまい。

——百鬼紫苑の攻略法として真っ先に思い付くのは、彼の魔力の少なさという弱点をついた持久戦だろう。だが彼女はそれを真っ先に捨てていた。

それは彼の魔力切れまで、あの怒濤のような剣に自分が耐えられる技量がないと判断したが故の事である。耐えきればいい、などという生半可な覚悟では自分はあるの荒波に呑まれ、切り刻まれてしまうだろう。

——そうなる前に決着をつける。

それこそが嵐の海に呑まれてもなお見える唯一の光明。

否、そうではない。

彼は最強の剣士ではあるけれど、決して無敵ではない。

だからこそ策を弄すれば勝機はいくらでも生み出せただろう。それでも自分が、彼を相手に剣で挑もうとするのは。笑ってしまうくらい下らない理由。

(私は勝ちたいんだ。あなたに、私が磨き上げてきた剣で！)

それが相手の土俵だろうと、それは自分も同じだ。刀の間合いこそ東堂^雷刀華の領域。自らの領土から逃げ出す領主がどこにいようか。

「ハアアア——ツツ!!」

意を込めた一撃。されどそれすら取るに足らぬと、百鬼紫苑は黄金の雷撃を纏う剣を容易く去なす。

致命的な隙。たとえ《疾風迅雷》で身体能力が強化されていようが、彼女の剣の戻しでは紫苑の剣には追いつけない。翻った黒き凶刃が東堂の首を刈り取らんと迫ったが——、

「こん、のお——ツツ!!」

彼女は再び既のところまで叩き落とした。

観客達が悲鳴にも似た歓声を上げる。

『あつぶねえ！ ギリギリ間に合ったか!』

『でも会長の剣、戻りの途中ですげえ速くなったような……いや、元からすげえ速かったけど……』

それを可能にしたのは、観客の一人が指摘したように戻りの途中での刀身の超加速だ。

自身の一定範囲に特殊な磁場を展開し、特殊な斥力と引力を発生させ、高速の切り返しを可能とする伐刀絶技——《稻妻》だ。

これほどの超加速を得る代償として手首に尋常ではない負担がかかるものの、普通の剣戟に織り交ぜれば相手のリズムを崩すことができる。それにこの技は使用せずとも、その存在をちらつかせるだけでこの技の目的——相手のリズムを崩すことは達成している。

だが、その防御すらも彼の心に波紋を生むことはない。

自分がかの一撃を防ぐことすらも、予想の範囲内だともいうのか。彼女は思い、そしてすぐさま理解する。

かの一撃を防ぎきる事は叶っていなかったのだと。

首に痛みが走った。

そこから零れるのは、人肌の温度を持つ特徴的な液体。

血液だ。それがまるで噴水のように吹き出し、今度こそ首を飛ばす^と意を込めた一刀を振るおうとしていた紫苑の白い髪を汚す。

「あ、ぐ……セエアツツ!!」

大きく剣を振り、鬼神を自らの領域より僅に引かせることに成功した。

『防いだと思ったより刃は東堂選手に達していたア！しかし、西京先生、こちらからも百鬼選手の剣は東堂選手に届いていないように見えたのですが……?』

『確かに《亡華》は防いだけど、《瀧華一刀流繚乱勢法》による斬撃範囲拡張による不可視の刃は防げてなかった。それが首にまで達したんだろうねえ。……紫苑の奴、刀華とこれ以上剣を交えんのはヤベエって判断したんだろうね。マジで潰しにかかるぞ』

西京が説明したように、彼女の首に刃を届かせたのは《瀧華一刀流繚乱勢法》の特徴の一つである斬撃範囲拡張。名すら持たぬ技ではあったけれど、彼女の首に刃を届かせるには十分だった。

それでも即死に繋がる動脈にまで不可視の刃が達しながらも致命傷を免れたのは、彼女の神ががった剣技あればこそ。一流の伐刀者でありなおかつ一流の剣士だったから、この程度で済んだ。かの一撃を防げる者など、この学園に5人も居まい。

「――」

そして圧倒的な技量と力によって少女に死を下さんとした男は、仕留めそこなつたと歯噛みすることもなく、試合を左右する一撃を彼女に浴びせたことを喜ぶでもなく、終始緘黙を貫いていた。

彼の心中は《瀧華一刀流繚乱勢法》の荒々しさとはまるで対称的。それは静謐に満ちた湖面が如く。

どれだけこちらが手管を弄そうと《閃理眼》で見る彼の心はまるで揺らぎやしない。ただ目標に向かって真つすぐに、勝利という名のゴールを目指し、突き進む。彼の心にあるのはただ一つ。

『お前を斬る』

ただそれだけの純粹な殺意。

不純物のない、黒き刃でこちらの命を刈り取ろうと迫る。

(やはり……こうしなければなりませんか)

魔術と剣術を併用し、やっと彼の剣術についていくのが精々と言っ

た自分の実力。それを痛いほど実感した彼女が打つ策は——彼女としても使いたくはない策であった。

何故ならこの策は《武御雷神》以上に安定しない技、いや、技とも呼べぬものを使わなければいけないから。最悪、自分の身体に大きな障害が残ってもおかしくはない、乾坤一擲の大博打。

だが、そうしなければ目の前の黒き鬼神の首を跳ね飛ばす事ができぬというのなら彼女は迷わずそうする。それほどまでに——目の前の男に勝ちたいのだ。

「——行きます！」

宣誓し、上段からの振り下ろしを見舞う。

それは有らん限りの殺意を込めて振り下ろした乾坤の一刀。

その決意の通り、この一刀には彼女の魔力によつて強化された膂力、技量、その全てが込められた全身全霊。その太刀筋は美しく、破軍学園の中で最も純粋な剣客であろう一輝も見惚れる程である。

だが——、

(駄目だ——!!)

同時にその失策をも悟った。

彼女の一撃は美しい。なるほど、その一刀ならば《瀧華一刀流繚乱勢法》の太刀をも追い越せるだろう。しかしそれは通常の攻撃に混ぜて放てばの話。

間隙を縫うのではなく、間を空けての単撃。そこに全容を晒すのに充分な間合いを設けておいては、近代兵器による弾丸の雨だろうと彼を捉えることは叶うまい。果てには不意を打つのであればまだしも、わざわざ宣誓しての一撃ならば『自分は隙を晒しますので、どうぞお好きに斬ってください』と言っているようなもの。

彼女の行いは、蛮勇を通り越して身投げに等しい。

だが、何故。

彼女だって剣士だというのであれば、その程度のこと理解しているはず。だというのに、どうして——。

それは彼女と相対する紫苑も理解していた。

故にこそ彼は寸刻の間、眉を怪訝そうに眉をひそめたものの、その

愚拳は自身の命を以て贖うべしと、

——《瞬桜》

《瀧華一刀流繚乱勢法》の中でも更に疾い、神速の抜刀によって彼女の剣を容易く叩き折った。

《鳴神》の刀身が宙を舞う。それには視線をやらず、今度こそ首を跳ねてやると無音の刃を走らせ——、

「——ッ」

彼の研ぎ澄まされた生存本能が己の《死》を感知し、思考よりも早くそれを叩き落とした。

響くは鋼同士がぶつかったとは思えぬ不協和音。彼が刃にて弾いたもの——それはもはや刀の体をなさぬ《鳴神》の柄だった。

彼女の最後の足掻きすら、彼は容易く打ち落とした。障害は全て退けた。

再び彼の魔剣が寸部たがわず彼女の首の傷へと迫り——それを容易く切断した。血が先ほどとは比べ物にならないほど噴き出し、リングを赤く汚していく。悲鳴が観客席から響いたが、集中という深海にいる彼は気にも留めない。

宙を舞う東堂の首を視界の隅で捉えながら、確実に息の根を止めてやると身体を両断しようと《亡華》を振るい、そして——。

——紫苑は己の死を視た。

逆袈裟に自分の身体を切断される、明確な《死》の光景。

それは刹那の先に自分に訪れる絶対的な終わりであり……自分が先ほど終わらせた少女が凶刃を握っていた手には、叩き折った筈の《鳴神》が握られていて。

「——《雷切》」

雷すら斬って落とす、伝家の宝刀が放たれた。

◆ ◆ ◆
視界を埋め尽くす閃光。共に落雷のような轟音が観客達の鼓膜を殴りつけた。

雷を切断すると謳われる彼女の最速の抜刀術を、超至近距離から見舞われれば流石の紫苑でも回避しきれない。それでも

彼の本能はそれに対する最適解を導き出し、なんとか致命傷を負うはずだったところを重傷で抑えた。

『マジかよ、刀華……イカれてんぞ……』

『な、何が起こったんですか先生!? 東堂先輩首切られて死にましたよね!?!』

『ああ。確かに刀華は首を斬られた。でもおっ死んじやいねえし何も終わっちゃいねえ』

見な、と実況者に顎でリングの方をしゃくってやれば、そこでは信じられない事が起こっていた。

彼女の切断された首よりも上、頭部が雷になったのだ。いや、雷だけではない。首を切断され、噴水のように溢れていた血液すらも雷へと変じた。それは先ほど《雷切》を放った首のない東堂の元へと集まり——それは東堂の頭へと変化したのだ。

「——己の身体を魔力化し、再構成する術か。……化け物め」

「それはこっちの台詞です。こっちは自分の刀と首まで犠牲にしたのに五体満足つて……馬鹿げているにも程がありますよ」

逆袈裟に大きく切られた自分の傷を押さえながら紫苑が言うと、東堂は苦笑する。

「殺ったと思っただんですが。どうして気付いたんです?」

「勘だ。あのまま剣を振れば負ける気がした。だから退いた。言っつしまえばそれだけだ」

「獣じみているというかなんというか……」

相も変わらず埒外の生存本能だ。もはや彼の勘——否、闘争本能と生存本能は自分の《閃理眼》と同等。いや、それ以上の性能を誇っているのではないかと思っつしまう。それほどまでに研ぎ澄まされた理由も、大方察せつしまうが。

「ですが、貴方に重傷を与えることはできませんでした。対して私は《雷王転変》らいおうてんべんによって、貴方が与えた傷の全てを癒しました」

「……そうだな」

彼女の言う通り、紫苑は戦闘に支障が出るほどの重傷を負つた。そして東堂が先に行つたような治癒を行う術は……ないとは言えない

が、それは瀧華薫が使えるものではなかった。ただの鍛錬を効率よく行うために彼が必要に駆られ、致し方なく編み出した技であるため使いたくないのが正直なところである。

『《瀧華一刀流繚乱勢法》ではない技は使わない』

それは彼がこの道を志したときからの矜持のようなものだった。

そして彼女が言うように東堂は自らの身体を雷へと変じさせることで、肉体を無傷の状態に再構築してしまう。それほど彼の刃が鋭かろうと、あらゆるダメージが瞬時に治癒されては意味がない。ただの徒労である……と、普通ならば考えるのだろう。

現に東堂が紫苑に傷を負わせたことで、観客達は沸いている。

「しかし、その技。《雷王転変》と言ったか？ そう乱用はできないだろう？ それに霊装を叩き折ってやったのも随分と効いていそうだ。発動出来てそうだな……あと二、三度と言ったところか」

——伐刀者が伐刀者足りえる理由である霊装は、魂が武装などの形に具現化したものであるというのが通説だ。

故に、先ほどのように霊装を打ち砕けば術者には相応の精神的ダメージが行く。並大抵のものならば霊装を破壊された時点で意識を失ってもおかしくないのだが……流石は《雷切》というべきか。

膝すらつくことはなかったが、それでも相応の痛打を与えたとみてしかるべきだろう。

加えて先ほどの《雷王転変》だ。肉体を魔力化させ、再構成するという術がそう易々と繰り出せるわけがない。それを実現させるためには人体に対する深い造詣と、そして何より並外れた魔力制御技術を必要とする。

東堂は魔力制御のステータスはBと確かに優秀ではあるが、この技を実現させるためには連盟基準で最低でもAは必要だろうというのが紫苑の見立てである。それを強引に成立させるのであれば、成立させるために如何程の無茶を通したのか。

加えて、と彼は続ける。

「剣士にとっては至上の牙である刀を捧げ、一時とはいえ命をも捧げた。それほどまで綿密に編み込み、ようやく撃ち放った《雷切》妙策はさ

れど、敵の命には届かなかつた。気丈に振舞つてはいるが……内心冷や汗をかいているんじゃないのか？」

(ええ、そうですね……！)

彼女は笑みを深めたものの、心の内では彼の言葉に肯定した。

わざと彼に首を取らせ、油断したところを《雷王転変》を発動し肉体を再構築、剣を振るう事が可能な身体にまで治癒したところで伝家の宝刀である《雷切》によるカウンターを見舞い、彼の命を終わらせる。

それこそが彼女が用意していた——否、用意できた、彼女の持ちうる全てを以て作り上げた鬼狩りの策だ。

彼女が見誤つたとすれば……。

《瞬桜》の疾さを見誤つた……！ あの一撃で霊装が折られ、策の全てが狂つた！)

それは彼の速さだ。

無論、彼女が自分のエゴだけで彼に剣戟を挑んだわけではない。彼と剣を交えることは上述した策を通すために必要なステップだった。

それは試合前にシミュレートした紫苑と、実際の紫苑との認識のずれを修正するため。それを剣を交える最中に修正を行い、《雷切》を通そうとした。が、実際は御覧のありさまである。彼女がシミュレートしたよりも彼の《瞬桜》は疾かつた。

策通りに進むならば東堂が《鳴神》が《瞬桜》と交錯したときに、自らの刀を手放すつもりだった。しかし彼の一闪が彼女の想定よりも速かつたせいで剣は手放すよりも速く断たれ、刹那ではあるが意識が飛んだ。

その与えてしまった隙は微々たるものだったが、その微々たる時間に彼は自らの死を嗅ぎ取り、自分の必殺の一撃を回避してみせた。

そしてこの策は——二度とは通じない。

初撃の《武御雷神》での突貫と同じく初見殺しじみているのに加え……彼が推測しているよりも《雷王転変》の反動は大きかつた。

彼女が行使する伐刀絶技のなかで一番の負担がかかるこの技は、一度発動しただけで脳みそを直接揺さぶられているような不快感と、刃

で脳を乱雑にかき回されるような激痛が襲っている。

こんな状態ではまともに剣を振ることができるのはあと一刀のみ。徒に足掻いたところで、彼を相手にそれは実らないだろう。

——ならば、その一刀に己の全てを賭けよう。

具体的にどうするか？

繰り出す技は《武御雷神》や《雷切》のような必殺の意を込めた、全身全霊の一撃でなくてはならない。しかしそのふたつは彼に破られている。かといって《雷鳴》のような連打する前提で使用する技では役不足だ。

それならば——、

「フウ……………」

今ここで、彼を打倒しうる技を編み出す他に道はなし。

為せれば勝てる。為せねば敗ける。

なんともわかりやすい構図ではないか。

「——」

彼女の決意を彼も理解した。

自身の及びもつかぬ絶技がこれから放たれようとしている。故に

彼の応手は——彼女と同じ、全身全霊を込めた一刀だ。

敗けることなど考えるな。僅かでも思考に過れば太刀筋も曇る。

眼前の敵を、斬ることだけを考えろ。そうしなければあの強敵は打ち倒せない。

（貴方を倒す。私の全身全霊の一刀で——!!）

（来い。《瀧華一刀流繚乱勢法》の奥義で、お前を斬る——!!）

——東堂刀華は後ろに下がり、陸上のクラウジングスタートのような体勢を取った。前方には自身を弾丸とするレールガン、《武御雷神》と同様の魔術が敷かれる。だがそれは《武御雷神》とは比較にならないほどに加速させるための距離が長い。

対する百鬼紫苑は、《亡華》を握り、振り下ろすための体勢を取った。ギチギチ、と握られる《亡華》が軋みを上げ、全身が彼の魔力が浸透したことで赤黒い光が灯り、それでもなお猛る魔力が炎となって身体の外に溢れた。

『ここにいる教員!! 観客達を全力で守れ!! このウチの見立てじゃあいつらがぶつかつたときにはここがまるごと吹き飛ぶぞ!!』

西京寧々が吠える。

その言葉に従って、破軍学園の教師達が観客席に魔力障壁を編み上げた。

それを見届けた東堂が——紫苑に突貫した。

《武御雷神》の加速に乗って、自身の身体が耐えきれぬ限界ギリギリまで加速し……その状態から納刀されていた《鳴神》の刃を抜き放つ。

それは《雷切》の電磁抜刀術の理合いと通常の抜刀術の理合いを、相殺することなく超高次元で組み合わせた異次元の居合い抜き。それは眼前の鬼神を斬るためだけに生み出した神域に至るための絶技。

その名は——《神斬》

対する紫苑が繰り出したのはシンプルな上段からの振り下ろし。

それはかつて一人の女剣士が目指し、ついぞとしてたどり着くことが出来なかつた境地であり——その技を引き継いだ一人の《魔人》がたどり着いた技。

それは紫苑の大きな武器のひとつである生存本能を自ら破壊し、自らの枷の全てを外して繰り出す、彼の魔力、努力、想い、自らの歴史……それら全てを込めた究極の一刀。

それは剣を志すもの全てが目指した境地の技であり、森羅万象を切断する《瀧華一刀流繚乱勢法》の奥義。

その名は——《散華》

神を斬る一刀と、全ての華を散らす一刀が、今、交錯する。

◆ ◆ ◆
痛い程の沈黙の中、最初に気がついたのは紫苑の後ろ側に座っている観客達だった。次点で、彼の対面に座っていた観客達は自分達が何者かによって移動させられていることに気が付いた。

「全く、滅茶苦茶な……!」

観客が移動していた原因——停止した時間の中で観客達を救出した新宮寺は、僅に振り返って大きくため息をついた。そしてリングの上へ飛び出していく。

彼の正面、リングから観客席の壁、果てには破軍学園の校舎に至るまでが——鋭利な刃物で切断されたかのように一閃されていた。斬痕から風が差し込み、曇天の境目から僅に太陽が姿を覗かせている。それらの事をなし得た者は——自分が叩き切った女の骸を見下ろしていた。彼女から溢れた赤い液体が、彼の靴を汚していく。

「……相変わらず強かった、東堂。だが」

俺の勝ちだ。

そう呟いた時と観客達と同じく呆けていたレフェリーが勝者を指し示したのは同時だった。

『け、決着——!! 眼で追うことすら困難な剣戟を制し、我らが最強を打ち倒したのはまさかのFランク……百鬼紫苑選手だア!! いえ、もはや彼をFランクと言って良いのでしようか!? 観客席を、破軍学園教師達が構築した魔力障壁を、いとも容易く斬ったその絶技は鬼神の一撃と呼ぶのに相応しい!』

実況の興奮する声を背負いながら、紫苑はリングから去っていく。そして変わって立ったのは、彼女の蘇生を試みようとする新宮寺。

「担架、急げ! 私の能力が効いている間にカプセルに搬送するんだ!」

白い銃を顕現させた新宮寺が、東堂の身体に一発ずつ弾丸を撃ち込み、吠える。彼女の《時間》の能力の一端、《停止》である。それによって肉体の時間経過による劣化を防いだのだ。

彼女の言葉に従って、控えていた人員が飛び出し彼女の身体を担架に乗せて運んでいった。

「——さて、私はもう行きますね。今日はありがとうございました。またこういう機会がありましたらよろしくお願いします」

「ああ、うん。こっちこそ」

失礼します、と頭を下げた葉を一輝は見送った。方向からして、紫苑の方に向かったのだろう。

「……ねえ、イツキ。イツキはアイツに……」

「うん……」

実況が紫苑の事を『鬼神』と評した通り、最後の一刀はまさしく神

の領域にあると言って相応しいものであった。

どのような堅牢な防御を敷いていようが関係ない、森羅万象を切断するその奥義。その他にもただの剣術とは比べることも馬鹿らしい精錬された技の数々に、自身の死を絶対には嗅ぎ取る生存本能。

そしてそれらを培わせた彼自身の《努力》。それらを見て一輝は理解した。

「今の僕では……彼には勝てない」

努力はしてきた。それこそステラほどの女傑に打ち勝てるほどに、自分は鍛練を積み、そして強くなったという自負があった。

しかし、それでも彼には届かないと納得してしまった。それは……先の奥義。あれはまさしく、全ての剣士が目指し、そして今は彼が辿り着いていない境地。そのひとつの形だ。

それは剣士として、黒鉄一輝は彼には及んでいないという確かな証左であり……、

「でも、七星剣舞祭では勝ってみせる」

そして自分もあの境地に至れるのだという証拠でもあった。

彼は立った。

さらに強くなるため。あの境地を至るには一秒だって無駄にはできない。



第9話

百鬼紫苑と東堂刀華の一戦からおよそ一ヶ月が経過した。

あれ以降、紫苑は一度として選抜戦の舞台には立っていないかった。というのも、東堂との戦いで彼の強さは白日の元に晒された。

破軍学園最強の騎士を圧倒した剣士と戦おうなどという者はこの学園では……というよりも騎士全体で見ても少数だ。

そしてその少数と巡り合うことはできずに不戦勝を続け、鍛練を積み重ねる日々が続いた。変化といえば、正式に彼の二つ名が《黒鬼》に決まったことだろうか。それはさほど興味を惹かれる内容ではなかった。

対して彼のルームメイトである西園寺栞はといえば、彼とは異なり順当に勝利を重ねていた。といっても試合内容は、彼女と向き合った相手が為す術もなく眠らされ、勝利するといった一方的なものだった。それらの戦法から彼女は《眠りの魔女》スリーピングウィッチの名で知れ渡っていた。そんな彼らの鍛練風景はもやお約束のものとなっていたが、二日からひとつの変化があった。

「フツ、セアツ——！」

それは彼らの鍛練にひとりの少女が加わったことだろう。

藍色の髪を靡かせ、紫苑に果敢に攻めいる女剣士——綾辻綾瀬である。

おおよそ一週間ほど前から紫苑と栞はストーカー被害に頭を悩まされていた。ストーカー被害、といっても付き回されただけで実害と呼べるようなものはなかったのだけど……そのストーカーこそが綾辻綾瀬だったのだ。

尤も彼女としては紫苑に声をかけたかったのだが、羞恥心が勝利声をかけられず一週間が経過した。しかし声をかけること事態は諦めきれなかったらしく、結果的にストーカーの真似事をする羽目になったらしいが。そんな馬鹿などは思ったが初めて顔を合わせた際、首ごと視線を知らした段階で察したものがあつた。

さて、そんな彼女の用件だが……端的に言えば自分を強くして欲し

い、だそう。《雷切》を真正面から斬り伏せた剣客。なるほど確かに格としては申し分ないが……しかし彼は剣客としては一級品だが、指導者としては劣等も劣等。

なにせ紫苑は誰かに剣を教えるための《努力》そしてこなかったのだから当然の事ではあるが。

故に彼は自分が教えられることなど何もない、と断ろうとしたのだが……綾瀬がどうしても食い下がったことで、とりあえずは稽古相手。紫苑が気付いたことがあれば口を出す、という形に落ち着いた。

現在、紫苑と綾瀬は互角稽古を行っていた。

純然たる剣士としては劣る綾瀬のレベルに紫苑が合わせ、寸止めで技を出し合う稽古だ。

日々これを行うことによつて、段階を踏んで綾瀬の強さを引き上げる事を目的としていた。

紫苑の《亡華》が黒の軌跡を描き、綾瀬の胴を薙ごうとする。

それを綾瀬は、

「セアッ！」

受け流し、そのまま後の先の一撃を放とうとする、淀みのない、流れるような剣技は彼女のこれまで積み上げてきたものの大きさを実感させる。

だが、紫苑はその一撃もいとも容易く叩き落とす。勢いそのままに、彼は剣を振るつた。

綾瀬の剣の型の裏をかくような、意地の悪い一撃だ。彼女がただ教科書通りの剣術を振るうのであれば、決して防御することが不可能なそれ。

だが、それにも綾瀬はしっかりと対処をして見せる。

決して型には嵌まらない。されど型を忘れるわけでもない。

彼女の剣技は、実践剣術として十分通じる域にあった。まあ、そうでなくては彼女も紫苑や栞のように、これまでの選抜戦を無敗で勝ち抜くことは不可能であつただろう。

しかし彼女は紫苑に助力を求めてきた。それは彼女が壁にぶつかっているからだ、と鍛練相手になる前に説明されたが……紫苑はそ

れをしつかりと見抜いた。

「綾辻、剣を止めろ」

紫苑の剣を再び受け流し、カウンターを見舞おうとしていた綾瀬の剣がピタリ、と止まる。

「ん、どうしたの？ 百鬼くん。ボクまだ疲れてないけど……」

「いや。お前が伸び悩んでいる理由がわかった」

「ほんとに!？」

「ずずい、と綾瀬が紫苑に顔を寄せる。

先日までは顔すら合わせられなかったというのに大したものだ。

……いや、二年間もの間自分が思い悩んでいた原因にたつた二日で到達できた紫苑に対する尊敬、加えてそれを改善できれば自分ももっと強くなれるという興奮が羞恥心に勝つただけか。

「流石ですね、紫苑さん。教えられることなど何も無い、と言っていたのが嘘みたいです」

「たまたまだ。俺も十年前にぶつかった壁だったからな。……とはいえ、綾辻には申し訳ないんだが」

「え、何？ 何か問題あるの?」

「ああ。……お前の抱えている問題を、俺では改善できない」

「嘘!?! なんて!?!」

「俺は《瀧華一刀流繚乱勢法》の剣士であって、《綾辻一刀流》の剣士ではないからだ。原因が何かわかったところで、その剣技の事を大して知らん他所の流派の人間が修正しようと手を加れば、ロクな事にならないのは火を見るより明らかだ」

驚きの表情で紫苑に詰め寄った綾瀬が納得する。

そも彼は最初に自分は生粋の剣士であって指導者ではない、と明言していたではないか。ならば彼に教えを乞うことそのものが間違っている。

それに彼が自分を強くするメリットなど、何もないのだから。

「が、それはあくまでも俺にはできないという話だ。お前の剣技を改善できる人間に心当たりがある」

「え? 誰、それ……」

「お前だつて知っている筈だ。他人の剣技を刃を交えることで奪い、上位互換の剣技を生み出す猿真似の名手を」

——猿真似の名手。

言い方は酷いことこの上ないが、彼女にも心当たりがあった。

それは《黒鬼》百鬼紫苑と並ぶ剣の達人にして、彼がいう猿真似の極致と照魔鏡じみた洞察眼を以て無敗を守り続けてきた、負け戦の百戦錬磨。

「《落第騎士》フリストワン 黒鉄一輝……」

「そうだ。奴は酷くお人好しな上、奴にもメリットがある話だ。恐らく受けるとは思うが……確約はできません。話は通してやるから、あとは自分で頭を下げるなりして頼み込め。俺ができるのはそれくらいだ」
「うん！ それでもありがたいよ！ ありがとう百鬼くん！」

◆ ◆ ◆

「……というわけだ」

「うん、わかった。僕で良ければ引き受けるよ。よろしく、綾辻さん」
紫苑が連絡し、彼らが向かったのは一輝達が鍛錬の場として使っている学園の一角だ。

そこには先にステラ・ヴァーミリオンに黒鉄珠雫、有栖院凧がそれぞれ修練に勤しんでいた。

「よ、宜しく願います！」

「……ねえ、百鬼くん。顔合わせてもらえないんだけど、僕何かしたかな？」

「気にするな。そのうち視線は合うようになる。それよりもお前に頼みたいことだが……その前に、だ。綾辻」

「う、うん。なにかな？」

「お前とお前の師匠である綾辻海斗氏の間には、ひとつの決定的な違いがある。そこさえ修正したなら、爆発的に……とは言えないかもしれないが、間違いなく強くなれる。それはなんだと思う？」

「ボクと父さんの……決定的な違い……？」

綾瀬は考え込んでしまうが、一輝は合点がいったのか。ああ、という納得の息を漏らす。確かに『それ』ならたどえ流派が異なろうが、紫

苑ならば気付けるだろう。

しかし、紫苑は気付くところで止まってしまおう。それをどう修正するのが最適解なのか、彼はわからない。だからこそ彼は綾瀬を手助けするために自分を頼ったのだ。

「……答えを教えるなよ。これは自分で辿り着かなければ意味がない」

「わかってるよ。それに綾辻さんは今は百鬼くんの弟子。外野が弟子の教育方針に手を出したりしないさ」

「ならいい」

そんな様子を見て、紫苑が咎める。それに一輝は肩を竦めて応じた。確かに自分が綾瀬の指導を行っていたなら、さっさと指摘をして型の修正に入っていただろう。

しかし彼は彼女自身が答えに辿り着く事を求めている。それは彼が努力し、研鑽を積み上げ、強さを自身の手で掴み取る『求道者』の気質も持っているからであろう。

勝利こそを是とし、如何なる手段を用いても勝利することを主眼に置く一輝とは根本から異なる指導方法だ。

そんなことを考えている間にも、綾瀬はうーん、うーんと唸っている。

「剣士としての技量……?」

「俺はお前の技量は知っているが、海斗氏の技量は知らん。違う」

「伐刀者であるか否か?」

「確かに明確な差ではあるが、それは違う」

「ええ? なんだろうな……?」

また彼女は悩み込んでしまう。完全な袋小路だ。やはり彼自身もわかっていたことではあるが、彼は指導者としては決して優秀というわけではないらしい。

一輝はそれに苦笑し、助け船を出すことにした。

「百鬼くん。完全に沼に嵌まったみたいだし、ヒントを出しても良いかな?」

「……………ああ」

「ありがとう。綾辻さん、ちょっといいかな？」

「え、うん。ヒントって言ってたけど、黒鉄くんはわかったの？ ボクと父さんの明確な差って……」

「うん。それだけじゃ色々考えてしまうけど、今回の事なら何となくは予想はつくよ。今回念頭に置いて考えるべきなのは、『百鬼くんが気付けた』っていう事なんだと思う」

「うん……？」

「えつとね。つまりは百鬼くんはかつて、綾辻さんがぶつかっている壁と全く同じものにぶつかったことがあるんだよ。そしてそれを解決して、今に至っている。百鬼くんとあなたの間にある共通点……それに気付けたら一瞬なんじゃないかな」

事が極めて単純であるがゆえ、これ以上言ってしまったら答えそのものになってしまう。とはいえこれは彼女が紫苑の《瀧華一刀流繚乱勢法》について知っている事を前提とした出し方だ。

お世辞にも誉められたヒントではないが……その時にはもうお手上げと言う他ない。

だが彼女は彼に師事を乞う前に、彼の使用する剣術について調べていた。

《瀧華一刀流繚乱勢法》

《瀧華一刀流》から派生し、そこに《倍化》の異能を組み込んだ魔導剣術。使い手は瀧華薫及び彼女の意思を継いだ百鬼紫苑。超攻撃特化型剣術と謳われる通り、先の先に重きを置く剣術であり、後の先を主眼に置く《綾辻一刀流》とは対極にあるもの。

そんな彼と自分の間にある共通点なんて……。

「あっ」

あった。確かにあった。

自分と父の間にある絶対的な差。そしてそれは彼もかつて相対した問題であったという。

それは……。

『性別』だ……！

綾瀬と海斗は女と男。

そして紫苑と薫は男と女。

自分とは逆ではあるが、師匠と性別が異なっているという事が一致している。

あまりにも当たり前すぎて、逆に見落としていた。

「そうだ。お前と海斗氏にある絶対的な差は『性別の違い』だ。指導者との性別の差は剣術だけでなく体術全般に現れる。……というわけだ、あとは頼むぞ」

「うん、わかった」

一輝と打ち合おうとする綾瀬を横目に、紫苑は彼らを邪魔しない位置に移動する。

「お疲れ様です、紫苑さん。これどうぞ」

「ああ、悪いな。……俺は大した事はしてないけどな」

紫苑は柔から差し出されたスポーツドリンクを受け取り、ベンチに座って魔力操作の訓練を行う彼女の横に立つ。

「……何してるんだ？」

「何って、魔力操作の訓練ですよ？」

「いや、それ……絵の具だよな？ 持ってるの」

「まあ正確に言えばアクリル塗料なんですけどね。まあ似たようなものですけど」

彼女が持っていたのは某企業のアクリル塗料だ。……いや、持っていたという表現は適切ではない。

彼女は自身の魔力放出を以てアクリル塗料や塗るための筆などを浮かし、操作して彼女が魔力操作で練り上げた百鬼紫苑1/12スケール（《瞬桜》の構え）を塗り始める。

それはまさしく匠の技だった。魔力操作が日本トップクラスのAである事を考えてもずば抜けている。魔力を操作して筆を操り、フィギアを塗っていくなど才能の無駄遣いにもほどがある。

「……上手いもんだな、本当に」

「元々こういう細かい作業が好きなんですよね。魔力制御の技術を鍛え始めたのも、粘土で色々こねくりまわすのが楽しくて、もつと上手に作れるようになっていったって思ったからですし」

「いや、それ趣味の範疇じゃないだろ。そこまで詳しくはないが。それにお前何冊か専門書みたいなの持ってたなかつたか？」

「ちよつと欲が出てしまってます。色々凝ろうとしたら独学じゃできなくて、専門書を何冊か買って勉強しましたね。フィギアも塗料も、あとは家事全般とか。まあ色々。料理は……紫苑さんが美味しいって食べてくれますから、もうちよつと勉強したいなーと思ってまた何冊か注文しましたよ」

「お前はどこまで行くんだ……」

一ヶ月過ぎしてみてもわかったことだが、栞は非常に多趣味な少女である。紫苑が知っている限りでも今やっているフィギア作りや、ポトルシップの製作。イラストを描いたり、あと彼も恩恵に預かっている料理などもそれに当たる。

少し前に『ちよつと試してみたいので』と言って、中華料理が山ほど出てきたときには驚愕したものである。しかもそれら全てがプロを凌駕しているのではないか、と思うくらいに美味なのだ。

最初は一日ずつ交代でやっていた料理だが、今ではほとんどが栞の担当になっている。悪いとは思ったのだが、栞本人が乗り気であることから断れず、彼の仕事は専ら買い物の時の荷物持ちや皿洗いなどがほとんどだ。

……まあ紫苑としては、自分が作るよりも遥かに美味なのでありがたく頂いているのだが。

「まあ、その時はまた実験台になってもらうとして。……それでも私は紫苑さんに憧れているんですよ？」

「憧れている？ 俺なんか？」

「ええ。私は紫苑さんみたいに何かひとつを極める、といったことは出来ませんから」

塗料を塗りながら栞は言う。

自分はあるちこつちに手を出すせいでどれもが中途半端になっている、と。

紫苑のようなこだわりを持って、ひとつだけで良いから世界で一番になりたい。そういうった願望は持ち合わせていない、と。

——だから自分は、彼と違って《魔人》にはなれなかったのだ。
なんて、口には出さないけれど。

「破軍学園に編入したのも、選抜戦を行っているのも親がどうしてもというからでしたから。私は正直、戦うことが好きじゃありません。自分が傷つくのも、誰かが傷つくのも。」

……それでも、紫苑さんの事は応援しています。それでも頑張つて、なんて言うつもりはありませんけどね。あなたは頑張りすぎなくらいです。あなたと知り合つてまだ一ヶ月くらいですけど、それでもヒヤヒヤします。いつか手の施し用のない程に壊れてしまふんじゃないかって」

「……悪い」

「別に怒っている訳じゃないですよ。あなたが『最強でありたい理由』も『最強でなくてはならない理由』も知ってますから。それでも……誰の前でもそう在らねばならない理由なんてないと、私はそう思います。誰かひとりくらい弱いところを見せたって、誰も責めはしませんよ。そうですね、例えば……私とか」

ね？ と微笑む栞に、敵わないと紫苑は苦笑する。

一度どうしようもないくらいに弱いところを見せてしまった相手だ。あの時はなんて無様な格好を晒してしまったのだ、と酷く後悔したが、あれ以降自分の動きが格段に良くなっているのは自覚しているところ。

仮に彼女に弱いところを見せずに、刀華と戦ったのなら……勝っていた、と断言は出来ない。

「……仲が良いのね、アンタ達」

話が一段落したところで彼らに話しかけたのは、一輝達と訓練をしていたステラ・ヴァーミリオンである。後ろには有栖院凧や黒鉄珠雫の姿もある。

「まあ一ヶ月も過ぎせば仲良くなれますよ」

「お前も黒鉄に随分懐いてるんだな。アイツに話しかけたいなら話しかけたら良いだろうに」

「ハア!? 誰がアイツに懐いてるって……!」

「アイツの視界の端に入るように剣を馬鹿みたいに派手に振り回していれば気付くだろう。それで、いいのか？　今なら話しかけられると思うが」

紫苑が顎でしゃくれば、今は一輝は綾瀬を気遣って休憩をいれているところだった。今ならば鍛練をしているわけでもないから話しかけるのは簡単だが……。

「話しかけたいのに、話しかけられない。それが乙女心つてものですよ、紫苑さん」

「……………よくわからん」

「まあ、ステラちゃんの事は置いておくとして。意外だったわ」

「意外だと？」

「ええ。ワタシは剣においてははずぶの素人だけど、あなたも一輝と同じくらい剣に精通しているんだから、型の修正くらいできるのかと思ってた」

有栖院の言葉に彼はまさか、と返す。

「俺は自分が《努力》してきたことしか出来ない。そこに誰かに剣を教えることは入ってなかった」

「じゃあ《努力》すれば……………？」

「出来るようにはなるだろうな。それが伐刀者でない普通の人間が可能な範疇なら。だが流石にあいつのためにそこまでやってやる義理はない」

そこまでお人好しではない、と言う紫苑にそれはそうだと有栖院は頷く。

一輝は休み時間に武術教室の真似事なんてやっているが、あれは一輝が親切すぎるだけの話だからだ。

しかし彼が気になったのはそこではなかった。

「普通の人間に可能な範疇なら？　でもあなたは……………」

「ああ。《倍化》の能力を使えるな。だがあれは例外中の例外。俺もなぜ使えるようになったかはさっぱり見当がつかん」

それは嘘だ。彼は自分が《倍化》の異能が行使できるようになった理由を知っている。

彼が《瀧華一刀流繚乱勢法》を使用できるようになったのは、彼が《魔人》になってからの事である。

瀧華薫の背中を追い、彼女の代わりに世界最強になるべく剣を振り続けてきた彼の想いが《引力》となって運命を塗り潰し、道理を踏み潰し、《瀧華一刀流繚乱勢法》を再現するに至った。

故に彼は《瀧華一刀流繚乱勢法》に組み込まれている《倍化》能力のみ使用可能で、分身と言った事はできない。

だが、そんなことを馬鹿正直には話せない。この事実は《魔人》となつた者、もしくはその領域に近づいた者、《連盟》の支部長、そして国家元首にしか開示されていない事であるからだ。

「道理や理屈はさっぱりわからん。《努力》すれば全く異なる異能を宿せるのかと思つたが、そういうわけでもないらしい。俺は一輝のような身体能力倍化や、黒鉄のように自身の魔力から水を生成するといった芸当はどう足掻こうが不可能……それが現段階での見解だ」

それだけ言うと、休憩は終わりだとして紫苑は立ち上がる。

目の前では一輝による型の修正が終わつたところであつた。彼によつて型の修正を行われた綾瀬は茹で蛸のように真っ赤になっているが、それは彼にとつて些細な問題である。

いざ打ち合いを始めればその羞恥は引つ込み、剣士としての顔が姿を見せることを知っているからだ。

そして彼らは再び剣を交え——そんな日々が三日過ぎた。

第10話

一輝との鍛練が始まって四日目。

そろそろ綾瀬の身体に疲労が蓄積してきただろうという事で、剣術の鍛練は一旦小休止となり、彼等は学園近くの屋内プールにやっていた。

学園の敷地内にもプールはふたつ備わっているのだが片方は定期清掃で、そしてもう片方は理事長である新宮寺黒乃の特別講習で貸し切りとなっていて使用はできなかったのだ。

そんなこんなでやってきたプールの女子更衣室。そこでステラ・ヴァーミリオンと西園寺栞、綾辻綾瀬は水着に着替えたのだが……。「ヴァーミリオンさん、露出度高いね……」

「そう？　これぐらい普通でしょ？」

綾瀬が頬を赤らめながらステラの身体に視線を向ける。

彼女の身体を覆っているのは、黒の紐ビキニである。紐とついている通り、その布面積はあまりにも頼りない。ふとした拍子に胸が零れてしまうのではないかと見ている側がハラハラする程だ。

対して綾瀬の水着は黒のセパレートタイプの水着である。露出度は綾瀬の気性も相まってステラよりも控えめ——というよりもどんな水着を着ようとステラのそれよりは低めになるのだが——だ。

そのままフィットネスにも使えそうなそれだが、彼女の剣客としての鍛練が健康的かつスタイリッシュな魅力を引き出している。

「シオリは泳がないの？」

「ええ。今回は紫苑さんから頼まれてついてきただけです。私は綾辻さんの様子を見ながら適度に寛がせていただきます」

栞の装いはラッシュユパーカーにデニムショートパンツと、水着からは離れたものだった。勿論下に水着は着ているけれど、あまり水に入るつもりもないからという装いである。

「アイツも来ればよかったのに」

「先に用事があったんじゃないよ。でも見てみたかった気もするなあ、百鬼くんの水着姿」

そう、今回は紫苑はおらず綾瀬の指導役は一輝のみとなっている。先に用事があった。とだけ伝えておいてくれと紫苑から頼まれた手前、彼女達にはそう説明したが彼が欠席した理由に思いを馳せ、小さくため息が漏れた。

彼が欠席した理由は——心療内科の定期検診が理由のひとつだ。

ただのアフターケアで大事はない、と彼本人から説明されはしたが、それでも彼の症状を知っている身としてはどうしても心配になる。それも数週間前に彼のトラウマを共に見て、彼が味わった痛みも共に味わった自分からすればなおさらだ。

そのトラウマと相対し続け、挑み続けた結果、極度のストレスで黒かった彼の髪が真っ白に染まった程だったのだから。

もうひとつの理由として『自分が行くと悪目立ちして綾辻の修行を妨げるから』というのもあったけれど。

彼の総身に刻まれた傷。

刀による斬痕が主立った物だけれど、火傷やリヒテンベルク図形と呼ばれるような感電した傷跡、銃痕、——彼の埒外の努力によって手にした強さ、その代償として彼の身体に刻まれたそれらはあまりにも痛々しい。

そんな外見の者が伐刀者ではない民間人も利用する市民プールでいたら前述したように悪目立ちする。不審者扱いされてもおかしくないほどだ。

もし行けたとしても迷惑はかけられない、と断った紫苑の顔を思い浮かべ、またため息が漏れた。

それはそうと……

(確かにもう一度見てみたいですね……)

先日のショツピングモールで彼の水着自体は購入している。

黒と青のシンプルなデザインのレストランスタイルの物だ。それ自体は大したことはないが、彼の剣士の肉体は、傷跡を十分にカバーしてありあまる魅力がある。

……まあ自分は彼の水着姿どころか、彼の全裸を見たことがあるのだけれど。

「……シオリ？ 顔赤くない？ 大丈夫？」

「えっ、はっ、はい!? なんてでしょうか……!?」

「いや、イツキをこれ以上待たせるのも申し訳ないから早く行きましよう？ それとも何かやることでもあった？」

「い、いえ。大丈夫ですよ、行きましようか」

まさか紫苑の全裸姿を思い出して赤面していたなどと言えるわけもなく、先に歩き出していた二人に続いてプールに向かった。

「お待たせ、イツキ」

「うん、大丈夫だよ。大して待ってないし」

プールに出て彼女達は先に待っていた一輝と合流する。

瞬間、一輝に周囲の男達からの嫉妬の視線が突き刺さった。

『は？ あの三人全員アイツの連れかよ』

『おいおいおい、少子高齢化の進む日本でそんな蛮行が許されると思ってたのか』

『沈めてやる』

(……僕は今日不慮の事故で溺死するかもしれないな)

彼の優れた聴覚が男達の怨嗟の声を拾い、彼は自然とため息が漏れる。が、自分の今の状況を客観的に見れば、彼らがそのような感情を抱くのは当然であると納得できるが。

しかも自分は世間一般で言うイケメンというわけでもないのだし。

これで紫苑がいてくれれば多少マシになったのではないか。

「良かったですね、黒鉄さん。両手に花ですよ？」

「ははは……。僕が持つには不相応かな……。僕は」

『ステラさえいればいい』……。ですか？』

「——ツツ!? いつ、から気付いて」

「そうですね。もしかしたらそうかな、と思ったのは紫苑さんと東堂さんの一戦の時。確信に変わったのは先程です。私と綾辻さんを見る目と、ステラさんを見る目が明らかに違いましたから。

……気を付けた方がいいですよ？ 黒鉄さんのステラさんを見る目、完全にえつちな事を考えてる顔でしたから」

「うぐっ……！」

悪戯をする子猫のような表情を浮かべる栞に、一輝は何も言い返せなくなる。

自分では表情筋を動かさないようにと気を張っていたのだが、他人から見て気付かれるほどに緩んでいたとは思わなかった。それほどまでにステラという少女が魅力的なこともあるのだろうか。

しかし……、

「あの、西園寺さん。この事は……」

「ええ、誰にも話しませんよ。第二とはいえ一国の皇女との恋愛発覚なんて、マスメディアが面白おかしく報道するのは目に見えています。……しかし、ステラさんにも言っておいて欲しいのですが、貴方達、結構わかりやすいです。プライベートな空間ならばともかく外でそういう事をするのは控えておいた方がいいかもしれませんね」

「……善処します」

「はい。善処してください。……まあ、今日のところはそういう事をして良いんじゃないですか？ 外野からの茶々には私が気を張っておきますし、存分にいちやつけば良いと思います。綾辻さんはこっちで引き取りますから」

「……………ありがとうございます」

「いえいえ、礼を言われる事のほどでは。頑張ってくださいね？」

とはいえ、このプールで何をするのかは私にはわかりかねますので、その辺りは教えて欲しいのですが。という栞に一輝は頭が上がりません。

何度も関係性を進めようとし、その度に躊躇って進めなかった自分達にとって、彼女から差し伸べられた手は非常にありがたい物だった。

——本当に彼女は人の機微に聡い、と一輝は思う。

恐らくは性分なのだろう。人をよく見、寄り添う才能。それはあの百鬼紫苑が彼女に心を許している事から見ても明らかなこと。

自分にはないものだ。

一輝は彼女に今日行うことの内容と、その意味を説明すると彼女と

別れた。

「——というわけです。詳しくはやって見てください。黒鉄さんの話ではやってみたらわかる、だそうです」

「なるほど。……でも肝心の黒鉄くんは？」

「ステラさんと少し話がしたいそう。二人つきりでプール内で話してますよ」

その事を聞いて綾瀬は合点がいったのか「ああ」と納得の声を漏らした。若干ではあるが頬が緩んでもいる。

その辺りは彼女も乙女らしい。

「それじゃあボク達は邪魔しちゃいけないね」

「ええ。それに綾辻さんは鍛練があるでしょう？ そちらに集中なさってください」

はい、と彼女は返事をしてプールの中に潜って行ってしまふ。

そうして残された栞だが、特にやることがない。プールに潜って綾瀬と同じ事をしてても良いのだが、そうすると一輝達の方に気が回らなくなってしまう。

一輝が綾瀬に提示した鍛練は、自分が普段意識しない、自分の身体の深奥に意識を向け、身体の事を完全に理解するためのもの。

彼女が今やっていること——《眠り》の能力を一輝達の周囲に展開し、擬似的な人払いの結界を構築することとの並行はできない。

随分と騒いでいるようだから、そちらにかける労力も大きくなっていく事もその要因のひとつだが。

なので彼女が出来ることと言えば考え事くらいのものだ。

そしてその大半は百鬼紫苑の事。

ただの定期検診とは言ったものの、また彼の心の傷を抉るようなことにはならないだろうか、とか。また誤って電車を見るようなことになったりはしないだろうか、とか。

彼が了承してくれれば今度はふたりつきりでまたプールに来て、綾瀬と同じ事を彼と一緒にやってみるのも良いかもしれない、とか。

そんな何でもないことを考えていると、

「そういえば西園寺さんは——」

プールから上がってきた綾瀬に声をかけられた。

といつても彼女に驚きはない。事前に彼女の魔力がこちらに近づいてきていることは察知していたからだ。

「百鬼くんと付き合ってるの?」

「ごぶっ、けほっ、こほっ!」

しかし彼女の言葉は全く予想できなかったが。

「はい!」

「いや、西園寺さんと百鬼くん仲良いみたいだったし、西園寺さんは名前前で呼んでたし、つまりそういうことかなーって」

「い、いえ……そんなことはないですよ。確かに紫苑さんは魅力的な殿方だとは思いますが……」

「じゃあ好きなの!」

「発想が飛躍しすぎて……!」

やはり年頃の乙女。色恋沙汰には興味津々らしい。

「えつとですね……好きか嫌いかで言えば好きですよ。でもそれが恋愛感情かと言われるとよくわからなくて。異性と付き合った経験もありませんし」

「なんか意外だね。西園寺さん美人だし、多才だし、モテモテで今まで何人かの男の子と付き合ったことあるんだと思ってたけど」

「あまり興味がなかったの。……それにしてもどうしてそんな事を?」

「あつ、百鬼くんを男の子として好きだって訳ではないよ。それは教えを乞う身として失礼なことだからね。ただ……彼の事をもっと知りたくなつて」

聞き、彼女は考え込む。

正直綾瀬がそういうことを聞いてくることは予想できていた。紫苑からも『別に隠しているわけでもないから話しても構わない』という許可は出ている。……無論《魔人》の事は隠さなければならぬけれど。

そうして思慮を巡らせ……、

「……わかりました。私の主観の話であれば、お話ししますよ」

「ありがとう！　じゃあ早速だけど、西園寺さんから見て百鬼くんってどんな人？」

「どんな人……ですか……」

「うん。どんなことだって良いんだけど」

「そうですね……」

百鬼紫苑がどんな人間か。

これまで過ごしてきた一ヶ月という短い期間の中で彼に抱いた印象。それは……。

『ごく普通の男の子』……ですね」

『普通の男の子』……？　なんていうか、意外だね。《黒鬼》なんて呼ばれてるから、もっと物々しい感じかと思ってたけど」

「確かに戦いの時の彼は凄まじいですからね。……けど、私生活を知っている身としては彼の事を『鬼』だなんて思えませんよ」

学園では綾瀬の言うように『血も涙もない悪鬼』だなんだと言われているが、栞の印象は全くの逆。

——彼は普通の少年だ。

笑いもすれば、怒りもする。

不器用ながらも、こちらを慮るような言動をしてくれることだって決して少なくない。一緒に買い物に出掛けるときは重い方の荷物を持ってくれるし、車道側を歩いてくれる。蛇足ではあるが、車道側を歩いてくれたのは西京の入れ知恵らしい。

食べ物好みはどちらかと言えば薄味が好み。なんでも五感が鋭いせいで、世間一般的な味付けだと彼にとっては少し濃く感じるとのこと。同時にそういう時は意図的に味覚を鈍化させているらしい。

「味覚を意図的に鈍化させて……」

「感覚を位置的に遮断することで、そのリソースを他の場所に割こうと《努力》したんでしょね。……さらっとやってのけるのが流石だと思いますけど」

「黒鉄くんもだけど、破軍学園のFランクってFランクじゃないよね」綾瀬の言葉に栞もまた頷く。

この学園のFランクは揃いも揃って埒外だ。一輝は剣術を始めと

する体術全般の才能、紫苑は己の身に宿した《努力》の異能。そして彼らは共に狂気の研鑽を重ねる事によって人間を超越している。たったひとつの剣術を極めんとするか、武芸百般を目指したかという方向性の違いはあるが。

「あとは……辛いものとか苦いものが苦手ですね。ピーマンとか唐辛子とか」

「それだけ聞くと凄く可愛いね、百鬼くん」

「ええ。……本当に、彼は普通の人だったんですよ」

葉は思う。

百鬼紫苑は到底、運命を超えられるほどのエゴは持ち合わせていなかったと。運命という絶対的なもの。その縛鎖を引きちぎれる程、彼は強くはなかったと。

——しかし瀧華薫が電車に跳ねられ、意識不明の重態になったこと。そして彼女の父親が自殺したこと。

それらの出来事が十歳にも満たない少年の心に深い絶望を刻み込み、同時に抱いた運命への怒りが、彼の自己を急速に肥大化させ、彼を運命の外へと駆り立てた。

そうして彼は自身の心身を省みない努力を己に強要し続け、結果、弱冠十二歳という若さで《魔人》になった。

己の内から聞こえてくる絶叫に耳を塞いで。幾度となく敗北して膝を折りたくなくても決して屈さず。涙を溢しそうになっても、薫は自分などよりも遥かに苦しいのだからと言い聞かせ。

彼は戦い続けたのだ。

「綾辻さん」

「……何？」

「もしかしたら貴方は、紫苑さんのあり方に憧れに近い感情を抱いているのかもしれない。けれど……私は、貴方に彼と同じような生き方はしてほしくない。

——彼の生き方は、人ができる生き方じゃない」

人として備えていなければならぬ大切なものすら不要だと断じ、切除して、削除する。そうして己を一振の刃として研ぎ澄ませる。

なるほど、確かに強者にはなれるだろう。

だが、それは人が耐えきれなくなるようなものではない。

そうしていた紫苑もまた、とうの昔に壊れてしまっていた。ただ壊れていてもなお、自分は壊れていないと言い聞かせ、進み続けていただけで。

——そうして彼が進み続けた果てにあるものを葉は知っている。

屍山血河の頂にて吼える、禍々しい炎のような瘴気を纏った、ひとりの悪鬼。彼が《魔》に堕ち、修羅に成り果ててしまった姿を。

「西園寺さんは……百鬼くんが戦うことに反対なの？」

「正直に言ってしまうえば」

葉は苦笑する。

「私は彼にこれ以上傷ついてほしくない。しかし私がそう言ったところで、彼はそれに頷きはしないでしょう。彼が自分自身を許せていないから」

だから彼はこれからも剣を振るのだろう。どれほど傷つくことになつたとしても。

彼は最強であろうとし続けるのだろう。自分の憧れが世界最強の剣士であると信じているから。

そもそも、自分が彼の抱いた想いを否定する権利などどこにもありはしないのだ。そのやり方がどれほど回りから見ている悲痛なものだったとしても、彼のやり方を咎める権利もない。

だがそれは彼を心配しない理由にはなりはしない。

故に彼女は自分の前でなら弱いところを見せても良いのだと言う。誰の前でも強者で在り続けることはとても苦しいことだから。たとえ貴方が最強でなくても、私は絶対に貴方を責めたりはしないからと。

なんて言葉は決して口には出さないけれど。それでも、

「それでも私は彼が自分の事を許せる日が来てほしいと、そう願っていますよ」

そう言う彼女の表情はとても優しかった。彼女と付き合いが長い綾瀬とて、それを見ればさすがに気付く。

西園寺葉は百鬼紫苑に対して並々ならぬ感情を抱いていると。それが恋愛感情と——言い方は悪いが、それをただの恋愛感情と決めつけるのは違うように思う。

それは母が息子を思いやるような。実直な弟の努力を陰ながら見守るような。そして愛する男の心身を案じるひとりの女のような。その他にも様々な感情が入り乱れ、絡み合っている。

自分は人の感情を理解できるとは思わないが、黒鉄一輝ならば自分がこうして感じているものをしっかりと言葉にできたのだろうか。

「それで綾辻さん。お喋りもいいですけど、まずは自分がやるべきことをしっかりとやるべきではないですか？」

「あ、うん。そうだね……ごめんね、変なこと聞いて」

「いえ、お気になさらず」

頑張つて下さい、と葉に見送られ綾瀬は再びプールに潜る。

——《黒鬼》百鬼紫苑。

事故によるものか人の悪意によるものかという違いはあれど、自信と似た境遇にある男。けれど自分とは絶対的に違う男。

彼は運命に抗ったのだ。《瀧華一刀流繚乱勢法》を最強にするために。事実その剣技は学園最強の雷使いであり、同時に学園最強の剣士《雷切》東堂刀華に勝った。世界最弱の男としてこの世に生を受けながらも。

そんな境遇を知ったからだろうか。自分は彼が気になったのだ。理屈も道理も説明はできないが、彼がどんな人間なのかもっと知りたくなった。

——その予感是最悪の形でわかることになったが。



プールでの休息兼綾瀬の鍛錬が終わって暫く。葉は近くまで迎えに来ていた紫苑と合流し、帰路についていた。

「楽しかったか？」

「ええ。綾辻さんにとっても、良い気分転換になったんじゃないでしょうか。ですけど……」

「どうした？」

「いえ。ただ貴方も居てくれれば良かったのに、と思っただけですよ」
「……機会があつたらな」

彼女のこの真つ直ぐに気持ちを伝えてくるところには一ヶ月経つても慣れることはない。コイツには恥じらいだとかいう感情はないのだろうか。

まあそれはそれとして、と葉は話を変える。

「本当に問題はなかったんですよね？」

「ああ。ただのアフターケアだって言っただろ」

「……………本当ですか？」

「こんな事で嘘を吐いてどうするんだ。すぐにお前に見破られるのに」

「それは確かに」

紫苑は嘘が吐けない。吐いたところで葉には絶対に気付かれる。それを分かった上で突っ込むか否かはまた別の問題だが。

——彼が嘘を吐けるように努力すればまた別の話ではあるが、彼がそんな事に自分の時間を使うとも思えない。そして目の前の彼の表情から嘘の気配はなかった。

その時、紫苑の生徒手帳が震えた。紫苑はそれを取り出し、来た内容に目を通し……………そして若干ではあるが、顔をしかめた。

「紫苑さん？」

「見ればわかる」

と、紫苑の生徒手帳を見せてもらった葉もまた顔を歪ませた。

メールの差出人は『選抜戦実行委員会』

内容は次回の選抜戦の相手が綾辻綾瀬に決定した、というもの。……………あの場に居なくて良かった、と紫苑は思う。まず間違いなく、気まずい状況になっていただろうから。

それにしてもこれも巡り合わせか。自分に運と呼べるものが味方したことはほとんどないが、しれに仕たって酷な話である。

——綾瀬があればほど必死になる理由も知っているから、尚更だ。

しかし……………

「紫苑さん……………」

「俺は手は抜かない。……お前もわかってるだろう」
「ええ……」

それは自分とて同じ事。自分の前に敵として立つのなら容赦はしない。己灌華の信一刀流じる乱勢最強を以て斬り伏せるのみだ。

——夜が更けていく。

第11話

——どうすればいい。

——どうすればいい。どうすればいい。

——どうすればいい。どうすればいい。どうすればいい。

プールでの鍛練が終わった先で一輝達と食事を摂っていたまでは良かった。その先で自分の因縁の相手である貪狼学園のエース《剣士殺し》ソードキラー倉敷蔵人に出会して。

そこで反射的に逃げてしまった先で、学園から配布された生徒手帳に入った連絡……『十一戦目の対戦相手は百鬼紫苑様に決定致しました』という文字を見てからずつと答えの出ない問題と向き合う羽目になった。

ルームメイトに心配されても、ろくに笑えなかった。それくらい、その報せは綾瀬の精神に大きなダメージを与えた。

——百鬼紫苑は破軍学園において最強の騎士である。

剣術では、あの《狩人》と《速度中毒》ランナースハイを打ち破った《無冠の剣王》黒鉄一輝と並び立つ……否、それ以上の実力を誇り。

そして平均魔力総量の1/15しか魔力を保有していないにも関わらず、自分と同レベルの魔力制御技術を持つ。

綾瀬とて平均魔力総量には及んでいないが、それは僅かな差。紫苑に比べれば遥かにある、と言って然るべき量だ。

綾瀬とて分かる。

自分と紫苑の力量の差は、隔絶していると言って尚生温い絶対的な格差があるということ。

百鬼紫苑は剣術と魔術、両方を極めた修羅。葉は《鬼》などと呼ばれているとは思えないと言ったが、これほどの男を《鬼》と呼ばずになんというのか。

そんな男に、自分は勝利しなくてはならない。何がなんでも勝たねばならぬ理由がある。

されとて、それは一体どうすればいいのかという最初の自問自答に戻ってくる。

——黒鉄一輝ならばまだやりようはあった。

彼が誇る必殺《一刀修羅》には『一日に一度しか使えない』という明確な弱点がある。それに彼は酷くお人好しだ。それこそなんの関係もなかった自分を強くしてくれるほどには。

学園の屋上から飛び降りるなりして、《一刀修羅》を使いざるを得ない状況を作り出す。そうすれば彼は間違いなく使ってくるだろう。例え、その後に選抜戦という大舞台が控えていようとも。

だが、紫苑には《一刀修羅》殺しのような真似は決して通じないだろう。

彼には《一刀修羅》のような明確な必殺技が存在しない。否、振るう剣技、その全てが必殺の魔剣であるというのがひとつ。

そして彼は一輝と比べずつとドライだろうというのがひとつだ。例え、前述したように自分が屋上から飛び降りたところで彼は決して救いには来ないだろう。

当たり前だ。彼からしてみれば『自分の対戦相手が勝手に飛び降りて、行動不能になろうとしている』状況だ。わざわざ助けにくるほど彼は大馬鹿ではない。

仮に助けに来たとしても、一輝のように明確な弱体化は見込めない。精々、彼が戦える時間を僅かに削ぎ落とすことができる程度だ。そしてその僅かに削った時間が試合に影響が出る程、自分の実力は彼に伯仲してない。

——要するに……詰みの状況だ。

「どうすれば……」

自分の持ちうる手札を改めて見る。

綾辻一刀流の剣術、そして自分の伐刀者としての『傷を開く』能力。魔力量に魔力制御……それをどの順番で、どんなに手管を弄そうとも彼には届かないだろう事が用意に想像できる。

そんな時だ。

「あつ……」

綾瀬に天啓が降りてくる。

否、天啓と言える程勝算があるわけではない。ただ勝ち目がゼロの

負け戦が、乾坤一擲の大博打をすれば僅かに勝ち目が見えるようになつたという程度のもの。

出来るか出来ないかでいえば出来ない可能性の方が遥かに大きい。しかし上手く行けば百鬼紫苑を完全に封殺できる。そんな一手。

なのだが……。

「……………」

彼女の良心がそんな事をしてはならないと止める。それは人がして良い行いではない、と。

けれど……彼女はそれを力づくで黙らせる。

「ごめんね、百鬼くん。ボクは……負けるわけには行かないんだ」

自分の大切なものを取り戻すため。

自分は勝つためならどんなことだってする。そう決めたのだ。

夜が明ける。

◆ ◆ ◆

綾辻綾瀬と百鬼紫苑の試合が行われる第六訓練場は、お世辞にも観客が多いとは言えなかつた。その観客も次に行われる試合目当てで来ている人間が多い。

《黒鬼》という名で恐れられる紫苑は無論の事、綾瀬も人気がある騎士とは言い難い。

彼女はこれまで格下のEランク騎士などと当たっていた為これまで突破できていたが、紫苑や一輝などのように《大物殺し》ジャイアントキリングを為してきたわけではないからである。

——会場を盛り上げようとする実況と、解説の教師の声が遠くから聞こえるようだ。まるで自分だけが海の中にいるような感覚。

良いコンディションだ、と綾瀬は思う。だがそうでなければ彼と剣を交えることすら出来ないだろうから、ここまでは彼の前に立つための最低条件。

問題は——ここから。

彼との距離は20メートル。

そこから漂ってくる剣気に身体をぶるりと震わせる。

(わかつてはいたけど……)

紫苑の顔に油断、慢心はない。けれど過度な強張り等も見受けられない。およそ剣士としてのベストコンディションを保って、彼は自分と相対した。

——正真正銘の全力で、自分を叩き潰すつもりだ。

『彼らはこの学園でも珍しいくらい、剣術に偏った騎士です。さて、この勝負の行方はどうなるのでしょうか？ ——さて、それでは皆さんご唱和ください！ 試合開始——!!』

瞬間、紫苑の姿が消えた。

そしてそれはすぐ眼前に迫っていた。

バゴオツツツ!! という爆発音にも似た音が遅れて響いてくる。それは埒外の筋力で床を蹴りつけ、綾瀬を斬り伏せようとしたのだ。だが、これは予想できたこと。

自分と紫苑の間にある剣術の技量差は絶対。遠距離からの刺突《鳳穿花》によるロングレンジアタックも想定できたが、彼はそんなまどろっこしい真似はしない。

自分の最強を以て叩き潰しにくる。綾瀬はそう確信していた。

刃と刃がぶつかり、鋼の音が鼓膜を叩きつける。

膂力の差によって身体ごと地面から引っこ抜かれそうになるのを何とかこらえた。

ここで紫苑は疑問に思う。

——綾辻一刀流は『後の先』……所謂カウンターを狙うことに特化した剣術である。故に綾瀬はこの一撃による衝撃をなんとかして逃がそうとすると想定していた。

その上で叩き潰してやると思ってた一撃は、外に逃がされる事はなく受けきられた。膨大な魔力——あくまでも紫苑基準だが——を放出することによって、彼女は耐えたのだ。

カウンターもへつたくれもない、力づくでの受け。何故そんな真似をする。紫苑がそう思った瞬間——

「——《魂裂き》」

紫苑の意思は暗転した。

最初に異変に気付いたのは実況席にいる解説役の教師——折木だった。

彼の顔色が目に見えて悪くなった。傷も負っていない筈、発作が起きるような病にもかかっている筈なのにどうして——そう思ったときだ。

紫苑が膝を屈した。

『な、なんとお!! 百鬼選手、《雷切》戦ですら膝を屈することなく會長を斬り伏せたにも関わらず、ここで初めて膝を折ったあ!!』

「げほっ、ごほっ、ウオエ……!」

いや、それだけでは済まない。彼が激しく咳き込んだかと思うと、腹の中身を床にぶちまけた。

『紫苑選手が嘔吐した! 明らかに普通じゃない……! 折木先生!! 彼の身に何が起こっているんですか!!? これが綾辻選手の能力なんでしょうか!?!』

『わ、わからない……一体何が起こっているのか……!』

ヒュー、ヒュー、と過呼吸を繰り返し、身体は何か怯えているように小刻みに震える。目の前に敵がいるにも関わらず、彼の視線は虚空を彷徨っている。

眺からは大粒の涙さえ溢れていた。

折木は強制的に体調を最悪の状態にまで持ち込む自分の能力、ヴァイオレットベイン《血色の海原》に類似した能力かと想像するがどうにも様子が違う。

そもそも百鬼紫苑程の男が、ただの痛み程度であそこまで苦しむだろうか。あれはまるで……おぞましいものを見てしまった、恐怖することしか出来ない子供のような……、

「綾辻さん、貴女……!」

ところ変わって観客席。

縁のある者同士の試合だからと、観戦をしていた西園寺葉が齒噛みする。その顔には明確なまでの憤怒がある。

「シオリ! なんてあんたそんなに怒って……?」

「怒りたくもなりますよ……!!」

普段の穏やかな雰囲気はどこに行つたのか。彼女は周囲の事など気にも留めずに、衝動を観客席にぶつける。

それはあまり付き合ひのない一輝やステラ、珠雫や有栖院には想像できない姿だった。

「あの、西園寺さん。貴女はまるで彼に起こっている事が分かつている風ですね。説明していただけませんか？」

「……綾辻さんの能力は『霊装でつけた傷を開く』という概念干渉系能力です。これを人体に使えばどんな掠り傷だろうと『重傷化』させ、また空間に使えば任意のタイミングで発生させられるカマイタチを発生させることができます。」

そして概念干渉系能力は『概念』そのものを操作することができる能力ですから、出来ることの幅は極めて広い。その能力を持った者の解釈次第で、可能なことが増えていくと言つてもいいでしょう」

卓越した《反射使い》が『自身が傷を負わされた』という因果を相手に『跳ね返す』ことによつて、自分の負傷をまるごと肩代わりさせるように。

尋常ならざる《努力》を繰り返すことによつて全く異なる能力を身に宿せるように。

後者は《魔人》となる前は『努力を重ねれば如何なる事だろうと、人類最高峰の技術や肉体を会得できる』能力だったものが、『努力を重ねる限り無限に強くなる』能力に変質したからこそ起きた現象であるが。

「つまりどういうことなのよ？」

「綾辻さんは百鬼くんの『心の傷』を開いた……そう言いたいんだね？」

「ええ」

——霊装とは魂の具現。それ即ち、心が擬似的に実体化したものだと言つてもいい。

それを先ほどの衝突でほんの僅か……そう紫苑さえ意識できない、ほんの僅かでも傷つけることが出来ていたとしたら。

あらゆる傷を重傷化させる彼女の一撃が、彼の心の傷を強引に開い

たとしたら。

「でもお兄様、そうそう心の傷なんて開けるものなんでしょうか？」

「いえ、たぶん彼にだけはそれが可能だったのよ」

それに答えたのは有栖院だった。

「私は詳しく知らないんだけど、確か彼って前に一輝達がプールに行った時『アフターケアがあるから』と断ったのではなかったかしら？」

「……ああ、そうだね」

「それなら可能でしょうね。アフターケアっていうとそんなに大した問題には見えないでしょうけど、逆に言えばアフターケアは必要な状態なんだもの。完治した訳じゃないわ。……彼の心には『かさぶた』があった。それを彼女は能力を使って強引に引っ剥がした。その結果があれって話ね」

おそらくではあるが、彼は11年前のトラウマと再び相對しているのだろう。そうでなければあんな状態になどなる筈がない。

葉が堪えきれないという様に舌打ちをする。

そして——彼らの想像は当たっていた。

(『心の傷』を開く……出来るものなんだね)

能力からすれば出来ないことはないが、出来る可能性は著しく低いといったものだった。いや、彼と一輝くらいにしか出来なかつただろう。

彼らは剣術であればこの学園の中——否、日本の中でも五指に入るくらいの実力者であるが、魔力においては劣等も劣等。紫苑に至っては連盟の中で最も素質がないと言われている騎士。

だから抵抗されなかつた。出来なかつた。

霊装を媒介し、心の傷を開こうとした綾瀬の魔力を。

——自分の勝ちだ。

彼は自分の心に傷を開かれたことで、精神に大きなダメージを負った。そんな状態では口々に剣技は振るえまい。

……それにしても《黒鬼》と呼ばれる剣士があそこまで苦しむなんて。

『普通の男の子……でしうか』

以前に聞いた百鬼紫苑の話がリフレインする。

彼はどれほど強かろうと、その辺りにいる男の子でしかないのだと。そんな彼が強さを得るためにどれほど自分の心身を磨り減らしてきたのかを。

(西園寺さんは……怒っているだろうな)

心の中で紫苑と栞に謝罪する。

本当ならばこんな手段になんて手を染めたくはなかった。だが、仕方がないのだ。そうしなければ勝てないんだから。

——勝利こそ全てだ。

どんなに高潔に戦おうと、負ければ全部失われるんだから。

二年前、彼女はそれを痛いほど思い知った。知ったときには全てが遅くて、自分の手からは溢れてしまっていた。

その溢れたものを——

(ボクは取り戻すんだ——！)

綾瀬は心の中で吼え、そして——その剣が弾かれ、腹部が裂かれた。

「……っ、げほっ……！」

激痛が綾瀬の脳を沸騰させる。

だが彼女はそれを些事だと切り捨て、距離を取った。

剣士の間合いで無様に痛みで悶絶することは、首を落としてくれと言っているようなものだからだ。

しかし……

『百鬼選手、満身創痍で立てないかと思いきや、ここで反撃を入れたあ!!』

紫苑は完全に押し潰されていた筈だ。自分のトラウマに耐えきれず、涙さえ流していた。完全な死に体、あそこから剣が振るえる筈がないというのに……どうして……！

「どうして、あそこから剣が——」

振るえるのか。

それに対する返事はなく——、

「——《花束》」

彼女の身体は逆袈裟に切り裂かれた。

——あまりに呆気ない決着だ。

綾瀬は東堂のように剣戟を交わすことなく、たった二合で散った。《瞬菊》と《鳳穿花》の合わせ技——《花束》による飛翔する斬撃——それも《鳴神》を叩き折るほどの速度で振るわれる一閃に、綾瀬程度の騎士が反応できるわけもなし。

こうして綾辻綾瀬の全身全霊を賭け、その上卑劣な手段にまで手を染めて挑んだ百鬼紫苑との一戦は、紫苑の圧勝という形で終わったのだった。

◆ ◆ ◆

「はっ——！」

綾辻綾瀬は破軍学園内に存在する医務室で目を覚ます。

I P S 再生槽による治癒を受けた者は、大体がこの医務室のベッドに寝かされる。自分がそこに寝転がっているということは——、

「……目が覚めましたか」

「……っ！」

負けたのか。そう現実を受け止めると同時に、自分のベッドの傍でパイプ椅子に腰かけていた人物——西園寺葉から声をかけられる。

——その目は、今まで自分が見てきた葉のそれよりもずっと冷たくて。自分がしでかした事の大きさを痛感させるには充分だった。

「——ごめんなさい」

「謝る相手が違うでしょうか？」

端的で、けれど明確な拒絶の意思。

それに二の句が継げなくなれば、葉は大きく溜め息を吐く。

「——まさか貴女がそんなことをするような方だとは思っていませんでした。私もまだまだ人を見る目がないようです。……失態でしたね」

自分だってこんな事をしたくはなかった。仕方がなかったのだ。

——口で言うのは簡単だ。けれど目の前の葉を見て、そんなことが言えるわけがない。言ってしまったら——自分はどうなるかわから

ない。

あの《黒鬼》百鬼紫苑と同格であると認められた少女が、自分に対して明確な怒りを持って力を振るえば……どうなるかは想像に難くない。

「はあ……綾辻さん」

「……はい」

「百鬼さんから伝言を預かっています」

「百鬼くんから……？」

「『お前は真面目すぎるから最初に言っておくが、俺は別に怒ってはいないければ、お前に謝って欲しいわけでもない』」

困惑の声が漏れた。

葉はそれに反応することなく、淡々と続ける。

「『ただ真面目すぎるのも難点だな。敵の弱点を突いた。ただそれだけの事で心が乱れる。心が乱れるから剣筋が乱れる。……それを誇り高いというか、勝ちに貪欲になりきれないというかはお前次第だが。』」

——ただお前が俺に対して申し訳ないと思うのなら……お前の手で《剣士殺し》からお前の大切な場所を取り戻してみせろ』」

「——ッ」

因縁の相手の異名が彼女——いや、彼の口から溢れる。

「『過去を取り戻せ。今を取り戻せ。未来を取り戻せ。誇りを取り戻せ。お前の大切なものすべて、お前自身の手で取り戻せ。お前の信じ、そして愛した剣で、奴を打ち破れ。それが弟子にくれてやる、最後の宿題だ』——以上です」

伝える事は伝えたと言わんばかりに、彼女は医務室から出ていく。

これで彼女がどう思ったのかも、これからどうするのかも知らない。仮に紫苑の言ったことを無視し、一輝辺りに助力を乞う他としても彼は特に不快感は示さないだろう。

「……本当に、優しすぎる人」

本当はもつと怒っても良い筈なのに。

彼はそれを『戦いだから』という一言だけで許してしまう。彼は生

粹の戦士だから。

——自分には理解できない考えた。自分は戦士とは程遠い人間だから。

……なんて自分が彼の前で言ったなら彼『お前は優しい奴だ』なんて言うのだろう。どっちが優しいんだか。

「今日のご飯はちよつと豪勢にしましょうか」

そんなもので楽になるとは思っていないけれど。それでも彼が嬉しいと思うことくらいはしてあげたかった。

第12話

「百鬼、少し良いか？」

「……？ 手短に済ませてくれるのなら」

選抜戦の控え室に行く途中の廊下で、紫苑は破軍学園の理事長を勤めている新宮寺黒乃に話しかけられた。

……ただすれ違ったから話しかけた、というには自分と彼女に接点もなかった筈だ。何の用だろうか？

「ああ、お前次の週の週末は予定は空いているか？」

「……はい。特に何もなかったかと思いますが」

「そうか。実は……」

新宮寺曰く、破軍学園が毎年七星剣舞祭の直前合宿を行っている海水浴場があるのだが、その周辺で『怪物を見た』などという不審な噂が立っているようだ。

普段ならば破軍学園の教師を向かわせて噂の調査、事実であった場合は解決等を行うのだが、現在教師達は不馴れな選抜戦の運営でそこまで手が回らないのが実情だ。

故に生徒会の面々に調査を依頼したのだが、搜索範囲が海中にまで及ぶことを考えれば些か手が足りない。故に外部から助っ人を頼みたい——との事だ。

「なるほど……」

「無論、電車とはすれ違わないように生徒会の方には話を通しておく。とは言ってもある程度事情を知っているだろう、東堂がいるから心配はいらんだらうが。……引き受けてくれるか？」

「……ええ。俺で良かったら」

新宮寺には、自分の変則的な編入を受け入れて貰った恩義がある。自分の編入を通すために、保護者である西京寧々が随分とごねたというのも話には聞いた。

それに今年度から始まった選抜戦にも紫苑は恩恵に預かっている。この程度で彼女への恩が返せるなどとは思わないが、喜んで引き受けよう。

「そうか、助かる——」

「ただ……」

「……？　ただ、どうした？」

「俺で良かったんですか？　俺は素敵なんて真似、全くできませんけど」

これが怪物狩りならば——剣士として力を振るうのならば、紫苑の本領だが、これが素敵となれば話は違ってくる。

自身に向けられた殺気を感じするならばまだしも、潜伏している敵を発見する術など紫苑は持ち合わせていない。

自分は無力ではないかという紫苑に新宮寺は「ああ」と納得を示した。

「その辺りは私も心得ている。だから西園寺にも話を通して欲しい。より正確に言うのなら、お前達ふたりへの依頼という事になるな」

「……わかりました。アイツにも話を通してはみますが……アイツが来られるかどうかはわかりませんよ？　数日前から忙しそうにしていたので」

「忙しそう？　何かあったのか？」

「なんでも家の方で少しあったようです。流石に詳しい事情までは知りませんが」

ここ数日は泊まり込みでどこかに行っているようで、夕食も一人で摂る日が続いていた。『何か俺に手伝えることがあれば言ってくれ』とは言ったが、自分に出来ることなど剣を振るう事くらいだ。そんな自分は彼女の力にはあまりなれないだろうが……それでも葉は『その時が来ればお力を借りても良いですか？』と言ってくれた。

(慰めなんだろうがな……)

元より多才で優秀な彼女の事だ。自分の手など借りずとも終わらせてしまうだろう。

「わかった。話だけでも通しておいてくれ。無論、無理はしなくても良いともな。ああ、でも参加してくれるにしろ、しないにしろ、今週の金曜までには生徒会の方に伝えてくれると助かる」

「わかりました。……もう良いですか？」

「ああ、邪魔をして悪かった。試合、頑張れよ」
失礼します、と紫苑は頭を下げて去っていく。

その姿を見送りながら、背後に向けて一言。

「——あれで良かったのか？ 寧々」

「おう。サンキュー、くーちゃん」

からん、と天狗下駄を鳴らして彼女の横に立ったのは和服を着崩した少女——にしか見えない女性だ。

破軍学園非常勤講師の西京寧々。K O Kと呼ばれる連盟旗下の戦闘興行においてランキング三位の実力者であり、現在は百鬼紫苑の保護者である。

「それにしてもお前は何を企んでいるんだ？」

「そんなもん義息子のラブロマンスに決まってるだろ!? 真夏の海！
乳がでけえ上にとびっきりの美女であるしおりんの水着姿！
そこで起こる怪物出現ツッパプニング！
そこでふたりの距離は急速に縮まって……！」

「お前は百鬼と西園寺をなんだと思ってるんだ」

義理の息子とそのルームメイトを恋愛ドラマの主演にしようとしている西京の頭に、新宮寺は手刀を振り下ろす。それをひよいつ、と軽い調子で彼女は避けた。

「いや、でもアイツ、マジでしおりんに懐いてるんだぜ？
今までからしたら信じらんねえくらいにさ」

「……………」

寧々の声から冗談の色が抜け落ちた。

「ウチがアイツにしてやれた事なんて、南郷寅次郎ジイのところにアイツを紹介してやったくらいだ。旨いメシなんて作ってやれなかったし、どっか遊びにだって連れて行ってやれなかった。義理とはいえ、母親らしいことなんてなんもしてやれなかった。10年近くアイツを見てきたのに。

……なのにしおりんはどうだ？ アイツと知り合ってもうちよいで二ヶ月。そんな短時間で遊びにも連れ出して、旨いメシも作ってやって、なにより……多少とはいえアイツの抱えてるもんも吐き出さ

せて、受け止めた」

西園寺栞には自分にはない才能がある。

——他者に寄り添う才能。

自分のような暴力を振るうことしか能がない自分とは全く異なり……そして、人のためになれる才能だ。

「全く、この歳で嫉妬たあ嫌になんね。しかも自分より一回りも年下のガキにさ」

「寧々……」

「まあつまり、何が言いたいかつてーと、少しでも息子の為になるかもしんねえ事くらいしてやりてえのさ。今まで青春の『せ』の字もなかった人生なんだ。そのきっかけくらい作ってやりたい。それにあのふたりなら戦力としても申し分ないだろ？」

「……そうだな」

新宮寺も西京も、自身の青春を犠牲にして強さを追い求めた人間だ（新宮寺はちやっかり恋人を作っていたが、それでも当時は強さを優先していたことに変わりはない）。

だからといって紫苑のようにはなれなかったし、なるつもりもなかった。彼の強さへの執念は最早、呪いと言っても良い程である。

これくらい強引に改善の機会を作ってやった方が良いのかもしれない。それに先ほど寧々も言ったことだが、彼と栞なら戦力としては十全過ぎるほどだ。

「ほら話は終わり終わり。さっさと行くぞ、くーちゃん。紫苑が試合したら、また訓練場ごとぶった斬るんだから」

「……毎度毎度少しは加減して欲しいものだ」

そりゃ無理な話さね、と笑いながら先に行く寧々を、新宮寺は頭をかきながら追いかけた。

◆ ◆ ◆
「ふうふう……」

柄にもなく緊張している、と黒鉄珠雫は自身の状態を判断する。

勝利へのプランは立てた。自身と対戦相手との相性は良好。だが……彼はそんなものなど容易く踏み潰してくるだろう。

目を開け、真正面に立つ男を見据える。

手入れなどろくにされていないだろう、お世辞にも綺麗とは言えない白髪。髪の間隙からこちらを真っ直ぐに見据えてくる赤と黒のオツドアイ。

そして人類最高峰の魔力制御力を持っている珠雫が、ようやく感じられるほどの弱い魔力。

そして相対しただけで押し潰されてしまいそうな殺気。

——《黒鬼》百鬼紫苑。

破軍学園序列一位にして生徒会長《雷切》東堂刀華を下し。以降の試合を綾辻綾瀬とのもの以外、すべてを不戦勝で勝ち上がり。

兄であり、負け戦の百戦錬磨である《無冠の剣王》黒鉄一輝をして『今の僕では彼に勝てない』とまで言わしめた、世界最弱の素質を持った伐刀者にして破軍学園最強の剣士。

わかつてはいた。

彼が自分よりも格上なのは。

相対しているだけで体力を消費していく。彼に見据えられているだけで、周辺の気温が下がっていくような錯覚すら覚える。

ぶるり、と珠雫の身体が震えた。

だが、彼女はそれに負けなくらい口角を吊り上げた。

何故か。

それはずっとこういう戦いを待ち望んでいたからだ。

自身の全身全霊。己が培ってきた全てを賭してなお届くか否かという、絶対強者との戦いを。

己の『想い』が試される、そんな戦いを。

(お兄様——)

この場所にいない、最愛の兄を呼ぶ。

今は自分の前を歩いている愛しの人。そしていつか並び立つと決めた、憧れの人。

(私は勝ちますよ、ステラさん。だから……貴女も負けないうでくださいね)

「双方、霊装を展開してください」

「飛沫け、《宵時雨》」

「——《亡華》」

紫苑の手には、鞘に収まった漆黒の日本刀が。珠雫の手には小太刀が握られる。

……所変わって場所は第七訓練場。

紅蓮の長髪を靡かせ、彼女はそこに立っていた。

観客の歓声が聞こえる。だが、それは遠くから聞こえているように曖昧である。

それは、目の前の敵に全ての意識が集中しているからで。

「……ふふ、流石ヴァーミリオンさん。歓声も人一倍です。流石に緊張してしまいますね」

「そんなもの微塵も感じていないのによく言うわね。シオリ」

綺麗に整えられた夜色の髪。柔和に微笑み、余裕のある立ち振舞いはこれから刃を交えるとは思えない。

だが、そんな立ち振舞いがステラにとっては何よりも不気味だった。

——得体が知れない。

それがステラの朧への印象だった。

解放軍によるショッピングモール襲撃。そしてこれまでの選抜戦において、朧は一度として霊装を見せていない。

ただ相対した相手を眠らせて戦闘不能へと追い込んでいる。故につけられた異名は《眠りの魔女》スリーピングウィッチ。

霊装不明。戦闘スタイルは魔法戦だと思われるが、詳細は不明。実力は未知数。

自分は一輝のように事前に対戦相手の事を調べたりはしないが、それでも耳に入ってくる情報はある。だどいうのに朧はここまで勝ち上がってきている事が不可思議な程、出回っている情報が少なかった。

「まさか。かの《紅蓮の皇女》を相手にするのですよ?」

「そう。だったらこれまで隠してきた霊装も見せてくれるのかしら

？」

「勿論ですよ。……《ウィックド・ウィッチ》」

短く葉がまじないを唱えれば、手に握られるのは、紫色の刀身を持つ小振りなアーミーナイフだ。

ステラの霊装である《レイヴァアティン妃童の大剣》に比べればあまりにも頼りなく、そして地味な武装。

「《ウィックド・ウィッチ》……悪い魔女」

「ええ。《眠り》の能力ですから。らしい名前でしょう？」

小鳥が囁くようにくすくす、と笑う。

余裕ぶっているように見える。……いや、実際余裕なのか。

ステラは日本に来てから、自分がどれほど井の中の蛙だったのかを思い知った。

来日してすぐ自分よりも圧倒的に素質で劣るFランク騎士に無様に敗北し、その一週間後にはテロリストに遅れをとった。

選抜戦が始まってすぐに《黒鬼》と《雷切》の戦いを見て、敵わないと痛感してしまった。

だが——自分だって成長している。

ならば……自分を侮る女に、一発おみまいしてやろうではないか。「その余裕ぶった顔、すぐに青くしてやるわ」

「お手柔らかにお願いしますね？」

ステラが霊装を手に握り、切っ先を葉に向ける。

それでも彼女は微笑み、アーミーナイフを構えた。

第六訓練場 『《黒鬼》百鬼紫苑VS《ローレライ深海の魔女》黒鉄珠雫』

第七訓練場 『《眠りの魔女》西園寺葉VS《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオン』

「試合開始——ツツツツツツツツ
!!!!!!!」

第13話

「《水牢弾》ッ！」

開幕の号令がなされ、最初に動いたのは珠雫だった。

それは彼女にとつて十八番であり、異名のきつかけにもなった敵を窒息させる水の塊を射出する伐刀絶技《水牢弾》である。

それを五発ほど一斉発射。

この技に為す術なく破れ去ってきた騎士は多い。それに対する紫苑の応手は——轟ッ！ という音を伴った居合い抜きだった。

《瞬菊》のような精錬された一刀ではなく、あまりにも荒々しく、そして無駄の多いそれ。

ならば何故そんなものを振るつたのか。簡単なことである。普段ならば無駄と切り捨てるそれが、今回は必要となったからに他ならない。

刀が振るわれた風圧によって《水牢弾》五発が残らず吹き飛ばされ、技の体を保てなくなった。その水の塊は扇状に散らばり、観客席を囲む魔力障壁に叩き付けられる。

だが、当然これだけでは終わらない。

「《障波睡蓮》——!!」

珠雫と紫苑の間に幅三メートルにもなる水の壁が競り上がる。

解放軍によるショットピングモール襲撃時において密かに準備していた（紫苑の敵の最高戦力撃破と、葉の制圧によって不発となったが）防御用伐刀絶技《障波睡蓮》。

それを展開した瞬間——その正面を風圧が薙いだ。

流星に剣で振るわれた風圧。しかもステラのような規格外の筋力を持つているわけでもないため、飛翔する払いは壁を吹き飛ばすには至らない。

今まで勝負を決めてきた技が容易く払われたことによる動揺はない。むしろこの程度、彼の強さを考えれば当たり前前にとってくることだ。

この程度で倒れられては拍子抜けも良いところ。

珠雫は《障波睡蓮》と並行して発動の準備を整えていた技を撃ち放つ。

「《血風惨雨》——ッ!!」

彼女は《宵時雨》を指揮棒のように紫苑へと振るい、巨大な水の塊を作り出すと、それを針のような形へと変化させ、紫苑に向けて一斉に射撃する。

弾雨、という言葉すら生温い一斉掃射に流石の紫苑も守りに回らざるを得ない。

彼は《亡華》の形状を自身を包み込むような形状に変化させ、水の針群を防ぎきる。

（——これでいい）

珠雫は作戦の第一段階が上手く行ったことに一旦安堵する。

彼と戦う上での絶対条件……それはクロスレンジに入らないこと。

紫苑ほどの剣士のクロスレンジ——即ち刀が届く範囲は『死地』も同じ。自分のような魔法戦に極端に特化し、近距離戦闘はさわり程度しか修めていない者が軽々に立ち入れば、待っているのは死のみである。

だからこそ絶対に刀の間合いには入らない。入らせるような行動を取らせない。

彼を魔法戦の間合いに押し止め、封殺しきる事こそが己の唯一の勝機である。

故に川の氾濫を想起させるほどの水量で、彼を圧倒しようとしたのだが……珠雫は目を見開いた。

——彼が歩みを進めている。

（嘘でしょ……!）

本来ならば制圧射撃に重点を置いている《血風惨雨》を一点集中し、彼にぶつけているのだ。それは川の氾濫と形容したように、到底人の身で受けきれぬような衝撃ではない。

並みの伐刀者であれば防御を貫かれるか、後退するか。ステラ級の規格外であったとしても足を止めざるを得ないほどの衝撃であろう

に。

ガガガガガガッ!! と《亡華》を釣瓶打ちにしているにも関わらず、一步、また一步と確実に歩を進めている。

(ツ！ 落ち着きなさい、私)

確かに《血風惨雨》を受けきつて、こちらに進んできてきている事には驚いたが、流石に走ると言った真似はできていない。それに《亡華》を盾にしている時点で、彼は攻勢には出られない。

彼のロングレンジアタックは全て斬撃を飛ばす、間合いを伸ばすといった『剣を振るうこと』が前提となっている攻撃であるからだ。

ならば彼の目的は——威圧。

お前の攻撃など然したるものではないと誇示し、こちらの動揺を誘うための一手であると彼女は読む。

(……私のやるべき事は変わらない。彼の歩みを止め、魔法戦で仕留める)

そのために必要な手を打つだけだ。

そうして足元に魔力を這わせ、作り出したのは氷の杭だ。

視界外からの強襲。それも『迷彩』と呼ばれる、魔力の使用を相手に感づかせない技術を用いたそれはいとも容易く迎撃される。

だが、一瞬だろうと彼の意識を後ろに向ける事が出来れば、その攻撃には意味があるのだ。

——紫苑の頭上に影が射した。

そのの正体を確かめることすらできなかった。

それは十メートルにも迫ろうかという巨大な氷の円柱だった。それが頭上という人間の死角から襲来し——紫苑を押し潰した。

轟音がこの場にいる全員の鼓膜を叩く。

だが——、

「——っ！」

まだ足りぬと、珠雫はその更に同じ円柱を作り出し、一本目の上から叩き付ける。衝撃に耐えきれず、一本目のそれにヒビが入る。リングに亀裂が入った。

更になら叩き付ける。一本目の氷柱は完全に砕け散り、リングの

一部が完全に粉碎された。

三本の巨大な氷柱がリングに叩き付けられ、そして生まれたのは巨大な氷の墓標。

水というどちらかといえば攻撃よりも、防御や治癒を得意とする能力でありながら、これほどの破壊を生んだ事実には観客席も実況席も静まり返る。

次いで生まれたのは……地を揺るがすほどの歓声だった。

『——す、素晴らしいiiiiiiiiiii!! 私、実況でありながら黒鉄選手が次々と繰り出す技の連打に、一切口を挟むことができませんでした！』

『なんだよあれ！ 水使いがやっていい攻撃じゃねえよ！ マジでえげつねえ！』

『いやあの攻撃だけじゃない。あれだけ大規模な攻撃だ。準備には相応の時間がかかった筈。なのにアイツはそれを一切悟らせなかった……っ！ それもあれだけ技を打っておきながら！ 《紅蓮の皇女》とは別方向にイカれてやがる……』

『これは終わったわね。いくら会長を真正面から斬り伏せたからって、世界最弱のFランクが受けきれいなような攻撃じゃないわ』

『いける……いける……いけんぞー！ 勝ってくれええ!!』

珠雫の勝利を確信した観客達が沸き立つ。

当たり前だろう。どれほど卓越した剣技を持っていようが、列車の衝突に抗える剣士など居よう筈がない。そのまま轢き殺されるのが関の山。

——そう。本当にただの剣士ならば。

無音の、漆黒の剣閃が走った。

一瞬遅れて、氷の墓標にいくつもの斬痕が刻まれ——墓標が崩れ去る。

そしてその下からは、制服が穴だらけになった百鬼紫苑が刀を抜いた姿で現れた。

その姿に——血の赤は見受けられない。

「さっすが紫苑。あの程度屁でもねえってか」

観客席が驚愕と紫苑の恐れに包まれる中、冷静に状況を分析している者が二人。

紫苑に話しかけた後、そのまま試合を観戦していた西京寧々と新宮寺黒乃である。

けらけらと笑う寧々に対し、新宮寺は「わからんな……。」と小さく声を漏らした。

『わからん』ってどういうこったよ、クーちゃん」

「私の見立てでは百鬼の魔力制御は《瀧華一刀流繚乱勢法》を使うために鍛え上げたもの。索敵や魔力を感知する事はアイツはどちらかと言えど不得手な筈。……そうだな？」

だからこそ、自分は合宿先の化け物が出るという噂の調査の協力者として紫苑と栞を指名したのだ(寧々からの頼みという事もあったけれど、本命はそれである)。

索敵や魔力の感知においては紫苑よりも、栞の方が遥かに上。それはショツピングモール内に潜伏していた解放軍の実働部隊の人数及び場所を正確に割り出した事からも明らか。

故に紫苑に珠雫が全力で施した『迷彩』を看破し、事前に対策を立てることは不可能に近い。新宮寺もまた、最初は決まったと思ったのだ。

そんな彼女の見立ては全く間違っていない。

伐刀者が用いることを前提に置いた《瀧華一刀流繚乱勢法》だが、その中に『迷彩』を破るような技はない。

だから寧々もそれに頷いた。

「しかしアイツは頭上という、人間にとっての絶対的な死角からの攻撃に見事対応してみせた。そのからくりは一体なんだ？」

「からくりなんて大層なものじゃねえさ。聞いちゃえば『なんだ、そんなことか』ってなるくらいシンプルだ」

寧々は珠雫に視線を向ける。

必死に取り繕ってはいるが、そこには明らかな動揺が見て取れた。間違いなく今の新宮寺と同じ疑問を持っていて、尚且つ自分のように親切に教えてやる人間がないから。

——そう。大それた伐刀絶技というわけでもない。破れるようなからくりがあるわけでもない。

「——勘だよ」

「勘……だど？」

「いや、勘つつーと正確じゃないね。ただアイツは次の攻撃がどこから、どんなものが来るのか『わかる』のき」

——そう。紫苑はただ理解しているだけ。

珠雫がどんな攻撃を仕掛けてくるのか、どこから繰り出してくるのか、どのタイミングで打ってくるのか……それら全てがわかるだけ。

言ってしまうえば、ただそれだけの事なのだ。

「馬鹿な！ ただわかる、そんなものただの勘と変わらんだろう。そんなものに自分の命を委ねるなど……！」

「まあウチにはわからんけどね？ アイツ曰く、まず臭いがするんだと。血みみたいな鉄臭い感じの。で、次の瞬間には自分が負けている景色が見える。」

それ聞いてウチは思ったね。その勘は、アイツの生存本能に由来するものなんだって」

騎士の中には自分の死に限りなく近づいたことで、五感で『死』を解する者がごく少数だがいるという。彼もまたそういう人間なのだろう。

それは納得できる。しかし西京の言うことが事実なのであれば、紫苑の『死への嗅覚』は前述のそれとは桁違いだ。

もはや『未来予知』の領域に達している。

「確かに精度は桁違いだけど、万能って訳じゃないぜ？ アイツの生存本能に由来する物だから他人の危機には一切働かねえし、まず『自分に害をもたらすもの』にしか効力はない。だから攻撃みたいな行動には全部反応するが、それ以外は全くわからねえ」

だがその弱点は今は今全く問題にならない。

試合とはいえ殺し合いの場。相手に攻撃しないなんて状況は成立のしようがないのだから。

「『究極生存本能』」

カワード・インステインクト

アイツの生存本能は、自分を殺すもの悉くに反応する。掻い潜れるもんなら掻い潜ってみなよ、妹ちゃん」

カワード・インステインクト。

臆病者の本能。

11年前に限りなく死に近づいて、そしてこれまでずっと負け続けてきた紫苑が身に付けた、『死』に対する絶対的な嗅覚。

なるほど、確かに恐ろしい代物だ。相手の殺気や害意に反応しているわけでもないから、感情を伴わない兵器による攻撃や天災にまで反応してくる。攻略法もない、単純明快な特性。

だが、真に百鬼紫苑を強者足らしめているのはこれではない、と新宮寺は思う。

（自身の死が見えたところで対処できなくてはそれで終い。本当に恐ろしいのは、初見の技だろうが対処してくる百鬼の対応力。……いや、これまで累積してきた戦闘経験だ）

紫苑にあつて珠雫にないもの。

それはこれまで積み上げてきた研鑽だ。

そしてひとつひとつ経験を積み上げ、己の血肉とする事において紫苑の《努力》は数ある異能の中で随一の性能を誇る。

それによつて生まれた彼我の差こそが目の前の結果だ。

珠雫は得意としている魔法戦で彼に傷ひとつつけられていない。

この事実は観客達が感じているそれよりも遥かに大きい。

（押し潰されるなよ、黒鉄妹。そうなつてはアイツの独壇場だぞ）

——まさか一滴の血も流すことが出来ないとは、と珠雫は苦虫を噛み潰す。

己の領域であるロングレンジでの魔法戦。しかも守りではなく、攻めに圧倒的比重を置いた剣術を使う相手の防御を貫けないなんて。

いくら自分の使う魔術が攻撃に寄つた炎や雷でないとはいえ、ランクの差を考えればありえない事の筈なのに。

しかし必要以上に悲観的になる必要はない。

たかだか作戦のひとつが通じなかつただけ。

それに『クロスレンジに入らない』という目的は達成している。

ならばこのまま持久戦を仕掛け、彼の首を討ち取る。

どれだけ強かろうが、彼の伐刀者としての素養は世界最低なのだから。

我慢比べで彼が自分に勝てる道理はない。このままじわじわとなぶり殺しにしてやる。

「――《白夜結界》」

視界が白に染まった。

魔力によって作り出された濃霧だ。一メートル先も見えないほどの霧は実況者泣かせではあるが……そんなもの、二人には全く以て関係ない。

(……霧そのものに攻撃性はない。ただの目眩ましか?)

《血風惨雨》のような火力の一点集中ではないと判断し、紫苑は《亡華》の形状を元の日本刀と鞘の物へと戻す。

――瞬間、彼の本能が自身の死を嗅ぎ取った。

四方八方から氷の杭や水の弾丸が身体に突き刺さり、地面に倒れ伏す己の姿を。

紫苑は鞘の形状を変え、浮遊する小さな盾を作り出す。それによって迫り来る攻撃を次々と防ぎきった。

だが、紫苑がただ守るだけで終わるわけがない。

くるり、と円を描くように周囲を切断する。斬撃を放つことで、ついでに霧まで払ってしまおうという算段だったが……返ってくる感触に肉を斬ったようなものはない。

返ってきたのはばしやり、という水音だ。

(水を使った分身か。ならば本体は――)

思考することさえ許さない、と彼女は一気に畳み掛ける。

濃霧を突き破り、紫苑の前に姿を現したのは十数名の珠雫だった。しかしそれが全て、先ほど切断した水分身と同様の物である事は容易にわかること。

路傍の石を蹴り飛ばすように刃を走らせ珠雫の分身を切断すれば

――瞬間、彼女の分身が爆発した。

至近距離で、小柄とはいえ人間サイズの爆弾が十数個も爆発すれば

紫苑とて怯みはする。爆音が鼓膜を叩き付け、僅かに後退する。

そこに迫るは同様の水分身。

しかし今度は爆弾ではなかった。紫苑にぶつかる直前でそれは同質量の水の姿へと戻り、瞬間、凍結する。

彼の身体が氷に包まれ、身動きが取れなくなる。そして眼前には、先ほど紫苑を叩き潰そうとした氷の柱——ではなく、巨大な氷の杭。人体を破壊するにはあまりに過剰な、それが紫苑の身体を押し潰そうと迫っていた。

「ルルア——ツツ!!」

この試合で初めて紫苑が吼えた。

氷の拘束を力ずくで引き千切り、すぐさま刀を振るう。

名すら持たぬ、けれど必殺の魔剣によつて破城槌は真つ二つに裂け、紫苑の脇を通り抜けてリングの外——丁度、観客席の最前席付近へと突き刺さる。

『実況者泣かせの展開で、音くらいでしか状況を判断できなかった状況から一変！ 真つ二つに切断された巨大な杭が観客席へと突き刺さるウ!! しかし観客席は先生方が魔力障壁で保護しているのをご安心ください！ つとここで百鬼選手が突っ掛けた！ 勝負を決めに行くか!?!』

先程の杭が突き刺さった風圧で《白夜結界》も吹き飛ばされた。もはや障害は何もないと、紫苑は珠雫へと疾駆する。

しかしおめおめと迫らせるほど珠雫も馬鹿ではない。

彼を《白夜結界》内に押し止めた水の弾丸や、氷の礫——あらゆる手段を以て彼の疾走を止めようとする。

——足首を何かに捕まれる。珠雫が床に這わせた魔力で形作った氷の腕である。

だがそれを紫苑は「だからどうした」と力ずくで粉碎する。

——それだけで事足りた。紫苑が僅か。ほんの一瞬でも足を止めればそれで良かった。

珠雫が試合開始直後から張り巡らせていた——《黒鬼殺し》の絶技を発動させるには!

「《青色葬送》」

訓練場を覆い尽くしてしまうのではないかという質量の水が突如として出現。それは紫苑の身体を包み込み、そしてそれが一気に収縮。

——百鬼紫苑の身体を押し潰した。

第14話

「スリーピングアイズ
《眠りの魔眼》」

号令が告げられた瞬間、葉の眼が怪しい光を灯した。微かに青く輝くその眼は、捉えたものを悉く夢の世界へと引きずり込む瞳だ。

この瞳に何人も騎士が眠らされ、敗北に突き落とされてきた。しかしこれの攻略法は明らかになっている。

「燃やし尽くせ！ 《焦土蹂撃》^{フロックンアロー} ツ！」

それは彼女の視界を自分から外させる事である。

見詰められている事で作用する力なのだから。視線をずらせばいい。当たり前の話だ。

ステラは自分の背後に数十個の光球を出現させ、それを葉に向けて撃ち放つ。その名の通り、着弾地点を焦土へと変える爆撃が葉に襲いかかった。

爆音。爆音。爆音。

光球が爆ぜ、衝撃と光が視界を焼いた。滅多な事では壊れない筈の特殊石材で作られたリングがひび割れていく。

「相変わらず馬鹿げた力ですね……！」

並みの伐刀者数人分の魔力をひとつの技に纏め、撃ち放つその姿は戦略級兵器と呼ぶに相応しい。

だが葉も易々とはやられない。

魔力放出によって脚力を大幅強化。リングの円周を走り回りながら、ステラの絨毯爆撃を回避していく。爆風で制服のスカートが靡いた。

反撃として見舞うのは《ウィックド・ウィッチ》を複数本顕現させての投擲だ。

ステラほどの剛力の持ち主に接近戦で勝負を挑むなど下策も良いところ。故にナイフの投擲で牽制しようと思ったのだが――、

「効くわけないでしょー！」

大剣を振るった時に生まれる風圧で、残らず吹き飛ばされてしま

う。

どれほど身体能力を強化しているようが、葉は女性として平均的な力しか持っていない。しかも投擲という攻撃手段では、ステラに容易く防がれてしまうのも当然の話だ。

仮に葉が攻撃に寄った能力を保有していれば別の話だったのだが、生憎と彼女の能力は《眠り》。初見殺しじみた怖さはあるが、能力そのものに攻撃力は皆無である。

致命的なほどに葉とステラの能力は相性が悪いのだ。

「セエア——ッ!!」

「くっ……!」

ステラが大剣の間合いに葉を捉えた。

そこから繰り返し出されるのはダンスにも似た、苛烈に燃え盛る炎のような剣技。

ヴァーミリオン皇国に代々伝わる《皇室剣技》^{インベリアルアーツ}である。

『西園寺選手、ステラ選手に魔術、ナイフによる攻撃を繰り返し出すも全て容易く防がれ防戦一方! ステラ選手、このまま決めてしまいか!』

黒鉄一輝との一騎討ちで大地を震撼させた剛剣が振るわれ、実況が言うように葉は何もさせて貰えない。燃え上がる炎に形容される彼女の苛烈な剣技に対して、逃げ回るのが精一杯——観客の多くはそう思っているのだろう。

だが、実情は全く異なっていた。

(——コイツ、近接戦の技量も高いの!?)

ステラの脳裏に甦るのは日本に来て、初めて行った試合。

負け戦の百戦錬磨と謳われる破軍きつての剣客、黒鉄一輝との模擬戦だ。

彼もまた今の葉と同じようにするりと、まるで落ち葉のようにステラの剣技を受け流していた。

ステラの剣は絶対強者に相応しく、相手に受けを許さない、敵を押し潰す剣技。そも剣を交えるという状況が成立している方がおかしいのだ。

——しかも一輝と異なり、『ナイフ』という片腕で扱う武器でステラ

の剣を捌いている。

こんな真似、彼でも出来るかどうか。

ここで——葉が攻勢に出た。

彼女の瞳が再び妖しい輝きを帯びる。

瞬間、ステラの意識が一瞬微睡む。すぐさま自身の膨大な魔力を以て彼女のもたらした眠気に抵抗したが——それでも一瞬、彼女の攻めが緩んだ。

そこで葉はステラの横薙ぎを受けると、そのままくるり、とその場で独楽のように身体を回転。そのままの勢いで《妃竜の大剣》の横つ腹を殴り付けた。

しかし人間を遥かに超越した膂力を持つステラに対して、力比べで挑むなど愚の骨頂。

現にステラは『斬撃重量累積』の能力によつて高められた、総重量十トンの斬撃を真正面から受け止めている。

加えて前述したように葉の武装はアーミーナイフ。お世辞にもパワー勝負を挑んで良い武器ではない。

——そんな道理は、ステラの大剣が横に大きく弾き飛ばされた事で否定された。

「——ツツ?」

身体ごと引っこ抜かれそうになるのを何とか踏ん張る。

しかし致命的な隙を曝したことはない。

そして葉はこの隙を見逃すほど優しくはなかった。

「ふ——ツ!!」

がら空きになったボディーに向かって《ウィックド・ウィッチ》を突き出す。絶好の好奇を逃さず、魔力放出によつて爆発的に加速した霊装による刺突は——、

「《エンプレスドレス妃竜の羽衣》——!!」

決定打にはならなかった。

ステラが纏った炎の鎧、それに伴う爆発で葉を退けたからだ。

しかし——その刃は確かに届いていた。ぽたり、とリングに赤い雫が落ちる。

薄くではあるが、ステラの腹部が切り裂かれていた。

葉はバックステップで距離を取り、改めてナイフを構え。

ステラは業火を纏い、大剣を構え直し——試合は膠着状態に陥った。

『し、信じられるでしょうか——!? 押し込まれ続け、もう終わってしまふのかと思われた瞬間！ 西園寺選手が反撃に打って出て、微かなものではありませんが、ステラ選手の玉体に傷をつけました！ オープニングヒットは西園寺葉選手だああああ!!!』

『《眠りの魔女》って魔法戦タイプじゃなかったのかよ!? 《紅蓮の皇女》の剣を弾き返したぞ!?』

『信じらんない……あんなの《無冠の剣王》以来じゃ……』

『いや、黒鉄だつてステラさんの剣を弾き返すなんて芸当出来てなかったぞ！ 受け流すならまだしも……!』

観客席がどよめきに包まれていく。

そしてそれは破軍学園有数の手練れである黒鉄一輝も同様だった。しかし彼が驚いたことは観客達とは全く異なっていたけれど。

(……何故西園寺さんがあの技を使えるんだ)

ナイフと日本刀という得物の違いはある。

しかし先程ステラの剣を弾いたからくりを——否、その技を一輝は知っていた。

当たり前だ。

それは……黒鉄一輝の剣技だったのだから。

第三秘剣《まどか円》

相手の攻撃に対して一切防御を行わず、独楽のような回転運動によって衝撃を循環。そのまま打ち返すカウンター。

それがステラの剛剣を弾いた、葉の——否、黒鉄一輝の技のからくりである。

そしてその技は彼のオリジナル剣技、秘剣シリーズにおいて随一の難易度を誇るものだ。

その難度は、現在の一輝の技量であつてもステラクラスのパワーファイターにおいては使用できない、と言えればどれほど繊細な技か理

解して貰えるだろうか。

しかし彼女は、その技をステラに対して使った。

しかも日本刀のような両手武器よりも遥かに力を逃がすことに不向きな、ナイフという片手武器で。

いや、それ以前に一輝には引つ掛かる事があった。

(西園寺さんは剣術どころか、武術の心得なんてなかった筈だ)

普段の歩き方や目線の動きなど、武芸を学ぶ者とそうでない者の差は些細なことでも如実に現れる。

この辺りは隠そうと思つて隠すことは非常に困難な事だ。

そして照魔鏡に例えられる一輝の洞察力は、彼女に武芸の心得など欠片としてないと判断を下していた。

(巧妙に隠していた？ いや、それなら違和感程度は感じる筈だ。だ
というのに僕は彼女の振る舞いに何も感じなかった)

なら……何故彼女が《円》を使えるのだ？

「——驚いたわね。まさかあんたがクロスレンジであそこまでやるなんて思わなかったわ」

「ありがとうございます。ステラさんこそ、あそこから防御に手が回るとは思いませんでしたよ。完全に決めたと思つたんですが」

「剣戟で上回られるのは初めてじゃないもの」

もし日本に来たばかりであれば、あの刺突で試合が終わっていただろう。あの頃は狭い世界ばかり見ていて、自分は絶対の強者であるという慢心に満ちていたから。

しかし今は違う。

自分よりも剣術に優れた者。自分よりも魔力制御に長けたもの——様々な強者を知つて、さらに自分も飛躍せんと鍛練を続けてきた。

「そう簡単に負けてやらないわよ、シオリ。私には絶対に七星剣舞祭に出なきや行けない理由があるの」

あの日誓い合つたのだ。

自分が大好きな騎士と、七星の頂点を争つて再び剣を交えようと。

——自分は絶対に負けられない。

彼はどのような相手とぶつかろうと、絶対に勝ち上がってくると確信しているから。

ステラの意思表明。それに葉は拍手を送る。

「そう簡単に勝てるとも思っていないですよ。」

……とはいえ私個人としては貴女に勝ちを譲っても良いかとは思いますが、私にも貴女と同じく負けられない理由があります。それに何よりも……譲られた勝ちなんて、貴女は喜ばないでしょう?」

「当然」

「ええ、知っています。貴女方、戦士とはそういう方ばかりですから。では——」

《ウィックド・ウィッチ》を再び複数本顕現させ、構える。

「小細工。小手先。猿真似ばかりの大道芸。どうぞ、その身で味わってくださいませ」

——来るか。

ステラが大剣を構えたとき、

《アップルバースト毒林檎の破裂》

ステラの足元で何かが破裂した。

薄い紫色の霧がステラを包み込み——《眠りの魔眼》とは比べ物にならない眠気が襲いかかる。

（——催眠ガスか!）

自分の周囲を取り囲む霧。その正体にいち早く気づいたステラは、自身を中心として熱風を発生。《毒林檎の破裂》によって生まれたガスを吹き飛ばしてしまう。

「ふ——っ!」

そこに襲い来るのは十数本のアーミーナイフ。

紫色の刃がステラの肉体に突き刺さらんと空を走るが——、

「無駄だって、言ってるでしょ!」

同じように剣の風圧で吹き飛ばす。哀れ、一切の抵抗も出来ず《ウィックド・ウィッチ》は吹き飛ばされ、そして——何かに引っ掛かったように空中で、ほんの一瞬だが動きを止める。

そして……弾かれるようにして再び勢いを取り戻し、ステラへと迫

る！

「——ッ!?!」

眼を見開き、すぐさま回避行動に移る。

しかしナイフが再加速するという現実には、一瞬硬直してしまった彼女は、すべての刃を回避することは出来ず——数本のナイフが突き刺さった。

『西園寺選手のナイフが何もない筈の空中で停止したかと思ったら、再び加速！ ステラ選手の身体に突き刺さったア！ 一体何が起こったんだ!?!』

『それはあれだな。皆、眼を凝らしてリングをよく見てみる』

解説役である教師がリングの方を指差せば、それに観客達も従って眼を凝らした。

が、

「……なるほど、魔力の糸ね」

ステラはそんなことをするまでもなく、ナイフが再び勢いを取り戻したからくりには気付いた。

それは彼女が言ったように、糸だった。ピアノ線よりもなお細い魔力の糸がこの訓練場全体に張り巡らされている。

ナイフが風圧で吹き飛ばされた瞬間、霊体化し、張り巡らせていた糸を実体化。ナイフを矢、魔力糸を弦として即席の弓矢を作り出し、再びステラに攻撃したのだ。

「ご名答です」

そう言い、葉は蜘蛛の巣のように張り巡らせた糸の上に飛び乗る。たん、たん、と軽い調子で蹴り上がり、そしてステラを見下ろした。何をしてくるのか。

考慮しながらも、ステラは身体に突き刺さったナイフを引き抜き、リングの外へと放り投げる。

ナイフを引き抜いたことで出血はするが、突き刺さった状態ではそれよりも遥かに戦闘に影響が出る。

ナイフが刺さった場所から、常に《眠り》の毒が身体を蝕んでいたのだ。戦闘をしなければならぬ、素早く動かなくてはならないと闘

争本能は訴えているにも関わらず、身体はどんどん眠らされていき、パフォーマンズの低下を強制させられる。

そんな状態では勝てる試合も勝てなくなってしまふ。続けてステラは自分の身体を自らの炎で焼いた。

魔力を用いた焼灼止血法である。

火傷による痛みはあるが、それが良い眠気覚ましになる。戦闘にも支障はあるというほどでもない。

「そうそう、ステラさん。ご存じかもしれませんが、日本には梅雨というものがあります」

「……？」

突然話しかけてきた葉に、ステラは怪訝な眼を向ける。

梅雨。来日して日の浅いステラとて、その程度は知っている。

日本など極東特有の雨期で、故郷であるヴァーミリオン皇国では見られないそれ。

だからどうしたとステラが、糸の上に見事なバランスで立つ葉に眼を向ければ、彼女は霊装を大量に顕現。

それを上空に向けて放り投げれば、それが糸に引つ掛かり、即席の弓矢が出来上がる。それを彼女は引き絞り――、

「雨が多くなる季節ですから、外出の時には傘を携帯された方がよろしいかと」

それを一気に解放した。

「エッジ・スコール
《劍 雨》」

そうして出来るのは刃の豪雨。《ウィックド・ウィッチ》が溜めによつて、投擲とは比べ物にならない速度と密度で襲いかかる。

「――ッ！」

しかし多少速度が上がるが、所詮は直線上に飛んでくる代物。一輝のような体術に極端に寄っている騎士ならばいざ知らず、ステラは魔法戦もこなせるオールラウンダーだ。

この程度、容易く防げる。

ステラは自身の周囲に熱風を発生させる。《毒林檎の破裂》によつて発生させた催眠ガスを吹き飛ばしたものと同様のそれを以て、刃の

雨を凌ぐ。

そしてそれは見事に叶い、ナイフの雨は退けられる——ような事はなかった。

風によつて吹き飛ばされたナイフが、実体化させた魔力の糸に再び引つ掛かり、そしてまた射出される。

それだけではない。空中でぶつかつたナイフ同士が弾かれ、そして糸に突っ込み、そして再加速。再びステラに襲いかかる。

そこで——、

「《毒林檎の破裂》」

ナイフが爆発する。再び紫の催眠ガスが視界を覆う。

しかしそれも一瞬の事。熱風がガスを吹き飛ばそうとした時——身体に痛みを覚えた。

「——グッ!? がはっ……!」

そこから先は早い。

次々と鋼の雨がステラの身体に突き刺さる。射出された鋼が、糸に、霊装にぶつかり、軌道が変わる。四方八方から襲い来る刃にステラは対処が追い付かない。

『ラツシユラツシユラツシユウツ!! 西園寺選手、次々と霊装を顕現させ、糸を引き絞つて刃の雨を降らせ続ける! それにステラ選手は防戦一方だあ!!』

『出血以上に厳しいのは西園寺の魔力だな。アイツの刃からは常に《眠り》の魔力がヴァーミリオンの身体に流れ込んでいる筈。いかにヴァーミリオンが頑強な選手だろうと、意識が落ちるのは時間の問題だ』

(勝手な事言つてんじゃないわよッ!)

ステラは朦朧とする意識の中で解説に吼える。

まだ何も終わっていないのに、何を宣っているのだ。

ダメージは降り積もっているが、それでも見た目よりは傷が浅い。それは葉と自分との総魔力量の差から来るものだろう。

西園寺葉の総魔力量のランクはE—。

ステラが何気なく纏っている魔力の鎧であっても、多少威力が減衰

してしまうほどには少ない。

それでもこうしてステラを封殺する事が出来ているのは、単純に葉の技量がずば抜けているからだ。近接戦闘・魔法戦そのすべての技量が、この学園で上から数えた方が早いほどに卓越している。

しかし――、

(自分の火力の無さだけはどうにもできないでしょう！)

「《妃竜の大顎》――！」

上空の葉に向かって放ったのは、竜を象った超遠距離砲撃である。それが二体、訓練場内に張り巡らせた貧弱な糸を引きちぎりながら、天へと上る。

流石の葉もこれには顔を強張らせた。

何度も言うように、葉の弱点は能力そのものの攻撃力の低さ。

《焦土蹂撃》のような魔力の爆弾ならば《ウィックド・ウィッチ》を投擲し撃墜することで防げるが、《妃竜の大顎》はそうもいかない。

故に――、

「《毒林檎の破裂》ッ！」

昇竜の一体に向けて、ナイフを投擲。《眠り》の効果よりも爆発に比重を置いた《毒林檎の破裂》を以て魔力を散らそうとするが――効果は無し。

一時的に竜の形を崩し、砲撃の威力を減衰させることは出来たが……それだけだ。技そのものを無効化できるわけもなく、葉は上空という有利な位置から逃走せざるを得なくなった。

しかし、ただでは逃げない。

二体の《妃竜の大顎》が葉を飲み込む寸前で、彼女は上に向かって魔力を放出。飛び降りるよりも遥かに素早く、リングの上に降り立とうとする。

その狙いは《妃竜の大顎》同士が衝突することでの相殺だ。

《妃竜の大顎》は対象に永続的に追尾する式が組み込まれている。

そのようなホーミング性能を持つ武装などの破り方としてメジャーなものは、紙一重で回避することで追尾してきたもの同士を衝突させることだろう。

それを葉も実践しようとしたのだが——その試みは竜同士が絡み合い、一回り大きな炎竜となった事で挫かれた。

「くっ……い！」

歯噛みし、地面に着地。

しかしそれだけでは終わらない。

ステラが自分の身体に突き刺さっていたナイフを引き抜き、投擲してきたのだ。

同じ投擲という手段であっても、葉とステラではその威力に天と地程の差がある。葉の魔力放出によって速度・威力ともに高められたナイフが弓矢であるとするならば、ステラのそれは銃弾と形容すべきものだ。

着地の衝撃を転がることで逃がし、それを追いかけるように刃が投げられるが——それを自分に届く前に爆発させることで、なんとか事なきを得る。

しかし頭上から迫り来る竜だけはなんとか出来なかった。

葉は全身を魔力の鎧で覆うことで、少しでもダメージを減衰させようとするが——、

「蒼天を穿て。煉獄の焰」

そこに止めを刺すように炎を練り上げる。

十重二十重と炎が絡み合い、炎の剣が光の剣となるまでに威力が高められる。その刃はドーム状の訓練場の天井をぶち抜き、一振の刃として完成する。

個人に向けるにはあまりにも過剰なその力。

森羅万象を燃やし尽くす滅亡の極光。

これこそが世界最高の総魔力量を誇るAランク騎士である、ステラ・ヴァーミリオンが振るう天下無双の剣。

「《カルサリテイオ・サラマドラ天壤焼き焦がす竜王の焰》アアアアアア——ツツ!!!」

ステラ・ヴァーミリオンという才女が全身全霊を注ぎ込んだ、必殺の魔術が振るわれる。

その刃渡りは100メートル。

この訓練場をまるごと薙ぎ払えるほどの間合いを誇る。いくら葉

が魔力制御に優れた騎士とて、戦場すべてを焼き払う剣に対してはあまりに無力！

——決まったか。

会場にいるすべての人々がステラの勝ちを確信した。

全体的に葉優位で進んでいた試合。彼女がこつこつと積み上げ、作り上げてきた盤面。

そのすべてをひっくり返す、埒外の攻撃。

だがそれが当たり前なのだ。

凡人が積み上げた100を、たった一息で吹き飛ばす。あまりにも理不尽な絶対的な力。それを持つからこそ——彼女は最強△ランクなのだ。

その結果は誰の目にもわかる形で現れた。

全身に大火傷を負い、地面に倒れ伏す葉。

明らかに致命傷、このまま放っておけば命を落とす事は容易に想像できる。

《妃竜の大顎》で包囲され、そこに追い討ちをかけた《天壤焼き焦がす竜王の焰》

振るう剣技、発動させる魔術が全て必殺であるステラ・ヴァーミリオンの絶技を《眠り》などという戦闘に不向きな能力で防ぎきれぬわけがない。

——むしろこれまでが出来すぎだったのだ。

「あんたは強かったわ、シオリ。本当に」

これほど一方的に押し込まれた経験は数えるほどしかない。対戦相手を侮らずに挑んだ戦いでは初めての事。

それでも勝ったのは自分だ。

呆然としているレフェリーに判定を下してもらおうように言おうとする。

「——お褒めに預かり光栄ですよ、ステラさん」

その背後から刃が突き立てられる。

背中から刺された刃は身体の深部にまで突き刺さった。

「いっふ……っ」

「ですが、油断しましたね。」

駄目ですよ？ 最後まで気を緩めては。こんな風になりますから」
確かにステラの一撃に敗北した筈の葉が刃を引き抜き、バツクス
テップで距離を取る。

身体から血が噴水のように吹き出すが、それでも意識を保たせ、振
り替えれば——葉は身体に紅蓮の炎を纏っていた。

第15話

『決まったア！ 突如として出現した水が百鬼選手を閉じ込め、更に押し潰したア!! これは黒鉄選手のジャイアントキリングなるか!?』
「あっちゃあ。紫苑め、してやられたな」

「ああ。いや、これは黒鉄妹が見事だったというべきか」

紫苑を閉じ込めた大量の水、あれがどこから来たものかを理解しているがゆえに新宮寺と西京は唸る。

珠雫が紫苑を包み込んだ水、それは彼女が今まで連発していた技のすべてからかき集めたものである。

紫苑を蜂の巣にしようとした《血風惨雨》も、彼を押し潰そうとした三つの氷の柱も、視界を白で塗りつぶした《白夜結界》も、水分身を用いた特攻も、巨大な氷杭による攻撃も。

そのすべてがこの訓練場を自身の魔力で満たし、あの水の監獄——《青色葬送》を発動させるための布石だった。

無論それらとて必殺の意を込めた、黒鉄珠雫の渾身である。そうでなければ、あの男の命には決して届かないと彼女は理解していたから。

それらで殺しきれれば重畳、届かなければ己の全てを賭けた《黒鬼殺し》の策に利用すれば良い。

そしてこの策の肝要なところは、『紫苑に逃げ込ませる場所を与えなかったこと』だ。

言うまでもないことだが、この《青色葬送》は紫苑の《究極生存本能》に引つかかる。自身の死を嗅ぎ取る、絶対的な嗅覚。それを持ち合わせていても、珠雫に好きなようにしてやられたのは『嗅ぎ取ったところでどうにも出来なかった』ため。

以前の試合で刀華が行った、自身を魔力化させる技でも使用できれば話は別だったのだろうが、紫苑の埒外の強さは所詮、伐刀者でない普通の人間の延長線上にある物ではない。

そんな人間を超越したような真似は不可能。

——どう足掻こうが詰みだ。

「ふう……」

珠雫は荒く息を吐いた。

——ずっと不安だったのだ。自分の考えた彼に勝利するための筋書き。それをどのように破ってくるのか、ずっと警戒し続けていたから。

珠雫も勘違いしがちであるが、連盟が評価した彼女のステータスにある魔力制御Aとは、誇大なしに人類最高峰の魔術師である証なのだ。それは彼女の周囲に強者が多すぎる事が要因のひとつではあるのだが、それはともかくとして。

そんな珠雫が全力で策を張り巡らせ、自身の魔力の存在に気づかれぬようこれでもかと隠蔽し続ければ、紫苑程度が事前に勘づけるわけがないのだ。

それでも彼には《究極生存本能》という反則技^{チート}じみた超直感があるが、それも戦いながら綿密に場を整えて、即座に発動できるようにした珠雫の絶技には追い付けない。

(敗けの目は全部潰した筈……)

《青色葬送》は、KOKランキング二位《カンピオーネ》カルロ・ベルトーニの最大規模にして最強の伐刀絶技《^{アドリアン・ブルー}第八大海》に着想を得た技。そのコンセプトは紫苑のような武術に特化した騎士を完封することである。

最初は氷山に閉じ込めることを考えたが、彼らのような達人という言葉すら不相応な程優れた武術家である者達に、氷という固形を用いることは突破口を与える事と同じ。対して液体であれば彼らの武も役に立たない。

規模や、中で相手に動かれるという脱出のリスクは、押し潰すことで解決した。

——この技は紫苑に刺さる。

まあ紫苑に打ち勝つために編み出した技なのだから当然ではあるのだが。

それでも……珠雫は宙に浮かぶ水の監獄を睨み付ける。紫苑の一挙手一投足、僅な動きも見逃さないように。

「ふう……ふう……」

睨み付ける。《宵時雨》を握る手に力が入った。

(倒れる……！)

懇願する。頼むから倒れてくれ。ここで負けてくれ、と。

その願いが通じたのか——彼の口から気泡が大きく溢れ、そして身体がだらり、と弛緩した。彼の霊装である《亡華》が手から離れる。

彼が意識を失ったことは明白だった。

(……やった、の?)

「黒鉄選手」

レフェリーに声をかけられる。それで我に返った。

彼の言わんとしていることはわかる。『決着が付いたのは明白なのだから、紫苑を解放しろ』と言うことだろう。

それは審判が彼女の勝利を認めたことと同義であり、

「——はい」

心の底から沸き上がる喝采を心に秘め、紫苑を解放する。

——寸前で、珠雫の腹部が大きく切り裂かれた。

「が、ぼっ……」

「馬鹿な……ッ!?!」

珠雫も、審判も眼を見開いた。

珠雫が攻撃された以上、彼女の腹を切り裂いたのは紫苑の攻撃だ。

それは間違いない。

だが紫苑の意識は間違はなく喪失した筈だ。いや、むしろ喪失して

いることが当たり前だった。呼吸など出来る筈もない水中で、なおかつ彼の身体は常に水圧で押し潰されていったのだ。

如何に肺活量が優れているようと、そんな状態では三分も耐えられない。それが当然――。

「馬鹿なっ!?!」

「つビビったあ。んだよ、くーちゃんそんなでけえ声出して」

「百鬼は間違いなく意識を喪失した筈だろう! 何故意識を失った状態で攻撃が出来る!?!」

「ああ、なんだそんな事か……。

まず一個目、『なんで意識がない状態で攻撃できたか』だけど、んなもん決まってんじゃん。『意識を失ってなかったから』だよ」

そう、紫苑は気絶なんてしていなかった。ただ気泡を口から大きく溢し、身体を弛緩させた。つまるところ『意識を失ったフリ』をしただけなのだ。

「そんな真似を……!」

「これだから良い子ちゃんは。これは戦いだぜ? 敵を騙すなんて当然だろ。むしろみすみす騙される方が間抜けなんだよ。

……つーか妹ちゃんが引っ掛かった方が意外だねえ。あの子はそれなりに性格悪イと思ってたんだけど」

けらけらと笑う西京の言葉を聞いて、新宮寺は彼女と初めて会ったときの事を思い出す。

彼女との模擬戦。幻想形態を用いて行われたそれにおいて、西京が自分の舌の一部を噛み千切って、自分の隙を作ったときの事を。

「まあ、くーちゃんからしたら紫苑が騙し討ちするなんて意外だろうけどさ」

「……ああ」

紫苑は敵を騙したりする事は不得意な人間だろうと思っていた。自分の振るう《瀧華一刀流繚乱勢法》に誇りを持ち、それ一本で敵を打ち倒すような、そんな男だと。

「――《瀧華一刀流》に伝わるこんな言葉がある。

『剣が折られれば鞘で。鞘を使えぬなら拳で。拳が碎かれれば脚で。

脚が砕かれれば牙で。牙が折られれば命で』

……まあ要するに『どんな手段を用いても良いから、とにかく敵をぶち殺せ』ってこった。どうだいくーちゃん。騙し討ちなんて平気でやりそうだろう?」

彼女の言葉に頷く。

《瀧華一刀流》は生粋の殺人剣だというのは聞いていたが、まさかここまでとは思っていなかった。

こんな理念を掲げている剣術を学んだ紫苑であれば、敵を騙すなど平気でやるだろう。

「……だが、まだわからんことがある。何故、黒鉄妹は斬られたんだ?

確かに《鳳穿花》など百鬼は遠距離攻撃を使用できるが、それは全て『剣を振るう』という予備動作が必要な筈だ。《青色葬送》で動きを封じられていた百鬼にそんな真似が出来る筈もなければ、仮に出来ていたところでそれを彼女が見逃すとは思えん」

「ああ。そりやそうだろうね。剣を振るったのがそのタイミングならな」

「……?」

「察しが悪いなあ、くーちゃん。《瀧華一刀流繚乱勢法》は《倍化》の異能を組み込んだ剣術だぜ? だったらさあ……切断されるまでの時間を倍化させるなんて、わけねえ事だと思わないかい?」

「……ッ! そうか! 《水牢弾》を風圧で吹き飛ばした、あのときか!」

あれは相手を窒息させる水の球を吹き飛ばすことに重点を置いたからかと思ったが、今考えれば紫苑にしては大人しかった。

あの風は珠雫対策のカモフラージュ。本命は西京が言った遅延姓の斬撃——《狂い裂き》をこのリング上に配置することだったのだ。「百鬼は魔力が十全にあつたとしても、感知するのが困難ほど少ない。しかもそんな奴がまさか遅延姓の斬撃を繰り出せるとはまず思えない……」

「しかもアイツ、『迷彩』もそこそこ出来るからねえ。そりやあ妹ちゃんと比べりや話にもならんけど、端から警戒してない相手の眼を欺く

くらは出来る」

生来の魔力の少なさと紫苑本人が研鑽を続けてきた『迷彩』の技術を以て、珠雫の盲点から斬りかかった——その結果がこれだ。

——そんな二人の言葉は聞こえていないが、珠雫も、審判も、観客の全てが思い知った。

道理だとか、当たり前だとか……そんなものを悉く乗り越えてきたからこそ、彼は《黒鬼》なのだ。

「ぐっ……！」

腹部を押さえながら、珠雫が目線を水の牢獄に向ければそこに紫苑の姿はない。

彼はそのすぐ下にいた。腹部を切り裂かれたことで、圧力が緩んだところを魔力放出によつて脱出。手放した《亡華》を握つて着地したのだ。

彼が大地を蹴る。真っ直ぐにこちらに向かって駆けてくる。それはまさしく疾駆と呼ぶに相応しい速さで。

「黒鉄選手……！」

「止めないでくださいッ!!」

レフェリーストップを入れようとする審判を、珠雫は一喝する。まだ何も終わっていない。激痛が脳をこれでもかと突き刺してくるが、まだ自分の意識はある。自分は戦える。

「《白夜結界》……!!」

再び訓練場が白で満たされる。

腹部の出血は極めて酷いが、それを治療している暇はない。そんなことをしていれば彼に斬られて終わる。

死中にしか活はない。ならば自分は攻める。そして——勝つんだ！

「《血風惨雨》！」

次いで放つは水の弾雨。

雨霰という言葉すら生温い針の群れが襲いかかり、紫苑を突き刺そうとするが——そんなもの彼は意にも介さない。

彼の疾走は止まらない。

(守ってない！ あれもブラフか！)

《白夜結界》は珠雫の魔力によって構成された霧。故に内部の様子など、彼女は目を瞑っていたって理解できる。

その霧が教えてくれているのだ。数分前、彼に全力の防御姿勢を取らせ、歩みを遅くさせた《血風惨雨》が何の役にも立っていないことを。

守る必要などまるでなかったにも関わらず、守ったのは——後の展開を見据えての事だろう。

そして——彼が珠雫の前に姿を現した。

あと五歩もあれば彼は自分の身体を両断できるだろう。しかしそんな局面であつても、珠雫は応手を練り出した。

聳え立つは水の壁。

あらゆる攻撃を遮断する珠雫の防御魔術《障波睡蓮》だ。事ここに至って、珠雫は冷静さを取り戻していた。

幅五メートル、しかも水という超重量の物質。それを突破するなど

「——《瞬菊》」

容易であつた。

紫苑は鞘に閉まつた刃を、渾身の力を以て抜刀。水の城壁を、一部ではあるが消し飛ばした。凄まじい風圧、次いで水が魔力障壁に叩き付けられる。

(突破された……！)

至近距離という事を考慮したとしても、ここまでの威力があるとは思っていなかった。珠雫の思考が硬直する——

「シズク——————ッ!! 頑張つてえええええええ!!」

寸前、唯一無二の友人の声に渴を入れられた。

そうだ、自分には彼がいるのだ。自分の勝利を心から願ってくれる大切な友人が。

ならば——こんなところで負けていられない!

一呼吸の間に壁を突破し、その奥にいた珠雫を両断する——が、そ

こから溢れたのは水だった。

紫苑に特攻を行った物と同様の水分身、それが切断された瞬間爆発した。

霧が一層濃くなる。《障波睡蓮》に用いていた水を流用したのだろう。もはや一メートル先が視認できないどころではない。

紫苑は握っている筈の霊装すら視認できなくなっていた。

(性懲りもなく目眩ましか)

嘆息し、されど警戒は微塵も緩めない。

——背後から珠雫が斬りかかった。

その手に握っている筈の《宵時雨》は日本刀ほどのリーチにまで延びている。

水の魔力を纏わせ、それを超高速で循環、攻撃力を飛躍的に上昇させる伐刀絶技《緋水刃》だ。

《究極生存本能》が作用する。

鉄のような不快な臭いがどこからか香り、次いで自身が水の刃に斬り伏せられる光景を見た。

彼は背後から迫る珠雫に視線を——向けず、前方に剣を振り下ろした。

霧が晴れる。

そこにいたのは身体が《血風惨雨》によって穴だらけになった紫苑と……彼の足元に倒れ、それでもなお足首を掴んでいた黒鉄珠雫であつた。

「——見事」

眼前に倒れる敵に紫苑は称賛の言葉を贈り、リングから去る。

それは世界最弱として生まれながら、その全てを努力で覆す。

それは常軌を逸する鍛練によって、己を死に至らしめる全てを感知する超直感と人を超越した肉体的性能を持つ。

研鑽の果て、彼の振るう全てが天下無双の剣である。

——自身の心を砕きながら最強を目指す、どこにでもいる少年である。

《努力》《魔人》

《黒鬼》《百鬼紫苑》

◆ ◆ ◆

「なん……で……」

——確かに自分は葉を倒した筈だ。

リングの端で、大火傷を負って倒れている葉の身体があることからそれは明らか。

いやそもそも何故彼女は——炎を纏っているのだ？

彼女の能力は《眠り》である。

ならば四方を炎に覆われた状態から逃げることも、分身を作り出すことも不可能。技量云々の問題ではなく、能力の都合上絶対にできない。

「なんで？ ……ああ、その事ですか」

ぱちん、と葉が指を鳴らす。

一体何事だ。背中 of 傷を焼いて止血を済ませたステラはわからなかったが、実況席からは何が起こったのかはつきりとわかった。

『炎です！ 先程ステラ選手の一撃によって倒れ伏した筈の西園寺選手の手が身体が、炎になりました！ ですが先生、西園寺選手の能力は《眠り》だった筈。なんで炎を——』

『……………なるほど、西園寺め。中々の狸だな』

『狸ってどういう事ですか？』

『簡単な話だ』

何故葉が炎を扱えるのか。

その問いに関する答えは解説が言ったように、非常にシンプルだ。

「私の能力が《眠り》だって話。あれ、嘘ですから」

『西園寺葉の能力が《眠り》である』

その前提が間違っているからに他ならない。

『「な……」』

そう彼女は徹底してステラに刷り込んだのだ。

攻撃の際には常に彼女を眠らせる攻撃ばかりを放ち。防御には不向きな能力だからと、ステラの猛攻から脱兎の如く逃げ回り。

そして彼女が必殺の一撃を放ってきたときには、抵抗できずにやられてしまった事を演出した。

全ては背後からの不意打ちを通すために。

「嘘や悪巧みは魔女の本質です。そもそも私は最初に名乗ったでしょう？ わるーい魔女だって。そんな相手の言うことを素直に信じるなんて……貴女は本当に『良い子』ですね？」

くすくすと小鳥が囁くように彼女はステラを笑い、そして人差し指を立てる。

「ではひとつ問題です」

「……問題？」

「ええ。ずばり——私の能力はなんでしょう？」

最初は間違いなく《眠り》だった。

刃が突き刺さってきたところから痛み代わりに、常に自分を眠らせる毒が流れ込んできていたから。

しかし今は《炎》の能力を使っている。自分が斬ったものが《炎》の分身であったこと、彼女が炎を纏っていることからそれは明らか。

自分に悟られずに背後に回り込んだ事だけはパツと思いつかなかったが、甦るのは首を斬り飛ばされた刀華が自身の身体を魔力化し再構成した光景。あれと同様の魔術を用い、並行して迷彩をかけたのなら自分が気付けないことも頷ける。

ならばステラの知識にある中で、該当する能力はひとつしかない。

「——《複写》。あんた《複写使い》でしょう」

「はい。正解です」

ぱちぱち、と葉が拍手をする。

しかし観客の多くはピンと来なかったようで、そんな彼らを代表し、実況が隣の解説役の教師に訊ねる。

『先生、《複写》って具体的にはどんな能力なんですか？』

『概念干渉系に類される能力で、その力は『相手の能力をコピーする』事だ。先程の倒れたと見せかけた西園寺は炎で作り出した分身、背後に回り込んだのは東堂がやってみせた身体を魔力化させる技と同系統の技だろう』

『凄い！ 万能な能力じゃないですか！』

『確かに極めて汎用性に長けた能力だが、無論弱点もある。ひとつは「複数の能力を同時には行使できない」こと。今の西園寺はヴァーミリオンの《炎》をコピーしたが故、《眠り》は使えない。そして逆もまた然りだ。そしてもうひとつ。それは——』

『『どう足掻こうがオリジナルは超えられない』』

なるほど、確かに西園寺葉は極めて優秀な《模写使い》だ。

自分の能力ではない筈の《眠り》を用いてあそこまで自分を追い詰め、そして《模写》して程ない自分の能力を用いて一瞬でブラフから不意打ちまで組み立てるなど、易々とできる事ではない。

しかも刀華ほどの騎士がようやく実用段階に至らせた《雷王天変》と同じ技を使い、けろりとしている事からも魔力制御技術では遠く及ばないと認めざるを得ないだろう。

だが所詮は《模写》。どれほど精巧な模倣品であろうと、それが模倣である以上、絶対にオリジナルは超えられない。

そこに加え、単純な熟練度の差が立ち塞がる。

どれほど完璧に能力を模倣しようと、使いこなせるかはまた別の話。

十年以上もこの能力と人生を共にしてきたステラと、僅か数分前にこの能力を手にした葉。両者を比べれば、葉には本来あるべきである研鑽が圧倒的に足りていない。

故に自分は超えられない。

同じ模倣であろうと、それを自身に合うように最適化し、なおかつ欠点を潰し、昇華させる《模倣剣技》ブレイドステイルとは異なる、ただのコピーであるが故。

「ええ。その通りです。私の能力はただの猿真似。ですが——」
苦笑し、彼女はナイフを天に掲げる。

魔力が集まっていく。そうして作られていくのはステラ・ヴァーミリオンの必殺の模倣。《天壤焼き焦がす竜王の焰》である。

紅蓮の炎が渦をとなり、天へと伸びていく。荒れ狂う炎が剣の形と成って――、

「それが何か？」

「――ッ!!」

『嘘……だろ……?』

『何がオリジナルは超えられない、よ……! あんなのヴァーミリオンさんのやつより遥かに上じゃない……!!』

そうして作り出された《天壤焼き焦がす竜王の焰》は、先程ステラが繰り出した物に比べ、遥かに巨大。刃渡りは――目算300メートルはあるだろうか。幅も比べ物にならない。

ステラの顔に焦燥が浮かぶ。観客達が絶望に吞まれる。

「オリジナルを超えられない事。そして能力に対する理解度と熟練度の差。それこそが《模写使い》の弱点ですが……」

しかしそれだけでは終わらない。

《天壤焼き焦がす竜王の焰》が折り畳まれる。中心に向かって炎が集まっていく。

「自分の事を何も理解していない相手であれば、それらは何も問題にはなりません」

「あなた、何言ってる……!」

「さあ? 何でしょうか？」

「はぐらかしてんじや……」

「ヒントは言いました。あとは自分で辿り着く事です」

そうして完成するのはステラの放つ《天壤焼き焦がす竜王の焰》と同程度の幅とリーチを誇る光の宝剣だ。しかしそこに込められた破壊力と、それが放つ輝きはステラのそれを遥かに上回る。

飄々と笑っていた葉は真っ直ぐステラを見据える。

「あなたには七星剣舞祭に出なければいけない理由があるんでしょう。自分の故郷を守るだけの騎士になりたいんでしょう。こんなところで私なんかには負けられないでしょう」

「……………ッ！」

「ならば絶望してどうするんですか？ 貴女よりも格下の、私の渾身程度に怯んで何を為そうと言うのですか？」

《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオン。約束に、理想に、己が剣に託した誓いに手を届かせたいのであれば。今ここで己の限界を超えて……私に打ち勝ってみせなさい」

「……………ッ！！ 舐めてんじゃないわよおおおおお！！」

好き勝手言わせておけば。

確かに驚きはした。自分よりも遥かに少ない魔力で、あれほどの破壊力を込める技量に感心はした。

だが絶望した？ いつ私が怯んだ？ 誰がそんなくだらない感情を抱いたと言うのだ。

自分で勝手に私の感情を解釈して。上から目線で説教か。私を侮るのもいい加減にしろ。

(ええ、上等よ!!)

たかが己の全力の三倍程度。自分に超えられない筈がない！
炎を収束させる。そうして作り出すは光の剣。

莫大な熱量と破壊力を誇る《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンの必殺の魔剣——！！

「《天壤焼き焦がす竜王の焰》アアアアア——ッツツツ！！！！」

「《天壤焼き焦がす竜王の焰・影打》」

そうして衝突する。吹き荒れるのは熱風。

余波だけで周囲を焼き焦がす魔力が観客席を燃焼させる。そんな規格外の魔力の衝突は——ステラが押し込まれつつあった。

(重い——ッ！)

脚がリングにめり込む。ヒビが入り、それは絶えず広がり続ける。自分の炎と全く同質のそれが自分を焼いていく。

炎を滾らせても滾らせても、彼女のそれに遠く及ばないように思える。こういう言葉を使うのはステラも好みではないが、自分と葉の間には隔絶した才能の差があるというのに。

膝が折れる。

もはや踏ん張ることが精々だ。それでも葉は容赦なく刃を振り下ろす。これで散るならばその程度——そう言わんばかりに。

(……ここに来てからずっとこんなものばっかね)

ヴァーミリオンがどれほど狭い国だったのか重い知らされる日々。日本に来てからわずか2ヶ月と少し。自国をどれほど探してもいかなかった格上の存在に、自分の弱さを痛感させられ続けた。

自分を初めて負かし、そして好きになった男《無冠の剣王》黒鉄一輝。

自分とは正反対で全く才能に恵まれなかった男。

けれど《努力》でその全てを覆し、学園最強に土をつけた剣士《黒鬼》百鬼紫苑。

そして目の前の敵。

自分がこれまでやってきた努力なんて努力ではない、と突きつけられるようだった。世界最高の才能があったからこそギリギリ渡り合えていただけ。それが嫌でもわかってしまう。

(それでもっ！ 私は負けられないんだ——!!!)

「敗けるなステラああああああ——ツツツツ」

——自分の勝利を望んでくれている奴がいるんだから!!

「おおおおああああアアああああアア——ツツ」

吼える。しっかりと大剣を握り締める。 !!!!!!

先程まで押し込まれていたステラが勢いを取り戻し、ふたつの剣は拮抗する。

「ハアアアアアアアアア——!!!」

そして——爆散する。

音が飛んだ。光が飛んだ。

剣の形が綻び、魔力の風となってふたりと観客席を殴り付けた。リングやドームの瓦礫は残らず燃え尽きた。耐えきれずステラは吹き飛ばされるが、リングに大剣を突き立てることでなんとか持ちこたえる。

いつも騒がしい実況の声も聞こえない。

そんな静寂の中でステラは葉を探そうとし——自身の頭蓋に刃が

突き立てられた。

声ですらない、間抜けな声が漏れる。

《クリムゾンバースト紅蓮の破裂》

そんな声と共に微笑む葉の姿を彼女は捉えた。

意識が、頭に突き刺さった霊装と共に爆砕される。

◆◆◆

『あいたた……何がどうなったんでしよう、《天壤焼き焦がす竜王の焰》同士がぶつかった余波であわや大惨事になりかけましたが——』
互いの必殺同士がぶつかった衝撃で、ガラスが吹き飛んだ実況席。そこから這い上がるようにしてマイクを握った実況が、眼下を見下ろす。

人間の感覚を悉く粉碎してみせたのではないかと錯覚させる爆音と爆風、そして閃光。それに蝕まれていた視界が徐々に戻ってくる。
リングの上は凄惨の一言だった。

中心点であるリングはそのほとんどが焼け焦げており、酷いところでは赤く融解してしまっている。

世界最高峰の力同士がぶつかった舞台に、観客達は舌を巻き、そして同時に勝者がどちらであるのかも理解した。

「判定を」

あれだけの惨状に巻き込まれたとは思えない無傷の黒髪の少女は、敗者である赤髪の少女に視線を向けたままレフェリーに判定を促す。

呆然としていたレフェリーがステラの状態を確認すると、頭の上で腕をクロスさせた。

『け、決着うううう！ ステラ選手の必殺と、その模倣である西園寺選手のぶつかり合いを制したのは——西園寺葉選手だああアア!!
ところどころステラ選手が盛り返したところはありましたが、それでも終始圧倒！ 文句のつけようもない！ 《紅蓮の皇女》相手に完全勝利を収めました！

……つと、ここで別の場所で行われていた《黒鬼》百鬼紫苑選手と《深海の魔女》黒鉄珠雲選手の試合の速報が入ってきました！ 結果は……百鬼紫苑選手の勝利！ これまで破竹の勢いで勝ち上がって

きた今年度一年生の首席次席がここで敗退しました……!」

「……良かった」

葉は安堵の息を漏らす。

紫苑が敗けるとは露程も思っていないが、それでも勝ったという報告が聞けると安心する。

それにしても……、

「まさか《眠り》以外を使わされるとは」

葉に勝利のカタルシスめいた物はなかった。

そこにあるのは自戒のみ。

ステラを侮っていたつもりはなかった。

彼女の実力と、この学園に来てからの成長度合い。それらを鑑み、そして『《眠り》』のみで仕留められる』と判断した。

そしてこれでもかと霊装を叩き込み、《眠り》を流し込み、ステラに対する最適解を選び続け、彼女を追い詰めたつもりだった。それでも耐えきれられ、自分の手の内を曝してしまったのは……彼女が自分の想定を上回っていたからに他ならない。

それも——彼女の本当の能力を考えれば当然とも言えるのだが。

「私も見えないですね」

その結果、自分の能力をこんなに早い段階から露呈させてしまった。この手札を切るのは一輝級の騎士に当たったときだろうと思っていたのに。

しかし、眠れる竜を叩き起こすには自分では足りないか。勝算は——自分の《天壤焼き焦がす竜王の焰・影打》を相殺してみせた事からも可能かと思っただが。

やはりこういう荒療治めいたことは自分には向いていない。

ならば人間に任せることにしよう。

さて——やってしまった事はしようがない。

反省の時間はここでおしまいだ。

「私は私にやれることをしないと」

勝者である少女は担架で運ばれていく敗者を尻目に、リングを去っていった。

第16話

「——ツッ!!」

目を覚ましたステラは勢いよく起き上がった。それはひとえに意識を失つてもなお、闘志を燃やし続けた証だろう。

しかし視界に入ってきたのはすり鉢状の観客席でも、対戦相手だった少女の姿でもない。真つ白な天井に簡素な、けれど清潔に整えられたベッドと……パイプ椅子に座った恋人にして好敵手——黒鉄一輝の姿。

「良かった。ステラ、身体に違和感はないかい？」

「ちよつと気怠いけど……大丈夫。ここは？」

「医務室だよ。あの後、すぐに運び込まれたんだ」

言われて見てみれば自分が今着ているのは制服ではなく、薄い水色の病衣である。全身に負った傷を焼いて出血を止めていたから、包帯のひとつでも巻かれているかと思つたが……IPS再生槽に入れられたからか、傷跡ひとつ見当たらない。

けれど頭が鈍く痛んでいる。思わず頭を抑えた。

そこで思い出す。

自分と栞の《カルサリテイオ・サラマンドラ天壤焼き焦がす竜王の焰》がぶつかつて、相殺され、視界が白で埋め尽くされた時、自分の頭に刃が突き立てられたことを。

「そっか……アタシ、敗けたんだ」

噛み締めるように呟かれたその言葉に、一輝は何も返さない。何も返すことができなかつた。その態度が、何よりも雄弁に自分が敗けてしまったことを語っていた。

「そっか、シズクは？」

「……敗けたよ。今はアリスがついている筈だ」

「そっか……」

自分と同時刻に行われた、もう一人の最強との戦い。

試合の間はずつと自分の事を考えてばかりだったが、終わればそちらに意識が向いた。

そっか……彼女も敗けてしまったか……。

「——途中で百鬼くんに会ったときに教えて貰った。お前の妹は最後まで俺に勝つために全力を尽くしてきたって。敗けてもなお、彼の足首を掴んでいたそうさ。……目が覚めたら『見事だった』と伝えろ、とも言われたな」

「……アイツらしいわね」

どこまでも勝ちに貪欲で、自分の愛する兄に並び立とうと必死に努力する姿。たとえ及ばなかったとしても、それでも足掻き続ける彼女の姿が目には浮かぶようだ。

「ねえ、イツキ……アタシの話、聞いてくれる？」

「……うん」

ふう、と大きく息を吐いた。少しでも落ち着いて話せるように。胸に手を置いて、鼓動を確かめる。それは内に秘めた激情が暴れまわるように激しくなっていた。

そんな時だ。優しく、背後に手を回される。何をされたのか一瞬わからなかったが……抱き締められているのだと、すぐに気づいた。

「イツキ……？」

「……僕は今のステラになんて言ったら良いのかわからない。だからせめて何かしようと思って……駄目だった？」

「ううん……ありがと……」

自分のそれとは違う、男性らしいがっしりとした身体。それに包まれていると、暴れていた鼓動が落ち着いたものになっていく気がした。

滔々と言葉が溢れ出る。

「——完敗だった」

「……」

「アタシはアイツの掌の上で踊らされていた。追い詰めたってアタシが思ったのも、全部シオリが演技してただけだった。……アイツは全然本気で戦ってなかった……！」

今になれば、栞がああ試合の中で何を考えていたのかわかる。

彼女が考えていたのはどうやってステラに勝利するかではなく、どれほど手の内を曝さずにステラに勝利するかであったと。

そして葉が本気でステラに勝とうとしていたら——最初からステラの《炎》を《複写》していたら、自分は一分として立っていられなかっただろう。

無論、それはただの推測でしかない。葉は最初、《眠り》で戦ってきたのだから。仮定の話など無意味だとわかっている、

しかしその時でさえステラは一方的に攻撃され続けてきた（ステラが攻勢に出た場面もあったが、それは全て葉がそうなるように仕向けたものだろう）。

それほどもまでの実力の差が彼女と自分の間にはあったのだ。

「最後の《天壤焼き焦がす竜王の焰》もそう。アイツは渾身だって言っただけど……あれも嘘よ。そう言えばアタシが全力で技を振るってくるって確信してたから、そう言っただけ。……アイツには余裕だった。余裕で、アタシの全力を軽く受けきった！」

だから《天壤焼き焦がす竜王の焰》が相殺された後もすぐに動いて、自分の脳天に刃を突き立てられたのだ。

あの光の剣で仕留めきれれば重畳、仕留めきれなければ別の手段で倒せば良いとでも考えていたのか……いや、彼女の事だ。あの一撃さえも、後の攻撃を確実に通すための布石だったのかもしれない。

……いや、それだけであればここまで怒りは湧いてこなかった。ステラにとつて許せないこと、それは——

「最後アイツは幻想形態カク引キしたのツ！ 信じられる!? 戦いの場で、アタシは手加減されたの！」

幻想形態。肉体的ダメージを負わず、体力を削ぎ落とす事を目的とする、霊装の展開方法のひとつだ。

その意図は——『お前なんてこの程度で充分だろう?』という侮蔑。……実際には『IPS再生槽を用いても治癒できるかわからない傷を負わせるわけにはいかなかった』という、良識ある人間ならば取つて然るべき行動なのだが。

というよりも確実に勝利するためにと首を飛ばしたり、身体を一刀両断している紫苑の方が人としては異常である。

けれどその良識ある行動が、ステラは自身を侮辱したと感じた。仮

に紫苑も同じ事をやられれば悔るな、と激昂したことだろう。

だが、それも当然なのだ。

彼らは戦士であり、栞は戦士ではないのだから。

そもその価値観が根本的に異なる。

故に栞からすれば当たり前前の行動が、彼女にとっては当たり前ではなくなってしまうのだ。

そして何よりも――、

「ごめん……イツキ……！ アタシ、約束守れなかった……！」

譲れなかつた想いがあつた。叶えたい夢があつた。

それは少女にとって一番大切な約束。自分が憧れ、愛する男との再戦の誓い。

彼女が自分との戦いに対して本気で挑んでこなかつたよりも。自分を掌の上で転がし、なおかつ決して壊さないようにと丁重に扱われ、敗北を喫した事よりも。

それがただ、悔しくて。申し訳なくて。

——このまま選抜戦が進めば、七星剣舞祭の選手は、選抜戦内で無敗を守つた選手になるだろう。

それは選抜戦を戦う者達の共通認識だった。

だから自分は絶対に勝たなければならなかつたのに。一度負ければ、その全てが自分の掌から溢れ落ちてしまうと理解していたのに。

……自分は、取りこぼしてしまった。

一度堰が破れてしまえば、もう止められない。

彼女に良いようにやられてしまった非力さが、ただただ憎い。自分のこれまでの研鑽に対する後悔が胸を苛む。

言葉にできない悔しさが、申し訳なきが、嗚咽となって溢れ出た。

一輝の顔に顔を埋め、しがみつく。

——本当はこんな姿自分にだって見せたくはないのだろう、と一輝は思う。彼女は《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンという理想で在り続けようとしているから。

それでも彼女が弱いところを見せられる相手なんて、恋人である自分を置いて他ならないと一輝はわかっているからこそ。

胸に爪が立てられ、食い込むほどの力であつたが彼は抱擁を緩めなかつた。

◆◆◆
夜も更け、太陽の代わりに月が道を照らす頃。

一時の休息と、コンビニへ買い物に出かけた栞の生徒手帳が震えた。誰だろうか、と鞆から取り出して見てみれば、ここ数日はろくに話せていない彼女のルームメイトからだつた。

「もしもし、西園寺ですけど」

『俺だ。……今、良かったか？ 都合が悪いならかけ直すぞ』

「大丈夫ですよ。一息いれようと思つてたので、丁度良かったです。どうかしましたか？」

ルームメイト——紫苑から自分に連絡が来るなど珍しい事があつたものだと、用件を聞くと新宮寺からの頼み事だつた。

毎年、破軍学園が合宿に使用している海水浴場に怪物が出現するという噂が流れている。現状、被害などは報告されていないが、懸念事項は残したくないため生徒会に調査を依頼したものの、海の中まで調査するとなると些か人手が足りない。

なので戦力面及び索敵の人手として、自分と紫苑の力を貸してくれないか、との事だつた。

『俺としては理事長に無理な編入を受け入れて貰つた恩義もあるから、協力したいとは言つたが……お前は今のところ忙しいだろう？』

だからお前に関しては返事を保留にしてある。勿論、忙しかったら断つてもらつて良い。恩義がある云々は俺の都合でしかないからな』

「なるほど……」

想像してみる。

海水浴場と言つていたから、自分も紫苑も水着だろう。

常に二人きりというわけには無論いかなだろうが、自分が早々に怪物を見つけ出すなりしてさっさと仕事を終わらせれば、時間を捻出できる。

紫苑と海辺でふたりきり……なら一緒に遊べたりもするのだろうか。紫苑は負けず嫌いな性格だし、勝ち負けがつくゲームでもすれば

意外と乗り気になってくれるかも……。

問題は彼の本気に自分がついていけるかだが、まあそれはともかくとして。

（——良いですね）

新宮寺にとつて予想外な事があつたとするならば、西京が言つていたラブロマンスに対して、その栞が意外と乗り気であつたという事だろう。

紫苑と知り合つて早二ヶ月。西園寺栞は自分が紫苑に抱いている気持ちを自覚していた。そして著しくアホになっていた。

恋は人を馬鹿にすることはあつても、賢くすることはないのだという言葉に今でなら栞は共感できる。

「確か次週の末でしたか？」

『ああ。ただ色々準備があるから、今週の金曜までに返答をくれるとありがたい、だそうだ』

「となると猶予は今日含め三日……」

現在、栞が抱えている問題を脳内で列挙し、それらの解決をシミュレート。自分が最善の動きで、それも全力で動いた場合かかる時間は……、

「なんとか間に合いそう……ですかね？」

『……大丈夫なのか？ 都合が悪かつたら別に断つても……』

「いえ、間に合いません」

確固たる決意で紫苑に答える。

解決すべき問題は山積みだ。

そもそも現在、栞が抱えている問題は極めて大きいもの。解決に取りかかつて既に五日が経過しており、栞としては解決できるのは次週末ほどだろうと考えていた。

このまま行くと間に合わない。

自分達の準備も整え、尚且つ思わぬアクシデントが発生したときに備えて、数日は問題の対処に回すための予備日が欲しい。生徒会から引き受けた仕事に連絡が来ないようにするためには、その条件は必須である。

改めて考えてみて、無謀だと思う。

……だがそんな事知ったことではない。

紫苑と海。バーベキューに花火にエトセトラ……。

これまで青春とは無縁な生活を送ってきた栞であっても、そういった事に憧れはある。それも好きな男と一緒にそういつたことができるのであれば尚更だ。

そんな楽しい時を過ごせるのならば、多少の無茶は承知の上。解決できるか、できないかではない。

やるのだ。

「すみません、紫苑さん。学園の方には三日ほどお休みするという連絡を入れておいて貰えますか？——本気で終わらせますから」

『わ、わかった……確かに伝える。後——』

「……？ どうしましたか？」

用件はこれで終わりだろう、と判断し、電話を切ろうとしたとき紫苑が続ける。なんだろうか、と続きを待っていると。

『ヴァーミリオンに勝ったって聞いた。……おめでどう、で良いのか？』

「……ありがとうございます。紫苑さんも珠雫さんに勝ったって聞きました。お互い、このまま勝ち続けましょうね」

『ああ。……悪い引き留めて。それだけだ』

「いえ、嬉しかったです。それじゃあ改めて……おやすみなさい、紫苑さん」

言い、電話を切る。

時間にしてはごく短い時間、コンビニから現在泊まっている宿泊施設に帰るまで話せただけ。

それでも栞の心は天にも昇らんとしていた。栞を少しでも知っている人間がこの場にいたら『誰だお前？』と言っていたに違いない。それほどまでに彼女は浮かれていた。

普段は冷静な栞が、自然と笑みを溢し、鼻唄まで歌うほどののだから。

「さっさと終わらせて、紫苑さんと海……」

少女の顔が微かに緩む。

非常に多才で、優秀で、数時間前には《紅蓮の皇女》をいとも容易く打ち砕き、彼女の夢を閉ざした少女は。

今はただの恋する乙女でしかなかった。

——なおこの数分後に、同じ施設内にいた知り合いに「ご機嫌ですけど、何かあったんですか？」と問われ、自分の有頂天具合を猛省するのはまた別の話である。

第17話

燦燦と照り付ける太陽、白い砂浜。そして青い海。

梅雨の不快さはどこへやら。本日は絶好の海水浴日和であった。週末という事もあつてカップルや、家族連れなど様々な者達が思い思いに今日という日を満喫しようとしており、また別のところでは海の家従業員が客の書き入れ時だと声を張り上げている。

そして……、

「海だ——————！！！！」

ここにもそんな人間が一人。！！！！

元服を迎え、三年が経った男性だとはとても思えない小柄な体軀に、くすんだ銀色の癖毛。普段は光を映さない金色の瞳は彼のテンションの高さからか、少し輝いているように見える。

襖泡沫。破軍学園において、副会長を務める男である。

さて、そんな男が今にも海に飛び込んでいこうとする中……彼と一緒に海に来た二人の男と言えは……

「……そんなに適当でいいのか」

「うん。むしろ、ちょっと雑に具材を切つてある方がバーベキューでは好まれるから」

「そういうものなのか？」

「こういったものって大事なのは空気感だから。みんなが楽しんでやるのが一番の調味料になるんだよ。……なんて、これはただの受け売りだけだね」

「それでも俺よりは詳しいだろう。……火はこんな感じか？」

「良い感じだね。上手いじゃないか、百鬼くん。本当に初めてなのかい？」

「西園寺に多少コツを教えてもらった程度だ」

「ああ、なるほど。確かに彼女博識だし、教え上手そうだもんね」

「事実上手かったからな」

海には目もくれず、お互いに会話を言いながらも手際よくバーベキューの準備を整えていた。

木炭をバーベキューセットに放り込み、うちわで扇いでいるのは口々に手入れがされていかないだろう、骨のようにくすんだ白髪に赤と黒のオッドアイを持つ小柄な男——百鬼紫苑。

白と青のシンプルなデザインの水着に上半身は同じく白のラツシユパーカーを羽織っている。日焼け対策というよりは、彼の全身に刻まれている凄惨な傷跡を隠すためのそれであるため、これまたシンプルな物。

対して折り畳み可能なデスクの上で具材を切っているのは、黒髪の優男——黒鉄一輝。紫苑よりも多少長身な彼が着ているのは、黒のトランクスタイプの水着である。何かあった時に必要か、と思い適当に購入したため飾りつ気のないシンプルな物だ。

そもそも男性の水着に洒落つ気を要求するのはいかなものか、と彼個人は思っているのだが。

そんな、真面目に昼食の準備をしているふたりを泡沫は一喝する。

「ちよつと二人とも！ せっかく海に遊び来てるんだぜ？ もつと騒げよ！ 楽しそうにしろよ！ 夏を満喫しようって気はないのかよ！？」

「ない」

「そもそも僕達、仕事でここに来てるんですよ……？」

そう、海水浴などに微塵も興味も示しそうにない（実際に興味はない）紫苑が何故、海水浴場などという彼とは真逆の人間しかいなさそうな場所に居るのか。それはこの施設が破軍学園の合宿施設であり、ここに『怪物が出現する』という噂が流れているため、その真偽を確かめるべく調査に来ているのだ。

メンバーはこの調査を破軍学園理事長・新宮寺黒乃から直接頼まれた破軍学園生徒会メンバー、そこに加わった紫苑と一輝、そしてあと三人の女生徒。

計八人で調査に来ており、生徒会メンバーの碎城雷と貴徳原カナタがこの施設の管理人に話を聞きに行っており、残る女性陣は皆更衣室で着替えを行っている。

そして着替え終わるのが女性陣に比べ、遥かに早いだろう男性陣が

昼食の準備をしようという話になったのだが——約一名、堂々とサボっている人間がいた。

「そりやそうだけどき。それでも夏の魔力ってやつは、人のテンションを爆上げするのに一役買ってんのさ！ だから仕方ない!!」

何故泡沫のテンションがここまで高いのか。それは——『夏だから』である。その一言だけで全てが片付き、どれだけテンションを上げて馬鹿騒ぎしてもその一言が免罪符となりうる。

ブレーキなんて不要。恥なんて学園に置いてきた。水着こそが我らの勝負服。俺が見るのは前だけで良い。

そんな陽気な人間特有の理論は、目の前の男達には通じなかったよ。うで。

「馬鹿なんじゃないのか」

「なんで外野の僕達の方が真面目に仕事やってるんだろうね……」

「この堅物共！ こーんなにも水着のお姉さん方が僕達を待っているのに、行かねえなんてよー！ ふたりとも男だって言うんならそういうのに興味があつて然るべきだろ!!」

「知らん」

「あ、はは……」

自分達が堅物なのではなくて、泡沫がそういう事に関して興味を示しすぎなのではないかと思うも、一輝に出来ることは笑うくらいだ。確かに紫苑は現代では珍しいくらいに硬派……というか、そういうことを全部切り捨ててきたから知らないだけだとは思うが。

「あーあー！ ふたりなんて知ったこつちやねえよ！ 僕は水着のお姉さんに『ぼく、どこから来たのー？ 可愛いねー』ってちやほやされてくるから！ 羨ましがんじゃねえぞ!!」

「お前が別に何をしようが構わんが、ちゃんと怪物についての情報も仕入れてこい」

「かー！ この堅物！ 仕事人間!! 良いよ、行ってきてやるよ！ 待ってるよお姉さん!!」

そう吐き捨て、水着を纏った女性客の元に走り出そうとした泡沫だったが「あ」という紫苑と一輝の声が、その声がまるで鎖のよう

に絡み付き、彼の足を止めた。

まるで出来の悪い機械仕掛けの人形のように背後を振り替えれば

「うたくん……？ 後輩二人に仕事を任せてナンパに行こうなんて……随分と良いご身分ですね……？」

そこには笑顔の——けれど激怒していると一目でわかる、破軍学園生徒会長の東堂刀華がそこにはいた。

「待って刀華！ 違うんだ、僕の話聞いてくれ!! 僕は情報収集の一貫として——」

「問答無用！」

「イヤアアアアアアアアア!!」

彼女は瞬時に距離を詰めて、泡沫を抱き抱え、芸術的な手首のスナップで彼の尻をひっぱたく。

「あはは……」

それを見て苦笑するのは、ラッシュスーパーカーで身体を覆い隠した西園寺葉。そしてその背後からは黒鉄珠雫。少し遅れて——荒い息を吐くステラ・ヴァーミリオンと彼女に引きずられるようにして兎丸恋々が現れた。

時間は少し遡って女子更衣室。

その空気は——お世辞にも良くはなかった。その原因（といって良いのかは不明であるが）は……ステラ・ヴァーミリオンである。

水着に着替えながらも、その視線は西園寺葉に向かう。

どうして自分を負かした相手と海水浴になど来ているのか。

それは——自分達が怪物調査に協力すると決めてから、更に助っ人として百鬼紫苑と西園寺葉が生徒会室にやってきたからである。

新宮寺から『助っ人はこちらの方二名確保できた』と言われていたから、都合が悪かったら断っても良いと刀華には言われた。

しかしステラは怪物調査という言葉に惹かれ、ステラと珠雫兩名は一輝と海水浴という私利私欲で、そして一輝は選抜戦で恩恵に預かった身だから協力したい、と言うことで助っ人として参加することが決

まった。

その直後に紫苑と栞がやってきたので、その時の空気は……言わずもがなだろう。

最終的には紫苑の『助っ人なんて多ければ多い方がいい』という言葉と、自分達が舌の濁かない内に『自分を負かした相手と顔を合わせるのが気まずいので、この話はやっぱりなしにしてください』なんて言うのは違うだろう、という事でそのまま参加することになったのだが……。

「…………… どうしました、ステラさん？」

「いや、別になんでもない……」

「そうですか。……それにしても、こういう言い方をすると品がないですが……凄いですね、ステラさん。あれだけ食べてもこのスタイルとか……詐欺ですか？」

「詐欺じゃないわよっ！」

思わず突っ込んでしまう。先程まで感じていたシリアスな空気感を返して欲しい。

「なんか体質みたいなものよ。どれだけ食べても脂肪は胸に行くの！」

「なんですかその反則体質。女性の敵ですよ？」

「私に言われたってどうしようもないでしょ!？」

ステラのスタイルは同性の栞から見てもひどく魅力的だ。

日本人の平均サイズを遥かに上回る、丘というよりは山と形容すべき大きな胸。引き締まった腹部は獣のようになやかで、狩猟民族特有のつん、と跳ね上がったヒップもこれまた大きく、男性からすればひどく魅力的に映るだろう。

戦闘での強さは自分が上だが、これに関しては完敗と言わざるを得ない。というか脂肪が全部胸に行くなんてどういう体質なんだ。

ステラの能力の事を考慮にいれても、摂取カロリーの消化はそれであら納得が出来るが、脂肪が全部胸に行くのは本当にわからない。

自分の日頃の努力を全否定された気がする、なんて思いながら着替える栞に背後から刺客が迫る——！

「しつおりちゃん!!」

その刺客とは兎丸恋々。

ここにいるメンバー全員がやっている日差し対策など知ったことではない、むしろ日焼け上等! という姿勢の彼女が葉の胸を揉みしだかんとするが——その手は届くことはなかった。

兎丸の身体が細い糸のようなもので、全身を拘束されたからである。

「うっそこれ魔力の糸!? いつの間に作ったの!?!」

「私の名前を呼んでからですよ。この程度、なんて事ないので」

「……珠雫さん、あなたは西園寺さんと同じ魔力制御Aですけど、同じこと出来ます?」

「出来るわけではないです。あの人本当に規格外ですよ」

「知ってました。紫苑さんのルームメイトなだけありますね……」

そう言い、一歩引いたところから兎丸と葉、そしてステラを見るのは黒鉄珠雫と東堂刀華。

彼女らはあんな騒ぎに巻き込まれてはたまったものではないと、そそくさと着替えを進める。

「はあ……それで兎丸さんは私に何をしよう?」

「いや、葉ちゃんもいい胸してるからちよつくら揉ませていただくか?」

「そんな気軽に揉まれたくないんですけど……」

「いいじゃん減るもんじゃないし。ステラちゃんみたいにドーン!

って感じのも良いんだけど葉ちゃんみたいなのも良いよねえ」

ステラになんだかんだ言っていた葉であるが、それでも日本人として平均サイズ、あるいは少し小さめかという兎丸に比べれば大きい。括れも勿論、ヒップも大きく、胸や尻の大きさはステラに及ばないながらも、彼女は全体のバランスが取れている。

どこか芸術品めいたものを感じさせる美しさだ、と兎丸は言う。

複雑な気分ではあるが、まあ褒められているのだから良しとしよう、と葉は兎丸を縛っていた糸を解く。無論警戒するのは忘れないが。

「ほら、馬鹿なことしてないで行きますよ。あまり紫苑さん達を待たせるのは忍びないですから」

「はーい。あ、でもちよつと待って。ステラちゃんの胸揉んでから行くから」

「は!?! ちょっと助けなさいよシオリ! つてもういないし! 嘘、トーカさんとシズクは……! いない!」

「へっへっへ……もう逃げ場はないぞおステラちゃん……スケベしようや……」

「アイツこうなるって予想して……! あの性悪女ア!!」

……そんな声を背後に聞きながら、栞は先に更衣室から出ていた刀華と珠雫に合流した。

「……良かったんですか? 逃げてきて。しかもあんなことまで言われてますけど」

「性格が悪いことは自覚してますので。伊達に悪い魔女を自称している訳じゃないんですよ?」

背後から聞こえてくる罵声を聞いてくすくすと笑う栞を見て、この人も大概だなど刀華と珠雫は思う。

「それに、あれくらい油を注ぎ込めば、炎のようなあの人は燃え盛ってくれるでしょう? あの人にはもつと強くなっていたただかなくてはならないので」

自分が燃料を放り込めるのならばいくらでも放り込んでやりましょよ、と笑う栞に珠雫は聞く。

「西園寺さんはあの人に強くなつて欲しいんですか?」

「ええ」

「それは何故です? 将来のライバルが増えるかもしれないのに」

「強い伐刀者が一人でも多くいたらいざというときに役に立つじゃないですか。それも強ければ強いほど。」

それに……これを言うとは侮辱と取られるかもしれませんが、私個人としては強さも七星の頂も微塵も興味ありません」

だからステラとの試合の時に『私個人としては勝ちを譲りたい気持ちがある』と言った。それを刀華は試合を直接見ていたので知ってい

だが、同時刻に紫苑と試合を行っていた珠雫には驚愕に値することだった。

ステラと栞の試合の映像は見たが、彼女の強さは『強さに興味なんてない』と言う人間が身に付けられる物ではなかった。

願いがそのまま強さに直結するなんて事は思わないが、それでも『故郷を守りたい』という願いを掲げるステラとのモチベーションの差は隔絶したものだ。にも関わらず、彼女は終始ステラを圧倒したのだから。

「なら、なんでそこまで強いんですか……？」

「そうですね……。珠雫さん、今から言う事は貴女にとって、そして東堂さんにとっても不快なことかもしれません。それでも構いませんか？」

珠雫は刀華に視線をやると、刀華も頷く。

——百鬼紫苑は過去の悲惨な事故によって、強さに執着するようになった。その執着はもはや呪いと言って然るべきもの。その甲斐あつて彼は世界最弱の伐刀者として生まれながら、今や七星剣舞祭の出場は硬いだろう。

そして彼に匹敵すると破軍学園の教師陣に判断された、栞の強さの根元。それが彼女達も気になるのだ。自分が不快になるかもしれない、なんて事は考えるまでもなかった。

「一言で言ってしまうえば——恵まれたからです。才能も、環境も、何もかもが」

「……っ」

残酷極まりない現実を、ふたりに突きつけた。

「私は幼い頃から要領が極めて良かった。他人が十の努力で行えることは大抵、一の労力で物にしました。料理も戦闘技術も、何もかも。そして私は『強者たれ』と周囲から期待されました。そのために自分に用意できるものはなんでも用意するから、強くなってくれ、と。」

私も周囲の期待に応えたいと思い、強くなるための努力を始めました。そして《模写》という能力の特性上、自分が強くなるために必要なことはあらゆる伐刀者の技を知ることでした。なので『様々な伐刀

者の技を学びたい』と頼み込み、古今東西あらゆる伐刀者の技をこの目で見て、体験し、学習し、模倣し、会得し、そして昇華させました。

そうする事が出来たのは、先も言いましたが周囲の人が自分に期待し、強くなれる環境を用意してくれたこと。そして、周囲の人が期待してくれるほどの才能が自分にあつたことです。……これを恵まれていると言わずになんと言うのでしょうか？」

そう葉はなんでもないことのように言うが、あの強さは才能だけで身に付くものではない。要領がいくら良いと言つても限度があるだろう。

刀華も珠雫も自分には才能があり、そして周囲にも（珠雫も認めるのは癪だが、自分が強くなれるというところだけに着目するならば）恵まれているのは認めるところ。

それでも自分と同じくらい恵まれていながら、強者になれなかった者も当然知っている。

刀華が尋ねる。

「辛くはなかったんですか？　周囲から期待されるということは」

周囲から期待されている、と彼女は言った。

期待と言うとポジティブなイメージだろうが、それは言い換えれば周囲からの重圧ということでもある。期待を裏切れば、失望される可能性だつて同時に秘めていた。

自分だつてスランプに陥り、ナイーブになつたときには周囲からの期待を重苦しいと思つてしまう事もある。

そんな時はなかったのか、と。

「なかった、と言うと嘘になります。しかし……それ以上に私は期待に応えたかつた。それに何か一つの事を成功させると、周りは自分よりも遥かに喜んでくれるんです。私が初めて模擬戦で勝つたときなんて、それはもう酷くて、『葉が初めて勝てたお祝いだー！』つて一晩中大騒ぎですよ。

皆いっぱいプレゼントとかくれたり、父は自分の仕事だつて忙しいはずなのに、意地で一日仕事を空けて遊園地に連れていってくれました。無理しなくて良い、忙しいんだから自分の事を優先して良いって

言ったのに。『娘と一緒に遊びに行きたいっていう、私の我が儘だよ』
なんて言って連れ出してくれました」

「……愛されてるんですね」

「はい。それはもう」

栞は苦笑する。

自分には勿体ないほど、自分の周りには良い人ばかりが集まっている。

「だから私は愛してもらった分、彼らが喜ぶことをしたい。そうするにはどうしたら良いかが——」

「……強くなることだった、と」

「そういうことですね。七星剣舞祭で優勝することも、彼らが喜んでくれるだろうからです。だから私個人としてはそこまで拘りがあるわけではないんですよ」

栞にとって重要なのは、周囲の人間が喜ぶこと。そのひとつが七星剣舞祭で優勝することだ、と栞は言う。

「でも今はそれ以上にしたいことが出来ましたしね」

「それって……？」

「それは内緒です。……さて、顔まで赤くなった《紅蓮の皇女》様に追いかけられる前に紫苑さんのところに行きませんか？ 流石にあの方と単純なフィジカル勝負をするのは御免被りたいので」

歩きながらとは言え少し長話をしすぎてしまった。今頃ステラは兎丸の猛攻——と言って良いのかは疑問が残るけれど——を突破し、自分を追いかけてきている頃だろう。

それより先に紫苑達の——正確に言えば一輝のところに行つて、あの暴れまわるドラゴンに首輪をつけたいところである。

そう悪戯つ子のように笑う栞を見て、珠雫は、

(もしかしてこの人と自分は仲良くなれるのでは?)

なんて思ったのはまた別の話である。

そして場面は刀華が泡沫に激怒した場面に戻ってくる。

第18話

「随分と遅かったな」

「乙女には色々と準備があるんですよ。日焼け止め対策とかまあ色々。……まあ約一名ほど全く気にしてない方もいますけど」

そう言い、葉は兎丸に視線を向ける。ついでにステラに視線が向かい、そして紫苑へと向かう。

——言わずもなだだろうが、ここにいる女性陣は全員容姿が極めて良い。スタイル云々は……まあ、それぞれの好みもあるだろうし、言わないとしてそれでも魅力的である事には変わらない。

中でも暴力的なスタイルをしているのが、後ろからやって来たステラ・ヴァーミリオンである。彼女の身体つきは男性の理想を詰めたものと言って良いだろう。

やはり国民性の違いだろうか。彼女の選んだ水着は露出度の極めて多い紐ビキニ。布面積が少ないせいか、それとも彼女の圧倒的物量を誇る胸部装甲のせいか、それは歩く度にたゆんたゆんと揺れている。

彼女は歩く度に男性の視線を釘付けにし、それは彼女や家庭を持っている男性すら関係ない。恋人達にひっぱたかれるまで、彼らの視線を縛り付けた彼女の肢体は、ただそこに在るだけで人を魅了する至高の美である。

あらゆる視線を纏いながら、砂浜という水着姿の戦場に魔性がエントリーした。

「おお……」

その姿にステラの水着姿を初めて見る泡沫は勿論、一度綾瀬との鍛練で以前に同じ姿を見たはずの一輝も息を飲む。

真夏の海が放つ魔力が、さらに彼女を美しく見せていた。

同姓の葉ですら彼女の水着姿は非常に魅力的に映るのだ。それに紫苑だって、そういう事に疎いとは言え一人の男性だ。彼女に視線を引き付けられるのは仕方ない——そう思いながら、視線をやったのだ……その視線はずっと葉に向けられたままだった。

「……？ あ、火起こすの下手だったか？ 悪い、これでも本とお前から教えてもらった事を参考に、それなりに頑張ったつもりだったんだが」

「い、いえ。とても上手だと思いますよ。初めてだとは思えないくらい」

首を傾げられ、言われるのは的外れな事。

本当に本に書いてあることをそのまま真似たのだろうという、素晴らしい手並みである。

いや、そうではない。

「他の方の水着姿を見て、どう思われました？」

「……？ 『水着だ』？」

「……それだけですか？」

「それ以外にどんな感想持てば良いんだよ……？」

さっぱりわからん、と言う紫苑に外野（主に女性陣）が集まる。ついでに言うとう泡沫はお尻ペンペンの刑から解放され、女性陣の会話に混ざった。

「あれ本気で言ってるんですか？ あそこまで興味持たれないとっそ清々しいくらいなんですけど」

「アタシも本当に見向きもされないとは思わなかったわ……なんか屈辱的……」

「百鬼くんもしかして枯れてるんじゃないの？」

「うたくん今日お肉抜きにしましょうか」

「なんで!？」

「というか栞ちゃんは脱がないの？ 私達全員脱いでるけど」

上から淡い水色のワンピースタイプの水着を纏った珠雫、ステラ、最低な事を言った泡沫に、それを戒めるように言ったのはタンキニタイプの水着を着た刀華。そして『自分達も水着見せてるんだから、お前もさっさと脱げ』と言ったのは競泳水着を着た兎丸である。

「やっぱり脱がないと駄目ですよね？」

「遅いか早いかの違いでしょ。それにステラちゃんと海に来てる時点で、見比べられるのは覚悟の上よ、皆」

「まあそれは確かに……」

加えて栞は珠雫の《水》を模倣し、海中の調査を行うことが事前の話し合いで決定されている以上いつか脱がなければならぬのは事実。

それなら早々に脱いだ方がメンタル的に楽かもしれない。そう思い、ラッシュユパーカーのフアスナーを下ろす。

——紫苑は自分が先程言った、『水着なんて水着だ、以外の感想なんてどう持てば良いんだ』という言葉が綺麗に吹き飛ばされた。

最初に『綺麗だ』と思った。

栞が選んだ水着は黒のモノキニ。露出度などはステラのそれとは比べるまでもなく少ないが——シースルー部分が極めて多いデザインだった。

なので実際に肌が見える面積は、一般的なビキニとそう変わらないほどだろう。ステラほどでないにしろ豊満な胸が作った谷間も、日頃の努力の賜物だろう引き締まった腹部もシースルー部分に覆われている。露出度は前述したようにステラのそれとは大差があるのだが、布に覆われているのに透けているというその事実が官能を匂わせる。

そして彼女の上半身が粗方黒に覆われているからこそ、目映い肌色の脚が引き立てられ、すらっと伸びた脚は健康美と呼ぶに相応しい。

「ええっと……どうでしょうか……？」

「ああ……えっとだな……」

「……なんつーかエロ——へぶらっ！」

下衆な感想を口走った泡沫は、見えない何かに額をぶつ叩かれたように仰け反る。自分達は何もしていないのに何故、と女性陣が仰け反った方向とは真逆——即ち紫苑達がいる方向に向ければ、紫苑がデコピンのように泡沫に人差し指を向けていた。

《鳳穿花》の理合いを用いた飛ぶ刺突ならぬ、飛ぶデコピン。それを放ち彼を黙らせたのだ。たかがデコピンと言えど、紫苑の膂力でそれが放たれば威力は言わずもがなである。

「俺は洒落たこととは言えないが……似合ってる。綺麗だし、良いんじゃないか……？」

「あ、ありがとう、ごさいます……」

赤面し、はにかむ葉。そんな彼女に視線を向けても良いものか悩み、視線を宙に彷徨わせる紫苑。

そんなふたりの周りだけ、夏の喧騒から切り離されたようで――、「あ、イツキもこつち来たんだ。作業終わったの？」

「まあ、大体は。……一番の理由はあのふたりの周りで空気になってるのに耐えきれなかっただけなんだけど」

「まあ気持ちはわかるわ。……あのふたりの周り、なんか全体的に甘い匂いがしてそうというか、ラブコメっぽい空気がしてるというか……」

「ステラさんの水着に何の反応も示さなかったのも納得ですね」

「……食後にコーヒーでも飲みたい気分ですね。ブラックで」

珠雫の言葉に紫苑と葉以外の全員が頷いた。

◆ ◆

「紫苑さん、お肉どうですか？」

「ああ、悪いな。それにお前焼いてばつかだろ、代わろうか？」

「焼きながら少しずつ食べてるので大丈夫ですよ。お気遣いありがとうございます」

そうか、と紫苑はタレの付いた肉を頬張り、海の方へと視線をやった。その先には先に描写したように、家族連れやカップル、友人達と来たのだろう者達がいよいよのやいものと騒ぎながら遊んでいる。この光景は、紫苑からしてみれば意外であった。

「怪物騒ぎなんて噂が立っているにしては人が多いんだな」

「話題性の問題であろう」

それに答えたのは管理人から話を聞いて戻ってきた、碎城雷である。彼はそのガタイの良さに似合わず、焼いた椎茸を頬張りながら続けた。

「これが鮫が出ただの、クラゲが大量発生したただのであれば海水浴場を閉鎖することも出来たのだがな。『怪物がいるらしい』という荒唐無稽な、しかもその怪物による被害者もないとあれば閉鎖する理由にはなり得ん。それに古来よりこうい噂は人を惹き付けるものだ」

「……よくわからん」

「某もあまり理解はできんがな。それでもそういう人々はいるものよ。それにしてもそなた、小柄な割にはかなり食えるのだな」

「まあな」

紫苑は見た目と異なり、かなりの大食漢である。

それは彼の鍛練と《努力》の異能によつて彼の筋肉が常人の数倍の強さにまで発達したことが理由である。それほどのパワーマシンを満足に動かすには、それなりの食事が必要なのだ。

言っている間にも、彼は持っていたイカ焼きを綺麗に平らげている。

「西園寺と会長、そして一輝が買ってきた材料の量を見たときには、買いきなのではないかと思つたが……なるほど、確かにこのレベルの大飯食らいが二人もいれば納得だ」

彼が視線をステラにやれば、ステラが五本の金串に刺さった肉や野菜を一気に食べていたところだった。

「……のろのろしていると某達に分まで食われかねんな」

「そうですね。……碎城さんもその身体だと結構食べなきゃいけないでしょう？ これ如何ですか？ 良い感じに焼けてますよ」

「かたじけない」

朶から差し出された香ばしい肉と野菜の刺さった串を受け取り、口に運ぶ碎城。

その時、「あの……」と控えめに彼らに声がかけられる。

「珠雫さん、どうされました？ あ、何か食べますか？ それならもうしばらく待つて欲しいですけど」

「いえ、それは結構です。満腹ですから。その……百鬼さんと話したくて」

「俺とか？」

紫苑と珠雫の接点などあまりないし、仲が良いか否かで語れるほど会話をした覚えもない。あるとすれば先日の選抜戦の事だろうか？ ……わざわざ掘り返したりするものだろうか？

「構いませんか？」

「ああ。……場所変えるか？」

「お願いします」

「わかった。じゃあ行ってくる」

「はい。いってらっしゃいませ」

葉に見送られ、二人は喧騒から離れた砂浜に座り込む。漣の音だけが彼らの間に流れていた。

「……西園寺さんと仲良いんですね」

「ああ。食いながらで良いか？ 冷める」

「構いません」

「はぐつ……ごくつ……で、話したいのはそんな事か？」

「いえ……」

なんと話し始めれば良いものか。深く息を吸う。海特有の磯臭さに負けないくらいの肉の香気が、彼女の鼻腔を通り抜けていった。

紫苑は話しあぐねている珠雫を急かすような真似はせず、ひたすらに肉を食らっている。そんな彼の空気を読まない行動が、むしろ珠雫にはありがたかった。

「——先日の選抜戦、完敗でした」

「ああ」

「私の魔法を悉く受けきられた。私の全部を込めた《青色葬送》とっておきも最後の悪足掻きも全部見破られて。自分で言うのもなんですが、私の『迷彩』はあなたが見破れる水準を遥かに越えていた筈です。なのにどうして……?」

「はぐつ……それを答えて、俺に何かメリットがあるのか？」

「うっ……」

何もない。

彼からしてみれば、今自分がした質問に答えることはただ自らの手の内を曝すだけの愚行。そして自分にそれを上回るだけの利を差し出すことは極めて難しい。

やはり忘れてくれ、と言って引き下がろうとした時だ。はあ、と隣で大きく溜め息を吐かれる。

「そんな顔するんじゃないよ。俺が虐めてるみたいだろうが」

「す、すみません……」

「……一個貸しだぞ」

そう言い、紫苑は《究極生存本能》のからくりを話す。

悪意の有無、天災や兵器による攻撃など『自分に害のあるもの』すべてを感知する絶対的な嗅覚。

珠雫の水面下で仕掛けていた攻撃も。そして最後の背後からの攻撃が水分身によるものであり、本命は彼が背後を向いたあとに自分が切りかかることであると見抜いたのも、すべてこの特性による物であると、包み隠さず。

「な、なんですかそのインチキ……」

「こういう勘を生まれながらに持つてるやつもいるんだぞ。そっちの方がインチキだろうが」

後天的に努力して身に付けた俺の方が遥かにマシだろう、と語る紫苑にどっちも大して変わらないんですよ、と珠雫は突っ込む。異能ありきとはいえ、努力してそんな超直感を身に付けられる紫苑も大概である。

「……良かったんですか？ 話してしまっただけ」

「お前が話してくれて言っただろ」

「それはそうですけど……」

「はあ……それにお前、俺が嘘を吐いてる可能性もあるだろ」

「……それは確かに」

紫苑は騙し討ちのような真似はしないだろう——そう決めてかかったからこそ、決定的な一撃を受けてしまったのでぐうの音もでない。『貸しだぞ』とは言ったが、彼が本当の事を話している保証はどこにもないのだから。

それに紫苑としては、自分が話したことが嘘かもしれないと疑わせた時点で目的は達成しているのだ。

「ちゃんと学んでるみたいだな」

「授業料が非常に高かったですから。何か学んで持って帰らないと」

「それでいい。人生は負けて、学んで、成長して、また負けての繰り返しだからな。……少なくとも俺にとってはそうだった」

彼は平らげた皿を砂浜に起き、空を見上げた。自然と珠雫も目線が空に向かう。思い返しているのは……彼らが今まで味わった敗北の記憶。

「努力しろよ、黒鉄。何度も負けて、何度も学んで、何度も研鑽して、そうやって高く高く積み重ねろ。そうしたら……そのうち自分の手を届かせたいところに届くだろうよ」

「……アドバイスですか？」

「ああ。十一年間ずっと敗けを積み重ねてきた、敗者の先輩からのな。負けた数の多さなら誰にも負ける気がしない」

「それで勝っても嬉しくないですよ」

苦笑する。

黒星の数で勝るなど、それはもう敗北と同じだろう。

「……話せてすつきりしました。ありがとうございます、百鬼さん。私も負け犬らしく、必死に足掻こうと思います。そして——次に戦うときは、鬼の首を獲れるようにしますね」

「そう簡単にくれてやるつもりはねえよ」

立ち上がる。

午後から本格的に調査開始だ。

色々抱え込んでいた物が落ちた今なら、もう少し昼食も食べられるような気がした。

◆ ◆ ◆
静謐な海の中を掻き分けるようにして、紫苑は泳ぐ。

一寸先も見えないような闇ではあるが、紫苑には関係ない。己の鍛練によって、鍛え上げられた肉体操作。それによって普段は味覚や嗅覚に割いているエネルギー、その全てを視覚に回す事で人間の限界を遥かに越えた目で海底や海中を見据える。

もはや夜目が利く、などというレベルではなく僅かな岩の起伏すらも彼の目は捉えていた。

——言わずもがなであろうが、《水》の能力を持つ珠雫と、その能力を《複写》した葉と比べ、残る紫苑とステラの索敵能力は彼女達のそ

れに遠く及ばない。

それでも二人が海中調査に抜擢されたのは、残るメンバーと比較して飛び抜けた肺活量を有していたことと……聞き込み調査が難航してしまうからというのが理由として挙げられる。

紫苑は全身に刻まれた傷跡のせいで威圧、悪い場合は嫌悪感を与えてしまうため、そしてステラは対極的に男性に頻繁に絡まれる。そんな状態では円滑な聞き込みなど出来たものではない。

なので紫苑とステラは魔力での索敵では得ることの出来ないだろう視覚的情報の収集に尽力しているわけである。

しかし……、

（——何も見つからない）

怪物騒ぎなんて噂され、遠方……どこかのテレビ局まで調査に来ている状態だというのに痕跡のひとつも見当たらない。見当たるのは海中を呑気に泳ぐ魚の群れのようなもの。

紫苑は海に対する知識など欠片としてないが、野生動物たる彼らが怪物などという存在に微塵も警戒していないことはわかる。

「ふはっ……」

海中で十分ほど動きまわり、限界を向かえた紫苑は海面に顔を出す。静寂に包まれていた海中とは対極的な、音や陽光、潮風が奏でる騒がしいセッションが紫苑を出迎える。

紫苑は荒々しく呼吸し、酸素を身体中に行き渡らせながら今まで見てきたものを思い返し、それらしい痕跡があったか思い返すが——成果は何もない。ここまで来ると、怪物騒ぎなんてデマだったのではないかとすら思える。

調査を開始してもう二時間近くが経過している。今頃、陸組の方ではSNS上での調査や聞き込みなども一段落付いた頃だろう。一旦、情報共有のために戻っても良いかもしれない。

『——紫苑さん、そちらの方はどうですか？』

突如として紫苑の脳内に声が届いた。自分の事を『紫苑さん』と呼ぶ者は一人しかいないため、声の主はすぐに誰かわかった。

西園寺葉である。

「こっちは空振りだ。そっちはどうだ？」

言つて、紫苑は疑問を抱く。

彼女が能力を使つてこちらにメッセージを届けてきていることはわかるのだが、自分はそんな真似は全くと言つて出来ない。

だが、それは即座に彼女から返事が返つてきたことが答えになった。

『こちらあまり芳しくはありません。珠雫さんと協力して、索敵範囲を広げてはいますが……もつと外洋の方に向かってみようと思います。流石にそこまで行くとステラさんと紫苑さんは来れないでしょうし……一旦戻つて報告という形にしてみましたいいですか？』
「ああわか——っ！」

何の前触れもなく、紫苑の本能が自身の死を嗅ぎ取つた。それに彼は即座に行動を起こそうとする。しかし陸上であればともかく、海という人類にとってアウェーな場所では対応が間に合わない。

「がぼっ……い！」

彼は為す術もなく海中に引きずり込まれる。

——そして彼が見たのは蛇のような怪物。

しかし、その蛇は彼の知識にはなかった。当然だ、その蛇は身体が岩などで作られた化け物だったのだから。

それを見、彼はこの怪物騒ぎの下手人の正体を看破する。

（——鋼線使いか！）

鋼線使い。

その名の通り、糸のような霊装を用いる伐刀者の総称だ。そして彼らのような手合いの大半は、紫苑に岩で出来た大蛇をけしかけるように無機物を糸で操り、人形を作つて戦闘を行うのが鉄則。

そして——このような手合いと紫苑の相性はお世辞にも良いとは言えない。

（《八重樫》）

紫苑は自分の足に噛みつき、深海まで引きずり込もうとする蛇の頭を顕現させた日本刀を叩き付ける。

使用した技は《八重樫》

《瀧華一刀流繚乱勢法》が誇る絶技のひとつであるそれは、端的に説明すれば重なる斬撃である。

振るった斬撃の数そのものを増やし、重ねることによって威力を数十倍にまで高めるそれを、彼は峰を使うことで重なる斬撃を重ねる打撃へと変化。

釘を打ち付けるように重なる打撃が岩の身体に叩き込まれ、形が保てなくなる。

が——岩の破片が磁力で引かれ合うように集まり、紫苑を海中に引きずり込んだ蛇が再構築された。

やはりこうなるか、と紫苑は歯噛みする。

紫苑と鋼線使いの相性が悪い理由——それは攻撃が通用しないというシンプルなものだ。霊装である糸を切ったところで然したる痛手にはならず再び人形を操られ、人形を粉微塵になるまで斬ろうと思ってもそれを行うには場所が悪すぎる。

おまけに——紫苑が感知できる限りでも、岩の怪物は十数匹はいる。そんな相手にまともに戦っていれば敗北は必至。されど海中では逃げ切ることも叶わない。

だが——それは紫苑が一人であればの話だ。

紫苑を取り囲む岩人形、その周囲に奇妙な渦が発生した。それはミキサーのように岩人形を瞬時に粉へと変える。数瞬遅れ、残像を捉えることしか叶わないほどの速度で迫る黒い影が紫苑を抱き抱え、海面へと浮上する。

「ぶはあっ！」

「はあっ……い！ 悪い西園寺、助かった」

その影の正体は葉である。

彼女は会話中に紫苑の言葉が急に途絶え、その刹那、怪物調査に来たメンバー以外の魔力反応を感知。

それが出現したタイミングから、自分達に敵対する者による攻撃であると判断し、珠雫に自分の身体を守ることを最優先にするように厳命してから、数キロ先にいる紫苑を救出に向かったのだ。

彼女は紫苑の言葉に「間に合って良かったです！」と返し、

「ステラさんの方にも襲撃が行っているので、彼女を救出してから陸に向かいます。紫苑さん、少し失礼しますね」

そう言い、彼女は紫苑の顔に淡い青色の魔力を纏わせる。

「これがあれば水中でも問題なく呼吸が行える筈です。それじゃ急ぎます、しつかり捕まっていますか——！」

返事の代わりに紫苑は抱きつくように腕を回した。それを確認すると、葉は《水》の能力を使い、人類の限界を容易く超えた速度で海中を泳ぐ。

亜音速に迫ろうかという速度で泳ぐ葉は、すぐさまステラの元にたどり着いた。そして彼女を襲っていた岩人形の全てを容易く蹴散らすとステラを回収。加えて事前に空気を集めておいた魔力のヘルメットをステラに被せ、陸地を目指す。

あの人形が潜んでいたのは海中、それもそれなりに砂浜からは離れていた場所であった。そうこうしている間にも、あの岩人形達が海水浴場に侵攻している可能性があった。

葉はふたりの身体を可能な限り労りながら、けれどその上で出せる最高速で浜辺を目指し——そして三人の目に予想外の光景が飛び込んできた。



雷撃と鋼の音色、そして純銀の煌めきが飛び交っていた。

海から侵攻してくる岩人形を貴徳原が数億の刃——彼女の霊装である《フランチェスカ》を以て切り刻み、刀華が振るう雷を纏った居合い抜きが爆砕する。

しかしもうひとりが問題だった。

一輝が戦っている相手——は同じ怪物調査のメンバーである《速度中毒》兎丸恋々と《城砕き》砕城雷。

いや、それだけではない。観光客の何十名かが同じ観光客に襲いかかっている。しかも明らかに正気ではない様子で。

この海水浴場の監視員だろう者達がなんとか押さえ込もうとしているが、尋常ではない怪力で無理やり拘束を解いている。

「何よ、これ……！」

「俺達にけしかけられた岩人形と同じことを人間でやってんだよ！
おい、ヴァーミリオン！ お前は貴徳原と東堂に加勢しろ！ あの岩
共を押さえ込むのにアイツ一人じゃ手に余る！」

「わ、わかった！」

「珠雫さんに中継点ハブの搜索を頼んで、水の分身も付けました！
私もこっちに加勢します！」

最初は混乱していたステラであったが、言われれば行動は早い。彼
女は《妃竜の大剣》を再び出現させ、岩の群れに一気呵成に飛び込み、
一振で数匹を木っ端微塵に粉碎する。

そして紫苑は逃げるに徹することで、なんとか戦闘を継続させていた
一輝に合流する。

兎丸の攻撃——選抜戦で一輝が受け流した物の数倍の速度と威
力で放たれるそれを辛くも回避したところで、最大重量まで累積され
た碎城の一撃が振るわれる。そこに紫苑が割り込み、《八重樞》を以て
弾き返した。

「百鬼くん！ 助かったよ！」

「フツ——！」

紫苑はそれには答えず、一輝に攻撃を叩き込んだ後、瞬時に離脱し
た兎丸に向かって居合い抜き——《瞬菊》と《鳳穿花》を合わせた《花
束》を見舞い、兎丸に絡み付いていた糸を幻想形態で斬り飛ばした。
「彼らに何があつたんだい？」

「…。コイツらは全員、怪物騒ぎの元凶が伸ばした糸に操られてる。
脳に糸を張り巡らせて、意識があるまま操り人形にされてるんだ」

「……ッ！」

意識のあるまま人を操り人形にするという、その悪辣さに一輝が顔
をしかめる。だが、と紫苑は続けた。

「アイツらの脳に張っている糸。それを断ち切れば支配下からは解放
される。お前ならやれるだろ。ここはお前に任せる。これが終わっ
たら西園寺に——」

加勢してやってくれ、という言葉は彼の口からは漏れなかった。
身体が氷で出来た二十以上の葉の分身が、海水浴場中を駆け回って

いたからだ。

その氷の分身は氷の拘束で観客達を拘束し、糸を断ち切り、拘束した客達を監視員と協力して避難させている。そして本人は大量の海水を操り、海から上がってくる岩の人形達を次々と砂に変えていた。彼女が持つ圧倒的魔力制御技術、その極致を以て砂浜に上がろうとしている岩人形達のほとんど食い止めている。

しかし彼女の魔力量はお世辞にも多い方ではない。これだけの魔術を並行して発動させていれば、流石の栞も魔力切れを起こすのではないか——そうならない理由は彼女の足元にある。

海水が彼女に吸われるようになっていく。

——自然干渉系の能力を有した伐刀者は、他の系統の能力にはない強みがある。

それは自分の能力に対応する物質——《炎使い》であれば炎を、《風使い》であれば風を取り込むことで、その物質を擬似的な魔力に変換することができる。

そして栞の現在の能力は《水》

海水を常時魔力に変換し続けることで、魔力の少なさを補っているのだ。

そして——、

「《凍土平原》——！」

海岸線すべてが氷で覆われた。

彼女が溢れ出る岩の軍勢を捌ききり、珠雫の支援に向かわせた物も加えて計三十を超える水の分身全てをマニュアル操作した栞は、その場に倒れる——直前で彼女の身体が、がっしりとした腕に支えられる。

「紫苑さん……。すみません、お手数お掛けして……」

「気にすんな。こっちこそ悪い。ほとんどお前に任せた」

「相性が悪いから……。仕方ないですよ。適材適所です……」

栞は頭を押さえる。

自分のキャパシティギリギリまで精密な魔力操作を行ったからだろう。頭が割れるように痛かった。

「百鬼さん」

次いで姿を現したのは、海を凍らせた立役者である黒鉄珠雫である。彼女は海の方——正確に言えば、そこに不自然に出来ている水で出来た竜巻を指差し、

「あそこに中継点があります。破壊を試みたんですが、私では中継点を守る人形を突破しきれませんでした。——斬れますか？」

「——ああ。西園寺を頼む」

珠雫に栞を任せ、彼は日本刀を振りかぶる。

上段からの振り下ろしである と確信させるその一刀を、この場所にいるメンバーは見たことがあった。

それは刀華を打ち破った、彼の全身全霊。

森羅万象、その全てを切断するすべての剣士が目指した到達点。その神域にある必殺だ。

彼の筋肉が隆起する。滅多なことではひとつも傷が付かない筈の霊装が、ぎちぎちという不快な音を立てて軋む。

そして——すべての華を散らす一刀が、振るわれる。

「——《散華》」

その《必殺》の剣は——神話に語られる預言者のように海を割り、岩人形の首魁すらも跡形もなく消し飛ばした。

第19話

「ん……あれ……」

西園寺葉は目を覚ました。

知らない天井、知らないベッド。いやそもそもなぜ自分は眠っているのだろうか、とこれまでの経緯を思い返す。

——あの鋼線使いの騒ぎの後、自分のキャパシティの限界ギリギリの魔術をそれなりに長い間発動させ続けたことで、気絶してしまったのだ。

「私もまだまだですね……」

たかだか限界寸前で気絶してしまうなんて。幾度も幾度も限界を越えてきた紫苑に比べて、自分はなんて情けないのだろうか。

身体を起こす。着ているのは水着ではなく、破軍学園の制服だ。きつと誰かが着替えさせてくれたのだろう。

時間を見てみれば夜の八時過ぎ。随分と眠っていたものだ、と溜め息を吐く。

その時だ。ガチャリ、とドアが開く音がして誰かが入ってくる。武者特有の歩き方、そして葉レベルの騎士が辛うじて感じられるほどのか弱い魔力。

「ああ、良かった。目エ覚めたか」

「紫苑さん」

百鬼紫苑だ。

自分の姿を見ると、ほんの僅かに安堵の表情を浮かべる。手には丸い皿と真っ赤な林檎がふたつ握られていた。

「食えるか？」

「はい、ありがとうございます。……あの、ここは？」

「海水浴場近くのホテルだ」

端的に答え、彼はベッドの近くにあった椅子にどっかりと座る。林檎を切ろうとする様子はない。まさか丸齧りしろということだろうか——そう葉が思っていると、刃物を抜いていないにも関わらず、皿に乗せた林檎が綺麗に切断される。

《魔人》の引力——林檎を切るといふ彼の意思が、強力に因果と結び付いた結果、刃物を用いずとも林檎が切断されたのだ。

ちなみにはあるが、紫苑が《魔人》であること、そして葉が《魔人》に至れたにも関わらず扉の前で引き返した人間であるというのはお互いに知っていることである。

だからと言って、たかだか林檎を切るのに《引力》を用いるとは思わなかったが。しかも芯の部分まで綺麗に切られている。

「俺も一個貰っていいか？」

「勿論」

元々彼が持つてきてくれたものなのだ。

彼は林檎を口に放り込みながら、葉が気絶した後の顛末を語る。

「あの後、糸の支配を逃れていた御祓が警察と魔導騎士を引き連れて戻ってきて、事態は完全に集束した。ただ糸に絡まれた奴らは近くの病院に搬送され検査。今日一日はずっと病院らしい。

それで海水浴場はまあ当然のように閉鎖。騎士と警察が協力して犯人の足取りを負ったが結果は空振り。今は嚴重警戒つてことで、騎士と警察があそこに留まることになった。

以上の事を理事長に報告した結果、俺達も一日近くのホテルに宿泊して警戒するようになって言われた。糸に絡まれた碎城と兎丸の事もあるしな」

「そうですか……」

「ただ警戒と言っても警察と騎士で事足りる。……要するに『よくやった。帰る前に遊んでいいぞ』つて事だ」

実際に理事長と一緒にいた寧々から言われたしな、と彼は苦笑する。

「じゃあ黒鉄さん達は……」

「海水浴場で来るかもしれない敵襲に備える……という建前で遊んでるだろうよ」

「……行かなくて良かったんですか？」

自分が起こしたのは脳のオーバーヒート。それもそこまで深刻ではない。その時は頭を金槌で叩かれているような酷い鈍痛があった

が、適当に休ませておけば勝手に収まる。

それに彼からしてみれば友人達と一緒に出掛けるなんて、今までにない経験だ。バーベキューも楽しんでいたようだし、彼も一緒に行きたかったのではないかと思っただが……、

「誘われはしたが断った。疲れてたしな」

そう言う紫苑の顔には確かな疲労の色が見える。

——彼が中継点たる傀儡を切断……否、消し飛ばした技である《散華》は文字通り彼の全身全霊。一振に己のすべてを込める技であるが故、体力・魔力のすべてを使い尽くしたのだ。

そんな状態でステラ達のような体力馬鹿と遊ぶなど御免被る。

「それにお前も心配だった。貴徳原が看てくれるとは言ってくれたが、折角友人達と来てるんだ。こういう時くらい羽目を外して遊んだ方がいいだろう」

「……そうですか」

「あ、全部食べたな。それだけでいいか？ なんなら持つてくるが」

「いえ、ご飯はもう大丈夫です。それよりも……一緒に散歩とか行きたいです。構いませんか？」



皿などをホテルの方に返却してから、二人は並んで夜の浜辺を歩いていた。

後ろには泡沫達に食事を振る舞う魔導騎士や警官達、そして彼らの中心で一輝・ステラペアとカナタ・刀華ペアがバレーボールで戦っていた。

紫苑達を通ったときには彼ら（主に刀華）に非常に心配されたが、気晴らしの散歩だと伝えれば特に留められる事なく見送られた。……ステラだけはリベンジが出来なくて悔しそうだったが。

夜風が紫苑と栞を撫でる。真夏の太陽とは対極的な優しい月の光が、彼らを照らしていた。聞こえるのは波の音くらいのもので、まるで世界に二人だけしかいないように思える。

「……月が綺麗だな」

「——ッ!? え、ええ。そうですね……この辺りは人工光も少ないで

すし、東京よりもずっと星が見えますから」

「……？ 俺、何か変なこと言ったか？」

「いえ、そんな事ないですよ……あはは……」

そんな事を考えていた矢先に紫苑からそんな事を言われ、心臓が高鳴った。愛を囁く隠喩として、月が綺麗だなんて言葉が用いられているだなんて彼は知らないのだろう。彼は本当に空を見上げて、月が綺麗だと思ったからそう言ったただけだ。

わかつてはいる。夜の浜辺でふたりきりで歩いている事に浮かれていることも。彼がたとえ自分の体力がなくて、休憩ついでに自分が目を覚ますまで待っていてくれたことに筆舌尽くしがたい嬉しさが込み上げてきたことも。

(本当にどうしたんでしよう……私……)

こんな事彼に出会うまでは思いもしなかった。二ヶ月前の自分からしてみれば、何をやっているんだと叱責したがるに違いない。

でも仕方がないのだ。理屈でもないのだ。

——恋に落ちるのに、劇的な出来事もきつかけも何もないのだ。ただ日々の、小さいことの積み重ね。一日一日の些細な思い出。それがきつと——人を恋に落とす。

今の葉には、それがわかった。

沈黙が再び流れる。心地よい沈黙だ。

自然の音が周囲を彩り、ふたりの散歩をより良いものにしていったが、紫苑はそう思っていなかったように。

「……退屈じゃないか？」

「いえ、そんな事ないですよ。どうしてです？」

「ずっと黙ってるから。……こういう時に話題のひとつでも振れたら良いんだけど、こういうのは経験がなくてな」

「良いんですよ、別に気にしなくて」

こういう時にぼんぼんと話題を振ってくる紫苑なんて、想像もできない。突如としてそうになったら驚くどころでは済まない自信がある。

「……じゃあひとつ伺いたいことがあったんですけど」

「なんだ？」

「綾辻さんの事。《剣士殺し》に勝つことが宿題だって言ったでしょう？ どうしてあんなこと言ったのかと思って」

「ああ」

「思い出すのは数週間前の話。」

彼は一時期弟子となっていた（と言っても具体的な指導は、全て一輝に任せていたので自分の弟子と言って良いのかは微妙なところではあるのだが）綾辻綾瀬と選抜戦内で戦った。

結果は紫苑が初撃で綾瀬を斬るといいう、あまりにも一方的なものだったけど……その内容はここでは省略する。

「……後悔してほしくなかったからだ」

「後悔……？」

「よくわからんって顔だな」

彼は苦笑し、続ける。

「もし仮にだが……綾辻が俺に負けた後、アイツの境遇を何らかの理由で知った一輝辺りがアイツの代わりに《剣士殺し》に道場破りを仕掛け、勝利したら……綾辻はどう感じると思う？」

「え？ それは……喜ぶんじゃないですか？ 自分の望んでいたものが手元に帰ってくるでしょうし」

綾辻綾瀬は《剣士殺し》——倉敷蔵人という伐刀者に実家の道場が道場破りを受け、彼に道場を奪われた過去を持つ。その過程で彼女の父親である《最後の侍》綾辻海斗は昏睡状態に陥り、二年間眠り続けている。

そんな彼女だからこそ、自分の道場が戻ってくることは喜ぶべき事のはず。

——そんな栞の結論を、紫苑は。

「いや、絶対に後悔する」

真っ向から否定した。

「え、いや、でも……」

「確かにその時は喜ぶだろう。奪われた場所が戻ってきたんだからな。……だが、その後は？」

一日後、一週間後、一ヶ月後、一年後。あるいはもつと先かかもしれ

ない。それでも彼女は絶対に後悔すると、紫苑は断言する。

「それでも大切な物が戻ってきたんですよ？　なのに後悔なんて……」

「アイツは……いや、違うな。俺達にとって一番重要なのは『自分にとって大切な物がそこにある』事じゃないんだよ」

アイツではなく、俺達と。

そう言い換えた紫苑の意図を、栞は察する。

——彼と綾瀬の境遇は極めて似ている。十一年と二年という年月の差はあれど、ある日理不尽に大切な物が奪われた。そしてそれを今でも許せず、必死に足掻き続けていること。

だから彼は、綾瀬を己に置き換えて考えたのだろう。

そうやって彼が出した結論、想いを栞は黙って聞いている。

『自分にとって一番大切な物を、自分の手で掴み取ること』

それが何より重要なんだよ。他人じゃ駄目なんだ。認められないんだよ。なんで一番大切なものを奪い返したのが、俺じゃないんだよ……。そう、後悔する」

「……」

「あと一日頑張れば勝てたんじゃないか。あと一週間頑張ればいれば倒せたんじゃないか。あと一ヶ月頑張ればいれば奪い返せたんじゃないか。あと一年頑張ればいれば、自分にとって一番大切なものを他人任せにせずに済んだんじゃないか……そんな凝りに似た後悔が、ずっと心の中に残り続ける」

あともう少し頑張ればいれば。そんな努力の余地が、まるで病魔のように身体を蝕み続けるだろう、と紫苑は語る。

同時に、そんなものを抱えて欲しくはなかったとも。

「……ピンと来ないか」

「分からなくはない、って感じですかね」

「お前はそうだろうな。結局のところこの話は、『過程』を重視するか、『結果』を重視するかという話でしかない」

どちらが正しくて、どちらが間違っているという話ではない。

所詮個人個人の考え方の差。紫苑は『自分自身の手で大切な物を取

り戻す』という『過程』を重視し、葉は『大切な物がそこにあればいい』と『結果』に重きを置く。

ただそれだけ事なのだから。

「これで良かったか？」

「ええ。……結局また紫苑さんの事ばかりですね」

「……そういえばお前の事は一切知らないな。俺の事は結構知られてるのに」

そも紫苑も葉も自分の過去を語りたがる性格ではない。

それでも紫苑の過去を葉が知っているのは、『眠り』の時に彼の夢を覗き込んだからだ。彼の痛みも苦しみも怒りも慟哭も。すべてをその身で体験し、味わったからである。

「そこまで面白いものでもありませんよ？」

「それを言うのなら俺の物だって大して変わらん。勿論、これは俺の興味本意だから別に答えなくても良いが」

「いえ、別に隠している訳じゃないですから。……座りましようか」

そう言い、彼女は近くにあつた岩場に背を預けた。紫苑もそれに倣って座る。

とはいえ何から話したのか……こういう経験がないので、どうやって話して良いものか悩む。

「——私、孤児だったんですよ」

なので、生まれから話すようにした。恐らくだが、ここが一番言うことが多そうだったから。

「……！」

「児童養護施設の門の前に、段ボールに入れられた状態で捨てられたらしいです。捨て猫かって感じですよね」

そう言つてくすくすと笑う葉とは裏腹に、紫苑の顔は暗かった。本人は軽く話しているが、笑い話に出来るまでどんな事を乗り越えたのか。

「……親の顔は」

「知らないです。今どこで何をしているのかもわかりません。探そうとしてもいないから当然なんですけど」

「会いたいとは思わないのか？」

「昔は会いたいと思ってきましたけど……年を重ねるにつれて、別に良
いかなと思うようになりました。私にとって私を産んだ人は赤の他
人と思えないですし、私を捨てて人生を新しくやり直そうって
思ってるときに『過去の負の遺産』捨てたはずの娘が出てきたら邪魔でしょうしね」
「……お前、よく俺にあんなこと言えたな」

思い返すのは心が限界を迎えた紫苑を、彼女が抱き締めて泣かせて
くれた夜。客観的に見れば、葉の生まれの方がよっぽど悲惨ではない
か。

そう言えば葉は苦笑して、

「今は幸せですから」

「……今」

「ええ。あそこに捨てられていたおかげで、私は今の養父に出会えま
した。そして——貴方にも。そうやって自分が納得できてさえいれ
ば、きつとそれで良いんですよ」

「……前向きだな」

「ええ。前向きな考え方が出来るように、努力しましたから」

「そうか」

努力した。それなら出来るようになって当然だろう。彼女は非常
に多才だから。

「はい。……そこからはまあその施設で普通に勉強したりして育つた
んですけど、十年前くらいに養父に引き取られました。」

養父はそこそこに裕福な人で、そして非常に多くのツテを持ってい
ました。だから頼んだんですよ。『私に投資してくれ』って」

「投資……？」

「ええ。……私は自分で言うのもなんですけど、伐刀者としてはそこ
そこに優秀な方です。養父もどこで私の事を聞いたのかは不明です
が、私に伐刀者として活躍して欲しかったから引き取ったと言われま
した。」

けれど当時私は六歳の子供。伐刀者としては赤子も良いところ
だったんです。ですから少しずつ強くさせる予定だったらしいです。

ですけど……私はそれが我慢できなくて、最初から物凄くハードな訓練をさせるように要求しました」

「どうしてだ？」

「私の育った施設って……まあ、明け透けに言っただけじゃあお金がなかったんですよ。老朽化もしていましたし、設備もボロボロ。経営するのが精一杯といった感じで。」

そんな感じだったからなんとかしたくて。でもそれなりのお金が必要でしょう？ でもたかが六歳の子供の我が儘にそんな大金は注ぎ込めない。

だったらどうすればいいか。子供ながらに考えたんですよ。私の我が儘に答えることで使った金以上の利益を見込めるくらい、強くなれば良いんだって。……そこからはずっと頑張りました。そして、今に至るって感じですね」

「……お前は凄いな」

「私なんて大したことないですよ。私は恵まれただけです。それに頑張る理由が傍目から見ても高尚だったとしても、イコール強いかと言ったらそうではないと思います」

こんなことを言ったら一部の人の反感を買いそうですけど、と葉は続ける。

「負けられない理由があるから強い？ 多くの人の想いを背負ってるから強い？ 頑張る理由が高尚だから強い？ 確かにそれも一側面ではあるのでしょうか。けれど決定的な理由であるとは思いません。……何故強いのか。それはきつとシンプルな事です。」

——努力しているから強いんです。毎日を懸命に、一生懸命努力して、経験を毎日コツコツ積み上げてきたから強いんです。だから私は世界最高の才能を持ち、そして『自分が生まれた国を守りたい』という気高い理想を持ったステラさんに勝てたんです」

自分は積み重ねた。自分に許されるものすべてを使って強くなるうとした。自分の隣に座る彼と同等であると認められるほどに。

そしてそれは——あなただって同じことだと、彼女は彼に微笑み、彼の白髪に手櫛を通す。

「あなたの努力を、頑張ってきたことを私は知っています。だから《雷切》や《深海の魔女》に勝てたんです。……あなたはもつと、自分を誇って良いんですよ」

「……ありがとな」

「どういたしまして」

結局こうなるのか、と紫苑は苦笑する。

いざ戦いとなればわからないが、人としての在り方という面では彼女に勝てる気がしなかった。

——自分の剣は軽い、とそう思ってしまった。

心優しい姉は、自分の今の状況に決して喜びはしないだろう。だから自分の勝利で喜んでくれる他人なんてどこにもいない。

誰の想いも乗っていない、軽いがらんどうの剣。

こんなことを考えるなんて馬鹿らしいと思っていたのに。それでも彼女の話を聞いて、思ってしまった。それでも彼女は、それが一番大事だとは言わなかった。

努力しているから、頑張れているから強いのだ、と。

その言葉は、彼を救う言葉だった。

——ここで、彼の優れた聴覚が異変を感じ取った。

「……ん？」

「どうしました？」

「いや、黒鉄達がいる方が騒がしいと思って。……戻ってみて良いか？」

「はい。……また鋼線使いが仕掛けてきた、とかじゃないと良いんですけど……」

言いながら戻ると、一輝の姿はそこにはなかった。

そして、その場にいた刀華が事の顛末を説明した。

『倫理委員会委員長と名乗った赤座が、黒鉄一輝を連れていった』と。

第20話

——怪物騒動があつてから、早くも三日が過ぎた。

幸いにも糸に絡まれ、傀儡となつた者達に後遺症は見受けられず、全員が騒ぎがあつた次の日には退院することが出来た。

それだけ聞けば事件は解決し、めでたしめでたしで終わるのだが——ステラ・ヴァーミリオンは誰の目から見てもわかるほどに激怒していた。

常に火花のような燐光を撒き散らし、眉をつり上げ、不機嫌そうに顔をしかめている。

それもこれも三日前の出来事が原因だった。

——始まりは一輝と自分が恋仲である、という事実がマスコミに報道されたことだった。

ここまでは百歩譲つてまだ良いとして、その内容が問題だった。

『姫の純潔を奪つた男』

『ヴァーミリオン国王大激怒』

『日本とヴァーミリオンの国際問題に発展か!?!』

その他にも、黒鉄一輝は昔から窃盗、恐喝なんでもありの黒鉄家史上最悪の札付きである。人格的に大いに問題のある異常者である。女癖も非常に悪く、ステラの他にも複数の女生徒とふしだらな交際を持っている。

そんな内容が、被害者の声という物と一緒に掲載されていたのだ。無論、これは全て出鱈目。偏向報道の域にすら届かない嘘八百だ。如何に日本のマスメディアのレベルが最低でマスゴミと嘲笑されていても、ここまでの酷い報道は中々に稀有だ。しかもその報道が同じ《連盟》に所属する国賓に係るものであれば尚更である。

それもそのはず。この報道は『倫理委員会』及びその親元である『黒鉄家』からの明確な悪意を孕んだ攻撃なのだから。

そして彼は『倫理委員会』委員長・赤座守に連れられ、国際魔導騎士連盟・日本支部に身柄を勾留されているのだ。

自分を悪い男に騙された頭の弱い女のように書き立てる情報紙も、

彼を根も葉もない報道を聞いて好き勝手に扱き下ろす者達も。すべてがステラにとって不快だった。

「——随分と殺気立ってるのね、ステラちゃん。可愛い顔が台無しよ？」

「……アリス。それにシズクも」

軽い、けれど不快感を微塵も与えない男の声に顔を上げれば、そこには見知った顔。黒鉄一輝の妹である黒鉄珠雫と、彼女のクラスメイトである有栖院凧である。

彼は「失礼するわね」と言つて、珠雫は黙つてステラの正面の席に並んで座つた。

そんな珠雫に、ステラは言いにくそうにしながらも自分が言うべき事を告げようとする。

「あの……シズク……」

「何ですか？」

「……やっぱり怒ってるわよね。アタシ達の関係の事……」

それは自分と一輝と交際していたこと。

三日前には赤座がやってきたことと言えなかったが、これは本来もっと早くに言わなければならなかったことだ。

——黒鉄珠雫は黒鉄一輝を愛している。

否、愛以上の感情を抱いている。一人の女としては勿論、妹としても、姉としても、母親としても、友人としても。珠雫は彼を慕っている。

そんな彼女に対し自分達の関係を隠し続けてきたことは、彼女への裏切りに当たる。それを今まで続けてきたことを彼女が——否、ステラ自身が許せなかった。

だからこそステラは頭を下げたのだが——。

「構いませんよ。知っていましたし」

「……え？」

「貴方には立場があり、公表すれば必ず騒ぎになる。七星剣舞祭が迫るこの時期にそれを避けたいというのは納得できませんし、最良の物であるというのとは同意見です。それよりも肝要なのは、これからの事で

す」

「待つて、知ってたの!? アタシ達の事……」

「何を今さら。ねえ、アリス」

「ええ。ふたりとも結構分かりやすかったし」

ふたりの言葉にステラは机に突っ伏した。

なんとということだ、人目は避けて逢瀬を重ねてきたはずなのにそれが全部無駄だったのか。そうでありながら、友人であるふたりに自分達の関係を隠し通せていたと考えていた自分の滑稽さたるや。

自分の間抜けさに耐えられず、声にならない呻きを漏らす。

「その事はともかく。これからの事ですが……貴方ならばある程度予想できているのではないですか?」

そう言つて彼女が視線を向けるのはステラ——ではなく、その後ろ。昼食であるサンドイッチを盆に乗せて傍に来ていた眼鏡をかけた少女。破軍学園新聞部の日下部加々美である。

「まあある程度は。……ステラちゃん、座つて良い?」
「ええ」

日下部は礼を良い、ステラの横の椅子に腰かける。その顔にはステラに対する申し訳なさがありありと浮かんでいた。

自国のマスメディアが彼女の怒りに火を付けたことを謝罪したいのだろう。ついでに自分の敬愛する一輝に、こんなレッテルを張り付けた彼らに対する怒りもあるが。

「私もちーつとばかし報道関係のツテがあるから色々探つてるよ。あと現状をちよつとでもマシに出来ないかって色々やつてはみたけど……流石に厳しいかなあ。ごめんね、ステラちゃん」

「良いのよ、仕方ないわ」

日下部は確かに優れたジャーナリストだが、一人のジャーナリストに出来ることには限度がある。おまけに今回の敵は『倫理委員会』及びその背後にいる『国際魔導騎士連盟日本支部』だ。彼女一人ではどうにか出来る範囲を大きく逸脱している。それを責めたりはしない。

それよりも日下部には聞きたいことがある。

「アイツらの目的は、イツキから異能を扱う許可を半永久的に取り上

げる『追放処分』に追い込むことなの。それで聞きたいんだけど……
イツキが今回みたいなケースで『追放処分』を受けることは……」

「まあ、まずないだろうね」

「……随分とあっさり言うのね」

あつけらかんと言う日下部に、有栖院は驚いたように言う。それに加ってね？ と彼女はサンドイッチを頬張りながら続ける。

「確かにステラちゃんの今回のスキヤンダルは大事だよ？ でもふたりはなーんにも悪いことしてないじゃない？ 『元服制度』は日本だけの制度じゃなくて、連盟に所属してる国ならどこにだってあつて、ふたりの交際関係は法的に全く問題ないんだもの。」

そもそもこの話って本来は『ヴァーミリオン皇国の第二皇女様が、留学先の国で恋人を作ったんだってー！ それってどんな人なのかしら？ わいわい』で終わる話。それをこのスキヤンダルを『不祥事』という事にした連中が煽り立てて、騒ぎを大きくしているだけなの。彼らは『国際問題だー！』って叫んでるけど、私から言わせれば当人——より具体的に言うならステラちゃんの気持ちをガン無視して、偏向報道の極みみたいなことやってる連中の方ががよっぽど国際問題だよ。まあそんな事は連中だって分かってやってるんだろうけど」

「と言つと〜」

「さっきも言ったけど私って文屋界限に多少顔が利くもんだから、そこで聞いた話なんだけど……やっぱり『倫理委員会』の方から相当強い圧力があつたみたい。『ヴァーミリオン皇女のスキヤンダルを不祥事として報道し、マイナスイメージを作るように』ってさ。ここだけの話だけど連中はKOKをはじめとする、公式の騎士興業の速報掲載権限を取り上げるって脅してきたらしいよ」

KOKは連盟は主催する世界最大規模の騎士興業。その他にも数多の騎士興業は情報紙において利益の六、七割は平気で占めてくる重要なもの。

その掲載権限を取り上げられるということは、情報紙の売り上げに致命的な大打撃を食らう事と同義である。まさしく是非もない、とい

うやつだ。

それもこれも騎士興業の元締めが《連盟》であるからこそ出来る脅し方であり、それは『倫理委員会』が本気で一輝から騎士資格を奪いに来ている証左でもある。

「それでも連中がやっていることは今のところ正当性の『せ』の字もない、ただの規模が大きい言い掛かりでしかない。だからこそ報道や査問会だなんて開いて揚げ足取りをしてるんだろうけどさ。でも先輩だって馬鹿じゃないからそうそう連中が望むことを答えないだろうし、最初に言っただけ《連盟》が『追放処分』を取ることはまずないだろうね。『追放処分』って本当に最終手段なんだよね」

「最後の手段って……どういうことなの？ カガミ」

「《連盟》って学生だろうがプロの魔導騎士だろうが、本当によつぽどの事がない限り『追放処分』にはしたがらないんだよね。皆に分かりやすい例で行くと……西京先生とかいいかな」

「西京先生？」

連盟に所属し、環太平洋圏最強と言われる魔導騎士だ。その私生活は……確かに派手で、マスメディアでも何回か取り上げられているくらいだが、『追放処分』の例として挙げられるほどではない筈だが……。

「あの人って十年前くらいまでマジで色々やってたからね。違法闘技場でバチバチにやりあったり、不良を何十人と病院送りにしたり、あとは逮捕歴だってあるし。それでもあの人は『追放処分』にはなっていない……まあ、それは《闘神》南郷寅次郎氏の監督下に置かれたからって言う理由があったりするんだけど、それでも問答無用で騎士資格が剥奪されたって良いことやってるでしょ？ それでもそうならない」

「……相当な札付きだったのね。西京先生」

現在の彼女を知っている身からすれば信じられないほど暴れまわっている。

それほどの事をしでかしておきながら『追放処分』になっていないのは何か理由があったのか、と珠雫が問えば日下部は頷いて問いに答

えた。

『追放処分』を受けた騎士は間違いなく犯罪者になるから」

騎士免許を取得した伐刀者は勿論、学生騎士として己の異能で身を立
てていこうと考えている魔導騎士の卵だ。そんな者達が、能力を行使
する権利を永久的に奪われる『追放処分』を受ければ、能力を違法に
行使する能力犯罪者になるのは自明の理。

それは既に幾度ももの統計がとれている、歴然とした事実である。

「そりや勿論、『追放処分』を受ける方にも大きな問題があるのは間違
いないよ？ でも首輪の付いてない狂犬より、首輪の付いた狂犬の方
が安心じゃん？ 西京先生クラスの強さを持った犯罪者が野放しに
なってるって考えたら、本当にヤバイことだって理解できると思うけ
ど」

「それは……確かに……」

彼女は個人でありながら、対国家級の戦力として数えられる伐刀者
である。普段は《連盟》から使用許可が降りていない彼女の切り札で
ある伐刀絶技《霸道天星》は、命中すれば大陸に大穴を開けると予想
されている程の大技だ。

そんな技を何の制限もかけずに野放しになっていれば、彼女の癩癩
で大陸にいくつもの大穴が空き、何百万人では済まない死者が出るの
は容易に考えられること。だからこそ《連盟》は彼女を『追放処分』に
せず、自分達の監視下に置いておくことを選んだ。

「まあ西京先生は極端な例だけど、《連盟》は全ての騎士を監視下に置
いて置きたいんだよね。その意思を受けて、連盟加盟国のほとんどは
国内の伐刀者が全員騎士の道に進むように法整備をしている。日本で
はまだ人権団体の声が大きくて、そこまで踏みきれてはないんだけ
ど」

ともかく、と彼女は話をまとめる。

「以上の事から連盟は『追放処分』にはかなり腰が重い。特にまだ学ん
でいる途中である学生騎士に対しては尚更。たぶんだけど『追放処
分』一歩手前まで行った話を含めても、片手の指の数で収まると思う。
それくらいレアケースなんだよ。だからこそ……私は先輩が心配だ

よ。そんなレアケースを引き起こすために、連中がどんな手段で先輩を追い詰めてるのか」

日下部の話を聞き、ステラは鬱血するほど強く拳を握りしめる。現在彼が置かれている環境をどうにもできない無力感が彼女を苛んだ。

そんな彼女は気付かなかったが……人の感情を見抜くのには長けた有栖院は、日下部の表情に混ざった僅かな引掛かりを見抜いた。

「ねえ、かがみん。それとは別に気になってることがあるんじゃないの?」

「あはは……やっぱりアリスちゃんにはバレちゃうか」

「それもやはりお兄様関連の事ですか?」

珠雫の言葉に日下部は首を振る。そこに嘘の気配はない。

「先輩は関係ないよ。ただ私がどうしても気になったただけだから。別に皆は気にしなくて大丈夫」

「それでも日下部さんが良かったら話して欲しいです。お兄様の事を色々教えてもらいましたし、私たちに出来ることなんてたかが知れているでしょうが……」

「それでも話を聞くことくらいはできるわ。誰かに話してみたら楽になるって事もあるでしょうし」

「それでも……」

ちらり、と日下部はステラに視線を向ける。

彼女は非常にナイーブになっている。そんな時に考え事を増やしたくはなかった。

その視線を受け、ステラは言う。

「シズクも言ったけど、イツキの事を色々教えてもらったし、それに……アタシ達、友達でしょ。そんなカガミがそんな顔してるんだもの。力になりたいわ」

そう言う彼女に日下部はありがとう、と頭を下げ「本当に先輩は関係ないし、私が考えたってどうにかできる話でもないんだけど……」と前置きした上で、自分の心に引掛かっている事を吐き出した。

「……これ本当にここだけの話にして欲しいんだけど、約束してくれ

る?」

「ええ」「勿論」「はい」

「ありがと。……実はね、『倫理委員会』が最初、報道するようになって命令したことって先輩の事だけじゃなかったらしいの」

「と言うと?」

「——『百鬼先輩が不正して選抜戦を勝ち上がってる』……そう報道しろって命令したらしいの」

「——ッ!」

その言葉に三人とも目を向いたが、一番顕著に反応したのは珠雫だった。

「百鬼先輩が不戦勝で勝ち上がってるのも賄賂を渡してるから。生徒会長にも珠雫ちゃんに勝てたのも八百長をしたからだって……」

「——私は私にできる全ての事をやって、彼に挑みました。その上で、私はあの人に負けたんです。なのに……そんな私たちの戦いを汚そうとしている連中がいると?」

珠雫の顔には明確な怒りが浮かんでいる。

それも当然だ、と彼女以外の三人は思う。

彼女は一輝達のグループの中では感情に流されず、冷静に物事を判断できる方ではあるが一端の戦士である。

自分達の全身全霊を尽くした戦いに、鬪争の本懐をまるで理解していない連中が勝手知ったるように『黒鉄珠雫は百鬼紫苑の甘言に応じてしまったから負けたのだ』と吹聴しようとするなど……腹立たしいにもほどがある。

彼女の周囲が比喻抜きで冷え込んでいく。テーブルには霜が降り、彼女の怒りが——、

「落ち着きなさい、珠雫」

爆発する寸前、有栖院が彼女の肩に手を置いた。珠雫の怒りが霧散していく。

「まだ話の途中でしょ。怒るのはそれからでも遅くないわ。ね?」

「……ごめんなさい、アリス」

「いいのよ。あなたが怒る気持ちだってわかるもの。……ごめんなさ

い、かがみん。ひとつ聞きたいのだけど、今回の騒ぎに彼の名前は一切出てきてない筈よね？」

有栖院が自分の気になったことを指摘する。

今回のマスメディアが囃し立てている事において、百鬼紫苑が不正をして勝ち上がっているという話どころか、彼の名前は一切マスメディア上で取り上げられていない。

騎士達の間では『昨年七星剣舞祭ベスト4だった《雷切》が無名のFランクに敗れた』という噂が流れ、それが多少ネットの海に散見しているが……それだけだ。破軍にマスメディアが来たことは有栖院が知る限り見たこともないし、これから来るという話も聞かない。

今回の騒動において、彼は完全に無関係の筈だ。なのにどうしてここで彼の名前が挙がる？

「そもそもアイツって『黒鉄』の関係者なの？」

「ううん。百鬼先輩に『黒鉄家』との関わりは一切ないよ。

強いて言うならあの人の幼馴染みの瀧華薫さん——正確に言うなら瀧華家になるけど、そこが昔『黒鉄家』の分家だったくらいかな。でも今では完全にその繋がりも途絶えてるし、今の瀧華って薫さんしかない。肝心の薫さんも今は昏睡状態だから、『黒鉄』の圧力で八百長なんて出来る筈ない」

彼女は続ける。

「じゃあ百鬼先輩自身の家はどうなんだーってなると、彼のお母さんは十一年前の電車脱線事故の影響で精神病院にずっと入院してて、お父さんはちよつと良いところの会社の、それなりの立場に就いてる人だけど、それもお母さんの入院費用と生活費でわりとカツカツ状態。それに彼が十一年前の事故の精神的ショックで、ご両親との記憶を全部失ってから、百鬼先輩と彼のご両親の交流はほとんどない。絶縁状態って言うても良いくらいにね

あとは現在の彼の保護者である西京先生だけ……西京先生が八百長なんて協力するわけじゃないじゃん？」

西京も紫苑本人も生粋の戦士。

紫苑が使う剣術《瀧華一刀流繚乱勢法》の理念は『何がなんでも勝

て』というものではあるが、その『何がなんでも』はあくまでも『闘争』という最低限の枠の中での『何がなんでも』だ。八百長などする筈がない。

「それで答える順番がちよつと前後しちやつたけど、アリスちゃんの話う通り、今回の騒ぎで百鬼先輩の話は全く挙がってない。と言うのもこの八百長の話を『倫理委員会』の方から『表に出すな。そしてこのような話があったことも口外禁止とする』って言われたらしいんだよ」

「がつつり話してるじゃないの」

「だからここだけの話って言ってるじゃん。本当に話さないですよ？」

日下部の言葉に三人は頷く。自分達が信用されているが故に話しているのだと理解しているからだ。

「それが先輩達の記事が出来上がって、さあ刷るぞ！ って時に……丁度ステラちゃん達が怪物調査に海に行っていた前日くらいにそういう連絡が来たから、現場はてんやわんや……って話は興味ないよね」

「ええ。シオンの話は『倫理委員会』の方が報道するなって掌返ししてきたからだけど……なんで急にそんな事言ったのかしら？」

「確かに、それはそうですね。日下部さん、何か知っていますか？」

ステラと珠雫の言葉に日下部は「うーうー」と長く唸った後、更に声を小さくして言う。

「これは私の完全な推測なんだけど……たぶん『倫理委員会』に圧力をかけた何かがあったんじゃないかな。『百鬼紫苑にマイナスイメージをつけるな』みたいな感じで」

彼女の推測に、三人は絶句した。

つまり彼女は『紫苑の背後には『倫理委員会』より上の権力を持った何者かがいるのではないか』と言ったのだから。

「……本気なの？」

「そうじゃないと納得できないんだよ。あれくらいマイナスイメージを作れって言ってた『倫理委員会』が掌返しするのは。私も知ってから色々探ってみたけど……こういう情報って誰かがネットの掲示板

なりにリークして、面白おかしく燃やそうとするじゃん？　そういうのも全くなかったんだよね。情報の握り潰しが滅茶苦茶徹底してる。……それに」

「それに？　どうしたの？」

「……私の部屋にさ、紙が張ってあったんだよね」

『——それ以上詮索するな』

「……ってかかれた紙が」

「……ッ！　け、警察とか……！」

「たぶん無駄だね。相手はネットの海にすら、僅かな情報も残さず消し去る事が出来るんだよ？　想定してないわけがない。幸運だったのは、ルームメイトが気付く前にそれを私が紙を処分できたことだね」

日下部は痛感した。

ジャーナリストが知ってはならない真実に気付き、消されるのは本当に身近にある事なのだと。

そして一歩間違えていれば、自分がそうなっていたのだと。

「いやあ、あの時はマジで怖かったなあ……にやはは……」

そう言ってお茶らけた風に笑う日下部の手は……震えていた。じつとりと冷や汗が夏だと言うのに、彼女の頬を伝う。

「その後は……？」

「手を引いたよ。流石に突っ込んで良い相手とそうじゃない相手くらい見分けられる。今回は後者だね」

破軍学園のセキュリティはそれはもう強固である。

それを難なく突破し、日下部の部屋に侵入。脅迫文を残していくなど並大抵の者ではない。

「好奇心は猫を殺すって言うけど……弁えなきや……」

「……ごめん、カガミ」

「良いの良いの。気にしないで。寧ろ言えてスッキリしたよ。ずっと誰にも言えないんじゃないかって怖かったからさ……三人を巻き込んじゃうかもだけど」

「上等よ。どこの誰だか知らないけど、アタシの友達に手出したこと

後悔させてやるわ」

そんな時だ。

「ヴァーミリオン、ここにいたか」

「……………？ 理事長先生？」

ステラの背後から話しかけてきたのは、スーツを纏った長身の麗人。破軍学園理事長・新宮寺黒乃だ。

「昼食中悪い。少し良いか？」

「ええ。何かしら？」

「黒鉄の事だ。……………ここではなんだ、場所を変えよう」

そう言い、彼女を自らの仕事場に誘った。

◆ ◆ ◆

一方その頃、彼女らの話題の中心となっていた少年は。

「——てめえが《黒鬼》か」

「《瀧華一刀流繚乱勢法》の百鬼紫苑だ。お前は……………《剣士殺し》だな。

俺に何の用だ？」

「きまつてらあ。……………俺と戦え、百鬼」

嗤う髑髏の刺青をした男——《剣士殺し》倉敷蔵人と向き合っていた。

第21話

「そんな事のためにわざわざここまで来たのか。随分と暇なんだな、《劍士殺し》」

「ああ。貪狼^{ウチ}じゃ、破軍みてえな面白エ事やってねえからな。暇潰しに、今まで門前払いしてた雑魚と遊んでやったんだが——その雑魚が強くなつてたんだよ。見違えるくらいになア。……綾辻綾瀬。知つてんだろう?」

ベンチに座る紫苑に向かって、倉敷が歩みを進める。

無論、彼は破軍学園の部外者であり、ここに来るまでに何人もの人間に危害を加えている。当然学園の警備を担当している者が捕らえようとするのだが……彼は警備員を一睨みしただけで黙らせる。

まるで蛇に睨まれた蛙のように、彼らは動きを止める。

「そうか。アイツは挑んだのか」

「ああ。完膚なきまでに負かしてやったけどなあ。それで、吐かせてみたらお前の名前が出てきたんだよ。しかも破軍にダチがいる奴に聞いたら、ソイツは《雷切》に勝ったFランクだって劍士だって言うじゃねえか。——そりゃあ、挑まねえ道理がねえだろう?」

「受けたところで俺に何の利がある」

「ああ? 利だと? ——そんな物が鬭争に要んのかよ、《黒鬼》」

くっだらねえ、と吐き捨てながら倉敷は紫苑の胸ぐらを荒々しく掴む。決して軽くはない紫苑の身体が、片腕で持ち上げられた。

「強エ奴と殺し合いてえ。鬭争に必要なのはそんな殺意だけ。そんなもんもわかんねエのかよ」

「……」

「だが……どうしてもそれが要るつてんなら、用意してやるよ。綾瀬の実家の道場——テメエ、それが欲しいんだろ?」

「いらん」

彼の言葉を遮るように、紫苑が言う。それに倉敷は怪訝そうな顔を浮かべた。

期間が短かったとは言え、紫苑と綾瀬は師弟関係だった筈。そして

彼女の事情をある程度知っていて、その上で彼女を強くしようとしたのだから、綾瀬の道場は彼とて求めるものだろう。

彼が彼女の道場を取り戻し、そして綾瀬に譲渡すればそれだけで綾瀬は欲しいものを手に入れられるのだから断る理由がない。

「あの場所は——いや、お前が綾辻から奪ったものは、全てアイツ自ら取り戻すべきもの。俺が奪って何になる」

「だったら、何が望みだ」

「……俺が勝てば、綾辻の挑戦を受け続ける。何百、何千、何万回だろうとだ。毎回、手を抜かずにな。約束するなら、受けてやる」

「——！ ハッ、良いだろう。雑魚を相手し続ける約束をするだけでテメエと戦えるなら安い買い物だ」

「それと……『いい加減離せ』」

彼がそう言った途端、倉敷は紫苑の胸元から手を離し、飛ぶようにして距離を取った。

——それは反射めいたものだった。

(ありえねえ)

その反応に一番驚いたのは、倉敷本人だった。そして自身の背筋を伝った寒気にも。

……彼の胸中を占めていた感情は、恐怖だった。

まるで奈落の底を覗き込んだかのような原始的な感情。己の死に対する拒絶。それが紫苑の胸元を離れた理由であると自分の身体は訴えている。

(刀も抜いてねえ剣客相手にビビったってのか？ 俺が？)

倉敷蔵人は己が強者であることを知っている。

天から授かった戦闘——特に近距離戦闘——において必ず優位に立てる特性、そして暴力の才能。

それはただその力を己の衝動のままに振るうだけで、《最後の侍》綾辻海斗に一方的に勝利し、昨年の七星剣舞祭においてベスト8にまで勝ち上がった実績もある。

傲りでも、粋がっているわけでもなく、彼は己が強者である事を理解しているのだ。

そんな自分をただの威圧だけで退かせたこの男を見据え、彼は――

(上等だ)

笑ってみせた。

東堂刀華の代名詞である《雷切》を真正面から打ち破った男。曰く、破軍学園最強の剣客。

この程度やってくれなくてはつまらない。それにこれほどの男を斬り伏せれば、自分は今よりももうひとつ上のステージに上られるだろうという確信もあつた。

「なら今すぐにでもやろうぜ――」

「ちーつと待ちな。クソガキ」

「あア？」

自分と紫苑の間に割って入る女の声。興を削ぐなどそちらを振り向けば、そこには華やかな和装を着崩した少女。一見、学生に見えるほど小柄な女性ではあるが、その女を倉敷は知っていた。

――いや、魔導騎士を志しているものであれば知らない人間はいないだろうという有名人。

「寧々」

「よお、紫苑。なんか面白そうなことやってるねえ。ウチも混ぜてくれよ」

「――《夜叉姫》西京寧々」

環太平洋圏最強の騎士にして《重力使い》

破軍学園非常勤講師である西京寧々だ。

「ウチがいる学園で好き放題暴れている他校生がいるって連絡を受けて来てきれば……噂通りの狂犬っぷりじゃないか、《剣士殺し》」

「……俺を貪狼に突き返す気か」

「いや？　ちよつと前から話は聞いてたが、紫苑は合意したんだろ？　ならセンコーとしちや失格だが、摘まみ出す気なんか更々ねえよ。ただお前ら野放しにして暴れられたら、学園が滅茶苦茶になっちゃう。ウチはそれを止めようって出てきただけさね。」

だからウチが審判、及びルールを決定し、お前らふたりはそれに

従ってもらおう。それに納得できねえなら今すぐテメエを摘まみ出す」
「……わかった。道場破りの作法は俺も心得ている」

破軍学園に乗り込み、警備員や生徒達を蹴散らしながら《黒鬼》に戦いを挑む。自分がやった行いは一種の道場破りである。

そして道場破りを仕掛けた者は、道場の主——この場合は審判役である寧々だ——に従うのが礼儀である。

「結構。ほんじゃ移動すんぞ。ついてきな」

◆◆◆

紫苑達が向かったのは、第八訓練場。

そこでは次の試合に向けての清掃や、リングの修復などが行われている最中だった。

それらの指示を出していた折木有里は、西京達の姿を目にした瞬間目を剥いた。正確に言えば、その背後に控えていた倉敷に対してだが。

「さ、西京先生？ どうしてここに……それにあなたは、貪狼の……」

「ごめんな先生。5分くらいここ使わせてくんね？」

言うや否や、西京は粗方の事情を折木に説明した。

紫苑に戦いを挑みに来た倉敷を納得させるため、そしてそれを合意した紫苑に対して戦いの場を用意したいこと。加えて現在次の試合まで少しばかり時間があるのが、ここくらいしかなかったことなどを。

「なるほど……時間の余裕もありますし、西京先生がきちんと見張っていてくれるのであれば、私は構いません。ただしスケジュールもありますので……」

「わかってらあ。それまでにはきちんと帰らせっからよ。……ほんじゃ、ルール説明だ。耳かっぼじってよく聞け」

西京が提示したルールは以下の通りである。

制限時間は次の選抜戦、そしてそれに向けた準備などもあるため5分とする。

幻想形態で試合を行う。実像形態を用いた場合、即失格とする。

「それで肝心の勝ち負けの付け方だが——」

西京は自身の魔力を紫苑と倉敷に鎧のように纏わせる。

「これで決める」

「これってどういう事だ？」

「今お前らに纏わせたのは魔力の鎧。これを5分以内に削りきられた方、タイムアップになった場合は削られた魔力が多かった方が負けだ。ゲームでいうヒットポイントみたいなものだと思えば良い」

普通こういう模擬戦では、相手が倒れるまで試合を行うのが常だが、前述した通り今は試合と試合の休憩時間である。

しかし彼らほどの実力者同士になると、五分では互いに倒しきれない可能性が出てくる。そこで一種の勝ち負けの指標が、寧々がふたりに纏わせた魔力の鎧だ。

——これを使うのなら実像形態で試合を行っても良いのではないか、という意見もあるかもしれないが倉敷は他校の生徒。しかも学園に殴り込みをかけてきた男だ。

加えて現在は選抜戦が行われている最中。あらゆる怪我を治療する再生槽の使用は破軍生徒を優先するのが当然だ、と西京は語り、それに倉敷も頷く。

こんなにも下らないことで揉めて、紫苑との試合時間が短くなっては堪らない。

「そんなじゃ、ふたりとも開始線に立って霊装を幻想形態で展開しな」

「食い散らかせッ！ 《大蛇丸》！」

「——《亡華》」

西京の指示に従い、共に霊装を展開した。

倉敷は鉞のような形状の骨剣を、紫苑は赤黒い靄を纏った一振の日本刀を。

倉敷は自身の闘争本能を剥き出しにした笑みを浮かべ、対する紫苑はどこまでも冷静に沈黙を貫く。

(スカしたツラしてやがる)

奴の顔には昂りというものを微塵も感じられない。自分を、以前に勝利した《雷切》よりも下に見ているからか。

……それに怒りが湧かなかったと言えば嘘になる。しかしそれ以

上に——楽しみで仕方がない。あの余裕の顔を歪ませてやるのが。

(テメエも殺してやるよ。《黒鬼》……！)

「準備は良いな？ それじゃ——試合開始！」

西京の号令が為され、倉敷が《大蛇丸》を振るおうとした瞬間——紫苑が殺意を叩きつけた。

「——ツッ！」

風が吹き荒れたと錯覚するほどの濃密な死の波動。それ自体には攻撃性など微塵も孕んでいない、ただの威嚇。

だというのに倉敷は見た。——自身が巨大な黒い掌によつて握り潰され、絶命する光景を。そして自身の死に様を見、喜悅する鬼の姿を。

(んだったんだよ、さつきまでのツラは！)

何がスカしたツラだ。

ここまでの殺意を突き付けられた経験など彼にはなかった。七星剣舞祭でこれまで戦ってきたときも、激昂した《最後の侍》と戦ってきたときでさえも。

何より彼は殺意を心地好いと感じる人間だった。だからこそ闘争を楽しみ、そして求めていたのだから。

だというのに彼の荒々しい殺意に心地好さなど微塵もない。これまでの殺意が兇戯のそれであると感ずるほどに、隔絶したそれであった。

初めてだった。これほどまでに——死を身近に感じたのは。

身体の震えが抑えきれない。《大蛇丸》を握る手が、じわりと汗で湿る。

そしてそれを見逃す紫苑ではない。

リングを踏み締め、飛ぶように一気に間合いを積めた。そうして刹那の間に、紫苑の領域——近距離戦闘の間合いに倉敷を引きずり込む。

僅かな烈帛の気合いの息を吐き、繰り出すは上段からの振り下ろし。名があるほどの技ではない、ただ幾年もかけて積み上げた堅牢な基礎に裏付けされる一撃。

だがそれゆえにその剣は重く、そして疾い。

それを——倉敷は容易く回避して見せた。

紫苑の覇気に呑まれたのなら……否、呑まれていなかろうと、決して多くの伐刀者ならば回避できないだろう一刀。それを彼は回避できない筈のタイミングで避け、

「《蛇咬》 ツッ！」

あろうことか反撃の一撃——否、二撃を見舞ってくる。

《蛇咬》の名に相応しく、挟み込むようにして振るわれる二撃は、全くの同時と判断させるほどに速い。

しかしその速さに対して、その二太刀はあまりに杜撰すぎた。剣術などまるでかじっていない、素人剣術でございという手振りで振るわれるそれ。如何に速かろうと、そんなものを迎撃するのは紫苑にとつては容易い。

『カワード・インステインクト究極生存本能』での先読みがあれば尚更だ。

紫苑は振るわれる一刀目を弾き返し、一步踏み込む。

『超攻撃特化型剣術』と謳われる《瀧華一刀流繚乱勢法》の踏み込みは日本——否、世界中に数ある剣術の中でも随一の速さを誇る。

無駄の一切を切除し、最短距離で踏み込み、横薙ぎ一閃。

それを胴体ながら空きの倉敷では防げる筈もなく——、

「ハッハー——ッ！」

そんな道理を目の前の男はいとも簡単に蹴り飛ばした。

戻ってくる筈のないところから彼の刃が戻り、横薙ぎを防御。短剣ほどにまで間合いを短縮した《大蛇丸》が《亡華》と衝突し、甲高い音を奏でる。

そしてそこ——超近距離は紫苑ではなく、倉敷の間合いである。

「オラオラオラオラアッ——」

「チッ」

短剣の間合いから振るわれる、回転の速い高速連撃。前述した通り、彼の振るう剣には理合いがなく——言うなれば肉体性能に任せた子供の棒振りのような物だというのに、彼は技の出が極めて速い。

それこそ、間合いの不利はあれど攻撃を得意とする紫苑が刃の間合

いで遅れを取るほどには。

紫苑の剣を掻い潜り、ひとつ、ふたつと大鉦が魔力障壁を削っている。

——一旦距離を取らねば不味い。

その辺り、紫苑は極めて冷静だった。

彼は最初に仕掛けたように、彼に殺気を飛ばす。間隙を縫い、強引に剣を振じ込んでやるとわざと——故意であると思わせない程度にはあるが——剣に力を込め振るった。

紫苑の剣気に倉敷もまた反応した。ほんの刹那、最初に見た情景が頭を過るが、くだらねえと吐き捨て彼の一撃を力づくで押しきってやると負けず剣を振るう。

衝突音。

倉敷の一撃に込められた威力さえも利用し、紫苑は後ろに下がった。

それに倉敷は追撃しない。先程の荒々しい剣のぶつかり合いが嘘のように、ふたりの間には静寂が流れた。

野次馬めいた観客達があれやこれやと騒いでいるが、思考に何ら影響はない。

(——速いな。一輝と同じ《身体能力強化》系統の能力か? ……いや、どれほど強化しているかがあのタイミングでの防御は間に合わない)

紫苑は眼前敵の能力の解析に思考をやる。

(となると別だな。《未来予知》それに類する能力だろう。あそこで間に合わせたのは《予知》に加えて魔力放出で間に合わせたのか) だがそれなら然したる問題にはならないだろう。

——対応できる速度以上の連撃で押し潰してしまえばいい。

たとえば未来を読んでいようが、当人が処理できる容量以上の攻撃を叩き込み続けなければいずれ許容範囲を超えて潰せるだろう。

何よりそれは『超高速連撃を以て相手を圧殺する』という《瀧華一 刀流繚乱勢法》の理念そのもの。紫苑が得意とすることだ。

だが、これはあくまでも予測。頼りにしすぎるのは愚策だ。

それよりも現在わかっている事に目を向ける。

(奴がやったのは刀身の短縮。となれば伸長も出来るな)

相手の戦力を鑑みた上で、紫苑は勝つために身体に適切に燃料を振り分ける。

戦闘を行うと決まってから既に味覚はカットしていた。

その分のリソースを視覚、聴覚、嗅覚に4:3:3の割合で配分していたが、それに修正を加える。

今回の相手は毒物やガスのような物質を用いて来ないだろうと推測。嗅覚に回していたエネルギーを移譲し、加えて嗅覚を二割削減。

次いで視覚の中でも色を削ぎ落とし、取得情報を少しでも軽くする。聴覚はそのままに、しかし余計な情報が入ってきているため、必要な情報を全て覚醒の無意識に放り込むようにする。

色の識別や不要な音情報の取得に使っていた動体視力に回し、蔵人の剣を目で捉えられる程に強化。

そして配分で出てきた余剰エネルギーをすべて——反射神経に回す。

普段ならば、よほどの強敵相手——長期戦が愚策となる相手か、そうしなければそもそも刃を交えることが難しい相手にしかやらない反射神経強化。

否——本来の反射神経の速度に戻す、と言った方が正確か。

反射速度を早くする——それは諸刃の剣である。

確かに反射神経が速くなることはアドバンテージ……紫苑のように近距離を主体としている騎士になればなるほど、その恩恵は大きくなる。何せ敵が一度行動する間に、複数回行動することができるのだから。

しかし最初に述べたように良いことばかりではない。

その欠点は即ち——体力の消費が極めて大きくなる、ということだ。

上記の通り、反射速度が速くなれば常人が一度のアクションを行う間に、複数回のアクションを起こすことが可能だ。しかし、そのアクションを行うための体力が減ってくるわけではない。

反射速度を引き上げることが即ち、短期決戦に特化すると同義であり、また長期戦を捨てる行為である。

やっている事は先程紫苑がやったような、肉体のリソースを振り分けることと同じ。

そして……どちらかといえば紫苑は長期戦を苦手としている騎士だった。

それは単に魔力量の少なさ。

《瀧華一刀流繚乱勢法》の使い手となるべく剣術も魔力制御技術も磨いた紫苑ではあるが、それでも平均の十五分の一という魔力量は継戦能力を著しく低下させている。

ならば長期戦の目を捨て、短期決戦に特化すればいいじゃないかと考える者もいるのだろう。しかし紫苑は万が一それで仕留めきれず、体力も魔力も尽きかけという状況に陥るのを良しとしなかった。

たとえ魔力が尽きようと、体力さえ残っていれば《瀧華一刀流》で仕留められる可能性があるからだ。

だが——今回の模擬戦は違う。

五分というタイムリミットが存在する。これは紫苑のにとって非常に有利な条件だった。

普段の戦いがゴールの見えない長距離のランニング（もしかしたら短距離走レベルの短さで済むかもしれないが）であるならばこの試合は明確に短距離走であると定められている。

ならばわざわざ長距離走の体力配分で走る理由はない。

更に今日は選抜戦の予定も入っていない。

ならばこの勝利のために全力を注いで良いということだ。

（——斬る）

紫苑は明確な殺意を抱いて、蔵人に突貫した。

「——ッ！ 《蛇骨刃》ッ!!」

だが倉敷もまた、彼の接近を許そうとはしない。

彼は自身が最も得意とする近距離戦で、紫苑に一太刀も与えることが出来なかった事実を非常に重く見ていたからだ。

蔵人は刀身を伸長させ、それを鞭のように振るう。

劍の届かない遠距離から一方的に攻撃を仕掛け、紫苑の疾駆を止めようとする。

だが紫苑とて超一流の劍豪。そう大人しくは止まってやらない。紫苑は歩みを止めず、その一撃を軽く弾き飛ばした。そのまま間合いを詰める。

遠距離攻撃を行えるほどに刃を伸ばした分、攻撃の回転率がひどく落ちてきているのだ。動体視力を平時よりも強化した紫苑にとって、その攻撃は文字通り止まって見える。

当然その特性を倉敷も理解している。

だからこそ彼は自身の素質と、『大蛇丸』の本当の能力——『刀身操作』を併用して、無数のフェイントを加えながら攻撃しているのだが……紫苑はその悉くを打ち落とす。

(ありえねえ……！)

倉敷の心をじわりじわりと恐怖が侵食していく。

自身に与えられた天からの贈り物が全く通用しない。

『暴力の天才』と謳われた己の攻撃の一切がすべて叩き落とされる。

(舐めんじゃねえぞッ！)

だが疎みだす己の心に渴を入れ、蔵人は己の魂を操作する。

仕掛けるは背後からの強襲。弾き飛ばされ、劍の間合いに捉えたところ……眼前敵が空きの身体に注視したタイミングで、奇襲を仕掛ける！

それに対し紫苑は——『亡華』の鞘の形状を変化させ、背中を覆う盾としてその一撃を防いだ。

(アイツの霊装！ 形を変えられんのか！)

気づいた時には既に紫苑の間合い。繰り出されるは逆袈裟斬り。それを蔵人は後ろに飛び退くことで回避しようとするが——、

(『鳳穿華』)

飛ぶ斬撃が彼を追い、西京が纏わせた魔力装甲を削り取る。

何故、という思案。それによって発生する刹那の硬直。それを見逃す紫苑ではない。

一瞬で踏み込み、再び彼を『亡華』の間合いに捉え、刺突を見舞う。

瞬間、蔵人の姿が紫苑の視界から消える。

普通の、否、超一流の剣客だろうとこのタイミングで敵を見失ったことに困惑するだろう。しかし彼にそんな事はある得ない。

自分の死を恐れる絶対的な嗅覚が、このままであればお前はこうに死ぬと教えてくれるのだから。

——下。首を撥ね飛ばされて死ぬ。

「ラァ——！」

上体を寝かせたまま振るわれる一撃。それを紫苑は《亡華》で受ける。

(体勢を崩した——！)

蔵人はしてやったりと笑う。

辛うじて防御を間に合わせたようだが、その表情は険しい。余裕がなくなっている証左だ。

(だが、それも当たり前なんだよ)

彼は畳み掛ける。仕掛けるは型も何もない自らの衝動に任せた乱撃。

ここは無理をする場面ではないと、体勢を崩した紫苑は判断し防御に注力する。

彼は頭上に刀を構え、振り下ろされる大鉈を受けようとする。そこそが蔵人の狙いだとも知らずに。

(殺った！)

そこで彼は大鉈の軌道に大幅な修正を加える。

頭上からの攻撃を、胴体を薙ぐ攻撃へ。これを紫苑が避けられる道理はない。

「は？」

——そんな彼の思惑を、紫苑は真正面から蹂躪する。

紫苑は自身本来の反射神経と、予知の領域へと足をつっ込んでいる第六感を以て彼の一撃を暖簾を潜るような気軽さで避ける。

紙一重という言葉すら生温い、最適距離で彼の一閃を回避し、

「《八重椿》」

紫苑が誇る剛撃にて、倉敷の身体を大きく吹き飛ばした。

(ああ、始まった)

その様子を見守っていた寧々は、小さく嘆息する。それはこの戦いの決着を完全に理解したが故。

即ち——ここからは紫苑の独壇場になると。

西京は非常勤ではあるが、破軍学園の教師と言う立場上、他校の生徒の情報も多少は仕入れている。その中に蔵人の情報もあった。

今年の七星剣舞祭においてベスト8という優秀な成績を修めた彼の強みは——《神速反射》という極めて凶悪な素質によるものである。それは常人のおよそ六倍——約0.05秒という速さの反射速度を有しているという、シンプルなもの。しかしその凶悪さは、紫苑が意図的に反射神経の速度を落としていたものを、元に戻したときに語った通りである。

今回の彼の敗因、それは——自分と同じような事が出来る人間が存在すると考慮しなかったこと。それに尽きるだろう。

紫苑の本来の反射速度はおよそ0.08秒と蔵人のそれには及ばない。しかし《究極生存本能》と《瀧華一刀流繚乱勢法》がその差を埋めるには余りある。

(まあそれも仕方ないっちゃ仕方ないねえ)

誰が予想するだろうか。後天的に人類の限界を超越した反射神経を身に付けた人間がいるなんて事を。

語るまでもないことだが、紫苑の反射神経は最初は常人のそれ……否、それよりも遅いくらいだった。しかし彼は反射神経を鍛える特訓を続け、人類の限界点に到達してもなお鍛え続け、彼の努力は《魔人》となった頃に実を結んだ。

(あえて名付けるなら——エンデヴァーカウンター《偽神速反射》ってところか)

そして《偽神速反射》は《瀧華一刀流繚乱勢法》と極めて相性が高い。それは——目の前の光景を見れば明らかだろう。

「ぐっ……ぎ、あ……ッッー！」

戦音が訓練場を席卷する。

蔵人は《神速反射》を以て何とか防御を成立させているが、それさ

えも薄氷の上に成り立つそれでしかない。一切攻勢に出ることは出来ず、退くことすらも許されない。

蔵人は苦悶の表情を浮かべる。呼吸を行うことすら出来ない。そんなものをしていけば、喰い殺されると理解しているから。

対して連撃を見舞う紫苑の動きは――、

『綺麗……』

『ああ、まるで……踊ってるみたいだ……』

精練された舞の如く。

剣がぶつかる鋼の音と鬪争の場にあつて然るべき殺気。それが不相応に見えるほどに、その動きは流麗である。

これこそが《瀧華一刀流》創始者、瀧華想蔵の娘であり超一流の舞踊者だった瀧華蓮華が編み出した剣術舞踊。

相手に攻撃させず、退くことも許さず、眼前敵を押し潰す《瀧華一刀流》が『超攻撃特化型剣術』と謳われた所以であり、瀧華薫、延いては百鬼紫苑の必殺。

――《刃桜舞い》。

舞い踊り繰り出す連続剣。

それだけでも極めて凶悪な技ではあるが《瀧華一刀流繚乱勢法》における《刃桜舞い》はそれを更に昇華させている。

それ即ち――『斬撃の倍化』

薫と紫苑の《刃桜舞い》には不可視の斬撃が複数伴うのだ。

その数は十も振るえば五十は超えよう。それが文字通り目にも止まらぬ舞いと一緒に繰り出されるのだ。

その凶悪さは、寧々の師である南郷寅次郎をして「あれを無傷で防ぎきれぬ人間はおらん」とまで言わしめるほど。

学生騎士に防ぎきれぬ代物ではない。

むしろ善戦している方だと寧々は蔵人を評価する。

しかし……その表情には明確な怯えが浮かんでいる。

(まあ、それも仕方のないことさね)

最初に紫苑が殺気を飛ばしたときの反応で、寧々は蔵人のもうひとつの強さに気づいた。

それは……死への鋭敏な嗅覚。

それこそが今の紫苑を相手に戦闘を継続させられている要因であり、ロクな剣術を学んでいないながらも《最後の侍》綾辻海斗を一方的に粉碎した天性の戦闘センスの正体である。

彼は迫りくる『死』への質や量などから攻撃を押し量り、それを《神速反射》にて回避または迎撃していた。

そう——紫苑の《究極生存本能》と同様の力を彼は有していたのだ。だが……幸か不幸か、蔵人には紫苑と異なり才能があった。天から与えられた素質のみで、大抵の相手を蹂躪できるほどに。

(だからこそ、アイツには紫苑と違って『死』への耐性がねえ)

生まれながらの素質で大抵の相手を打ち倒せた。それは逆に言えば苦戦した経験が極めて少ないとも言える。対峙しただけで『死ぬ』と思わせた相手との戦闘経験など言わずもなだらう。

まるで嗅覚に優れた犬が強烈な悪臭を感じたとき、痛みすら覚えて悶絶するほどに。『死』への嗅覚が優れているという事は、それに対する恐怖などを一切誤魔化せない事と同義である。

紫苑は《究極生存本能》を会得するまでに何千回もの『死』を感じ、それに適応したが、蔵人にはその経験がない。

だからこそ『死』を感じたときに身体が竦む。怯え、身体から力が抜けていく。——恐怖が、身体を侵食する。

(同じ理屈の力だろうと、どこぞとも知らねえ何者かにただ授けられただけの奴と、勝つために死に物狂いで掴み取った奴。差が出るのは当たり前さね)

人類の限界を超えた反射神経、死に対する絶対的な第六感。

同様の力を持ちながら、決定的な差を生んだ要因はたったひとつ。——その力に至るまでの過程である。

◆ ◆ ◆
「あや、綾瀬っ……ちよつと待ってっば……！」

ルームメイトから懇願される。けれど綾瀬はそれに耳を貸さなかった。貸してなんていられなかった。

速く行かないと間に合わない。その一心で、彼女は走る。

そしてたどり着いたのは第八訓練場。

自らの師であった百鬼紫苑と、仇敵・倉敷蔵人が決闘を行っている場所だ。

観客席までの階段を煩わしいと、魔力による身体能力強化まで行って駆け上がり、そして——彼女は見た。

「がっ……はっ……！」

——百鬼紫苑の剣が、倉敷の身体を大きく切り裂いたのを。

幻想形態特有の赤い光《血光》が蔵人の身体から舞い、苦悶の声をあげて彼はリングに倒れる。

「そこまでッ！ 勝者、百鬼紫苑！」

決着がついたと、寧々がジャツジを下せば紫苑は刀を下ろした。反射速度を戻してからは一太刀も食らわなかったとは言え、その体力と《刃桜舞い》による魔力消費は些か大きかった。

汗で張り付いた髪を乱雑に掻き上げ、《亡華》を消した。

「ハア……」

「お疲れさん。ほれ、紫苑。ダチが来てんぜ？」

寧々は言いながら蔵人を背負い、そして彼の最後を指差す。

そこには荒い息を吐く、綾瀬の姿があった。視線が合う。

「百鬼くん……！」

彼の名を綾瀬は小さく呟いた。

彼女にとっては独り言だったが、彼の耳はそれを確かに拾った。どうしてこんな事をしたの、そう言いたげな声だった。

それに紫苑は答えない。ただ——彼女を指差した。それだけだった。

「良いのかい？ なんも言わなくて」

「これで伝わる」

紫苑がそう言えば、寧々は「そうかい」とにやりと笑って蔵人の身体を紫苑に預けた。重いから持て、という事なのだろう。

彼は溜め息を吐いて、気絶した彼を運んでいった。

綾瀬は紫苑をそのまま見送った。そしてその一分後程に、彼女の

ルームメイトも綾瀬に追い付いた。

「はあ……綾瀬、速いって……。私みたいな普通の女の子にも気を遣って欲しいんだけど?」

「あ、うん。ごめんね」

「まあいいけど。それで、彼とは話せたの?」

「いや、話せなかったよ」

「そっか、そりゃ残念」

「いや……そうでもないよ」

そう言い、微笑む綾瀬の様子にルームメイトは頭上にクエスチョンマークを浮かべる。

「さ、早く帰ろう。帰って特訓しなきゃ」

「え、マジで? もうちよつと休もうよ」

そんな暇はない、と綾瀬は訓練場を去る。それは彼が自分を指差した理由を理解したが故。

『次は、お前が勝て』

そう彼は言ったのだから。

第22話

「——何を呆けておるか!」

酒焼けした怒鳴り声と共に、顔面に査問員用の飲料水をぶちまければ、一輝は目を覚ました。

「査問中に居眠りなど不真面目にもほどがあるわ!」

自分の耳元で怒鳴るのは、眼鏡をかけた小太りの中年。彼のがなり声は非常に大きく、お世辞にも広いとは言えない部屋によく響いた。

だがそんな彼の声さえ、今の一輝には遠かった。

二週間にも渡る長期の監禁。何十回も繰り返される問答に一度として聞き入れられない主張。いずれも人間の精神を削り取るには十分すぎるほどの苦痛だ。

——けれど、か細いながらも確かな心の支えが彼にはあった。

あれは確か拘留されてから四日が経過した頃だっただろうか。

それまで彼の食事は、カロリーバー二本というあまりに少ない物だった。水分の摂取も制限され、何故か毎食支給されるはずの飲料水がどこかに紛失してしまうそうさ。そして一輝が閉じ込められている部屋は数週間前から断水中で、お手洗いも水が流れない。

そんな地味な嫌がらせを受けていたのだが……ある日、長時間の査問を終え、部屋にあるパイプ椅子に座っていたところ突如として食料と、飲料水が入ったペットボトルが出現したのだ。

それから毎日0時になると、食料と飲料水が転送されてくるようになった。食べ終わったゴミはベッドの下に置いておけ、と一緒に送られてきたメモに従っておけば、翌日の早朝にはゴミなどが一切消えている。

おそらくは《物体転移》^{オブジェクト}の能力を持った伐刀者が、自分を助けようとしてくれるのだろうが……まず彼の知り合いに《物体転移》の異能を持つ人間はいない。

そもそも自分をここまでして助けようとしてくれる人間に心当たりがなかった。まず自分を助けようとするという行動自体が、極めてリスクのある物だったから。

(誰かはわからないけど、ここから出たらお礼を言わないといけないな……)

目の前の男達が何かを言っている。上述したように、何十回も繰り返した問答だ。それに対しての返答すらも最早テンプレートが仕上がっている。

彼はどうせ聞く耳を立ててないのだから、必要最低限——ステラとの交際を不祥事だったと取られるような発言をしないようにだけ注意し、残りの思考は最近あった事へと向いた。

一番印象的だった……というよりも、心に大きなダメージを負ったのは一週間前の、実父・黒鉄蔵との面会だろう。

『何も出来ないお前は何もするな』『私に認めて欲しいといったな。ならば——今すぐ騎士をやめろ。一輝』

何も出来ない者には何も出来ないりの役目がある。その範疇を超え、中途半端に成果を出すお前は組織という肉体に蔓延る癌なのだという蔵の言葉。

シヨックだった。

こんな事を言われるくらいなら『Fランクの息子など、黒鉄家の面汚しだ』と口汚く罵ってくれた方がありがたかった。そこにあるのが失望であるならば、自分は少なくとも、本当に僅かながら期待されていたという事なのだから。

そこには好意も悪意もない。当たり前だ。誰が路傍の石に感情など向けようか。

詰まるところ一輝は実の父親にとって——どうでもいい存在だったのだ。

その事を知ってから一輝の調子は目に見えて悪くなった。

心は勿論だが、何よりも身体が悲鳴を上げ始めた。今は微熱と頭痛、そして咳程度で済んでいるが……このまま病院に行かなければ症状は更に悪化するだろう。

問題は、目の前の男達がそんなことを絶対に許しはしないだろうという事だが。

「げほっ、げほっ——」

「何を咳き込んだるかこの軟弱ものがア!!」

「ぐっ……!」

咳を耐えきれなかった一輝の腹部へ、中年の男の拳が突き刺さる。普段ならば堪えもしなかったのだろうが慢性的なエネルギー不足と体調不良が重なり、膝から崩れ落ちる。

そして中年は彼の胸ぐらを掴み、顔面に拳を叩き込もうとして……。

「まあまあ。その辺りで勘弁してあげてくださいいな」

席を立った赤座が、一輝を殴ろうとした男の腕に手を添えて制止する。

そして彼は一輝に視線をやり、特徴的な笑い声を漏らす。

「んっふっふ、随分とお辛そうですね」

「……………」

「これだけ査問が長引けば仕方ありません。ですが……これは全て君のためなのですよ。君が立派な騎士だということ世間に示すために、我々は査問を開いているのですから。……しかし、このままでは埒があきません。

そこで私は考えたのですよ。君の適性について疑問を持っている者達全てを黙らせることが出来る素敵な方法を。知りたいですかあ？ 知りたいですよねえ？」

豚のように醜悪に笑う赤座。

どうせろくな事ではないが、その方法とやらを聞かなければ話しは進まないのだろう。

「なんなんですか、その方法は……」

「——『決闘』ですよ」

「……………」

『決闘』

それは古来からの騎士の風習であり、決闘による決定は騎士にとって絶対である。

どれほど道理を外れた無茶であれ無理であれ、決闘によって決められた事には従うのが騎士の不文律だ。

それは日本だけではなく、連盟に所属する国でも同じ事。

決闘において一輝が勝利することが出来れば、最早誰も一輝の騎士の適性に対して文句を言うことは許されない。

「明日の選抜戦最終戦。そこにこの事態の全てを委ねましょう。」

しかし……君の相手は三年とは言え無名の騎士。君の力を証明するにはあまりにも弱すぎると言わざるを得ません。それではこの騒ぎに関心を持つ者達が納得しない。この決闘には相応の役者を用意する必要があります」

「げほっ……誰なんですか、その相手は……」

聞くと、赤座はこれ以上ないほどに笑みを深くし——その相手の名を告げた。

「我々『倫理委員会』から指名する相手は——スリーピングウィッチ《眠りの魔女》西園寺栞です」

それは一輝の好敵手である《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンを掌で転がし、圧勝してみせた魔女。

自らの能力である《模写》を鍛えに鍛え抜いた結果、技の技量だけでオリジナルを上回る出力を出せるようになった、破軍学園随一の騎士。

……一輝が万全の状態であろうと鎬を削るだろう相手だ。

「私が、黒鉄さんと……」

そして同時刻。破軍学園理事長室において、栞もまた対戦相手の変更を新宮寺から告げられた。

「……随分と直接的な手を打ってきましたね。シリウス・ヴァーミリオン陛下が来日されるまでに決着をつけるつもりですか」

「……！ 知っていたのか」

「ええ。ある程度は」

ヴァーミリオン皇国国王であるシリウス・ヴァーミリオンは……こう言うてはなんだが親バカである。あの国は国民全員が大なり小なりそういう気質だが、彼のそれは一線を画している。

故にこの騒ぎで彼が大人しくしている筈がなかった。彼は政務を

片付け、日本に乗り込むと言ってから二週間ほど。ステラ曰く、来日できるのはおそらく来週だろうとの事なので、そこまで粘りきれれば良いと新宮寺とステラ、そして一輝も考えていたが……連中はそれを許さなかった。

「私との決闘……彼は、受けたんですよね？」

「ああ」

「でしようね」

というよりは受けざるを得ない状況を作り上げていた、と言う方が正しいか。大方、既に決闘の事をシリウスに決定事項として通達していたんだろう。

汚いやり口だ。

「ないとは思いますが、私が何かを賭けさせられると言ったことは？」

「ない。そも、私がそんなことはさせない。……本当ならば、黒鉄の奴も守ってやらなければならなかったのに……！」

新宮寺は乱雑に吸っていた煙草を灰皿に押し付ける。その仕草からは彼女の怒りがこれでもかと伝わってくる。

「……西園寺。お前にとつて黒鉄との戦いは選抜戦最終戦でしかない。私が言っても説得力は欠片もないかもしれないが……全力で勝ちに行け。それが誠意になるだろう」

「ええ。無論ですよ。……もう退室しても？」

新宮寺が頷くのを見、葉は「失礼します」と言って退出する。

そして、小さく溜め息を吐いた。

「……やはり、良い気はしませんね」

眩き、彼女は紫苑が待つ自分の部屋に帰っていった。

◆ ◆ ◆

「……して、彼の様子はどうですかねえ？」

深夜。

粗方の職員が帰宅した頃、赤座は部下の年若い男に問いかける。彼とは言わずもがなだろう。あの名家の面汚しであるフランク——黒鉄一輝の事だ。

「正直……あまり芳しくはありません。自白剤を使っただけですが、我々の予想以上に奴は耐えています。症状も本来であれば肺炎、もしくはそれ以上になっても不思議ではありませんが、現状では少し重めの風邪の域を出ていません」

「チツ……無駄に頑強ですねえ、あのガキは」

赤座は豚のように肥えた顔に、明確な不快感を滲ませる。彼が意固地になっているせいで、自分の手間が更に増やされているのだから当然と言えば当然だが。

雑魚は雑魚なりに素直に私の踏み台になれば良いものを、と赤座は毒づく。

「……赤座委員長。奴の事はともかくとして……よろしかったのですか？」

「何がですかねえ」

「《黒鬼》百鬼紫苑の事です。あのまま手を退いても……」

「……私として奴の事は不愉快ですがねえ。仕方がないでしょう、ご当主様から注意を受けてしまいましたから」

《黒鬼》百鬼紫苑。奴には昨年、煮え湯を飲まされた。

黒鉄一輝を授業から閉め出すために行われた、破軍学園内における規則——実技授業を受けるための最低基準の設定。

この基準を設けるための工作に赤座も協力していたのだが……その時、厳から厳重注意を受けたのだ。

『授業から閉め出すのは一輝だけ。百鬼紫苑は巻き込むな』と。

正直、訳がわからなかった。

奴は世界最弱の騎士。厳が嫌う『相応を弁えず、組織全体を狂わせる歯車』だろうに、彼はそれを容認し、あろうことか彼に直接、謝罪まで行ったのだから。

何が黒鉄厳をそうさせるのか。百鬼紫苑とは一体何なのか。

事情を聴こうにも、『お前達は知らなくて良いことだ』の一点張り。納得など出来る筈がなかったが、彼の心証をこれ以上悪くするわけにも行かずあの時は退いた。

しかし……紫苑に味わわされた屈辱を赤座は決して忘れてない

なかった。

だからこそ、赤座は一輝を貶める時に、紫苑の社会的地位もまた地に落とすことを画策した。

『倫理委員会委員長』を敵に回すとどうなるかを思い知らせてやるために。しかし……その結果は実を結ばなかった。

はじめは『百鬼紫苑からは手を退きましよう』という部下からの悲鳴だった。お願いします、私も命が惜しいんですなどと懇願してきたときは耳を疑ったが……部下がひとりふたり死んだところで赤座にはどうでも良かった。そんなものよりも自身の出世の方が大事だった。部下ひとりふたりいなくなったところで、十分に採算は合う——いや、それ以上だと確信していたからだ。

しかし……再び黒鉄巖に注意された事でその計画は頓挫した。

巖とて百鬼紫苑に良い印象は抱いていない事は確信していた。だからこそ、あれやこれやと彼を説得しようとしたのだが……彼はこの騒動を上手く収めた暁には、最初に約束されていたポスト以上の地位を用意すると約束してくれた。

ならばわざわざ彼に固執する必要はない。

二元より百鬼紫苑は、一輝クンを潰すついででしたからねえ。広報長の次の足掛かりに出来れば良いと考えていたのですが……その手間は省けましたし、手出しは無用です。二兎を追って、一兎も仕留められぬようでは本末転倒ですから。んっふっふ……」

「……赤座さん。この件が終わった暁には……」

「わかっていきますよう。私の口添えで、昇進を打診します。君は優秀ですからねえ」

「あ、ありがとうございます！」

部下が頭を下げるのを見、赤座は笑う。自分に頭を下げる人間を見るのは気分が良いと。そしてその機会は、自分が出世すればするほど多くなるだろうと。

(精々私の出世の役に立ってくださいねえ。一輝クン。んっふっふ……)

こんな薄暗い場所などとはあと一日でおさらばだ。

光の当たるところで、自分が多いに活躍する様子を頭に思い浮かべ、赤座は再び笑った。

——敵の言葉など、今の彼からは完全に抜けてしまっていた。

第23話

選抜戦最終戦。

今日の観客席はいつもの数倍の生徒達によって埋められていた。これまで無敗を貫いてきた十二名しか試合を行わないため、試合数そのものがずっと少ないのだ。

特に寧々と新宮寺がいる第一訓練場の賑わいは、他のそれとは一線を画すものであった。

それは学園生だけでなく、報道陣が入っていることも大きかった。黒鉄家次男黒鉄一輝と、ヴァーミリオン皇国第二皇女ステラ・ヴァーミリオンのスキャンダル。そして、その騒ぎに言いがかりをつけてくる者達を黙らせるために——という建前で、一輝の敗北する様を全国に報道することによって、一輝の騎士としての社会的地位を粉碎するために、赤座が引き込んだ者達だ。

「なあくーちゃん。今回の勝負、どうなると思う?」

リングを見詰めながら、寧々は隣の新宮寺に問いかける。その顔には一輝への懸念が滲んでいた。

「……正直、黒鉄は厳しいだろう。日本支部に向かわせた教師曰く、どこか体調を崩しているそうだったからな。そしてそれは西園寺も見抜くだろう。そこを彼女が突かないとは思わない」

彼女の恐ろしさは《模写》という能力の汎用性も勿論だが、突出した魔力制御技術とブラフを数多に敷き詰めた盤面操作技術の高さにあると新宮寺は読む。

その実力はあの《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンを掌で弄び、文句の付けようがない実力勝ちを収めたことから明らかである。

無数のブラフと相手の冷静さを奪う的確な言葉選び。それによって対戦相手を翻弄し、平時のコンディションを奪い、勝利する。

鍛え抜いた剣術と純粋な殺意、そして勝利への執念で相手の悉くを蹂躪する紫苑とはまるで対極。その戦闘スタイルは悪いウィットド・ウィッチ魔女を自称するに相応しい。

「だろうねえ。まあけど、黒坊だってそう大人しく負けてやるつもり

なんてないだろうさ。だから……力抜けよくーちゃん」
「……っ」

無意識に鬱血するほど強く握りしめていた手を、寧々に言われ緩めた。自分の生徒に対してあれほど好き放題させてしまったこと、そして彼を陥れるために自分の生徒が使われたこと。

未然に防げることはあった筈なのに、それに気付けなかった自分の至らなさが彼女を追い詰めていたのだ。

「この戦いがどういう結果に終わろうが……あの赤狸にはきっちり落とし前つけさせる。そうだろう？」

「……ああ」

「ウチらに出来ることなんざ見守ることくらいさね」

そう言つて、気を利かせた笑みを浮かべた寧々が凍りついたのはその直後の事だった。

『ご来場の皆様にお知らせいたします。』

西園寺葉選手対黒鉄一輝選手の試合時間となりましたが、まだ黒鉄一輝選手が控え室に到着しておりません。選抜戦規定に則り、今から十分以内に黒鉄選手の到着が確認されない場合、西園寺葉選手の不戦勝となりますので、ご了承くださいませ』

スピーカーから聞こえてきたのは、そんなアナウンス。

それに新宮寺は拳を自分の膝に叩きつけた。

「あの、下衆が……っ！」

「おい、くーちゃん。どうなってるんだよ、これは……」

「——赤座が黒鉄を連れてくるからと、迎えを断つたんだ。あの赤狸……どこまで私を愚弄すれば……!!」

◆ ◆ ◆

——黒鉄一輝は夢を見ていた。

夢だと認識できる夢……いわゆる明晰夢。

その中で一輝は、しんしんと雪が降る森の中を歩いていた。

(これは……あの時の……)

一輝は思い出す。

この景色は……己の夢の原点。曾祖父《大英雄》黒鉄龍馬と出会っ

た場所であると。

自分の居場所が家の中に無いことが嫌になって衝動的に家から飛び出して。そして迷子になって家に帰れず、このまま凍死するかというところで彼に助けられたのだ。

それにしても……何故今になってこんな夢を見ている？

久しぶりに黒鉄家の者に会い、彼らに追い詰められていく状況を幼少気の頃に重ねたのか。

それとも、桐原静矢との選抜戦の直前に見たような『自身の心の絶叫』か。

どちらにせよ関係ない。歩かなければ。歩いてこの森から抜け出さなければ。

強迫観念めいたそれが、一輝を突き動かす。

『——今すぐ騎士をやめろ、一輝』

『ごめん、黒鉄。……お前とは、もう仲良くできない』

自分の父親が、自分の元を去っていたかつての友人の声。

その他にも一年前に自分を徹底的に追い詰めた桐原の声が。

数多の声が、黒鉄一輝を否定する。ここで折れてしまえ。諦めてしまえ。

実の父親にすら何も望まれなかった人間が勝つことなど烏滸がましい。

ここで凍え死ねと。

だが黒鉄一輝はその全てを真つ向から否定する。

それは——自分の心の奥底から、炎のように燃え上がる想いがあるからだ。雪と共に降り積もる罵詈雑言のすべてを上書きするような暖かな言葉が脳裏に響くからだ。

『頑張って！ お兄様!!』

鈴の音のような玲瓏な声が、彼を奮い立たせる。

『今回の壁新聞は先輩の特集ですよ!』

あざとさすら感じさせる可愛い声だが、彼の背中を押す。

『……ここが正念場だよ、黒鉄くん!』

かつて自分が剣の手解きをした少女の声が、彼の手を引っ張った。それだけではない。

自分がかつて下した敵達が、昼休みに開いた武術教室に来てくれた友人や先輩達が、自分を学園に入れてくれた教師が。

多くの人が一輝の背中を押し、手をとって導き、病に侵された一輝の身体を支える。

そこに彼の歩みを止めようとする者などひとりもおらず、そして――

『一緒に行きましょう！ 騎士の高みへ!!』

何よりも愛しい者の声がして、彼の意識は現実世界に浮上する。

「……ん、あれ……」

自分は誰かに背負われていた。

その背中は逞しく、そして大きい。結われた白髪が、一輝の鼻先をくすぐった。

――その背中を、一輝は知っていた。けれど同時にあり得ないとも思う。

当然だ。その背中の主は――《大英雄》黒鉄龍馬は、もう十年以上に老衰で死去した筈なのだから。

目を覚ましたことに気付いたのか、黒鉄龍馬の姿をした何者かは自分を背中から下ろす。

随分と長い間寝ていたおかげか、連盟支部を出るときには極めて悪化していた体調も、少し身体が重い程度にまで改善していた。これならば西園寺栞との決闘にも、万全とは言えずとも彼女に誠意を見せるには十分なほどの力が振るえるだろう。

いや、と一輝は首を横に降る。

確かに体調が改善したのは、極度の緊張を常に強いられていた『倫理委員会』の監視の目を逃れられたこともあるのだろうが、一番の要因は――安心できる背中で眠ることができたからだ。

幼少期に彼と出会った場所が夢に出てきたことも、彼に背負われていたことが関係しているのだろうか。

「行ってこい、小僧」

……彼の声は記憶のままの声だった。何もなかった自分に、夢を与えてくれた、低くも優しい声音。どん、と力強く背中を押される。

その硬くなつた大きな掌と、そこに込められた想いが一輝に最後の
濁を入れた。

「待って——」

一輝と龍馬の間に一陣の強い風が吹く。思わず目を瞑ってしまつた。

目を開ける。そこには——黒鉄龍馬の姿はどこにもなかった。

故人である筈の龍馬が自分を背負い、そしてすぐに消えた。

夢でも見ていたと言われた方が納得するくらい、不可思議な体験
だった。けれど……彼の激励、あれは間違いなく本物だった。

気が付けば学園から十数メートル離れた場所まで来ていた。早く
行つて、栞と戦おう。そして——。

その一心で彼は歩みを進め、校門前まで辿り着いた。

あともう少し歩かなければ。そう思った一輝を、

「——お兄様！」

「珠雫……？」

妹の言葉が止めた。

どうしてこんな所に妹がいるんだろうか。……いや、妹だけではな
かった。

「先輩、頑張れー!!」

「試合はまだ始まつてないぞ！ 走れー！」

「黒鉄くんなら勝てるよ!!」

かつて打ち破った強敵達が、休み時間の武術講座に来てくれた先輩
や同級生達が。たくさんの者達が一輝を出迎えた。

信じられないものを見るような目で固まったのは、束の間。一輝の
瞼から涙が溢れた。

「え……？」

「ど、どうしたんですかお兄様!? やはり連中から暴力を……」

「い、いや……違うんだ……なんか、嬉しくて……」

——嬉しくて泣くななんて初めての事だった。

誰にも望まれていないと思っていた。夢の中で聞こえてきたもの
も所詮は夢。自分にとって都合の言い妄想でしかなくて、実際はそん

な事がある筈がないと思っていた。

それでも……違った。

自分は確かに望まれている。自分の勝利を、願ってくれる人がこんなにもいた。

それに気付いたら……気付けば涙が溢れていた。

「……確かに最初はひとりだったかもしれません。長い間、ずっとひとりだったことも私は知っています。……けど、今はひとりじゃないんですよ。こんなにも多くの方が、あなたを応援したい、貴方に勝ってほしいって思ってるんです」

「うん……」

「それは私も一緒です。そして——あの人も」

「——イツキ！」

顔を上げる。

そこには炎のような紅蓮の髪を靡かせた少女がいた。

「ステラ……」

「……私はシオリに負けたわ。今年の七星剣舞祭には出られない。——けど！ アタシはアンタを応援してる！ アタシが負けた女に勝って！ 七星剣舞祭に出場して!!」

アンタは——アタシの最強なんだから!!」

一輝の手を握り、笑いかけてくる彼女に思わず苦笑が漏れた。

世界最高峰の才能を持ち、それに胡座をかく事なく鍛練に明け暮れた彼女にとっての最強が、Fランクの自分なのか。

あまりにも不相応な称号だ。けれど——彼女にそこまで言わせたのも、また自分だ。それならば。

「——勝ってくるよー!」

必ず勝つ。

それこそが、彼らへの感謝の示し方だろうから。

◆ ◆ ◆

『——ご来場の皆様、長らくお待たせいたしました。』

黒鉄選手の到着をこちらの方で確認できたため、これより七星剣舞祭最終戦の方を開始させていただきます!と思います!!』

「黒鉄……！」

「間に合ったか！」

前回のアナウンスから八分。なかなかギリギリだったが、一輝の不戦敗という事はなさそうだと新宮寺と寧々は安堵の息を吐いた。

『赤ゲートから今、《眠りの魔女》が姿を見せました！』

十九戦無敗の騎士。しかもそのうち十四試合は自身の能力を大幅に制限した上での勝利！ 自身の能力が《模写》であるという事が割れてからは主にステラ・ヴァーミリオン選手の《炎》を用いて勝ち上がってきました。そして——未だ彼女に傷を負わせた騎士はなんとゼロ名!! ルームメイトである《黒鬼》百鬼紫苑選手と並んで最強と呼ぶに相応しい強さを持っています!』

栗の足取りに強張りはない。

しやん、と背筋を伸ばし、青ゲートを静かに見つめている。

その姿には紫苑に抱くような恐怖とはまた違う、一種の底知れなさがあつた。

「イツキ……」

ステラは恋人の名を呼び、ぎゅつと手を握つた。

彼女と戦つたからこそ、彼女の強さは友人達の誰よりも知つている。それにお世辞にも彼のコンディションはベストとは言い難い。だからこそ、普段ならば出ない筈の負けの芽が出るのではないかと不安になる。

だが——彼女は目を逸らさない。隣に座る珠雫もまた同様だ。

それはひとえに……彼の事を信じているから。

『そして青ゲートから姿を見せるのは、同じく十九戦十九勝無敗。《落第騎士》黒鉄一輝選手。』

——これまで彼は誰にも認められませんでした。ただひとり、地の底で研鑽を続けてきた一匹狼。けれどッ！ 彼は打ち倒してきた!! 《紅蓮の皇女》を！ 《狩人》を！ 《速度中毒》を!! 破軍学園が誇る数多の猛者達を！ その剣一本で!!

そして今、彼は頂点へと手を伸ばした——!!』

青ゲートから姿を見せる一輝。

体調不良などおくびにも出さず、彼は歩みを進め葉の前に立つ。沸き立つ観客席。その中心で対峙したふたりの間に流れる空気は、決闘の場に相応しくないほどに穏やかである。

「——良い顔ですね。黒鉄さん。間違えましたよ」

「うん。……気付かされたからね。僕は一人じゃないって。僕の勝利を願うのは、決して僕だけではないんだって」

「……そうですね。ほら、周りを見てください。貴方を応援する声があちこちから聞こえてきます。私が悪者みたいです」

そう言つて葉は苦笑する。

悪い魔女を自称する身だ。悪者扱いは上等だとは思うが、ここまでアウエーだと些か気不味さがある。

「黒鉄さん。ひとつ提案があるんですけど」

「何かな」

「——最初の一刀。そこにお互い、全てを乗せませんか？」

「……………」

予想外の提案だった。

まず最初に一輝が疑ったのは、ブラフの可能性。しかしそれは自身の照魔鏡と謳われる観察眼と、彼女自身の言葉を以て否定される。

「貴方の事情は粗方知らされています」

「……決闘なのでしよう？ ならば……わかりやすい形の方がいいでしょう。私が勝つにしろ、貴方が勝つにしろ誰の目にも分かる明らかな決着」

——貴方のコンディションが悪かったから私が勝った、なんていちやもんを後からつけられたくない」

「……意外だったよ。君は勝てればそれでいいってタイプだと思ってた」

「紫苑さんはそういうのを嫌うでしょうから。私も影響されたのかもしれません」

「確かに彼ならそう言うだろうね」

紫苑は一輝よりも遥かに求道者の気質が強い。

彼は勝負の中での騙し討ちやブラフなどは仕掛けるが、盤外戦術を

好まないだろう事は用意に想像できる。

「それに領いてくれるのであれば、西園寺栞の全力を以てお相手いたしましょう。……如何です?」

「……良いよ。乗った。それにそういうのは嫌いじゃないからね」

「決まりですね」

一輝は黒い一振の刀を。栞は紫色の短剣を。

お互いが霊装を握り締め、闘気を迸らせる。

——臨戦態勢をとった。誰の目にもそれが明らかだった。

『それでは皆さんご唱和ください。——試合開始!!』

瞬間、

「《一刀修羅》アアアアアアアアアアアア!!!」

一輝が吼え、全身から青い炎を迸らせる。

彼が死に物狂いで会得した必殺。自分の全てを一分間に注ぎ込み、発動する絶技。

霊装である《陰鉄》をなおさら強く握り締め、一輝は栞を真っ直ぐ見据える。

対する彼女は陸上のクラウチングスタートのような構えをとった。そして黄金の雷を全身から迸らせる。

その技を一輝は知っていた。

——《建御雷神》

それは《雷切》東堂刀華が持つ、自身をレールガンの弾丸として射出し相手に突貫する技だ。一度紫苑に破られた技であるとはいえ、侮って良いものではない。

確かに栞の魔力はお世辞にも優れているとは言いがたい。けれどそれを補って余りある魔力制御技術と、最初の一刀に全てを込めるといふ言葉に相応しい魔力がそこには込められている。

その威力、そして速度は本元である刀華の一体何倍なのか。

予想ができない。だが——自分は彼女に勝つと誓いを立てた。

そう決めていた一輝は……自然と迎撃に最適な型を取っていた。

刀身を握り締め、背中を栞に向けるほど背骨を捻り込んだ。

そうして完成されるフォームは……《雷切》と同じ抜刀術の構え。

双方共に、同じ騎士の理合いを用いて眼前敵を打倒せんとする。「行きます」

小さく呟き、葉は自身の身体を弾丸とし——一輝に突貫した。

(駄目だ——！)

時が静止したのではないかと勘違いするほどに引き伸ばされた、超集中の世界の中で一輝は確信する。

このままでは自分は敗北してしまうと。

魔力で作られたレール。魔力による装甲を纏い、人体を引きちぎるには十分すぎるほどの加速を得て突っ込んでくる葉。

たとえ抜刀術の溜めを利用し、普通に剣を振るうのとは桁違いの速度と破壊力を生もうとしても、このままでは剣を振るうことすら許されない。

ならばどうするか。

決まっている。——勝利するために、かき集めるのだ。

彼女と自分の間にあるあらゆる差。それを埋めるために。

《一刀修羅》の制限時間。一分間など長すぎる。振り絞って一秒にまで収束させろ。

五感も不要。そんなものにリソースを割く余力はない。

刹那の間に決着がつくのみだから、呼吸だつて必要ない。

血肉、気力、体力、魔力、可能性、そして自らの歴史。

その全てを振り絞って——目の前の最強を打ち倒せ!!

——その時、どこからか。

聴覚を断つた筈の一輝の耳に。

ぎちり、という鎖が擦れるような音が聞こえた。

衝突する鋼の稲妻。

刀身同士がぶつかったとは到底思えない轟音が響き、大気をリング上から残らず吹き飛ばす。

交錯は閃光を生み出し、あらゆる音と色を消し飛ばし——瞬間、ゴム毬のように吹き飛ぶ何かを観客達は見た。

それは——黒鉄一輝と西園寺栞だ。

黒鉄一輝の腕に握られている筈の《陰鉄》の刀身の長さは1／3程度にまで短くなっており、彼が纏っていた筈の制服、そして刀を握っていた筈の腕は焼け焦げている。

対する栞はというと霊装は欠片も残さず粉碎されており、腹部から左肩までが大きく逆袈裟に切り裂かれていた。腕に至っては皮膚一枚でなんとか繋がっているという有り様で、腹からは臓物を溢している。

どちらも致命傷を負っている。今すぐにも再生槽に入れなければ命を争うだろう。しかし、まだそういうわけにはいかない。

これはただの選抜戦ではなく、黒鉄一輝の未来をかけた決闘なのだから。

固唾を飲んで観客が見守る中——ぴくり、と身体が動いた。

そして身動きしたのは——《落第騎士》黒鉄一輝。

僅かに残った刀身を支えに彼は立ち上がり、死に体でリングへと戻り——天に向かって拳を掲げた。

『……け、決着ツツツツ!! 決着しました!!』

彼らが言ったように、たった一合の交錯！ 試合時間にしてみれば一分もないほどの刹那!! それに打ち勝ったのは!! 《落第騎士》——

「否ツツ!! 《無冠の剣王》黒鉄一輝選手だア!!」

観客席が歓声に包まれる。

興奮の坩堝と化したリングの上から、一輝は身体を引きずるようにして降りていく。その姿を見て——ステラは迷わず駆け出した。

彼が向かった青ゲートで出迎えるつもりだろう。

それを追わないのかと、珠雫に横に座っていた日下部は視線をそちらに向ける。

「……う、ひぐつ……」

——珠雫は涙を溢していた。

だがそれも無理のないことだと日下部は思った。

栞はあの瞬間、今まで見せたことがない——それこそ間違いなく『西園寺栞』という人間に許された限界の力を以て、一輝を打倒しよう

とした。

そう、一輝を殺してしまうかもしれない覚悟で。

……そんなものに耐えられる筈がなかったのだ。当たり前だ。誰が世界で一番愛する人が死ぬところを見たいと思うのか。

日下部はそれを理解したからこそ、黙って珠雫を抱き締めた。

「見たか、寧々」

「ああ。……黒坊の奴、やりやがったよ……!」

興奮を隠しきれないという様子で言う寧々。

ふたりは見たのだ。一輝の居合い抜きと栞の《建御雷神》が交錯せんとした瞬間——一輝が更に加速したのを。

「二分でテメエの全てを使い尽くす《一刀修羅》ではしおりんのスピードには追い付けねえ。それを黒坊は理解したからこそ、一分じやなくたった一振に自分の全部を乗っけやがった! 『最強の一分間』を更に驚異的な集中力で凝縮して、身体能力の強化倍率を数百倍にまで高め、スイングスピードとパワーを上乗せしやがった……!」

それはもはや『修羅道』などという人が堕ちる程度の道に非ず。

極限を超えた極限。人を超えた——鬼。名付けるならば。

《一刀羅刹》

(……アイツはずつとこうしてきたんだろうな)

一分前の自分よりも強くあれ。一秒前の自分にも打ち勝てと。

絶えず逆境の中、死に物狂いで己を信じ続け、己を昇華させ続けてきた。

常に己の可能性を信じ続け、前へ、更に前へと強さを渴望し続けた事が今回の勝利を生んだのだ。

「……全く、大した男だよ。本当に」

この調子ならば——そう遠くない未来、彼は自分が引き返してしまった領域にすら到達するだろう。

それを素直に喜べないのは……自分が《魔人》の領域に踏み込むことを恐れてしまったが故か。

「ともかく今回の騒ぎはもう収束するだろう。家のしがらみ、襲いかかる理不尽、不条理な決闘……その全てを黒鉄は真正面から相手取

り、完膚なきまでに一刀両断したのだからな」
もはやこの決着に口を挟める者などいない。

黒鉄一輝の勝利を、会場に入っている報道のカメラが捉え、この戦いの結果は全国に放映されている。

《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンを打倒した騎士、西園寺葉が黒鉄一輝に敗北した光景を。

「……それはそうとき。良いのかい？ 赤狸をどうにかしなくて」

「構わんさ。奴がどう足掻いたところでどうにもならん。それに……あの戦いの後にそんな真似はしたくないからな」

理事長室に戻れば、此度の騒ぎの後始末が色々と待っているのだろう。けれどこの瞬間だけは——この素晴らしき戦いの余韻に浸っていたかった。

……そんな中、今回の結果を受け入れられない人間がひとりいた。

閑話

第24話

——失敗した。

失敗した。失敗した。失敗した。

赤座は観客席から、青ゲートを目指し走っていた。その動きはお世辞にも速いとは言えず、どたどた、という擬音が聞こえてきそうなどいかに醜悪である。

しかし外聞など気にしていられるほど、赤座には余裕がなかった。

——彼は失敗した。黒鉄一輝の騎士資格を取り上げる今回の計画は、黒鉄一輝が西園寺葉に勝利したことによって水泡に帰した。

今度は別の手段で彼を陥れようとしても、世間がそれを許しはしないだろう。それほどまでに『決闘に勝利した』という事実は大きいのだ。

完全に詰みの状況である。

そうなれば赤座に待っている未来はひとつしかない。

自分は今回の騒ぎの責任を取らされ、失脚するだろう。

これまで『倫理委員会』という暗部で、昇進のために耐え抜いてきた時間も。そこに至るまでに重ねてきた努力も。

その全てが無駄になってしまう。

あんな生きる価値もないゴミのせいで、自分という人間の全てが崩れ去ってしまう。許されるものか。認められるものか。

そもそも西園寺葉などという猿真似しかできない雑魚を、決闘の相手に指名したのが間違いだっただ。

《赤の淑女》や……非常に癪ではあるが、《雷切》東堂刀華を打ち破った百鬼紫苑を決闘の相手に指名できていれば。

そうだ、百鬼紫苑を利用すれば良かったではないか。互いに奴らの名誉を貶める材料は作ってあったのだ。部下が命が惜しいだの色々言っていたが、弱みでも握って脅せば良かった。

そうすればどちらが負けようが、黒鉄殿の目の上のたんこぶを処分

できていたことには変わりなかったのに。

「クソッ！ クソクソクソオツッ!!」

ここ最近分からないことばかり起こる。

世界最弱の騎士である百鬼紫苑というゴミを、敵が非常に重く見ていること。

奴を貶めようとしていた策が悉く失敗し、マスメディアが駄目ならネットだと彼の名誉に泥を塗る噂を流しても、その全てが何者かに抹消されたこと。

黒鉄一輝の食事に仕込んだ自白剤が満足に機能しなかったこと。

その全てが百鬼紫苑に関わった時から起こった。

——すべてあの男のせいだ。

黒鉄一輝を排除したら、すぐにあの男を貶めてやる。二度と剣が振るえないようにしてやる。

確かに奴は強いが、それもすべて腕つぶし。策略や謀略の類いに奴は滅法弱い。

敵には止められるだろうが、そんなもの知ったことではない。全てが自分に利するように働くべきであり、自分以外の全ては自分に見下され、己の踏み台になるべくして在るのだから。

そうだ。私は悪くない。

自分にこんな役回りを強いた黒鉄敵が、決闘に敗北した西園寺栞が、運命に抗った黒鉄一輝が、自分の命令を自分の命が惜しいなどという理由で従わなかった部下が、そしてすべての元凶である百鬼紫苑が悪いのだ。

私は悪くない。私は悪くない。

狂気に満ちた禍々しい笑いが赤座から溢れる。

気がおかしくなったのか、現実から逃避してしまったが故か。彼は己の衝動のままに罵詈雑言を吐く。

「ふひっ！ ふははははははは!! 待っているよ、百鬼紫苑!! 黒鉄一輝を処分したら次は貴様だ! そして私は——おぶっ!」

そんな彼を何かが阻んだ。

それは……壁だった。淡い輝きを放つ白い壁。弾力性に富んだ泡

のような壁が、赤座の足を止めたのだ。

「クソッ！ なんなんだこれはっ！」

赤座は自身の霊装である手斧を顕現させ、それを壁に向かって叩きつける。しかし壁を破ることはできず、壁が持つ弾性によって跳ね返された。

泡のような、と上述した通り、その壁の見かけは非常に脆そうに見える。だというのに赤座の攻撃を一切通さない。肥満体で、身体を動かす機会こそ少なかったにしろ、連盟においてCランクという上位十パーセントに入る赤座の攻撃がびくともしない。

赤座は手に持っていた杖を投げ捨て、全力で斧を振るった。魔力放出による加速も加えた、真正銘赤座の全力の一撃だ。

しかしそれすらも通さない。それどころか一際強く跳ね返され、赤座の身体が吹き飛ばされる。

醜い豚のような苦悶の声が赤座の口から漏れ、毬のようにごろごろと転がる。そして彼の身体は再び壁に叩き付けられた。

間違いなく、障壁系統の能力を有する伐刀者が自分の道を阻んでい

る。

「一体どこにいる！ 正体を見せろオ!!」

赤座が吼えた。その瞬間、とん、という何者かが着地したような軽やかな音が背後から聞こえた。

この自分を閉じ込めたことを後悔させてやる、と赤座が振り向き――そして眼を剥いた。

ここにいる筈のない人物だった。

当たり前だ。赤座はこの目で、この下手人が黒鉄一輝に斬られる様を見届けたのだ。そしてそれが、赤座を一輝の元へと向かわせた要因でもあったのだから。

――西園寺葉が、そこにいた。

「赤座守。貴方に――彼らの邪魔はさせない」

◆◆◆

「どうして……貴様が……！ お前はさつき、斬られた筈……!!」

「そんなもの治療したからに決まっているでしょう」

当たり前の事を聞くなという西園寺葉の瞳は、紫苑が見たこともないほどにずっと冷えきっていた。人を人と思わぬ、まるで路傍の石を眺めるようなそれで、赤座を見下ろす。

「ならば何故立たなかつた!? 治療すれば勝てた筈だろう! それなのに、何故——」

「彼を勝たせた方が利になると思ったからです」

「ふざけるな!!」

手を抜いたというのか。

この女は、一輝を勝たせるためにわざと負けたと。

赤座は怒りに身を任せ、手斧を振りかぶるが——赤座がそれを振り下ろすよりも、葉の蹴りが赤座の身体に突き刺さる方が速い。

赤座の攻撃とは比較することすら烏滸がましい神速の蹴り。乙女の細足から繰り出されたとは思えない威力のそれは、肥満体の赤座の肉体をサッカーボールのように軽く蹴り飛ばす。

「げほっ、がはっごほっ!!」

「ふざけるな? それはこちらの台詞です。貴方のせいで、私がどれほど駆け回ったと思っているんですか? 黒鉄さんに仕込んだ自白剤の効果軽減の為の治療、食料を届ける手間、それらを行うための下準備。……本当に手間をかけさせられました」

「なん……」

ありえない。

黒鉄一輝を監禁していた部屋は古くに作られたため、内部に監視カメラは仕掛けられていないが部屋の外は別だ。常に監視の眼があり、外部の人間が入って来ようものなら絶対に気付く。

それに彼女の口振りからは、定期的に室内に侵入していたようではないか。そんなことを許すほど、連盟日本支部が敷く警備網は甘くない。

「入れる、筈が。いったいどうやって」

赤座がそう言った直後。彼女の左手に複数本のナイフが顕現する。

一見すると『鍵』のように見える、僅かな白い輝きを放つ短剣。

それを赤座は知っていた。

そのナイフは——否、靈装は。

「ディヴァインゲート《蒼天の扉》……！」

国際魔導騎士連盟副長。

《翼の宰相》ノーマン・グリードの靈装である《蒼天の扉》。

それが保有する能力は——転移。しかしその転移可能距離が規格外だ。

向かう先に《蒼天の扉》が存在している必要があるという条件こそあれど、それさえ満たせていけば地球の裏側にまで一瞬で転移する、天駆ける能力の最高峰。

それを用いて、一輝の監禁場所へと侵入していたのだと。

だが、それもありえないのだ。

西園寺栞の能力は《模写》

複製し、身に宿すことができるのはあくまでも『能力』のみであり、伐刀者の魂の具現である《固有靈装》は模倣することができない筈。

だというのに彼女はそれさえも模倣してみせる。模倣し、その異能を行使してみせる。

それはもう《模写使い》の範疇に収まるわけが——。

そこではたと気付く。

赤座とて騎士連盟に所属するもの。伐刀者の能力については知識を叩き込んでいる。その中には当然《模写使い》の知識も入っているが、前述したように『相手の靈装すら模倣』した者は前例がない。

ならば、彼女がその能力を極めに極めたが故に可能となった異例なのか。

——否、そうではない。

「貴様……《模写使い》ではないな……!!」

ステラ・ヴァーミリオンは最初、彼女が《眠り》の能力者であると勘違いしており、彼女が自身の能力である《炎》を扱ったことで《模写使い》であると判断し、それに彼女もまた同意をしたが——それさえも嘘だったのだ。

数多の能力を自在に使い分ける。他者の靈装を顕現させる。

それすら彼女の能力の一端に過ぎない。

彼女の本当の能力は、引き取った義父をして『世界最強』と断言させた全能である。

赤座の言葉に栞は無言で肯定を示し、彼に言う。

「貴方の質問には答えました。今度は私が問いに答えなさい」

「何をふざけた真似を！ 答えるわけが——」

あるか。

そう言おうとした瞬間、彼の肥えた身体に無数の風穴が空いた。その数は優に百を超えるだろう。

聞くに堪えない絶叫が、栞が展開した結界の中に響き渡り、吹き出した鮮血が栞の制服を汚していく。

突如として人体に穴が空く現象……それを引き起こした栞の左手には先程まで握られていた《蒼天の扉》の代わりに、白銀の拳銃——《世界時計》新宮寺黒乃の霊装のひとつである《エンノイア》が握られていた。

《クイックドロウ》

新宮寺黒乃の能力である《時間》を操り、赤座の周囲の時間を停止。時空間の境界線上に弾丸を配置し、時間停止が解除されると同時に銃弾が相手に突き刺さる回避不能の伐刀絶技であり、新宮寺の十八番とも言える技である。

それを容易く行使してみせた栞は、次いでぱちんと指を鳴らす。

瞬間、赤座の身体に空いたすべての銃痕は消え去り、栞の制服を汚した血も消え失せた。まるで先ほどの攻撃がすべて夢だったかのよう——否、ようにではない。

『彼が攻撃を受けたのは夢だった』と現実を改変したのだ。

「私は答えてくださいと言ったのではなく、『答えろ』と言ったのです。

……この意味、わかりますよね？」

「……!!」

「嘘を吐いたら撃ちます。私が嘘を吐いたと判断した場合も同様です」

「ふざけ——」

再び風穴が空く。絶叫が木霊する。そしてすべての外傷が《夢》に

なる。しかし痛みを負ったという記憶だけは現実に残り、彼の精神を蝕む。

「ああ、ごめんなさい。言い忘れていましたね。私に対し反抗的な態度をとった場合また然りです。大丈夫、心配はいりませんよ。——貴方が何度死のうと、私が何度でも甦らせますので。死んで楽になれるなんて思わないことです」

栞が微笑みを浮かべる。しかしその眼は全く笑っていない。

ただうっかり殺しきってしまわないようにと注意を払っているが、それだけだ。彼女にとって自分を殺害することは、路傍の石を蹴り飛ばす行いとなんら変わりないのだと理解させるにはあまりに充分すぎた。

「貴方はわかっていないかもしれませんが——私、怒ってるんですよ。わざわざ貴方のために、こんな時間を割いている事自体が不快なんですよ。わかりますか？」

「……………」

喋っては駄目だ。

何が彼女の逆鱗に触れる行いかわからない。ならば何もしない。黙ってさえいければ、彼女の機嫌をこれ以上損ねることはないのだから。

なんと、甘い考えか。

彼の頭蓋に風穴が空いた。脳ミソが床に散らばり、どさりと赤座だった物が床に転がる。そして……その傷の全ては夢になる。

ただ『彼女に殺された』という痛みと事実だけが赤座に襲いかかる。

「ハア……ハア……！ ヒュウ……ヒュウ……」

「悪いことをしたら『ごめんなさい』でしょう？ 『倫理委員会』の長ともあろう方が、小学校で習うこともできないんですか？」

侮蔑の言葉が吐き捨てられる。……屈辱だった。

自分よりも二回りも歳をくっていない子供に、これほど好き放題されている現実が。しかし彼には分別を弁えられるだけの冷静さがあつた。

赤座が栞に向かって土下座をする。

「もう、しわけ……ありませんでした……」

「ええ。本当に。……貴方を殺すのも、甦らせるのも手間です。これ以上私の手を煩わせないでくださいね？」

地面に這いつくばる赤座を睨睨しながら、栞は続けた。

「まずひとつめ。——どうして紫苑さんを巻き込んだんですか？」

「な、何故あの男の名が——」

指に向かって銃弾が放たれる。その一撃は赤座の太い指を吹き飛ばし、その長さを半分ほどにまで縮めた。

「無駄口を叩くな。私が聞いた事だけ答えなさい。今度は指程度では済ましませんよ」

「……っ！ それは、私の上官の命令だ！ 連盟日本支部支部長黒鉄殿が——」

銃弾が赤座の土手っ腹に大きな穴を空ける。

これまでのそれよりも遥かに魔力が込められたそれは、臓物だけでなく骨すらも消し飛ばし、彼の意識さえも粉碎する。

それを栞は頭を蹴り飛ばすことで無理矢理覚醒させ、傷を治療した。

「黒鉄長官には貴方の独断専行である、と謝罪と共に言質を頂いています。……本当に貴方は、私の怒りを煽るのがお上手ですね？」

「がぼっ……」

銃口が口の中に突っ込まれ、赤座は声にならない悲鳴を漏らした。自分の腹部の大部分を吹き飛ばした弾丸が、口の中で炸裂すればどうなるか……彼には容易に想像ができた。

「——嘘を吐くな。私の手を煩わせるな。再三言っている筈なのに、どうしてご理解いただけなのでしょう？」

……ああ、なるほど。どうせ治療されるのだから、いくら痛みを負おうが構わないという腹なのです。それならば治療はやめにしましょうか。貴方が死んだところで私はどうでも良いですし」

「……ッ!!」

「違う？ それなら最初から正直に答えなさい。その方がお互いのためでしょう。違いますか？」

栞の言葉に勢い良く首を縦に振る。

死ぬのは嫌だ。死んでしまつては再起することすらできない。ここをやりすごす事さえ出来なくては、彼女に復讐する機会さえも叶わない。

——彼女の命令に従順になること。それだけがこの場を乗り切る唯一の光明である。

「答えなさい。貴方が黒鉄長官から下された命令は、黒鉄一輝の騎士資格剥奪だけだった筈。にも拘らず何故貴方は、一切関係がない紫苑さんを巻き込んだのですか？」

「……ッ、奴が黒鉄殿の障害になつていたからだ」
「……………」

「奴の話をするとき、彼はいつも顔をしかめる。彼が掲げる厳正な秩序、それを逸脱する百鬼紫苑を排除する事で、それを取り戻すために

——」
「なるほど。よくわかりました」

「——ッツツツ!!」

数千を超える弾丸が赤座の身体に突き刺さつた。《クイツクド口ウ》——もうひとつの新宮寺の霊装《プロパツール》を使用しての乱射。

それに赤座が堪えられる筈がない。意識を失い、痛みによつて意識を覚醒、また気絶——。のたうち回り、小便を垂れ流す赤座。それを光の一切ない瞳で見下ろす栞は続ける。

「紫苑さんの排除に成功すれば、黒鉄一輝の騎士資格剥奪後の昇進に更に箔をつけられる。そしてゆくゆくは昇進の足掛かりに……ですか。全く——腹立たしいにも程がある。

そんな理由で——私の愛する人に手を出したんですか」

赤座は消え行く意識の中で耳を疑つた。

好きな方、だと？　つまりこの少女は——自分の惚れた男を守るために、自分の策の全てを潰したのか？

そんな……。

「そんなくだらない理由で……?」

「くだらない……ですって……?」

瞬間、赤座は理解する。

自分が——少女の逆鱗に振れてしまったことを。

葉の蹴りが、赤座の胸部を吹き飛ばした。臓物が壁に叩き付けられ、鉄の匂いが結界の中に満ちる。そして全ては夢になる。

「くだらない!? くだらないですって!? 彼の事を何も知らないからッ! そんな事が言えるんですよッ!!」

五体満足で赤座の肉体は戻ってくる。しかしそれでも葉の怒りは止まらない。殴打が、蹴りが、何度も何度も赤座の命を絶命に至らせる。

その度に赤座の死はすべて夢だったことになる。何度も何度も死から生へ、現から夢へと流転する。

「あの人があそこまでの強きを得るまでッ! どれ程頑張ったッ!

どれほど苦しんできたかッ! どれほど足掻いてきたかッ!! どれほど自分を責め立てたのか!! お前にッ!!」

葉は知っているのだ。

自分が助けを求めてしまったせいで、輝かしい姉の将来を奪ってしまった。そのせいで彼女の父親を自殺に追い込んでしまったと、自分を責めていることを。……彼は何も悪くなんてないのに。

自分には才能がないから、他人が当たり前持っているものを切り捨てて強きに変えなくてはいけないと彼が自分に言い聞かせていたことを。……本当は切り捨てたくなかったのに。

自分の心の絶叫が聞こえないように蓋をして、痛みも感じないふりをして毎日毎日努力を重ねていたことを。……本当はずっと前に泣いてしまいたかったのに。

家族を切り捨て、友達も切除して、自分の弱さを削除して、自分を一振の刀として研ぎ澄ませようとしていたことを。……本当は刀になんてなりたくなかったのに。何度も何度も諦めたいって思ってたのに。

《瀧華一刀流繚乱勢法》は世界最強の剣術だから。

自分の憧れた剣士・瀧華薫は世界最強の剣士だから。

自分は最強で居なくてはならないと、自分を追い込み続けた百鬼紫苑。最強で在り続けようとする彼が……。

本当は《黒鬼》なんて異名が似合わないほどに脆くて、優して、どこにでもいる普通の男の子なのだど知っているから。

最強で在り続けなければならぬ彼の『弱いところ』を、自分は知っているから。

認められる筈がなかった。

許せるわけがなかった。

理不尽に襲いかかる悪意に、彼の夢が挫かれてしまう現実を。

だから葉は赤座の行おうとしていた行為の悉くを潰したのだ。

——努力したからといって、それが本当に報われるとは限らないと葉はわかっている。死ぬ寸前まで努力を続けようとも夢に届かない者もいれば、自分のように大した努力もせずに隔絶した強さを手に入る事例もあるだろう。

運命とは平等に不平等を与えるものだど知っている。だから今さらそんな事に憤慨しようとは思わない。

けれど——今回のような例は別だ。

明らかな害意を持った人間の行いで、全うに努力してきた人間の道が閉ざされる。夢に挑む権利すらも剥奪される。

善人が損をし、悪人が得をするようにこの世は出来ている？

人を信じれば、掬われるのは足元だ？

——そんな理に、西園寺葉はふざけるなど吐き捨てる。

善人が損をし、悪人が得をするようにこの世が出来ているのなら、私が悪人を叩き潰そう。

足元を掬われそうになっていたらならば、私がそれを助けよう。

理不尽も、害意も、悪意も。

彼が歩むと決めた道、その外から彼を傷付けようとする一切から彼を守ろう。彼が真つ直ぐ夢に向かって歩けるように、それ以外の全てを自分が退けよう。

『尊敬する姉の剣術こそが、世界最強の剣術なのだど証明したい』

——自分にはそんな大それた願いはない。

大切な人の努力が報われてほしい。

大切な人が苦しむところを見たくない。

大切な人に笑っていてほしい。

そして彼が許してくれるなら……自分が彼を幸せにしたい。

与えられた才能に比べれば、あまりにもちつぽけで平凡な望み。だがそれこそが栞という一人の少女の根幹だった。

……どうして才能とは欲しいと願っている人の元には行かず、別にいらなと思うている人間の場所に向かうのだろうか。

いや、才能を渴望するからこそ才能はその者の手に渡らないのか。この世は理不尽に満ちている、と栞は何度目かわからない怒りを覚えた。

不意に栞の暴力の嵐が止まり、赤座の肥満体を片腕で持ち上げ、目を合わせる。

「ひいーは、離せえ!!」

赤座はじたばたと暴れ、栞を殴打する。しかしその全ては栞が自身の周囲に展開した魔力の障壁に阻まれる。

「——あの人の苦しみを知らないなら、木っ端だけでもその身で味わいなさい」

「な、何を」

栞の青い瞳が禍々しい赤い輝きを放つ。

そして——その魔術を発動させた。

「《夢想^{ドリーム}世界への切符^{トリック}》」

——瞬間、赤座は知らない場所に立っていた。

ひどく現実離れた場所だ。もう真夏に差し掛かろうかというのに、空は黒い雲に覆われ、天からは黒く染まった雪が降っている。

その雪は、それがまるで刃であるかのように赤座の身体に突き刺さった。口の端から悲鳴が漏れる。痛み悶絶し、身体を振ろうとするが満足に身体が動かせない。

四肢を黒い鎖が拘束していたからだ。

「ここはどこだ! おいつ! 私に何をしたッ!? ここから解放しろ

!!

叫ぶが、その声はこの空間に木霊するばかりで誰も答えてはくれない。幸い霊装は展開できるようで、それをういてなんとか鎖を切断しようとした。

その時だ。

カンカンカンカン——と。

どこからかそんな音が響いてきた。この音を赤座は当然知っていた。だが何故……踏み切りの音がこんな場所で聞こえてくるのだ？

黒い霧で覆われていた周囲が晴れていく。

自分がいたのは線路の上だった。周囲には踏み切りがあり、そこに両手両足の鎖が伸びて、自分は拘束されている。

そして——眼前からは、血色の電車が迫ってきていた。

「ま、まて……！」

逃げ出そうと必死に身体を動かすが、拘束が解かれる気配はない。電車が止まる気配も同様である。

そしてそのまま轢かれる直前——彼は思い出した。

『彼が巻き込まれた事故は、鉄道車両整備士であった百鬼紫苑の父親が故意に整備不良を起こして引き起こしたものである』

そんなでつちあげを記事に記載するようにと、報道記者達に命令したことを。

◆ ◆ ◆

赤座の身体を適当な控え室に乱雑に放り込み、栞は部屋から出た。今頃、彼は百鬼紫苑が味わった地獄をそのまま体験している。夢の中ではさぞかし苦しむだろうが、夢から覚めたら——およそ一週間ほど後の事だろうか——忘れるように魔術は調整した。

紫苑のような後遺症はまず残らないだろう。

その間に彼の上官である黒鉄蔵が、この事態の後始末を行ってくれ、ことは確約してくれている。栞の役目は、その間彼が一輝や紫苑に対して余計なことをしないように、赤座の動きを封じることだった。

彼を眠らせれば良かっただけの話なのだが、今回の件を栞は本当に腹に据えかねていた。蔵にも『責任を取らせる必要があるため、奴を

殺さない範囲でなら黙認しよう』と憂さ晴らしの許可は貰っている。ここまで怒ったのは初めてだ。逆にここまで自分は感情を動かす事が出来たのかと、感心すら覚えたほどである。

——それほどまでに、自分は紫苑に惚れているということか。

好きな男に悪意を向けた相手に報復を行うなんて、今までの自分では絶対にあり得なかった。

これまでの自分ならなんとか怒りを押し殺し、咀嚼し、消化していただろう。だというのに『そう』しようとする欠片も思わなかった自分に、今更ながら驚きを覚える。

本当に恋は人を変えるもののだと自分の事ながら呆れる。尤も、恋なんてするんじゃないが。

「自分は大人びていると、そう思っていたんですけどね……」

自分の事ながら呆れる。今回の事で義父からは叱責を受けるだろう。何もここまでやる必要はなかっただろう、と。

何気に義父に怒られるなんて初めての経験だ。普段が温厚だから、怒らせると非常に恐ろしそうだ。

『——ツキ！ イツキ、しっかりして！』

赤座が向かおうとしていた方向——青ゲートの方からステラの声が聞こえてきた。良かった……とは、自分が彼に負わせた傷を考えれば言える筈がないが、彼らは言葉を交わすことが出来たのだろうか。

……いや、今、言葉を交わせなくても良い。彼らの『これから』は自分が彼に敗北したことで、確かに紡がれたのだから。話す機会は沢山あるだろう。それよりも彼は、自分との戦いで負った傷を癒すべきだ。

そうなると無論、こちら側に向かってくるだろう。

それはよろしくない。自分は今、一輝に破れたことで再生槽の中で治療を受けている事になっているのだから。

栞は自身が行使する数多の異能の中から瞬間移動を選択し、発動。第一訓練場から破軍学園の校舎のひとつの屋上へと転移。

次いで、赤座を閉じ込めた結界——現実世界から《夢》の世界へと隔離する伐刀絶技《幻想結界》を発動する。

そして数分前から震えていたスマートフォン——破軍学園から配布された生徒手帳とは異なる——をとった。

電話の向こう側にいるのは……彼女の義父だ。

「——お待たせしました。お義父様。葉です」

『試合を見たよ、葉。負けたね。……彼はどうだった？』

「やはり強かったです。『西園寺葉』として全力を出しましたが……結果はお義父様もご覧の通りかと。これは私の見立てですが——そう遠くない内に《覚醒》^{フルートソウル}を迎えると思います」

『君にそこまで言わせるか。……それなら、君が負けるだけの価値はあったと。そう判断していいんだね？』

「はい。間違いなく」

『それならば構わない。君の事は信頼しているからね。……しかし、ここで君に黒星が付いたこと。それが報道で大きく取り上げられたことは、今後を考えるとあまり好ましいとは言えない。それは心得ているね？』

「……はい」

叱責と呼ぶにはあまりに静かで、落ち着いた声音。

それは自分が言った事を全て、葉が理解していると確信しているからだ。

彼女は非常に聡明だ。

しかし同時に、情に厚く身内に非常に甘い少女だ。

他者に襲いかかる不条理や理不尽を嫌い、自分に与えられた才能と身に付けた技術などでそれを排除しようとする動こうとする嫌いがある。美德と言うこともできるだろうが。

それは自分が敗北することが、自分が所属する組織にとって不利になるとわかっていても、彼にとって有利な条件で決闘を行ったことからも明らかだろう。

無論、彼女が言ったように『西園寺葉』として出せる全力を出して彼と戦ったことは事実ではあるが。

「今回の敗北は——前夜祭の成功を以て取り返します」

『最後の確認だ、葉。前夜祭で、君が行うべき事はなんだい？』

「《黒鬼》百鬼紫苑の無力化です。……わかっていますよ、お義父様。検証も試行も何度も繰り返し返しました。必ず成功させます」

『ああ、その通りだ。彼に暴れられると、我々がどれほど状況を整えようとも、盤面ごとひっくり返される。それは是が非でも防がなくてはいけない。ただし……やり方は君に任せるよ』

「はい。心得ています」

『よろしい。……さて、仕事の話はこれで終わりだ。ここからは父娘の会話と行こうじゃないか』

がらり、と電話先の気配が変わる。

冷酷さすら感じさせる知的な声から、彼が自分で言ったように娘との会話を楽しむ父親としての声に。

「お仕事の方はよろしいのですか？」

『ああ。一段落した……とは言い難いが、厳くんはかなり投げてきたからね。随分と楽にはなったよ。流石にヴァーミリオンとの話し合いには私が出向かねばならないだろうが、それでもしばらくあちらの方は後処理でてんてこ舞じゃないかな』

「……そこそこにした方がいいんじゃないですか？」

『葉がそれを言うかい？ 赤座守氏をこれでもかと蹂躪してきた君が？』

「うっ……」

『いやあ、あの時の葉は本当に見ておっかなかった。『絶対に潰す』なんて暴言が君から飛び出したときには耳を疑ったよ。それに……義息子むすこに手を出されて、腹立たしいと思ったのは僕も同じだからね』

「誰が義息子ですか！ 誰が!!」

ぼっ、という音が出るほど葉は赤面する。

まだ自分と紫苑はまだ交際すらしていないのだ。にも関わらず、義息子だなんて気が早すぎる。……それは勿論、そういう関係なりたいとは思ってはいるけれど。

『《魔人》が有事の際に運用できない、また運用できたとしてその後処理が極めて面倒になる事態は連盟加盟国の長として避けなくてはいい』

なかった。だからこそ僕も全力で協力し、彼の名誉を貶める全てを潰したわけだが……』

はあ、と電話先で溜め息を吐かれる。

『一体誰が想像するんだろうねえ。今回の一番の功労者である君がここまで頑張ったのは——』『初恋の相手にあらぬ噂をつけられそうになったことに激怒したから』だなんて……』

「~~~~~ツツ!!」

声にならない悲鳴が漏れた。

穴があつたら入りたい、いや今すぐこの場で転がり回りたい。義父と電話を繋がず、メッセージで先の言葉が送られていたら羞恥心でのたうち回っていただろう。

『初恋の相手にあらぬ噂をつけられそうになったことに激怒したから』

改めて字面に起こしてみるとなんて恥ずかしい理由だろうか。

「お義父様！ それ絶対に誰にも話しちゃ駄目ですからね!!」

『なんでだい。良いじゃないか、青春らしくて。僕は嬉しいんだよ？ ずっと僕の頼みのために努力し続けてくれた栞に、ようやく春が来てくれたんだって。志保さん達も喜ぶんじゃないかな』

「だからですよ！ 絶対からかわれるじゃないですか!？」

自分が傍にいないときに、彼の周囲の世話をしている方達——栞とも随分と長い付き合いになるが、彼らに知られてみる。

やれ赤飯だ、やれお祝いだなどと騒ぎ倒すに決まっている。そしてそういう時、自分の父親は悪ノリするタイプだというのも知っている。

『それにこの前、海にだって行ったんだろう？ どうだったんだい？ 水着も新しく買っていったと聞いたけど、彼に褒められたのかな？』

「もうお義父様！ そんな話ばかりするなら電話切りますからね!」

『あはは、すまないね。何せこんな栞は新鮮だから。ついからかいたくなってしまう。父親らしいことを出来たことなんてほんの僅かだし、それに……君を私の願いを叶えるための駒として利用している申

し訳なさだつてあるんだ。本当なら、彼との仲がこじれるかもしれない役目を君に押し付けたくはないが……』

「……良いんですよ、気にしなくて。話を聞いて、やると決めたのは私なんですから」

葉は知っている。

彼が十年という僅かな年数で、一介の教師から日本の政治界の頂点に君臨するという偉業を成し遂げたことを。そしてそれに苦勞と努力を重ねたことを。

すべては——日本を、そして国民を最悪の未来から守るために。そのために……自分は日本最高の伐刀者教育を六歳の頃から受け続け、こうして破軍学園にも侵入しているのだから。

『すまない、葉』

「だから良いって言ってるでしょう？　もう、何度も謝るのはお義父様の悪い癖ですよ」

『ああ。……頼んだよ——』

その少女はあらゆる伐刀者の能力を自在に行使する、全知全能である。

彼女はあらゆる神話や英雄譚をただの事実へと墮する、埒外の絶技を振るう。

それほどの絶技を持ちながら運命の外には至らず、一人の男を愛し、慈しみ、寄り添うただ一人の女である。

そして——第八の騎士学校《暁学園》の切り札である。

《夢》《伐刀者》

「《全智の魔女》月影葉」

二章

第25話

——ステラ・ヴァーミリオンは紅蓮の竜を象った、魔力の砲撃《妃竜の大顎》を眼前敵に向かって撃ち放つ。

ここは『巨門学園』という、『破軍学園』と同じ日本に七つある騎士学校が保有する合宿施設。山形県の山奥にあるそこで、破軍学園の『ボランティアコーチ』としての役割を彼女は務めていた。

尤も、彼女自身の心境は『自分こそが挑戦者だ』という物だったが。その証拠に見てみる。

竜の身体が割れた。

魔力の炎という、斬れる筈がないものを敵は不可視の刃で容易く切断してみせる。——否、それだけに留まらない。

「……ッ！」

ステラは自分の身体を、魂の武装である両刃大剣《妃竜の大剣》で防御した。自分が日本で培ってきた強敵との戦闘経験、その中で磨かれた第六感が『防御しろ』と自分の身体に命令したからだ。——そしてその第六感は極めて正しい。

ガギインッ！ という派手な金属音が響き、それに伴って衝撃が《妃竜の大剣》から伝わってくる。力を殺しきれず、ステラは僅かに鏽を踏んだ。構えがほんの少し崩れる。

それは隙と呼ぶにはあまりに小さいが、自分が刃を交えている相手はさも当然に如く針に糸を通してくる。

飛ぶ斬撃によって二つに分かれたれた炎の竜。そこを敵は突っ切り——白髪の剣鬼は自分の前に姿を見せる。

《黒鬼》百鬼紫苑。

それが現在、ステラと刃を交えている剣士の名だった。

彼は鞘に納めていた刀を、自らの間合いに捉えるや否や、それを文字通り目にも止まらない速度で抜き放った。

それに対しステラも大剣を振るって迎撃する。

交錯。一際甲高い音が響き、少し離れていた場所で訓練を行っていた者達もそちらに視線をやった。

その刀と剣の交錯は——全くの互角。紫苑、ステラ双方の腕を痺れが襲うが、紫苑はそれに顔をしかめる事もない。

直ぐ様二の太刀を振るう。その速度は、先の一撃に比べれば少しばかり見劣りする。だがその刃は遥かに重い。

「くっ……い」

ステラが苦悶の声をあげる。

——ステラは破軍学園。否、日本中を含めても一位、二位を争うほどの屈指のパワーファイターだ。

ステラの振るう剣技《皇室剣技》は、剣戟すら成立させずに相手を押し潰す絶対強者の剣であり、その威力は大地を震撼させ、亀裂を走らせるほど。

それに対する応手はそのままステラに押し潰され敗北するか、一輝や葉が行ってみせたように受け流すかくらいしかない。

そもそも剣戟を挑もうとすることが馬鹿らしくなるほどの膂力を持つ彼女を相手に、目の前の男は真正面から剣戟を成立させている。

しかも日本刀という得物でだ。

一輝や紫苑の主な武装である日本刀はそも、技の冴えと速さを以て相手を『断ち斬る』ことに主眼が置かれ、作られたものである。

対してステラの武装である西洋の剣は、西洋で発展した甲冑の上から殴打するようにダメージを与えることができるように作られた。元々切断力はさほど重視しておらず、斬るにしても日本刀のように技で斬るのではなく、力任せに『叩き斬る』事を得意としている。

そのため刃をぶつけ合う力比べの現状は、自分の方が有利——とまではないが、それでも自分にアドバンテージはあるとステラは考えていた。少なくともパワーでなら紫苑には絶対に負けないと。

だというのに、ステラの剛剣が真正面から打ち返される。紫苑の身体からは絶対に出せないだろう威力の剣で、自分の攻撃が迎撃される。

しかし……だからなんだというのか。

なるほど、確かに彼の剣と自分の剣の威力は互角だろう。

しかし彼は自分と剣を交えるために、非常に僅かではあるが『溜め』を必要としている。

対する自分はそんなものはない。それどころか自分の今の剣は威力ではなく、彼の速度に渡り合うために速さを重視したものである。ならば威力を込めればいい。その鬼を真正面から力押しで蹂躪するための剣に切り替えればいい。ただ魔力を放出し、剣を振るえばいい。それだけで自分は紫苑の剣を遥かに上回る速度と威力を両立できるのだから。

——《黒鬼》百鬼紫苑。

自分の好敵手であり、最強でもある男が『剣技だけならば自分よりも上』と認めた、破軍学園最強の剣士。

そんな相手と刃を交えられる非常に貴重な機会。吸収してやろうと考えていたが……もうお勉強は切り上げよう。

自分は——この男に勝つ！

ステラはこれまでの剣とは比較にならないほどの魔力を込め、その一撃を振るう。颯風が紫苑の身体に叩き付けられるほどの荒々しい剣、それはステラの目論み通り——紫苑の手から《亡華》を吹き飛ばした。彼の顔が動揺に染まる。

致命的な隙だ。

身体は『どうぞ斬ってください』と言わんばかりにがら空きになる。それどころか勢いを殺しきれずに彼の身体はくるりと回り、背中を彼女に晒した。

そんな隙を彼女がわざわざ見過ごすわけもなく、彼女は返す刃で彼の胸を薙ごうとし——それよりも速く、紫苑が彼女の身体を深々と切り裂いた。

「かつは……」

そこから吹き出すのは血液ではなく、同色の燐光——幻想形態で傷を付けた時に飛散する魔力の光。物理的ダメージを与えない代わりに、直接相手の体力を削ぎ落とす《霊装》の展開方法のひとつである。何故、どうしてとステラの思考を疑問が浮かび上がる。だが自分が

彼に斬られたからくりを見抜く前に、ステラの喉元に赤黒い靄を纏った刃がぴたりと添えられ、

「俺の勝ちだ」

刃と共に自分が敗北したという事実もまた、同時に突き付けられたのだった。

◆ ◆ ◆

「うう……負けたわ……」

「お疲れ様、ステラちゃん。ほい、これ飲む？」

「ありがとカガミ……」

少し離れた場所で紫苑とステラの戦いを観戦していた日下部は、労いと共に彼女にスポーツドリンクを渡す。

それをステラは受け取り、身体に流し込む。戦いで火照った身体にそれはよく染み渡った。

「ねえ、ステラちゃん。最後のあれ、なんで斬られたの？ 刀は吹き飛ばしてた筈なのに……」

「……霊装の形を変えたのよ。アイツの霊装——《亡華》は普段は刀と鞘っていう形をとってるけど、アレ本来の形は不定形の霧みたいなもの。カガミだって鞘を盾に変化させたりしてるの見てるでしょ？」

《雷切》東堂刀華との戦いや、《深海の魔女》黒鉄珠雫の戦いの中でも《亡華》の形を変化させ、攻撃を防いでいた場面が見られた。

それと同じからくりだとステラは言い、続ける。

「アイツはアタシを焦らしてより力を込めた一撃を誘って、さもその攻撃で刀が吹き飛ばされたかのように演出した。ご丁寧に表情まで作ってね。」

それでしてやったりとアタシがほくそ笑んだアタシところで、鞘を刀の形に変化させた《亡華》で断ち切った。最後アタシに背中を見せたのは、二太刀目をギリギリまで隠すのと、その攻撃にアタシの力まです乗っけるためだと思うわ」

紫苑の霊装が普段は刀の形をとってはいるが、その本質は不定形霧のようなものだと理解はしていた。ならば鞘の形を変化させ、攻撃してくることは予想が出来たはずだとステラは自身を戒める。

「あの決まり手は瀧華薫氏の試合でも見たな」

「へえ、よう見とるなあ」

「彼の霊装の性質は氏の霊装《散桜華》ちるおうかに極めて類似している。戦闘スタイルもまた同様だ。……彼が戦う理由を考えれば、それも当然だがな」

「えつと……カガミ、こちらのふたりは？」

彼女の視線は日下部の隣に座っている男女に向いた。

気の良さそうな笑顔を浮かべた茶髪の少女と、真面目そうな、眼鏡をかけた男。どちらも破軍学園とは異なる制服を着ているから、彼女の個人的な友人だろうか。

「ああ、ぶ挨拶が遅れてすみませんステラ姫。アタシは武曲学園で新聞部に所属しとります、八心つちゅーもんです。どうぞよろしくお願います」

「貪狼学園で新聞部に所属している、小宮山と申します。以後お見知りおきを、ステラ姫」

「なるほど、カガミの同業者だったのね」

よくよく見てみれば、二人の右腕には日下部の物と同じ腕章がついている。同業者ならば並んで自分達の試合を見ているのも当然と言えた。

そして日下部は自己紹介も済んだところで、と3人に話を振った。

「お二人は先の試合、どう見ます？ あ、ステラちゃんも戦ってみてどうだったかって事聞かせて欲しいな」

「ええ」

「そうだな……まず二人とも非常にレベルが高い」

その言葉に日下部は微笑む。

自分達とはまた離れた場所で試合を見ていた文曲の新聞部達——彼女らは「紅蓮の皇女が負けるなんて拍子抜け」だなんだのと抜かしていたが、やはりこの二人はわかっている。

「ステラちゃんの戦いを生で見たんは初めてやったけど、噂通りとんでもないレベルの高さや。一撃一撃の攻撃力に瞬発力、それに魔力量。どれも学生騎士のレベルを大きく超えとる。破軍が武曲ウチラのやり

方を採用せず、例年通りに選手を選んどつたら絶対選ばれて、優勝かつさらってくレベルの逸材や」

「……そこまでもないわよ」

パツと聞くと謙遜しているように聞こえるが、彼女の胸中が謙遜などではないことを他の三人は瞬時に見抜いた。

ステラは現在、破軍学園内だけでも三人に敗北を喫している。

自らの宿敵である黒鉄一輝。

自分の七星剣舞祭出場を阻んだ西園寺栞。

そして先ほどの百鬼紫苑。

自分が刃を交えているだけでこれだけだ。あと選抜戦初戦にて紫苑に敗北してしまったが、《雷切》東堂刀華も自分よりも格上だろう。そしてそれは全国に出れば更に増えるだろう事は予想に難くない。……まあ、自分は今年の七星剣舞祭には出場できないのだが。

「それでも絶対ええところには行くて。それは間違いない。……話戻すで。ほならなんでステラちゃんか敵わんかつたら単純な話や。――

――《黒鬼》が滅茶苦茶に強い」

「同感だ。ステラ姫……さんのような馬鹿げた力はなく、技も派手ではない。だが、彼の剣は敵を倒す……いや、『殺す』事に特化しているんだ」

八心も小宮山も今回の合宿に参加し、記事を作るために他校の選手の情報収集を行っている。その時に当然ながら紫苑——というよりは《瀧華一刀流繚乱勢法》についての調べはついている。

現存する流派……否、失伝した剣術を含めても、日本に伝わる数多の流派の中で最凶と謳われた殺人剣。

眼前敵を如何なる手段を以てしても殺せ、という理念のもと作り上げられた技の数々は、その全てが相手を絶命へと至らしめる『必殺』である。

見映えの良さなど何一つ考えない。

そこに在るのは敵を殺害するための技術の結晶であり、それらは数多の闘争の中で血を吸い、更に進化を続けてきた。

植物が多くの水や日光、養分を吸い、美しい華を咲かせるように。

「はえー、マジで物騒やな。時代錯誤もええところやけど」
「いや、そうでもない。」

……『闘争ある限り進化は止まず。故に我が剣術は永久未完の剣術なり』——《瀧華一刀流》の創始者・瀧華想巖はそんな言葉を遺した。伐刀者が《侍》と呼ばれていた時代から、国家間の戦争、そして魔導騎士同士の試合——形態は変わり続けたが、そこには確かに『闘争』がある。それならば《瀧華》が枯れることは決してないのだろう」

そんな闘争に打ち勝つべく薫が編み出した《瀧華一刀流繚乱勢法》もまた《瀧華一刀流》の進化の形の一つであり、そして彼女が昏睡状態に陥っても、彼女の意思と技は紫苑に継承され、さらなる進化を続けるのだろうか？と小宮山は語る。

「なんかそう聞くとただ物騒って訳でもないんやな。……それでその百鬼くんはあんなどこで何してるん？」

八心の視線の先、そこでは紫苑の手を黒髪の少女が両手で包み込んでいた。美しい黒い髪をロングボブで整えた少女は紫苑に微笑みかけ、それに彼もまた表情を動かさしめないが応じていた。

その少女に小宮山と八心は見覚えがあった。

「あれは……西園寺菜か？　彼女は《無冠の剣王》に敗北しただろう。何故ここにいる？」

「ああ……アレは——」

「自分の魔力をシオンに渡してるんだって。前に教えてもらったわ」
「はあ!？」

二人が声を揃えて驚愕した。

それに日下部は「まあそうなるよねー」とあっけらかんと笑う。自分だって初めて菜に聞いたときには酷く驚かさされたものだ。

「いやいや何を言うとするかわかつとるか？　『他人に自分の魔力を譲渡する』なんて出来るわけないやん」

「信じられん……本当に譲渡できているのか？」

「それは間違いないですよ。私も信じられなくて、試しにやってもらったけど本当に魔力を貰いました。逆の事出来ますか？　って聞いたら魔力が吸われていく感じがしましたしね。なんでも《模写》で

相手の魔力を模倣しているんだとか」

「嘘やろ……」

八心は頭を抱えた。小宮山も頭を押さえている。

他人に魔力を譲渡する、または受け取るということはそれほどまでに馬鹿げたことなのだ。

それを説明するためには、この世界における『魔力』と言うものについて説明しなくてはなるまい。

——そもそも『魔力』とは何か。

それは伐刀者という特異な存在が、自らの意思によって世界の法則をねじ曲げるために用いるエネルギーであり、それは『魂』と一般的に呼ばれる場所から湧き出すと言われている。伐刀者の霊装が『魂の具現』と呼ばれるのも、霊装が魔力の超高濃度の塊であるからだ。

そんな『魂』に由来するエネルギーである魔力を、他人に流し込んだらどうなるか。

端的に言えば——拒絶反応が出る。まず間違いなくだ。

何度も言っている『魂』とは謂わば、その者の性格や価値観など人格を形成する上で欠かせない、人間を根底から支える要素のひとつである。

全く同じ性格や価値観を持った人間がふたりとしていないように、魔力もまた全く同じ性質を持った伐刀者はどこにもいない。

つまり魔力を相手に譲渡するということは、『相手の根幹をなす場所に、自分という異物を注ぎこむ』事と同義であり、自我を侵食する行いであるからだ。

それによつて発生する拒絶反応は、臓器移植や、輸血を必要としている人間に異なる血液型の血を輸血するなどとは、比較にならない程激しい。

だというのに西園寺栞は、それを拒絶反応を発生させずにやってのけている。

「百鬼先輩は一輝先輩と違って普段から魔力使うから、今回みたいに一日で何人も相手していると途中でガス欠になっちゃうんですね。だから西園寺先輩がサポートに入ってるんだと思います。まあその

他にも《水》の能力を《模写》して怪我の治療とかもやってますけど」
切断された腕や、臓器の損傷といった重傷を再生するIPS再生槽という医療技術の結晶とも言える物があるにはあるのだが、それを使用する際には全身麻酔を施す必要がある。

身体にかかる負担も大きく、何よりそれを使用した場合麻酔が抜けるまでの数時間はまともに動けないため、葉のような治療術を使える者が一人控えているだけで訓練の効率は大きく違ってくる。

今見える範囲にはいないが、水使いである珠雫や、自身の能力で『傷を負わなかった事にする』事が出来る破軍学園の生徒会副会長・御祓泡沫も七星剣舞祭には出場しないが、葉のような協力者として合宿には参加している。

「本当に規格外だな……。流石はあの《黒鬼》と肩を並べると言われるだけはある。——して、そんな彼女を撃ち破った《無冠の剣王》はどこ？」

「僕の事を呼びましたか？」

「先輩。お疲れ様です」

噂をすればなんとやら。彼らの後ろから現れたのは、黒髪の優男。されどその男はただの柔和な男ではない。

《眠りの魔女》西園寺葉を一刀の元に下し、そして名実ともに百鬼紫苑と双璧を為す破軍学園最強の剣士。黒鉄一輝である。

「イツキ。こっちに来たの？ 忙しそうだったから後で迎えに行こうと思ったのに」

「ステラと百鬼くんが模擬戦をするって聞いていても立ってもいられなくなってるね。葉隠先輩達に無理を言って早めに切り上げさせてもらったんだよ」

彼はステラ達とは離れた場所で葉隠——破軍学園の代表選手である葉隠姉妹に稽古をつけていた。それは確かに充実した時間ではあったが、それでも自らの恋人であり、憧れでもあるステラと紫苑の模擬戦となれば見逃せない。

葉隠たちもまた見てみたいと言ってきてくれたので、そこはあまり揉めなかったのだけだ。

初対面である一輝と他校の新聞部であるふたりは自己紹介を簡単に済ませ、八心はそれはさておきと本題に入る。

「黒鉄くんは百鬼くんと自分、戦ったらどっちが勝つと思う?」

「おい、八心」

「ええやん。ウチらん中で一番剣に詳しいのは黒鉄くんなんやから。素人があーだこーだ言うより、よっぽど建設的な話が聞けるやろ。で、どう?」

「そうですね……」

彼はしばし考え、そして結論を出す。

「7:3で百鬼くんの方が有利、ですかね」

「ほう、こりやまた意外というか。互角って世間では言われとるけど。その心は?」

「まず僕と百鬼くんは同じ剣士ではあるんですけど、方向性はまるで逆なんですよ。僕はどちらかと言えば防御に比重を置いた剣で、百鬼くんは攻めに大きく偏った剣技を使います。加えて僕は色んな流派や別の武術の理合を用いています、それでも純粋な『武術』であるのに対し、『滝華一刀流繚乱勢法』は剣術に魔術を組み合わせた『魔法剣術』、そして僅かではありますが『徒手空拳』で戦う術を持っています。そしてこの差が、僕と彼の決定的な差になっている」

「それって何なんですか?」

「魔力制御技術だよ。僕と彼ではそこが雲泥の差なんだ」

目に焼き付くのは《雷切》東堂刀華との試合。彼女の《雷》の魔力によって速度・威力共に底上げされた魔法剣技と互角どころかそれを追い越し続け、果てには破軍学園の敷地の2/3という範囲に斬痕を刻んだ超遠距離斬撃を実現する。

それを平均総魔力量の1/15という世界最弱の魔力で、なおかつ魔力切れの兆候を一切見せることなく、である。

自身の魔力の少なさがデイスアドバンテージとなっているが、魔力の燃費の良さだけで言うなら珠雫と良い勝負をするだろうと一輝は語る。

「そう聞くと馬鹿げてるわね……」

「その上使う剣術が日本随一の殺人剣。《模倣剣技》を使おうにも僕相手に持久戦をしようなんて馬鹿な真似は彼はしてこない。短期決戦でケリをつけに来ると思います。だから僕と百鬼くんが戦ったら、僕がどこまで彼の攻撃を凌げるかにかかってきます。……こんな感じでした良かったですか?」

「なるほど。凄いタメになったわ。おおきに。黒鉄くんの記事、格好良く仕上げたるさかい、期待しとつてや」

「ありがとうございます」

「魔力制御技術と言えば、君が来る前に《眠りの魔女》の話をしていました。君はなんとか勝ちを拾えたが、彼女と戦った所感などを聞かせてもらいたい」

小宮山が一輝に尋ねる。

ここでステラに話を振らなかったのは、自分が彼女に敗北しているからだろう。それは事実なので仕方がないが、それでも少しばかりは思うところがある。しかし自分が負けた相手に勝った男の話は聞きたいと、それをグツと飲み込み一輝の言葉に耳を傾ける。

彼は少し悩んだあと、「これは推測なんですが……」と切り出した。

「普通に戦ったら、おそらく僕は負けていました」

「そうなのか? 確かに辛勝、という感じではあったが……」

「なんでか、聞いてええ?」

「小宮山さん達はあの試合が決闘であった、という話はご存知ですよね?」

「ああ。君は体調も万全ではなかった上、新技の反動か三日間もの間眠り続けていたという事も目下部から聞いている」

彼が眠っている間に、一輝を取り巻くすべての問題は収束に向かっていったが、そこはこの話には重要ではない。

「じゃあ体調崩しとったから勝てたってこと? 火事場の馬鹿力的なやつで新技編み出して」

「いえ、僕の体調が万全だとしても彼女に負けていたと思います。僕が勝てたのは……『あの勝負が決闘であった』という一点に尽きます」

「それはどうして?」

「簡単な話だよ、ステラ。おそらく彼女は僕の事情を何かしらの手段ですべて把握し、『あえて負けてくれた』んだ。それも一撃目ですべて決めようって提案し、『誰の目にもわかりやすい明らかな決着』を演出してね」

彼女はそもそも七星剣舞祭に執着していなかった上、彼女の気質は戦士のそれとは程遠い。

故に一輝を勝たせるため、あえて手を抜くといった真似も平然とできる。それがステラや紫苑には侮辱と取られる事であろうとも、だ。

そこはステラも理解している。

だが、理解できることと、納得できるかというのはまた別の話である。

手を抜いて一輝を勝たせた事は、騎士としてのステラからすれば誠に腹立たしい。わざと負けるといふ行いは、『決闘』という一種の儀式を汚す行いであるからだ。

しかし彼女があえて負けてくれたことによつて、『一輝が騎士資格を永久に剥奪される』という最悪の未来を確実に回避できたこともまた事実であり……。

「うがー! もう色々考えすぎて頭痛くなってきたわ! イツキ、アタシと模擬戦しましょう!」

「それは構わないけど……」

ちらり、と新聞部の面々を見やる。

それに八心は「かまへんかまへん」と澆刺に笑い、

「いつまでも熱いカップルの間にいらん人間が挟まっとならあかんやろ。ありがとうな」

「それにそろそろ私達は『黒鬼』達の方に向かいたい。君達から話を聞いて色々聞きたいこともできたしな」

「こみやん、百鬼君たちおらんくなつとるで! ほな、ウチらは二人を探しますんで、ここで失礼させてもらいますわ。ほんまありがとうございます!」

新聞部の面々は一輝達に頭を下げると、八心の言う通り紫苑を探し

に去っていった。

そして件の彼はと言えば……

「……はぐつ、もぐつ」

合宿場に用意されたキッチンで間食——というには些か量が多すぎるが——を取っていた。

今回の合宿にあたり、巨門学園は多くの農業者などから商品としては使い物にならない……いわゆる規格外野菜などを引き取り、合宿参加者へ提供している。

彼が頬張っているサンドイッチもまた、そう言った食材たちを葉が簡単に料理をしたものだった。といっても料理と呼べるものはありあわせの材料で作ったソースくらいのも物だが。

「……悪いな、手間かけさせて。お前も食うか？」

「いえ、お気持ちだけありがとうございます。さほど動いていない私が食べたなら、夕ご飯に支障が出ますから」

紫苑は「そうか」とだけ言ってまた食事に没頭する。葉からすれば山ほどともいえる量だったのだが、それがみるみるうちに彼の胃袋に収まっていくのは見ていて気持ちが良かった。思わず笑みが零れるくらいには。

彼女の意識の大半は目の前の彼に向けられながらも、その何割かはここにはいない一人の男に割かれていた。

(……当然のように見抜いてくるんですから)

黒鉄一輝と自分の模擬戦。あの時確かに《全智の魔女》^{月影}として戦う事は出来なかったが、それでも《眠りの魔女》^{西園寺}として許される全力を出して戦った。あの時放った《雷切》^{オリジナル}は東堂刀華のそれよりも上だったにも拘わらず、彼は容易く打ち破ってきた。

頼もしい騎士だと思うのと同時に、恐ろしい騎士だとも思う。

(やはりステラさんの剣を受け流す際に《円》を応用したのがまずかったですでしょうか……)

《円》は黒鉄一輝が誇る《秘剣》がひとつ。打ち込まれた衝撃を円循環を以て相手に撃ち返すカウンター。それを彼女は《重力》の力を以て自身の身体の内にストックする《夜叉姫》西京寧々の《夜叉神楽》の

理合いを組み込むことで、自身の身体能力及び肉体制御技術では到底再現不可能な絶技を可能としていた。

とはいえステラほどの高機動且つ超火力の騎士を相手に、自身の能力の上澄みの更の上澄みである《眠り》だけでは到底逃げ切れないと判断したので仕方がなかったとは思うのだが。

これなら最初から《複写》であると明かしておけばよかったか。今更後悔しても遅すぎる事ではあるけれど。

しかしあと数日で自分は暁学園の切り札《全智の魔女》メアリースーとして動ける。そこまで誤魔化せればいいか、などと考えていたところで紫苑の手とは異なる手が、彼の胃袋に収まるはずだったサンドイッチを掠め取っていった。

「どれ、ワシもひとつご相伴に預かってもいいかのう？」

「……もう食ってるじゃないですか、南郷先生」

その手の先にはひよひよひよ、と笑う好々爺——《闘神》南郷寅次郎がいた。

第26話

「やめい、『先生』など。ワシはお前に何一つ教えとらんわい。……つと、お嬢ちゃん。ワシも座ってもいいかの?」

「……はい、勿論ですよ」

「すまんのう。本当なら紫苑とその彼女さんの邪魔はしたくはなかったんじやが、いかんせんジジイには立ってばかりというのは疲れるでな。それにこんなにも旨そうなものが置かれては我慢できん」

はー、よっこいせ。などとわざとらしく言いながら南郷は紫苑の横に腰掛ける。

それに対して彼ははあ、と溜息を吐く。

「間違つても付き合つてるとか言うんじやねえよ。西園寺が嫌がるだろ」

「なんじや付き合つとるわけではないのか。つまらん。ワシに曾孫くらい見せて欲しいもんじやがの」

「そういうのは寧々に期待しとけエロジジイ。コイツを巻き込むな」

ひよっひよっひよ! と笑う老人に対し、紫苑はまたため息を吐いた。

《瀧華一刀流繚乱勢法》を世界最強の剣にするために非常に世話になった人とはいえ、彼のこういうところばかりは尊敬できなかつた。ましてやそれが自分の友人に向けられるのならなおさらである。

彼女は飄々と受け流したが、それでも一人の女なのだ。自分からすれば尊敬すべき師の一人であれど、初対面の老人からこのような言動をされては不快に思うのも至極当然だ。

……などと紫苑は思っているが、栞はこれまた阿呆な事を考えていた。ここではあえて割愛させていただくが。

「はあ、それで先生。何故アンタがここにいるんだ?」

「久しぶりに弟子の顔を見たくなった……というのもあるが、それが本題ではない。お主、巨門が呼んだボランティアコーチを全員倒したんじやろう?」

紫苑と栞はそれで合点がいった。

今回の合宿にあたり、巨門は代表生を鍛えるべく何人かのプロの魔導騎士を講師として雇っている。が、紫苑と一輝は合宿を開始して僅か二日間で彼らを全員完膚なきまでに負かしている。それは《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンも《雷切》東堂刀華も含めてである。むしろ紫苑は彼女らに鍛えてもらうというよりは、挑まれるといった方が良いような事になっていた（ちなみに栞もステラに何度か相手をしてくれと言われているが、私は代表生ではないのでと断っている）。

そんな現状を破軍はともかく、巨門は良しとしなかった。彼らも共同合宿という形で場所と講師を用意している身。メンツというものがあるのだ。……とはいえ、全世界を含めても十の指に入るだろう《闘神》南郷寅次郎を呼んでくるとは思わなかったが。

「まああのレベルではお主の相手にならん事は一目見て分かったわい。……というわけでじゃ、紫苑」

最後のサンドイッチを口の中に放り込み、咀嚼した南郷はその好々爺めいた顔を凶悪に歪め、嗤った。

「腹ごなしにワシとダンスでもどうじゃ？」

「——くはっ」

その笑みに、紫苑もまた笑みで答える。

「上等だ。今日こそその首貫うぞ、ジジイ……！」

「ほぎげ、糞餓鬼」

《黒鬼》対《闘神》

互いに日本という国家の超戦術兵器に分類される《魔人》同士の衝突。

彼らが暴れるにはこの合宿場はあまりに狭すぎる。腹ごなし、と言ってはいるが彼らに自重という物を求める方が愚かである事は栞も知っている。

（ここにいる講師の方々を総動員すれば……いえ、ステラさんにも協力していただきましょうか）

なんだかんだ楽しそうな男達に対し、合宿場に致命的な被害が出たらどうしよう……と栞は胃を痛めていた。



《闘神》が来ている、という報せはこの合宿場に來ていたジャーナリスト見習いたちによつて瞬く間に広がつていった。それと同時に《黒鬼》対《闘神》の戦いが見られるとなれば、人が集まるのは至極当然と言えた。

学生、講師問わず人がわらわらと集まり、備え付けられたリングを囲む。

余波で怪我をしないようにと魔導障壁が展開される。障壁の展開には先に名前を挙げたステラ達も協力していた。たかが模擬戦で……と言われることも栞は想定していたが、幸いここには紫苑と南郷の両名をよく知る東堂もいたので、説得は手間取らなかつた。とはいえ、ステラはいまいち納得できてはいなかつたけれど。

「ねえ、シオリ。本当にここまでやる必要があるの？ アタシ達が協力しなくても、先生達に任せておけば……」

「いえ、万が一という事がありますので。それに……ステラさんは見たくありませんか？ 《闘神》の本気」

「……見たい」

「なら彼らがこちらに気を遣わず、全力で暴られる環境作りに手を貸してください。なにせ貴方の魔力量はここにいる誰よりも多いんですから」

栞の言葉にステラはわかつたわよ、と返す。

ステラほどの魔力量で構成された魔力障壁は並みの伐刀者十数人の強度・範囲に相当する。そんな彼女が協力してくれるかどうかでは雲泥の差なのだ。

無事に障壁が周囲に展開できたことを確認し、栞はリングの上に立つ二人に言う。

「南郷先生、紫苑さん！ こちらの準備は完了しました！ 始めてもらつて構いません！」

「わかつた。……黒鉄、頼めるか」

「うん」

彼らは模擬戦のレフェリーを一輝に依頼した。審判をどうするか、という話になつたところで一輝の方から志願してきたのだ。

栞からは怪我をさせるわけにはいかないから自分がやる、と言ってくれたのだが……それは断った。だってそうだろう？

(百鬼くんと南郷寅次郎……ふたりとも今の僕では及ばない領域にいる人達だ)

そんなふたりの戦い。間近で見たいに決まっている。

「……お二人とも、準備はよろしいですか？」

「構わんよ」「いつでもいい」

「それでは……試合開始！」

一輝がそう言った直後——彼の身体が宙を舞った。

刹那遅れ、ステラ達が築き上げた魔力障壁に巨大な斬痕が刻まれる。ガリイツツツ!! という派手な音を立てて、魔力障壁が崩壊した。

(何が起こった……!?)

「ツ！ 障壁の再構築！ 急いで!!」

栞は指示を下しながら壁を瞬時に構築、そして宙を舞う一輝の身体を受け止める。

咄嗟に張り巡らせた魔力障壁、それでも魔力制御の極致に至った栞は、発生した謎の斬撃の余波を辛うじて防ぎきった。一拍遅れてまた張り巡らされた講師達による障壁が完成したのと、栞の壁が崩れ去ったのはほぼ同時。

「西園寺さん!? ごめん！」

「お気になさらず。それよりお怪我はありませんか？」

「それは大丈夫……」

一輝の戦闘経験が『全力で守れ』と指示をくれたおかげで、彼は間一髪怪我を免れた。

それに栞は安堵の息を吐き、呆れに近い笑いを漏らした。

(……障壁を準備していて良かったですね。ここまでだとは思っていませんでしたけど……)

一輝の身体を吹き飛ばしたものの、そして魔力障壁を削りきった物の正体は全く同じもの。

——紫苑と南郷が放った殺気である。

そう彼らは別に攻撃を放ったわけではない。ただ『相手を殺す』という殺意を持っただけ。彼らにとつてはあいさつ程度の物であり、本来ならばそれが物理的破壊が起こる筈もない。

ただ彼らは伐刀者ではなく《魔人》。この世の世界法則を上塗りする、真正正銘の怪物達だ。そのような者達が『目の前の敵を殺す』という意を抱いたのならば、斬撃のひとつも発生しようというもの。

そして彼らは——衝突する。

互いに出方を窺いなどしない、全力の衝突だ。

黒い靄を纏った妖刀——《亡華》と鞘から抜き放たれた仕込み杖《魔笛》が派手に火花を蒔き散らし、一度、二度と交わる。

その交錯は全くの互角。

三度目の衝突で互いにリングの端まで下がり、一呼吸置く。

(……そう簡単に押し切らせてはくれないか)

ふう、と大きく息を吐き紫苑は眼前の脅威を睨みつける。

いくら魔力量によるデイスアドバンテージがあろうとも、紫苑の筋力量と《運命踏破》ブルスウルトラによつて人間の限界を超えた肉体性能。そして魔力量の不利を覆すに足る魔力制御能力。それら全てを組み合わせてもなお、齢九十を超えたあの老体に傷ひとつ事すら叶わない。

対して紫苑は全身に極めて浅くではあるが、斬痕が無数に刻まれていた。太刀による攻撃はすべて防ぎきっていたにもかかわらず、何故傷を負っているのか。

それは南郷の能力による攻撃だ。

《闘神》南郷寅次郎の能力は《音》。

彼は太刀を用いずとも、《魔笛》によつて発生した音を斬撃と化し敵を切り刻むことが出来る。南郷寅次郎が誇る伐刀絶技のひとつ、《音切》である。

本来であれば《魔笛》を抜刀、そしてすぐさま納刀することによつて発動する技を剣戟によつて発生する《音》を斬撃に変えている都合上、威力は本来のそれよりも落ちている。しかしそれでも積りに積もれば確かなダメージとなるだろう。

《音切》を使われ続ければ、不利なのはこちらだ。ならどうすれば技

を使われずに済む？

その解答を、紫苑は導き出していた。

一方その頃南郷と言えば、内心で深く溜息を吐いていた。

(……腕の痺れが止まらん。奴め、本当に加減という物を知らんな)

尤も、紫苑は加減だとか遠慮だとかいうものとは程遠いところにいる男であるという事は南郷もまた重々承知しているところではあるが。

——悟られないように表情を繕ってはいるが、紫苑の攻撃は有効打とは言えずとも、確かに南郷の肉体にダメージを与えていたのだ。

というのも南郷が先の剣戟の中で《音切》を発動させていたように、紫苑もまた伐刀絶技を発動させていた。

それは《瀧華一刀流繚乱勢法》の絶技の一つ、倍化能力を用いて斬撃を増やし、そして重ねる《八重樫》である。それは瀧華薫がステラのような生粋のパワーファイターと真っ向から渡り合うために生み出した剣技ではあるが、それとは別に刺さる相手がいる。

それは南郷のように防御を得意とする相手である。

《八重樫》の特性は前述したとおりであるが、重なった斬撃は全く同じタイミングで叩き込まれるのではなくほんの僅かにタイムラグがある。本当に僅か、常人には決して気付けないだろう本当に僅かなタイムラグによって起こる多段攻撃は、衝撃を殺しきることが極めて困難である。おまけに紫苑のスペックは先に述べた通り、カタログスベックからは想像できないほどのパワーとスピードを併せ持つ。

(そしてその程度、奴は見抜いてくる。となれば応手は読めるな。……やれやれ、結局は根競べか。老体には堪えるんじやがのう)

双方、深く息を吸った。そして——再度、鬼と神が衝突する。

鋼と鋼がぶつかり合う音が響く。だがそれは斬撃になることはなく、音色を奏でる。

剣と剣、それがあある種の曲となり、そして彼らはリングという舞台の上で踊るように刀を振るう。

否、ように、ではない。それはまさしく舞踊であった。

紫苑の舞は酷く苛烈だ。ただ眼前敵を殺すという目的のみを追求

した、攻めに特化した戦闘舞踊。瀧華薫、そして百鬼紫苑の十八番にして必殺の剣舞《刃桜舞い》。

黒い靄を纏った刃は、己の本能のままに、殺意のままに振るわれるそれには、決まった型などは存在しない。連綿と受け継がれてきた『如何なる手段をもってしても眼前敵を打倒せよ』という意志を乗せ、神の血を啜らんと吼えるその姿はまさに『修羅』と呼ぶに相応しい。そしてその刃は南郷寅次郎に《音切》を使わせないという目的を容易に達成した。

だが——その防御を崩すことは叶わない。

《闘神》——《無缺》南郷寅次郎が誇る戦闘舞踊《劍曲・劍の舞》。専守の剣なれど、数多とある第二次世界大戦の戦場、その中でも極めて苛烈であった南方戦線を一切の傷を負わずに生還してみせた事からもその守りは比類ない。

攻撃の《刃桜舞い》。防御の《劍曲・劍の舞》。相反する舞が衝突し、鋼の音色を奏で、それは決して止まることはない。

その世界最高峰の剣のぶつかり合い、それに彼らを囲む観客達もまた固唾を飲み、一言も口から漏らすことなく彼らの舞を見守っている。

《刃桜舞い》の袈裟、横薙ぎ、刺突……エトセトラエトセトラ。そしてそこから発生する魔力の刃が南郷を切り裂こうとするが、《劍曲・劍の舞》はその悉くを防ぎきってみせる。

——紫苑が《刃桜舞い》を、南郷が《劍曲・劍の舞》を用いた時点で此度の戦いの結末はふたつに一つとなった。

模擬戦で事前に定められた制限時間に十分の間に紫苑が南郷の守りを崩すか、南郷が守りきるか。

そして——。

◆ ◆ ◆
「……結局勝ちきれず、か」

自分に割り当てられた部屋、そこに備え付けられた二人掛けのソファーに背を預けながら紫苑は呟いた。

——南郷が施設に訪れてから三日、毎日模擬戦を重ねたが結果はすべて引き分けに終わっている。

初日の《刃桜舞い》と《剣曲・剣の舞》の超持久戦や《音切》による弾幕を《究極生存本能》カワード・インステインクトで掻い潜ることが出来るか否か、そしてそれらの複合。様々なやり方で戦い続けた二人ではあったが、先に彼が言った通り引き分けに終わっていた。

それに「でも」と異を返すのは同じ部屋を使っている葉である。「今日は片腕を持って行けたじゃないですか。あと五分長ければ勝てましたよ」

「戦いに『もし』はない。それに最後の最後で腹派手に掻っ捌かれただろ。結局トントンだ」

相変わらずストイックですね、と紫苑の言葉に彼女は苦笑する。軽傷を負わせる事すら並みの騎士には不可能な《闘神》の片腕を切り飛ばしたというのにまだ足りないのか。しかもその後ステラと刀華などのボランティアコーチ全員を相手し、勝利を収めたというのに。見上げた向上意識である。

まあそうでもなければ世界最強の剣士を目指そうとは思わないのだろうか。

「それにヴァーミリオンにも傷を負わされた。奴も随分と巧くなった……お前が見ているんだろう?」

「ええ、まあ」

はあ、と葉は大きく溜め息を吐いた。

それは合宿が始まった初日の事。

『お願いシオリ! アタシと模擬戦して!!』

『お断りします』

『なんで!?! 自分で言うのもアレだけど、アタシと戦って損はさせないわよ!』

『貴女の相手をするの非常に疲れるんですよ。剣は重く、魔法戦で相手しようとしても人一人に向けていい火力ではない技を気軽に撃つてきますし。それに私は貴女のように今以上に強くなりたいなどと思っていない。そもそも私がこの合宿についてきた理由は怪我の

治療といった方面での選手のサポートであって、ボランティアコーチとして呼ばれたわけでもありません。ですのでお断りします』

確かに自分は彼女に勝利した。己の真の能力、その一端を使わされたことは予想はしていなかったが、それを加味しても圧勝という形で。

まるで子供をあしらうような余裕を残しての勝利ではあったが、だからと言ってそう何度も相手をしたいかと言われればそうでもない。

何故なら彼女の相手は非常に疲れるから。紫苑や刀華などのように毎日毎日相手をしているのが異常なのであって、身体能力は一般の女性とそう変わらない葉には堪える。それに今回の合宿では紫苑のサポートに徹するつもりだった、というのもある。

そのように断ってから一日後。ステラからの猛烈なアタックは止まらなかった。

二日後、南郷が来てからの彼女のアタックは更に苛烈さを増した。それに根負けした形で彼女の特訓に付き合う事になった。……と言っても霊装と霊装をぶつけ合うようなものではなかったが。

「それでバトミントンか」

「はい。手を使わず、魔力操作のみでラケットを操る。ちょうどこんな感じですね」

そう言っただけで彼女は少し離れた場所に置いてあったテレビのリモコンを操作してチャンネルを次々と切り替え、最終的にはテレビを消した。

からくりとしては魔力を障壁として展開する事とそう変わらない。けれどただ固め、壁として展開する事と魔力を自身の手足のように操ることでは難易度は天と地の差。

葉はなんて事のないようにやっているが、同じ事が出来るのは破軍学園においては珠雫くらいしかいないだろう。

そんな魔力操作バトミントンを、彼女はステラへの課題として与えた。合宿中の目標はラケットを操りながら、葉からワンゲーム先取すること。

ちなみにだが葉はその相手を水分身を作り、別の場所にいる選手達

の治療を並行し、なおかつラケットを六本操りながらである。

そんなものがバトミントンである筈がない。当然ステラも苦言を呈したが、『だったら貴方も出来るようになればいいでしょう?』と黙らせた。

別にラケットを複数本用いてはならない、というルールを設けていないのだからやっても構わない。

『まあ、出来るものならですけどね?』

そう言われたステラの反応は……まあ、察しがつくだろう。

彼女は炎の能力者に相応しく、油を注げば注ぐほど燃え盛ってくれる。これほど扱いやすい者も早々いない。

最終的にステラは一点しか取ることは出来なかったが、それでも彼女の魔力制御技術は合宿以前と比較して大いに成長した。

「……いい性格してるな、お前も」

「お褒めの言葉として受け取っておきましょう」

溜め息を吐く紫苑に彼女は微笑む。

と、そこで紫苑が大きく欠伸をした。

「……大きな欠伸ですね。もう寝ちやいますか?」

「ああ……そうだな……ねむい……電気、つけたままでいいぞ」

「いえ、私ももう寝ちやいますね。おやすみなさい、紫苑さん」

ぱちり、葉が部屋の電気を消す。

紫苑がベッドに入り、そしてすぐさま寝息を立て始めたのを聞いて……葉はほっと安堵する。

それは紫苑に仕掛けた伐刀絶技が無事に効力を発揮し、なおかつそれが紫苑に悟られること無く眠ってくれたことだ。

葉が紫苑に仕掛けた技の名は《安息の揺りかご》

対象の傷の治癒速度、疲労回復、魔力回復速度などを高める非攻撃型の伐刀絶技であるが、副作用として相手の睡眠欲を増大させてしまうことが挙げられた。

この技が彼の《究極生存本能》の効力範囲外であることはわかっていた。それはこの技は強制的に眠らせるといった『攻撃』ではなく、自分に様々な恩恵をもたらす『回復』であると判断されるためであろう。

副作用も僅かに促進されるだけであつて、大元は彼自身の欲求であることも幸いした。

とはいえ、そんな極めて限定的な予知に頼らずとも彼は勘が鋭い方だ。自分が技を仕掛けたことに気付かれる可能性は十分にあつたが……南郷との戦いで彼も疲弊していた。

なまじ脅威に関する絶対的な嗅覚を有している代わりに、自らの利になる事に対しては彼は極めて鈍い事も葉は把握していた。

ともかく彼女にとつて都合の良い方に物事が働いたと言える。

(効力時間は……およそ18時間といったところでしょうか。前夜祭を終えるには充分な時間。さて、これで紫苑さんの無力化は達成したとして……念のため、日下部さんの方を見ておきましょう)

彼女は聴く、そして優秀なジャーナリストである。

暁学園しゅんがくえんに辿り着かれる可能性は……まあ無いとは思うが、念には念をだ。辿り着けなければ良し、辿り着いたのならば自分が関わっているという証拠だけ隠滅した上でもう一人に事後処理を任せれば良い。

それによつて彼が自分達を裏切るのか否かのひとつの判断材料になることだろう。

(仕事を増やさないでいただきたいですね。……有栖院風さん)

彼女は破軍学園の女子生徒《眠りの魔女》としてではなく、暁学園の切り札《全智の魔女》メアリースーとして暗躍を開始した。

第27話

——巨門と破軍の合同合宿も最終日となろうとしていた夜。

天気は生憎の雨であった。嵐というほどではないが、大粒で勢いのある雨粒が破軍学園新聞部部长・日下部加々美の自室の窓をぱたぱたと叩いている。

もう夜更けと言っていていい時間であるというのに、眠らず彼女が何をしているかと言えばこの合宿期間中に収集した資料の整理である。小さなデスクスタンドに照らされ、机の上を埋め尽くさんばかりの書類の数々は今回の合宿で取材をした情報と、他校の新聞部とトレードを行った情報。そして書類を押しつけるように鎮座しているノートパソコンには、他の部員達が集めてくれた他校の合宿の情報が入っている。

これらの情報を照らし合わせ、合宿期間の七校の動向やそれぞれの戦力分析を俯瞰的な視線から行う。七星剣舞祭前の特集号のために。

——それはそういった過程での発見であった。

きっかけは彼女の尊敬するクラスメイトであり、先輩の黒鉄一輝からの電話。

『巨門の代表選手の『紫乃宮天音』ってどういう人かわかる?』

随分と曖昧な質問であったが、その時も彼女は漠然とした事しか教えることが出来なかった。

元々彼の詳細は不明であったし、そもそも今回の七星剣舞祭においては天音のような……つまりは小学生リーグや中学生リーグの出場経験がない一年生が多く代表入りしていた。彼もそのうちの一人、程度での認識で日下部としてもあまり興味を持っていなかった。

ヴァーミリオン皇国からやってきた超新星《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンに、日本人唯一の学生Aランク騎士《風の剣帝》黒鉄王馬の七星剣舞祭への参加表明、現《七星剣王》諸星雄大などなど。ジャーナリストとして着目するべき点は多くあったのだから。

しかし尊敬する先輩に頼ってもらったのであれば、その信頼には応えたいもの。

そんな気持ちで彼の調査を開始したのだが……、

「なによ、これ……！」

日下部は目を見開いた。現在彼女がいる東北の山奥は真夏でも涼しいくらいであるというのに、冷や汗が止まらない。

彼女が目を落とすのは苦勞して手に入れた件の少年、紫乃宮天音の一学期の成績表。そこに記されていた授業内の模擬戦の成績。

六戦六勝——うち六戦不戦勝。

新聞部として多くの選手の戦績データを集めてきた日下部だが、こんな不気味な戦績は見たことがない。

いや、見たことがないといったら……これほどの無名の選手がエントリーしてきた七星剣舞祭自体、前例がない。

ただの豊作。今まではそのように考えていたが、果たしてそのようなことがありえるのだろうか。

力がある者は本人が望まずとも目に留まるのがこの世界だ。だといふのにこれほど多くの、一年でありながら代表に選ばれるほどの『実力者』達が……今まで誰の目にも留まっていなかったなどという事が。

(まるで今まで日の当たらない世界にいた者達が、示し合わせたみたいいな……)

「……ッ」

ふと感じる。

自分が気づいてはいけないものに気付きつつあることを。そしてそれは自分のような一記者にはどうしようもできないほど、途方もないものであることを。

——過去に百鬼紫苑の事について調べた時のような。

アレが今、自分が気付こうとしているモノと同一のモノであるとしたら。以前は警告だけで済ませてくれた。しかし……二度目はないかもしれない。

(……それでも)

自分はジャーナリストだ。違和感を覚えたからには追求しなければならぬ。

それに今回の件で巻き込まれるのは自分だけではないのだ。一輝達、七星剣舞祭に情熱を燃やす者すべてが巻き込まれることになる。そんな事態はなんとしてでも防がなくては。

故に日下部はすべての資料をひっくり返し、自らの内に芽生えた違和感を徹底的に追及する。

七校すべての代表生の情報から理事会の面々に目を通したとき――

雨の音とは異なる異音が、日下部の耳に届いた。

「――ツツ!!」

勢いよく音のした方へと顔を向ける。

音の発生源は――窓だ。雨の降りしきる外から、その音は聞こえた。かりかり、と窓をひつかくような音が。

彼女は恐る恐る、窓に向けてスマホのライトを照らすと……。

「なおーん」

と鳴く、一匹の黒猫がそこにいた。

「なんだ、猫ちゃんか……驚かせないでよ、ほんと」

首を傾げる黒猫に、日下部はほっと胸をなでおろした。

調べている事が事なのだ。いつ自分を黙らせに来る刺客がやってきてもおかしくないこの状況で、この黒猫の来訪はあまりにも心臓が悪かった。

彼女はびしょ濡れになった猫を室内に迎え入れ、身体を拭いてやる。

身体が濡れている以外は清潔で、暴れまわったりもしない。首輪もしているし、誰かの飼い猫だろうか。この施設で誰かが飼っている猫が迷い込んできたのか、はたまた深夜の散歩にでもやってきたのか。このままでは調査の続行もできないし、夜更けに悪いが施設の人に預けよう――そう考えていた時だった。

猫の青い瞳が淡く輝き、日下部を眠りの世界に引きずり込んだ。

日下部が迎え入れた黒猫――それが一瞬のうちに姿を変え、地面に向かって倒れる日下部の身体を支えた。

それは破軍学園の制服を纏った黒髪の少女、西園寺栞改め月影栞である。

彼女は日下部の身体を椅子に座らせると、机の資料すべてとパソコン、加えて彼女がまとめた資料に目を通していく。

彼女がここにやってきた理由は《暁学園》が明日（もう今日）になろうとしているが）行う《前夜祭》の成功をより盤石にするためであるが、何故こうも易々と侵入・そして今情報の隠蔽を行えているのか疑問が残りはしないだろうか。いや、そもそも何故大雨の中、猫が窓をひっかくような小さな音が日下部の耳に届いたのか。

それは彼女が日下部が滞在している部屋を中心として伐刀絶技を使用していたためである。

その技の名は《幻想結界》。数週間前赤座を拷問していた時に使用していた結界だが、その真骨頂は『結界内で起こるすべての事象に干渉することが出来る』点である。

今回の例で行くのであれば『ある特定の音を対象は必ず拾うようになる』『それに関して違和感を覚えなくなる』『結界内に滞在している者の警戒心の低下させる』などなど……挙げたらキリがないほどの事象に栞は干渉している。

それほど高度の結界を日下部に一切関知されることなく行うことが出来たのは……ひとえに彼女の魔力操作技術が極めて優れているからに他ならない。

そのように自身が潜入する準備を整えた栞は《変身》の異能を用いて猫に化け、真正面から日下部がいる室内に入ると《眠りの魔眼》スリーピングアイズを発動させ、彼女を眠らせたわけである。

こうして用意に侵入を果たした栞は、日下部のまとめた資料に目を通し、感嘆と呆れが混じり合ったような溜息を吐いた。

「……これは、見事というかなんというか……」

そこにあっただのは、七星剣舞祭の代表生の名前が複数。

『巨門学園』紫乃宮天音

『祿存学園』サラ・ブラッドリリー

『文曲学園』平賀怜泉

『貪狼学園』多々良幽衣

これだけならばただ日下部が気になった生徒をピックアップしただけのように見える。しかしこれらの資料に記されていた者達は――全て葉が所属する『暁学園』が他校に潜入させていた生徒の名前だった。

加えて葉が彼女を無力化した時に開かれていた資料は、西園寺葉のもの。一輝に敗北し、代表生に選ばれていなかったにも関わらず調べている辺り未恐ろしいものがある。

「優秀過ぎるのも困りものですね」

ともかく『暁学園』に自分が関わっている証拠を隠滅しなければ。

葉は日下部の頭にそっと手を置くと自身の魔力を彼女に注ぎ込んでいく。それは『西園寺葉の事を考えようとした瞬間に、何を考えようとしていたか忘れる』ようになる、という認識阻害術式。まるで目覚めたとき、『夢』の内容が記憶から抜け落ちていくように彼女の脳に一時的に仕掛けを施した。

無論、後遺症が残るといった事はなく、時間経過で自然と解除される。また全力で『迷彩』を施したため、学生騎士レベルの人間に術式が発見されることはまずない。

「これでよし」

自身が関わっているという証拠は完全に隠蔽した。またあえて日下部にとっての本丸である『暁学園』の存在には気付けるようにしてあるので、眠らせる前との記憶の齟齬も最低限に済んでいる。

『暁学園』の隠蔽は日下部を監視している者に任せるとしよう。

葉は『転移』の異能を用いて日下部の部屋から出ると、『幻想結界』内にいる者すべての認知を書き換える。そして、

「すべては夢でした」

誰にも悟られることなく、自身の目標を達成したのだった。

「……ん？ アレ!? 私、いつのまに寝ちゃったの!?!」

机に突っ伏して眠っていた日下部は勢いよく起き上がる。

部屋の壁にかけてある時計を確認すると時刻は1:25。彼女の記憶にある限り、10分間眠っていたことになる。

「しっかりしろ、私。早くこの違和感の正体を突き止めないと……」
ぱん、と頬を叩くと彼女は再びパソコンと資料に向かい合う。

——己が感じている違和感、その一端が欠落したことに気付かぬまま。

……そしてその40分後、日下部は彼女が調査を行っている最中ずっと監視を行っていた有栖院風の襲撃に遭い、意識を失う事になる。

その有栖院すら、葉の行動には一切気付くことが出来なかったのは語るまでもないであろう。

◇ ◇ ◇

そして一夜明け。夕刻。

合同合宿を終えた破軍学園のメンバー達は、生徒会メンバーの一人・碎城雷が運転するバスに乗り帰路をたどっていた。山形からの長旅はもう終わりも近く、破軍学園はほど近い。

生徒たちは皆、仲の良い者同士で近くに座り、和気藹々と談笑している。とある一人を除いては。

「はあ……」

「元氣だしなよ、ステラ……」

「だって、悔しいんだもん……」

一輝がステラを気遣うも、彼女の顔に活気は戻らない。

そんなところに声をかけてきたのは破軍学園の七星剣舞祭の代表、葉隠姉妹である。

「どったのステラちゃん」

「バス酔いなの？」

彼女達の言葉にステラは「そういうわけではないわ」と言葉を返すが、彼女の気分は沈むばかりである。

何があったの、と彼女らは一輝に視線を向ける。

「……百鬼くんとの模擬戦の結果に思うところがあつたみたいで」「ちなみに戦績は？」

「……………六戦全敗」

言うとしてテラは、ズウーンという効果音が聞こえてきそうなほどに意気消沈してしまう。

合宿初日からステラは紫苑に模擬戦を挑み続けた。しかし結果は彼女自身が言った通り、完膚なきまでに打ちのめされ、叩きのめされ、負かされ続けたのだ。

しかも最終日以外は一太刀も浴びせることが出来ずに敗北している。

これを惨めと言わず何と言うのか。

だが葉隠姉妹はそうは思わなかったようだ。

「南郷寅次郎相手に真正面から互角に戦える相手だぜ？しょうがなくないか？」

「そうそう。今年のFランクは絶対にFランクじゃないの。Fランクの皮を被った別の何かなの。バケモノなの」

「あれ、これサラツと僕デイスられたな……」

男の嘆きがどこからか聞こえてきた気がしたが無視。そんなもの聞く価値もない。

「……でもそんなの言い訳にならないわ。だからこそシオリにも恥を忍んで特訓してもらったのに……うがー!!」

「人の名前を呼んでおいてすぐに吼えるなんて酷くないですか？」

苦笑しながら話に入ってきたのは、ステラの特訓相手の一人の葉である。

しかし吼えたくもなる、と彼女はまくしたてる。

「だって！ アレのどこがバドミントンよ!! ラケット何本も使うとか反則でしょ!？」

「貴女もやっていいですよ、って私言いましたよね？」

「出来るわけないってわかって言ってたでしょ!？」

「それは勿論。そんなに簡単にされたら私の形無しじゃないですか」

「し……お……り……!!」

「ふふ、まあそれは冗談として。魔力制御技術は一日で一気に伸びる、という物ではありません。毎日コツコツと続けることが、一番の近道

です。頑張ってくださいね」

「むう……」

そもそも自分は葉に文句を言える立場ではないことは重々承知である。

やりたくない。断る。紫苑のサポートに徹したいと言っていた彼女に無理を言って頼んだのは自分なのだから。

だからと言ってアレはなくないか、という気持ちもあり……。

そんな彼女をよそにそういえば、と黒鉄珠雫は葉に尋ねる。

「その百鬼さんはどこに行かれたのですか？ 姿が見えませんが……」

「彼なら南郷先生と一緒に東京に帰られるそうです。あのお二人は師弟関係である前に、祖父と孫のような関係ですから。色々積もる話があるでしょう」

無論それは嘘である。

今頃紫苑は自分が合宿中に使っていた部屋のベッドで、すやすやと眠っているはずだ。それが露見しないように紫苑が使っていた部屋には意識が向かないような細工を施してきたし、それとは全く別にリラクスできるような環境を整えてきた。

（南郷先生に互角で終わった事を気にしていましたし……折角疲れを取る魔術をかけてきたのに、安眠できないんじゃないかね）

そもそも無理やりかけた魔術だとか、色々と自分で突っ込みたいところはあるがそれも仕方のない事だ。

何せ紫苑が今回の前夜祭に参戦すれば、自分達の敗北は必至。自分ならば彼を抑える程度はできるが、それでも自分以外が七星剣舞祭に参戦することが出来ないという状況にもなりかねない。

それは父が掲げる悲願の為にも、絶対に防がなくてはならないのだ。

といった裏の事情はあるのだが、それをこの場所にいる面々が見抜けるはずもなし。

話はステラがやけ食いを始めた菓子、そこから発展して女同士の聖戦に移り変わり、それを葉は微笑ましく見守る。……確かにステラの

あの体質は詐欺だろう、などと思いがら。

そんな時だった。

砕城が勢いよくブレーキを踏んだ。あまりに唐突に推進が失われたことでバスにいた全員が前に投げ出される。

「何があつたの!?!」

真つ先に動いたのは生徒会長である東堂刀華である。彼女はすぐに席に立ちあがり、砕城に駆け寄った。

感情を表に出さない砕城にしては珍しく顔を青く染めながら、真つ直ぐ前方……破軍学園がある方を指さしていた。そこには……血のような空に。もうもうと黒煙が立ち上っていた。

一輝達に乗せたバスは、突っ込むような勢いで学園の正門を潜り抜け、タイヤを滑らせながら停車した。

同時にドアから、窓から外に飛び出し、その惨状を目にした。

校舎のあちこちから火の手が上がリ、黒煙が立ち上っている。地面を舗装しているアスファルトはひび割れ、砕け、爆撃で儲けたのかというありさま。そして学園のあらゆるところで、破軍学園に滞在していた教師や生徒が倒れている。

しかし目の前で何が起こったのかを把握する暇を与えず、上から声が響いた。

「レディイイイイス!!!ア~~~~~~ン、ジェントル
メ~~~~~~ン!!!」

なんともふざけた、軽い調子の声が響いた。一輝達は一斉に視線を上げ、その声の主を捉える。!!!

道化師の装いをした、長身痩躯の男。それが燃え盛っている校舎の屋上に佇んでいたのである。

「山形からの長旅、大変お疲れ様でしたあ！ お待ちしていましたよう!!」

その姿はあまりに奇妙。破軍学園を襲撃した賊に違いはないのだろうが、あまりにも場違いな格好であり、ほとんどの者が困惑を浮かべるが……一輝と東堂にはその姿に見覚えがあつた。

『文曲学園』の平賀怜泉さんですよ。これは貴女がやった事ですか？」

「いえいえ。いえいえいえいえいえ。『ボク』ではありませんよお」
言うや否や、《道化師》平賀怜泉は高さ十メートルはあろうかという屋上から飛び降りる。あまりにも無謀、しかし飛び降りたのは彼一人だけではない。

彼の背後から次々と続くように人影が飛翔し——全員揃って一輝達の前に着地する。

野太刀を携えた和装の男——武曲学園代表・黒鉄王馬。

トップレスにエプロンを羽織っただけの奇抜な格好をした女——
緑存学園代表・サラ・ブラッドリリー。

黒いライオンに跨る少女とメイド服の女——廉貞学園代表・風祭凜奈及びその従者、シャルロット・コルデー。

その他三名、合計七名の面妖な風貌と、その風体以上に凶悪なオーラを孕む者達が、一輝達の前に並び立つ。

そして平賀は仰々しく手を広げ、告げる。

「ボク達、『暁学園』です」

影で蠢いていた第八の勢力が、正式に名乗りを上げた。北斗七星の名を関する七校にあてつけるような、『暁』という名を。

「……破軍以外の六校の代表が顔を並べ、破軍へ襲撃を行った。一体どういう意図なのか……納得のいく説明を聞きたいね、兄さん。皆は無事なんだろうね？」

一輝は賊の中でも最も縁のある者——実の兄である王馬に問うが、それに彼が応じることはない。

彼はただ真っ直ぐ、ステラだけを見つめていた。

それにステラもまた睨み返す。

暁と名乗った全ての者たち全員が覇気を纏う魔人に相違ないのだろうか、彼はその中でも規格外だ。まさに桁が違う、という表現が相応しい。

だが負けじと、ステラ以外の者達も暁学園の面々を睨み返す。徐々に、しかし確実に両者の緊張が高まっていく。

そんな中で一輝が投げかけた疑問に、平賀が答えた。

「ああ、ご安心を。倒れている皆さんは幻想形態によるダメージで気絶しているだけで、怪我一つしていませんよ。それで……ああ、何故このようなことするのか。そも暁学園とは何なのか。ええ、お教えいたしますとも。」

いくら『暁』に所属している生徒が七星剣舞祭への出場権を持っているからといって、連盟の許可なく設立された新設校が参戦するなど運営委員会が認めるはずがない。故に、認めさせる必要があるのですよ。我々、『暁』が存在しない『日本で一番強い騎士を決める祭典』がどれほど無意味で、空虚な物なのかを。誰の目にも見える形でね」「……つまり『破軍』を壊滅させることでその『示し』を行い、『破軍』に変わって第七の学園として出場しようというわけですか。……そのような無法、まかり通るとお思いで？」

「委員会だって馬鹿ではない。出場停止になるのがオチだろう」

「フフ、皆さん聡明で助かりますよ。しかしそれがそうでもない。我々は必ず七星剣舞祭に参加します。」

「というよりも運営委員会、そしてその母体たる連盟は我々を認めざるを得ないのでしょ」と

「だってそうでしょう？」と彼は語る。

《騎士連盟》は傘下の伐刀者教育を一身に預かる身であり、連盟所属の教育機関より遥かに力を持つ教育機関を許せない。

それは戦後半世紀以上の時をかけて構築してきた、『日本の伐刀者教育の全てを独占する』という権益を守るため。

国家の守り手である伐刀者の教育を日本ではない全く別の組織が代行しているというある種歪な状況を国民に容認させ続けるため。

そして此度の破軍学園壊滅によって失われた信頼を回復するため。以上の理由から連盟は必ず自分達の挑戦を受ける。

否、受けざるを得ない。

そのような状況を作り上げる事こそが、此度の襲撃の目的であった。

「ですので、非常に申し訳ありませんがここで貴方達には残らず倒れ

てもらいます。我々の踏み台として」

——ぞわり、と。ドス黒い殺気が暁の背から昇り、それぞれが霊装を構える。

「ここまでコケにされて、はいそうですかなんて言うと思う？」

それに対し一輝達もまた霊装を構え、応戦の意志を示す。

あまりに唐突な悪意。動揺が残っていないと言えば？になる。

だがそれ以上に、自分達をここまで足蹴にした連中に一発かましてやらねば気が済まない。

「やれるものならやってみなさい！」

「それでは遠慮なく。ふふふ……」

こうして場の緊張は一気に沸点に達し、両軍が同時に地を蹴った。

……その様子を破軍学園の内通者、有栖院風は酷く冷静な目で見ていた。

(この一撃は必ず通る)

有栖院は自身の霊装である《黒き隠者》ダークネスハーミットを顕現、扇状に構える。

——彼はこの瞬間のために今の今まで忍んでいた。

有栖院の能力は概念干涉系《影》。伐刀絶技《影縫い》シヤドウバインドは対象の影に霊装を突き刺すことによって、いかなる者であっても強制的に束縛する非常に強力な伐刀絶技である。

しかし彼の能力は真正面から戦いよりも、奇襲という場で尤も活きる能力だ。

ならばそれが通るだけの状況を作ってやればいい。

学園に入り込み、何食わぬ顔で実力者たちに近づき、信頼させ、たった一撃だけ無条件で通る隙を作り出せば暁学園の勝ち揺るがない。

そしてこの瞬間、有栖院はその全てをやり遂げた。

破軍陣営は有栖院に無防備な背を曝し、眼前の敵に駆け出してしまっている。一輝の生徒手帳から『有栖院はスパイである』と警告が発せられるが、それは僅かに、けれど致命的な位に遅かった。

最早回避も防御も不可能な状況を整えた。

だからこそ彼は——暁陣営への奇襲が無条件に通ると確信した。彼は暁学園を裏切っていた。

ここに到着する前に一輝達に暁学園の存在、目的などを打ち明け、その上で彼らの打倒に力を貸してほしいと頭を下げていた。それに対し一輝達は……彼を信じることにしたのだ。

しかし暁のメンバーがその事を知っている筈がない。故に自分を信用し、ここで破軍陣営を有栖院が無力化すると確信している。

……と、彼は思ってしまったている。

彼は気が付くべきだった。

この場所に百鬼紫苑が、今回の襲撃における最大の障害が既に取り払われている事に。

彼は感じるべきだった。

《黒鬼》がこの場にはいないという、奇襲にはもってこいの状況がすでに完成されているという事に、なんら違和感を感じなかった事に。

だから、ほら——暁陣営に駆け出した破軍の生徒が一人欠けている事に気付けない。

「がっ……………!!?」

有栖院の胸元、そこから大振りの刃が飛び出していた。

「……………は?」

「あり、す……………?」

暁陣営に向かって投擲されるはずであった《黒き隠者》。

それが放たれず、あろうことか背後で有栖院の苦悶の声が聞こえてきた事に破軍陣営は振り返った。

そこには前述した通り、大振りのナイフによって胸元を貫かれた有栖院の姿があり。彼が倒れたことよってその姿が露になった。その姿を捉えたステラは吼える。

「どういふことよ……………シオリ!!」

◇ ◇ ◇

「はあ……………」

ステラの咆哮、それに刺客——栞は大きく溜め息をついた。

彼女は左手から作り出した魔力糸を用いて気絶した有栖院の身体を絡め取り、そしてたんつ、と軽く背後に飛んだ。

そして空いたおよそ二十メートルほどの距離。それこそが栞と破軍メンバーとの決して埋められない溝の象徴であった。

そのすぐ背後で……景色が揺らぐ。

栞の背後に立っていたのは二人の男。和装を纏った青年と、道化服に身を包んだ長身瘦躯の男。

「ふっふっふっ、お疲れ様でした。栞さん。お見事でしたよう」

「……早くこの男を彼の元へ届けに行きなさい」

道化服を纏った男——平賀怜泉は、笑うがそれに栞は不快感を隠そうともせず顔を顰めた。

「そんな顔をしなくてもいいじゃあないですか」

「早くしろ、と私は言いましたが」

「ええ、ええ。勿論ですともリーダー。全ては貴方の命ずるがままに」

「リーダー……？」

その声は一体だれのものだったのか。

目の前で行われるやり取り、突如として動きを止めた暁学園のメンバー。そして自分達の背後から現れた黒鉄王馬と平賀怜泉。そしてトドメに自分達の作戦を挫いた西園寺栞。

目まぐるしく変化する状況に彼らは到底追いつけていなかった。

破軍学園の面々が現実を飲み込もうとしている間に、栞は確認すべきことを済ませていく。

「残りのメンバーは？」

「ここを壊滅させた後、《世界時計》と《夜叉姫》の足止めに向かった。既に奴らが通るだろう東海道新幹線の線路上で待ち伏せが完了しており、空路も既に封じてある。これはクライアントに指示を仰ぎ、彼もまた了承している。故にオレ達がやることは目の前の敵を叩き潰すことだ」

「私達の負担が大きすぎるような気がしますが……まあ良いでしょう。今に始まった事ではありませんし。……それで、どういうつもりか、でしたか。そんなもの決まっているでしょう？」

「我々が『暁』であるからですよ」

最初からお前達の敵であったのだと。そう告げた。

「つまりアンタは……最初からアタシ達を騙していたのね!？」

「ええ。そう捉えてもらって構いませんよ。申し訳ないとは思っていませんけどね。」

ですが……貴女方が七星剣舞祭での優勝を志すように、我々にも為さねばならないことがある。そのために、貴女方にはここで倒れてもらいます」

ステラの糾弾にも、栞は一切表情を変えない。

それに彼女以外もまた、察するだろう。

のつぴきならない事情があつて、自分達と戦う事を強要されているわけではない。彼女は有栖院が暁を裏切ったのと同じように、自分自身の意志で彼女は自分達の敵になったのだと。

「……それに『はい、そうですか』なんて言うと思う?」

改めて破軍学園のメンバーは霊装を構えた。

目の前の不条理に抗うために。そして母校を滅茶苦茶にした敵を絶対に許してはならないという覚悟で。

——しかし、彼女達にとつてそんな決意などは言ってしまうかどうかでもよかった。

彼女達がどのような決意を持つていようとも、その全てを上から叩き潰すのみなのだから。

「《紅蓮の皇女》は俺が貰う。文句はないな、《全智の魔女》」

「ええ、勿論。それでは——」

栞はそつと微笑み、そして——。

「記せ、《愚者の写本》」

己の霊装を顕現させた。

——それは一冊の本だった。

持ち運ぼうと思うと脇に抱えなければならぬほど大きな本。

タイトルも書かれておらず、装丁も何もかもが白い。白紙の名を関するに相応しい、真っ白な本。

そんなものに殺傷力など望めようはずがない。だというのに……。

(なに、あれ……!!)

葉隠姉妹の膝は笑っていた。カチカチ、と齒が鳴る音が周囲に響

き、冷や汗が滝の様に溢れる。

怖い。恐ろしくて仕方がない。先ほどまでは抗おうと克己していたにも関わらず、あの本を見ただけでその決意がゴミのように思えてくる。

あの白い本に込められた絶対的な『力』。黒鉄王馬のそれをなお上回る庄に、彼女と向き合った全員が確信する。

自分達の最大の脅威。それは西園寺葉を置いて他にない、と。

そして――。

「それでは蹂躪を開始します」

絶望が、自分達の終わりを宣告した。

第28話

蹂躪を開始する。

そう葉が言った直後、平賀怜泉は葉と王馬が歩みを進める方向とは逆——つまりは破軍学園から離脱する動きを取った。

だがそれを易々と許すほど、ここにいる人間は甘くはない。

「——ッ、待ちなさい！」

黒鉄珠雫が即座に逃走を阻止しようと動く。彼を追いかけながら放つのは《水牢弾》、それをまるで水の弾丸のように撃ち放つ。それは暁の二人の隙間を抜け、あわや平賀の身体に命中しようというところまで。

平賀の身体が消失し、《水牢弾》は木々の一本に命中。風穴を開けた。

何故あの男が消失したのか。一瞬怪訝に思うも、珠雫はこの学園で重ねてきた戦闘経験を以てそれを看破する。

「ッ、貴女……！」

「ほら、早く行かないと追いつけませんよ?」

つまりは葉が《転移》の能力を複写、自身の能力として行使し、平賀の逃走を支援したのだと。しかも彼女はわざわざ『追いつけない』と言っていることから、自分が有栖院の身体に魔力の糸を巻き付け、位置を特定している事まで看破している。

——掌の上で踊らされている。

その事を珠雫は理解するも、だからといって有栖院を見捨てるわけにもいかない。

「くっ……！」

故に珠雫は有栖院を追いかけることを選択した。

自身の魔力を放出して、身体能力を一時的に強化。有栖院の追跡を開始した。それを葉は素通しにする——かと思いきや、

「フッ」

珠雫の背中に向かって白いナイフを投擲。そしてすぐさま自身の前方、黒鉄一輝に向かってナイフを投擲する。

だが見え見えのモーション、そんなもの防ぐのはそう難しいものではない。一輝は軽く剣を振るうだけでナイフを自身の足元に叩き落とした。また珠雫もナイフを迎撃しようとして小太刀を振るおうとしたところで——その異能が発動する。

「オーブンゲート開門」。破軍学園校門前へ」

「『——ツツ!!』」

瞬間、純白の閃光がナイフから放たれ一輝と珠雫を同時に飲み込んだ。彼らがいた場所には光と同じ色の羽が舞っている。

そして転移した二人はというと……栞が唱えた通り、破軍学園の校門前にいた。

転移させられた、そう一輝が気づき、ステラ達の元へと戻ろうとするも、そのようなことを彼女が許すはずもない。

純白の壁が栞の背後に聳え立ち破軍学園の、一輝と珠雫、そして破軍学園敷地内に残ったメンバーが完全に分断された。

「……行かせても良かったのか?」

「ええ。平賀は事前に車を待機させていた場所に転移させましたし、何よりこのメンバー全員を相手取るのは些か面倒です。数が減ってくれるのに越したことはありませんし……今日は『あの方』が宿を取ってくれているのでしよう?」

栞の言葉に王馬が頷く。

平賀が現在向かっている暁学園の校舎には教師役《隻腕の劍聖》ヴァレンシユタインに加え、栞の言う『あの方』——現世界最強の劍士たる《比翼のイーデルワイズ》が宿を取っている。今回の件に彼女は関わっていないが、義理堅い彼女の事だ。一宿一飯の恩には剣を以て応えてくれるだろう。

「あちらは問題なく撃破してくれるでしょうし、私達は目の前の敵に集中することにしましょう。ステラさんの相手は任せましたよ」

「言われるまでもない」

すぐさま王馬はステラに向かって突っかける。

野太刀という長物を持っているとは思えない速度で、真正面から突っ込んでくる彼にステラもまた真正面から応戦した。

瞬間、剣と剣がぶつかったとは思えないほどの衝撃と轟音が響き渡った。

「くはっ」

王馬が禍々しく頬を歪め、ステラを力づくで捻じ伏せようと更に力を込める。それに大人しく屈するほどステラは大人しい女ではない。彼女は魔力を迸らせ、膂力任せに王馬の身体を三十メートルほど吹き飛ばす。

「そんなにアタシと戦いたいなら受けて立つわよ！ 《風の剣帝》!!」

吼え、剣を天に向かって掲げた。

そして繰り出されるのは彼女の最強の伐刀絶技。全霊を、大剣に注ぎ込み炎熱の剣として振るう技。

—— 《天壤焼き焦がす竜王の焰》。

もはや天災と呼称すべき一撃であり、それは人間一人に放つていい技ではない。

(相手の実力がわからない、けどただ者じゃないのはわかる！)

ならば初手に己の全力を叩きこむ。これで決まるのならばそれでよし。決まらないのであれば相手の応手で力量を見極める。

それがステラの思惑だった。

周囲の温度を跳ね上げるほどの炎の奔流、それに対し王馬もまた笑い、

「こんなつまらんとところで終わってくれるなよ？」

自らの持つ最強の伐刀絶技で応えた。

構えはステラのそれと全く同じ。野太刀を掲げ、己の魔力を注ぎ込む。

彼の能力は《風の剣帝》の異名に相応しい自然干涉系能力《風》。その力によって生まれた暴風は霊装である《龍爪》を中心として竜巻と化し、周辺の大気を喰らう。

瓦礫を、大気を、炎を。周囲に存在するありとあらゆるものを喰らいつくして生まれたのは——圧縮に圧縮を重ね、質量すら持った暴風の剣。

「——《月輪割り断つ天龍の大爪》」

炎熱の剣と暴風の剣。

それは能力こそ違えど、圧倒的な力で蹂躪するという理念の元編み出された至上の刃。

最大射程五十メートルという規格外の攻撃範囲。己の全身全霊を込めて振るわれる絶死の剣。

それがほぼ同時に振るわれ、そして衝突した。

瞬間、互いの魔力により剣の形に編み込まれていた炎と風が削り取られるように火花を散らし、その余波が炎の嵐になって周囲に破壊をもたらしながら鎬を削る。

「きやあああ!!」

全てを吹き飛ばし、そして焼き尽くす炎の暴風に葉隠姉妹が悲鳴をあげる。

いや、その場にいた者のほとんどが魔力で身を固め、身体を丸くしてその場に踏ん張ることがやっとであった。故に必死に自分の身を守る。並みの騎士では目を開けて見る事すら叶わない次元の戦いがある。そこにはあつた。

だが――、

「――ツツー」

やがてその均衡が崩れ始める。抑え込まれ始めたのは……《紅蓮の皇女》の方であった。

《天壤焼き焦がす竜王の焰》が軋みをあげ、押し込まれる。規格外の臂力を持つステラの両手に、今まで感じたことが無いほどの圧迫がかかる。ステラの踵がアスファルトに亀裂を刻んでいく。

その事実が示す応えはひとつだ。

(アタシが力負けしてる……ッ)

この瞬間、《天壤焼き焦がす竜王の焰》を以て相手の力量を見極めるという彼女の目論見は瓦解した。

自身が敗北した西園寺葉との衝突であっても、己の炎を更に猛らせることによって最終的には模倣された己の技も打倒することに成功したのだから。だが……王馬のそれは全く違う。

どれだけ炎を猛らせようと。燃え上がらせようと、勝てるビジヨ

ンが見えない。

綺麗なクロスを描いていた必殺同士の衝突。それが徐々に形を歪んでいく。

暴風の刃が徐々に光剣を押し込み、嵐が魔力の刃を削り取り。ついには《天壤焼き焦がす竜王の焰》は真つ二つに切断され、ステラの頭上に影が落ちる。

(まずっ……い！)

直前まで頭上からの圧力を受けていたステラは咄嗟の回避行動に移れない。そして二人の次元が異なる戦いに、他の者達は自身の身を守るのに精一杯で、助けに駆けつけることは不可能。

故にステラはこの一撃を受けざるを得ない。

勝負は決した。

——《雷切》東堂刀華がこの場にいなければ。

「ステラさんッ!!」

《月輪割り断つ天龍の大爪》がステラを両断せんとした瞬間。

東堂は《雷》の異能を用いて身体能力を一時的に強化。横合いから滑り込み、振り下ろされる刃からステラを間一髪救出する。

そして刹那遅れて王馬の必殺が大地に叩きつけられた。

暴風で形作られた刀身はその軌跡上に存在するあらゆるものを切り裂き、吹き飛ばす。ステラは東堂に抱きしめられながらその破壊を目の当たりにする。

《月輪割り断つ天龍の大爪》が振り下ろされた場所には……何も残っていないかった。校舎も、訓練場も、アスファルトも、瓦礫すら。悉くが風によって削り飛ばされたのだ。

まるで巨大な龍の爪で抉られたように。

こんなものを受けていたら……そう思うとゾツとする。

「ありがとうトーカーさん——ッっ!?!」

途端にステラの声が詰まる。その理由はステラを抱きしめる東堂の右手にあった。それはステラの延髄に添えられている。そこから東堂はステラの脳に直接雷を叩きこんだのだ。

「な、んで……」

「ごめんなさい、ステラさん。今、貴女と王馬さんを戦わせるわけには
いかない。今の貴方では絶対に彼に勝てない」

「……………あ……………」

何かを言いたそうな顔をしたが、ステラの意識は落ちてしまう。脳
のブレーカーを直接落とされたのだから当然と言える。

「牡丹さん、桔梗さん！」

「えっ」「きゃあ！」

ステラを気絶させた東堂は、葉隠姉妹にステラの身体を力任せに投
げつける。

突然人の身体を投げつけられたことに驚愕したが、それでも選抜戦
を最後まで勝ち抜いた女傑である。なんとかステラの身体を受け止
める事には成功する。二人に対し、東堂は間髪入れずに叫んだ。

「彼女を連れて逃げてください！ 可能な限り遠くへ!! 今ここで貴
方達、七星剣舞祭代表生は絶対に負けてはいけませんッ!!」

この状況下において東堂は、この場の誰よりも冷静であった。

(西園寺さんと王馬さんを撃退して、事態を收拾する事。それは確か
に最善の結果を得るための手段ではあるけれど、この場での最善手
ではない)

確かに人数という面では自分達が圧倒的に有利ではあるが、彼ら二
人を抑える事は百鬼紫苑という切り札を欠いた自分達には到底不可
能。

ここで無策に挑んでステラ達が再起不能に追い込まれた場合、本当
に暁学園が破軍に代わり、第七の騎士学校として出場するという『最
悪の結末』になりかねない。

そして東堂の発した強い意思の籠った言葉は、

「は、はいっ」

葉暮姉妹に彼女の考えを理解させるには至らずとも、その迫力だけ
で二人を突き動かす。

力のある桔梗がステラの身体を背負い、二人は踵を返すように破軍
学園から逃走する。

だが、

「葉。『鍵』を寄越せ」

「は？」

「興が冷めた。帰る」

……二人は雰囲気をぶち壊すように口論をしていた。

「いや、流石にここのメンバー全員を相手にするのは疲れるんですけど」

「クライアントからは許可は貰っている。『力を示せ』だそうだ」

「はあああ……」

葉は深く、深く。それはもう深く溜息を吐いた。

黒鉄一輝の今後を考えて、わざと敗北した事。それによって暁学園が負った不利益。それを出されてはこちらは強く出られない。

それにクライアント……彼女の義父は決して出来ないと考えていることは、こちらに要求してこない。それでもなお『ステラを撃破した後は即座に帰還していい』と指示を下したのなら、『自分は破軍学園を単騎で壊滅させられる』と期待されているということでもある。それにまた深く溜息を吐くと。

「……どうぞ」

白いナイフを顕現させ、王馬に手渡した。瞬間、王馬の身体が消失し、そこには純白の羽が残る。

そして残ったのは葉と破軍学園生徒会メンバー。数にして一対五。おまけに生徒会メンバー全員、七星剣舞祭に出場してもおかしくないほどの実力者である。

「……随分とあっさり行かせてくれるんですね。葉暮さん達も簡単に逃がしてくれましたし」

「まあ葉暮さん達も含めて全員倒すのも、貴方達を倒してから追いかけるのも、労力としては然程変わらないでしょうし。王馬さんでなくとも、誰かあと一人でもいたら楽だったんですけど……ないものねだりをしてもしようがないですよね」

はあ、と葉は再び溜息を吐く。

瞬間、彼女から今までとは比較にならないほどの圧力が放たれた。彼女の持つ純白の書のページがひとりでに捲られ、そこから膨大な

魔力が溢れ出す。

「——お覚悟を」

眩き、栞は臨戦態勢を取った。

「皆」

ただ一言。東堂は共に戦う仲間を落ち着かせるために、そして自身を鼓舞するために笑ってみせる。

ここにいる全員が確信する。

破軍学園にいたときの彼女は、自身の全力の半分も出していなかった。その上でステラを代表とする破軍学園の強者を打ち倒してきたのだと。

そしてここにいる全員が力を合わせて、ようやく勝ちの目が見えるほどの隔絶した実力差が横たわっていることを。

だが……それがなんだというのか。

それが、ここまで自分達の大切な場所を滅茶苦茶にされたのを黙ってみている理由になるのか。ただ黙って蹂躪される理由になるのか。

——否、なるわけがない。なっつていい筈がない。

そしてその気持ちは、他の四人も一緒だった。

彼らは並び立ち、ともに笑い、眼前の敵を睨みつけた。

「やられっぱなしでは生徒会の名折れです。この借りは倍にして返しますよ!!」

「おうっ!」「ああ!」「ええ」

《全智の魔女》月影栞

VS

《雷切》東堂刀華 《紅の淑女》貴徳原カナタ 《観測不能》禊泡沫

《速度中毒》兎丸恋々 《城砕き》碎城雷

その戦いの火蓋が切られたのであった。

◇ ◇ ◇

——パン、と一発の乾いた音が響いた。

瞬間、どさり、と泡沫の身体が地面に倒れる。

「……っ! うたくん!!」

彼の全身から溢れるのは幻想形態で傷を負わされた時特有の赤い光——血光。それはつまり、眼前の敵が泡沫に対して攻撃を行ったという証左である。

「……まずは、一人」

そう呟く葉の手には黒と白の拳銃が握られていた。

その二丁の拳銃を……霊装をここにいる全員が知っている。それは破軍学園理事長、《世界時計》新宮寺黒乃の霊装。

「《エンノイア》……」

「《プロパトール》……!!」

対象の周囲の《時間》を停止させ、その間に銃弾を乱射、そして再び時間を動かすことによって回避不可能の銃弾を無数に叩き込む伐刀絶技《クイツクドロウ》

それを用いて、今の一瞬の間に裸泡沫を打ち倒したのだと。

だが何故、他者の霊装を顕現させることが出来るのか。《模写使い》が模倣可能なのは能力のみであって、霊装は再現できないというのは伐刀者の中では常識である。

加えて泡沫は《確率操作》の因果干渉系能力を持つ伐刀者。自身の力や行動の範囲内、という明確な縛りはあれど『攻撃が外れた』という可能性が1パーセントでもあるならばあれば100%外れるように出来るという強力な能力を持っている。本気で彼が守りに入ったのならば、彼を打ち倒すことは極めて難しい……筈だった。

だというのにこうもあっさりと打倒された。

「くっ!」

だがその事を引きずっているわけにはいかない。

確かに泡沫が打倒されたことはかなりの痛手だ。何故なら泡沫の能力によって身を守りながらの遅延戦闘という策が使えなくなったから。だが次の策は用意してある。

「カナちゃん!」

「ええ!!」

東堂は雷を迸らせ、貴徳原は自らの霊装を細かく砕き、喉けた。破軍学園一位と二位——それも実戦経験も豊かな、ふたりの連携が葉に

襲い掛かる。

(彼女は自分達を下に見ている)

それは紛れもない事実である。現に自分は彼女と同室である百鬼紫苑も敗北したし、カナタもおそらくではあるが彼には勝てないだろう。しかしそれはすべて一人ならの話。

今の彼女は一对二。能力の都合上、溜めを必要とする碎城と兎丸が加われば四人同時に相手取ることになる。それはいくら実力が隔絶していようと、極めて困難。必ず隙ができる。

そこを突く。

「――《雷切》」

「《星屑の斬風》ツ！」

そして繰り返し出されるのは神速の抜刀術と、刃の嵐である。

共に幾多の敵を切り裂いてきた伐刀絶技。それに対し葉は迎撃も、回避行動も行わない。

その現実にくたたりは憤りを覚えた。こちらを侮っているのか知らないが、いくら時間操作の能力を持っていようとも一撃で意識を刈り取ってやれば問題にもならない。

だが……彼女達は葉が何故回避行動をとらなかったのか。その理由を突き付けられることになる。

「《愚者の夢見る英雄譚》《黒騎士》」

「――ツツ!!」

その刃の悉くが防がれる。弾かれる。

それは葉が《エンノイア》と《プロパトール》を消失させ、代わりに纏った鎧にあった。それを、二人は知っている。

「《無敵甲冑》……!!」

K O K世界ランキング第四位。《不屈》の能力をその身に宿す、アイリス・アスカリッドの霊装《無敵甲冑》。纏うものに無限の肉体再生能力を与える、比類なき守りの力である。

その防御力は、魔力を伴わない攻撃ならば対艦ミサイルの直撃にすら耐えるほど。魔力を伴う攻撃だろうと、葉の魔力制御技術ならば《月輪割り断つ天龍の大爪》ほどの威力が無ければ少し痛い程度。た

かたか電気が少し走ったり、皮膚を少し切ったくらいならばダメージにならない。

ならば回避の必要などありはしない。シンプル過ぎる理由である。
「フツ——！」

彼女は同時に顕現させた黒い戦斧を振り回し、刀華を間合いの外に追い出した。そしてそこから全力のアツパーカットを葉は見舞う。それを東堂は横に飛ぶことで回避したが——その本命は刃に非ず。

斧によって削られた礫による弾丸、それが東堂の後ろに控えていた貴徳原に向かって放たれる。それは葉の魔力放出によって加速を加えられた斧によって射出されたため、並みの銃弾に匹敵するほどの速度を誇る。

しかしいくら早かろうと所詮は物理攻撃。弾丸さえ打撲程度に抑える伐刀者の魔力による防護壁は、たかだか礫程度で傷つく筈がない。

だがそれでも葉が意味のない攻撃をするはずがないという確信が、貴徳原を動かした。彼女は霊装である《フランチエスカ》を盾のように展開。その上でそれを高速回転させることによって擬似的な削岩機とする。

これで魔力による防弾ジャケットすら貫通してダメージを与えられるという事はなくなつた。

貴徳原は盾を構築した時の余りを操作し、東堂を支援しようとしたところで——、

「がつ……!?!」

刃の盾が爆破によって吹き飛ばされた。何故、と思う暇もなく盾を食い破った残りの礫が貴徳原の身体に突き刺さり、再び爆発。彼女の身体を校舎の残骸へと叩きつけた。

「カナちゃん!?!」

「そちらに気を取られている場合ですか?」

「——!!」

戦斧が東堂に向かって振るわれる。大振りの振り下ろし、そんなものが歴戦の猛者たる東堂に命中するはずもない。横に飛んで回避す

るが、振り下ろされた先の地面が蜘蛛の巣上に破碎。大地を震撼させる。

それはステラが振るう超重量級の剣を思わせる威力。こんなものを受けてはひとたまりもない。ならば――、

(リズムに乗られる前に潰す……！)

再び斧を振るう葉に先んじて、東堂は動く。

《疾風迅雷》による身体能力強化、《閃理眼》による行動の先読み、葉の攻撃を迎撃せんとする。が、その企ては真正面から打ち砕かれた。迎撃を行った東堂の身体が地面から引っこ抜かれ、十メートルほど後方に吹き飛ばされたのである。

(何、この重さ……!!)

東堂は確かに葉が斧を振るう、その最初を潰した。だというのに帰ってきたのは、出始めとは思えないほどの威力を伴った横薙ぎ。それを可能にしている要因はふたつ。

ひとつは彼女が纏っている鎧《無敵甲冑》の特性故に可能となる、埒外の身体能力強化。

この鎧の治癒力は何も防御の身に活きる力ではない。伐刀者ならば誰しもが可能である、自身の魔力を放出し攻撃の威力・速度を強化する技術。普段ならば肉体を破壊しない範囲でしか行えないそれを、この鎧をまもっている間は肉体の損傷を度外視し、人の身では到底不可能な膂力、速度を以て振るうことが出来る。

ふたつめは貴徳原の刃の盾を破ったのと同じからくり。

つまり、能力の並行使用である。

先の貴徳原の防御を破ったのは、礫そのものの強度を上げる《硬化》、速度を上げる《加速》、着弾した際に発生した《爆破》、そして刃の盾及び貴徳原が纏っていた魔力装甲を破るための《魔力破壊》の四種。

そして現在、東堂との近距離戦闘に使用しているのは《不屈》、自身の肉体を破壊する力を操作し、斧の破壊力を増すための《重力》、空気抵抗を無くすための《風》と《加速》、東堂の電撃によるダメージを無効化するための《水》、そして自身の本来の能力である《夢》の六種を

同時使用している。

では何故東堂は能力の同時使用に気付けないのか。

それは葉が意図的に、次にどのような攻撃を仕掛けるのかを隠していないからである。

次に葉がどんな攻撃を仕掛けてくるのか、それを東堂が理解できるような状況を整えることによって、本当に隠したい『能力の同時使用が可能である』という情報から意識を逸らす。問題なく《閃理眼》は機能していると錯覚させる。

この手の心理戦は東堂よりも葉の方に一日の長がある。故に東堂は葉の身体からは繰り出せるはずのない剛撃の謎に気付くことが出来ない。

だが、そんなことを葉は一切気にかけない。

「——!!」

大地を踏みしめ、葉は前進。一拍の間に東堂を戦斧の攻撃範囲に捉えると、

(ツ、横薙ぎが来る！)

背中が見えるほど捻った横薙ぎを見舞う。そこから繰り出される威力は先ほどのそれとはけた違いである。直撃を避け、刀を使って横薙ぎを受け流す。が、

(腕が、裂けそう……！)

万全のタイミング、万全の力のコントロール。それを以てしてもなお受けきることが出来ない。彼女にできる事といえば、インパクトの瞬間に雷撃を叩きこむことくらいであるが……それも鎧の内部で絶縁体と化した水を纏っている葉には効果を発揮しない。

(なんなの、この人……!!)

霊装を複数使い分けることが出来る、身に着けていなかった筈の武術をまるで熟練のように使いこなす。

そんなもの能力のみを模倣する《複写使い》の枠に収まっていない。

……まあ、彼女が知らないだけで元々《模写使い》ではないので当然の話ではあるのだが。

「……もう大人しく倒れませんか？ そうすれば必要以上に痛めつけ

ずに済みますし」

「そんなのお断りだつての!! さいじよー、合わせて!!」

「応ツツ!!」

栞がため息混じりに言うが、それに答えたのは東堂ではない。

自身の能力、その真価を発揮するべく準備を整えていた兎丸と砕城である。『速度の累積上昇』と『斬撃重量の累積加算』。それによつて振るわれる兎丸の攻撃速度はマツハ2を超え、砕城の斬馬刀による一撃は異名の通り城を砕く一撃となる。

「《ブラックバード》ツツ!!」「《クレツシエンドアックス》!!」

そうして繰り出される二人の必殺の一撃。それは、

「《トータルリフレクト完全反射》」

《無敵甲冑》を脱いだ栞の身体に届く直前、見えない障壁のような物に阻まれ自身の身体を傷つけるだけに終わった。

幻想形態によるものとはいえ、マツハ2の速度で繰り出される拳と斬撃重量十トンの斬撃による衝撃、それをそのまま打ち返されては無事でいられる道理はない。

彼らの意識は闇に飲まれていくが……。

「……ありがとうございます、お二人とも」

ふたりが作ってくれた時間で準備は整った。

東堂は栞に吹き飛ばされた場所よりも、さらに遠くで陸上のクラウドチングスタートのような構えを取っていた。

——そこから繰り出される技を、栞は知っている。

《神切》

《建御雷神》と《雷切》の合わせ技。

あの百鬼紫苑が自身の切り札たる《散華》を以てようやく迎撃できた、東堂刀華の捨て身にして最強の一撃。そしてそれは——ほんのわずかではあるが《魔人》の領域に足を踏み込んだ一刀。

それに対し、栞は——。

◇ ◇ ◇

一方その頃、破軍学園襲撃の報を受け、急ぎ大阪から東京へと帰還しようとしていた新宮寺黒乃と西京寧々。

だがその帰還は……当然無事には終わらなかった。

「これはどういうことだよ……くーちゃん」

突如として自身を狙った銃撃。寧々は、下手人——隣に立っていた新宮寺を睨み付ける。

霊装である二丁拳銃を構える新宮寺はそれには答ええない。代わりに、と銃撃を仕掛けてくるが《時間停止》を伴わない攻撃など寧々にとって防ぐことは難しいことではない。

《重力》によって周囲の空間を捻り、銃弾の軌道に干渉。寧々に突き刺さるはずであった銃弾は、背後にある木々を穿った。

容易く攻撃をやり過ぎた彼女は思考を巡らせる。

——まずこれがガッコーを襲ってきた連中の攻撃であることは間違いない。

第一線から身を引いていたとはいえ、かつては『連盟旗下の国家において三番目に強い騎士』としてその名を轟かせていた新宮寺を、こゝも容易く自身の支配下に置くことが出来た。

それほどの実力者が今回の事件に背後にいるという現実には、僅かに薄ら寒さを覚える。

だが……自分のやることは変わらない。

(全部まとめてぶちのめしてやる)

寧々は霊装を顕現させ、新宮寺とまだ姿の見えない敵との交戦を開始した。

第29話

「くっ！」

新宮寺黒乃は二丁拳銃から魔力で構成された弾丸を打ち放つ。並みの騎士ならば新宮寺の攻撃に対して一切抵抗できずに倒れるのだが……生憎、彼女が対面している騎士は並みの騎士ではない。

「ふふ、見ない間に鈍ったのではないのかね？」 《世界時計》

白いボルサリーノ帽に同じく白いジャケツトを羽織った紳士は歯を見せて笑う。紳士然とした姿には不似合いな紺碧の槍を振るい、彼は数百もの氷の槍を作り出す。

「《カンピオーネ》……ッ！」

上空。水と氷の城壁に囲まれた先で笑う君主を新宮寺は睨みつける。

彼女と対面している男の名はカルロ・ベルトーニ。イタリアが誇る最強の騎士にして、KOKランキング二位の英傑。そして史上最強の水使いと謳われる男である。

《世界時計》VS. 《カンピオーネ》の戦いが始まっておよそ十数分。戦闘は膠着状態……否、新宮寺の劣勢で展開していた。

それはひとえにカルロが操る水の量。

彼が史上最強の水使いであると言われるのは、同時に操作可能な水量がずば抜けていることが理由である。過去に伐刀者に占拠された街を『丸ごと洗い流した』という実績を持つことから、一国の存亡を左右できる力を持つとされている。

そんな彼と新宮寺は極めて相性が悪かった。

新宮寺が《時間》という、因果干渉系能力の中でも最高峰の力を有していることは言わずもがなであろう。しかしそんな最強とも思われる能力にも弱点はあった。

それは攻撃範囲の狭さ。彼女は好敵手であった寧々のような大規模範囲攻撃を持たない。《時間》の能力を宿した弾丸は必殺というに相応しいが、所詮は拳銃。目の前に築かれた水と氷の城砦を一撃で吹き飛ばすような範囲攻撃には期待できない。

まるごと蒸発させてやろうとしても、前述した膨大な水の量にそれは叶わなかった。

西京がいてくれれば、と新宮寺は齒噛みする。

破軍学園襲撃の報。それを聞いた自分と西京は急ぎ、大阪から東京へと戻ろうとしていた。が、東京大阪間の最も早い交通手段である飛行機は滑走路の異常を理由に運休。

仕方なく次善の案である東海道新幹線の線路上を走り、東京を目指すという手段に出たのだが……それを敵は読んでいた。

線路に仕掛けられた《転移》の術式。それに新宮寺が引っ掛かってしまい、西京と分断されてしまったのだ。

自分が築けないほど入念に施された《迷彩》に、分断を目的とした転移術式。転移先で待ち受けていた《カンピオーネ》カルロ・ベルトーニ。

何故ここにカルロがいるのかは不明であるが、破軍に襲撃をしかけてきた連中が自分達を絶対に辿り着かせるわけにはいかないのだ、ということとはわかる。

(だからこそ絶対に奴を倒さなければ)

如何なる理由があろうが関係ない。

自分の生徒を傷つけた。それだけで敵に地獄を見せてやるには十分すぎる理由なのだから。

新宮寺は魔力を滾らせ、眼前敵に弾丸を打ち放つ。

……ここで賢明な皆ならば、現在生じている状況を奇妙に思っている事だろう。

新宮寺は転移によって飛ばされたどこかでカルロ・ベルトーニと戦闘を行っている。彼女ほど優秀な騎士が転移の術式に気付けなかったという違和感はあるけど、それを仕掛けた下手人が彼女を上回る程に優秀であったと言われれば、まあ納得は出来る。

しかし、前話の最後で西京は誰と戦っていた？

……そう、ここでカルロと戦闘を行っているはずの新宮寺黒乃である。

西京は新宮寺が敵の術中に嵌り操られたため、眼前敵である彼女に加え、彼女を操っている何者かとの一対二の戦闘を強要されている。もしこの状況が正しいのであれば新宮寺黒乃という人間が同時に、異なる場所で観測されている事になる。

何故そのような奇妙な状況が起きているのか。

決まっている。

——その全てが誤った認識であるからだ。

「相変わらず凄いなあ、栞さんの能力」

東海道新幹線の線路上。そこで突っ立っている新宮寺と西京の姿を、望遠鏡で見ている金髪の少年。

日下部加々美に『暁学園』の存在を気付かせた紫乃宮天音である。

その隣には黒いライオンに乗った少女に、その傍で控えているメイド服を纏った女。もう真夏であるというのに防寒具に身を包んでいる少女に、トツプレスにエプロン姿という奇妙極まりない姿をした少女など、そこに統一感はあるでない。

「そうだろう！ なにせ栞おね……ごほん、《全智の魔女》^{メアリー・スー}の能力は『世界最優』と謳われるほどに万能にして最強!! 相手があの《世界時計》と《夜叉姫》であろうと、無力化するだけならば容易いわ！ ふはははは!!」

「……なんで凛奈が誇らしげなの」

はあ、と大きな溜息を吐いたエプロン姿の女性——サラ・ブラッドリリーは自分の後ろを見やる。そこには自身の能力で作りに出した月影栞、それが二人いた。

——現在の新宮寺と西京の状況を説明するのであれば、たった一言で充分だ。

彼女らは夢に囚われている。

《夢想世界への切符》^{ドリーム・トリップ}

以前、赤座を無力化するときにも使用した技であり、その効果は対象に術者の望んだ夢を見せること。

発動条件は『対象との接触』。これは線路上に《幻想結界》を展開、

線路上を擬似的な《夢》の世界とすることで果たし、彼女らの無力化を達成したのだ。

彼女達が事前に気付く事が出来なかったのかと言えば……まず不可能であつただろう。

周囲をよく観察すれば違和感に気付くことも出来たが、今の彼女達は一刻も早く学園に戻らなければならぬという状況だ。

そんな時、周囲に必要な以上に気を配ったりはしないだろうし、そも《幻想結界》そのものは殺傷力は皆無である。その上、そういった違和感すら感じさせなくするのが《幻想結界》の本質だ。

《夢》の中でどれほど不可思議な出来事が起ころうと、《夢》を見ている間はそれを『当たり前』の事だと思ってしまう。

そういった意識への干渉もまた、《夢》の真骨頂のひとつである。が、弱点がないわけではない。

「《夢想世界への切符》は一定以上の外圧や対象が『これは現実じゃない』……つまりは《夢》だつて気付いた瞬間に解けてしまう」

「それに新宮寺さんは因果干渉系能力者だ。同じ種類の能力にはある程度抵抗できてしまうし、解けるまでは時間の問題かな。とりあえず葉さんに報告しておくよ」

ポケットの中でスマートフォンが震える。

破軍学園から配布された生徒手帳ではなく、暁学園の生徒が持っているそれが震えたという事は平賀か、新宮寺と西京の無力化に向かった誰かだろう、と葉は戦場の只中だとは思えない気軽さでそれに出る。

「はい、葉ですけど」

『ごっちは無事に終わったよ。そっちはどう?』

「滞りなく。これから眠り姫と彼女の騎士ふたりを叩き潰しに向かうところですよ」

そう言う葉の足元には気絶した東堂刀華の身体と空になった葉菫が数十発分が転がっている。

《魔人》の領域に足を踏み込んだ絶技——《神切》を放とうとした東

堂であつたが、栞はその点冷静であつた。

発射寸前となつた彼女に《加速》では間に合わないと、彼女は東堂の
一帯の時間を《停止》させ《クイックドロウ》を見舞つたのである。
とはいえ、彼女は内心穏やかではなかつた。

(あれが放たれていたら……私は負けていたでしょうね)

足の先程とはいえ確かに《魔人》の領域に至っている刃と、その扉
の前で引き返したものだ。そこにはわずかながらも隔絶した差がある。
あの技のタメがあと一秒でも長ければ……こうして倒れていたのは
自分の方であつただろう。

だが戦闘にもしもは存在しない。ここに立っているのは自分であ
るし、東堂は敗北した。それがすべてである。

「そちらは監視を続けてください。もし新宮寺さん達が動き出したら
――」

その瞬間。栞は黒鉄王馬の風もかくやという突風が吹いたと錯覚
した。

錯覚した、というように実際には突風など吹いてはいない。では栞
が『突風』と勘違いしたものの正体は一体何だったのか。

それは……彼方からでも感じられるほどの常軌を逸した剣気。お
そらくは《比翼》のイーデルワイスが暁学園への侵入者――つまりは
黒鉄兄妹との交戦を開始したのだろう。

それは栞のプランが計画通りに進んでいることの証左でもあるが、
それはなにも良い事ばかりではない。

「栞さん――」

「ええ、わかっています。二人が動き出したのでしょうか？」

それは新宮寺と西京に仕掛けた《夢想世界への切符》が効力を失つ
た事。それは即ち世界トップクラスの騎士がこちらに向かつてきて
いるという事でもある。

だがそれに対して栞は動じず、電話先の五人へ指示を出す。

「皆さんは撤退してください。間違つても足止めをしようとは思わな
いように。サラ」

『ん、わかつてる』

『しかし《全智の魔女》よ。貴様はどうする？ 貴様とてあの二人を同時に相手しようとなれば骨が折れるのではないか？』

「ええ。ですがそれは同時に二人を相手にした場合の話。既に彼女達を分断させる策は打ってあります」

そのためにわざわざ一輝達を平賀の追跡に向かわせたのだ。

一輝達に向かった場所は死地である。流石の一輝とて《比翼》と事を構えて無事でいられるとは考えにくい。ならば新宮寺と西京のどちらかを黒鉄兄妹の救援に向かわせることで、自分が二人を同時に相手どる可能性を減らしたのである。

「皆さん、こちらへの救援は必要ありませんので先に言った通り帰還してください。その後は……少し気が早いですが祝勝会です。会場などはクライアントに聞いてくださいいね」

そう言うのと電話先からは喜びの声などが聞こえてくる。

それに栞は微笑むと電話を切った。多少賑やかにはなったが、それに目溢しするのは紫乃宮と自分の能力が突破されるわけがないと確信しているからである。

「さて……私は少しだけ残業ですかね」

眩き、そして《転移》の能力を発動させた。

◇ ◇ ◇

「はあ……ッ、はあ……ッ」

意識が戻ったステラが感じたのは、自分の身体が揺さぶられている感覚だった。どうやら自分は背負われているようだ。自分を背負っている者は随分と余裕がないらしく、荒い息を吐いている。

そこで、彼女は自分がどんな状況に置かれているかを理解した。

「……アイツらは!?!」

「おわっ！ やっと起きたか！ なら下りてくれないか？ 流石に人おぶって走るのってしんどいんだよ……」

「ぐ、ぐめんなさい」

気絶した人間を背負って走り続けたのだ。いくら魔力によって身体能力を強化できるとはいえ、桔梗の体力は一輝のような規格外とは言えない。

うだるような蒸し暑さだというのに冷や汗が滝の様に溢れ、足はガクガクと生まれたての小鹿の様に笑っている。そんな様子にステラは思わず声をかけた。

「ねえ、大丈夫？」

「大丈夫……じゃねえ……」

「けど……逃げなきゃダメなの……西京先生達が帰って来てくれるまで、なんとか……」

『西京先生達が帰って来てくれるまで』

その言葉が示す事実の一つである。

——自分達ではどう頑張ったところで彼らには勝てない。

つまりは追いつかれた時点で自分達は終わりだと。その言葉をステラは否定したかったが……どれほど言葉を重ねたところでなんの慰めにもならないだろう。

自分は選抜戦で葉に負けていて、そしてつい先ほど黒鉄王馬にも完膚なきまでに敗北したのだから。

そんな自分が、全部敵を打ち倒してやるなどどうして言えようか。

「そんな暗い顔すんなって牡丹ちゃん。《風の剣帝》はなんでかわかんねえけど自分から撤退してくれたし、西園寺だって生徒会メンバーの五人が抑えててくれてんだ。いくらアイツでも——」

瞬間、三人の背中に悪寒が走った。

森が一気に騒がしくなり、鳥たちが我先にと止まっていた木々から羽ばたいて一目散に逃げていく。その姿は肉食獣に追われ、怯える草食動物を想起させる。

それが何を意味しているのか。それはすぐにわかった。

「——ッ、真っ直ぐこっちに向かって来てるの！」

『今から行くぞ』

そう葉が宣告したのだ。

隠密行動など一切考えない、速度だけを重視した疾走。

自分達の様に紛いなりにも整備された山道を通ってくるのではなく、木々が生い茂る山中を直線的に突き進んでくる。その速さは一体

自分達の何倍であろうか。……もしこの速度をずっと維持してこちらに向かつてくるのであれば、追いつかれるのにそう時間はかかるまい。

「は、早く逃げねえとー！」

「待ってー！」

桔梗と牡丹は駆け出そうとするが、それに待ったをかけるのはステラである。

彼女に一刻も早くあの二人は声を荒げるが、ステラは相手にせず思考を巡らせる。

(……おかしいわ)

彼女の足を止めさせたのは違和感であった。

自分達を追いかけてきているのが黒鉄王馬であったのであれば、こんなことは思わなかった。彼の戦い方は自分と同じく、阻むもの全てを真正面から叩き潰して進撃する絶対強者のそれである。

しかし葉暮姉妹曰く、彼は撤退してくれたという。嘘を吐く理由もないので、これに関しては間違いないだろう。では自分達を追ってくるのであれば葉である筈だ。

しかし彼女の戦闘スタイルは、武装こそ違えど一輝のやり方に類似している。

機転を利かし、策略を練り、小手先の小細工で相手を絡み取り、勝利する。葉はそんな人間だ。たとえ自分の想像を超える力を有していようと、そのやり方は変わらない。

そんな彼女が『強者』のやり方で自分達を追ってくる。真正面から貴方達を叩き潰すと宣誓する。

(そんなの、アイツのやり方じゃない)

第一、彼女は珠雫以上に魔法制御技術に特化した騎士である。自分達に追ってきていると勘付かせることなく迫り、不意を打つことなど容易な筈。そうした方がよっぽど簡単に自分達を制圧できるのだから、そうしない理由がない。

ならば何故そうしていないのか。

決まっている。

(本当に見て欲しくないものから意識を逸らさせるため！)

「何やってんだよ！」

「早く逃げるの!!」

「駄目よ、焦ったら全部アイツの——」

掌の上だ、と既に駆け出していた葉暮姉妹を止めようとした時にそれは起こった。

「——閉じなさい」

彼女達の身体を糸のような物が絡め取ったのだ。

十重二十重にも巻き付いたそれは彼女達が全力で魔力を放出し、身体能力を強化しようとも引きちぎることが出来ない。

間違いなく葉が仕掛けた罠である。

「なんなのコレ！」

「クツツ、引きちぎれねえ!!」

「やっぱり……!!」

自分達ではどうにもできない絶対的な脅威が、自分達を追いかけるとき人はどうするか。

——それとは逆方向に逃げるに決まっている。なら葉はそこに罠を仕掛けているのは当然の話だ。

もう少し早く気付けなかったのか。そう悔んでも時すでに遅し。

何重にも巻かれた糸、そこから伸びた視認することが難しいほど細いそれを伝って、彼女達に人を気絶させるにはあまりに過剰な雷撃が叩き込まれる。

むぎむぎと罠にかかった彼女達に難を逃れる手段は存在せず、葉暮姉妹の身体は地面に倒れた。それを確認して糸は前方の木々の間へと消えていく。その動きは糸というよりは触手と呼んだほうが相応しいだろう。

「——惜しかったですね。あともう少し早く気付けていれば、お二人も助けられたのに」

そうして刺客——葉は姿を見せた。

森の奥から姿を見せた彼女には怪我の一つどころか、服のほつれや泥の汚れも見当たらない。今の今まで戦闘をしてきました、と言って

も誰にも信じてもらえないだろう様相を呈している。

彼女を睨みつけながら、ステラは問う。

「……トーカさん達はどうしたの」

「倒してきましたよ?」

「随分と余裕そうね」

「まさか。随分と手こずりましたよ。予定では私はもう帰っているはずでしたし……おかげで色々押していて困ってるんです」

はあ、と溜息を吐く栞にステラは身体から怒りの炎を滾らせた。

もう帰っているはずだった? 色々押していて困っているだと?

「アタシ達を侮るのも大概にしなさいよ……!」

自分達の敗北は必然であると最初から決めつけるその姿勢。ましてや彼女は対峙した王馬の様に、真剣に戦ってすらいない。

ただする必要があるからやる。そういった作業のような態度をした者に自分達の決意が踏みにじられるなど——許せるわけがない。

ステラは霊装を顕現させ、眼前敵を打倒せんとそれを栞に向ける。それに栞は霊装を顕現させる……事無く、ステラに語りかけた。

「私と戦う気ですか?」

「当たり前よ!!」

「……ステラさん、気付いてますか? 貴方——」

膝が笑っていますよ。

そう彼女は憐憫の視線と共にステラに告げた。

呆けたような声が漏れた。視線を自身の足に向ける。

どうせまた彼女お得意の張ったりだ。また自分をコケにしているのだという思いで。

視線の先では——膝ががくがくと震えていた。

「……………うそ……………」

「嘘でない事は自分がよく分かっているでしょう? 貴方……怖気づいてるんですよ」

剣を持つ手が震える。歯がカチカチと鳴る。

最早言い訳などできなかつた。自分は……栞を《恐怖》している。

一步。二歩。三歩。

少女の形をした絶望が距離を詰めてくる。

一步。二歩。三歩。

自分は後ろに下がり、距離を取ろうとする。

「やめておきましょう？ 負けると自分で分かっているのに戦う理由なんてありませんよ」

「ちがっ、私は……!!」

「決して勝てないとわかっていても、大切なものを踏み躪った敵に挑む。志は立派だと思えますよ。しかし……：：：勇氣と蛮勇は違います。そんなことしても決して貴方のためにはなりませんよ」

優しく《恐怖》が囁く。もう良いじゃないか。どうせ戦ったって結果は何も変わりはないのだ、とステラ自身の理性が冷静に自分に語り掛けてくる。

そしてステラは――、

「ッ、蒼天を穿て！ 煉獄の炎ッツ!!」

それでもなお、戦う事を選んだ。

剣を天に掲げ、収斂させるは紅蓮の業火。それが十重二十重に絡みつき、巨大な光熱の剣と化していく様は昇竜を想起させる。

そして練り上げられるのは彼女の必殺。

「《天壤焼き焦がす竜王の焰》——ッツ!!」

彼女が誇る最大火力、最大範囲の紅蓮の剣が振り下ろされる。

対し栞は……：：：顔に明確な焦りを滲ませた。

「……ッ、もう来ますか……!!」

そう呟く栞は紅蓮の剣——ではなく、それを透かした先にある空の一点を見つめていた。

今のステラなど、栞からしてみればなんの脅威でもない。それがたとえ彼女の全身全霊を込めた一撃であったとしてもである。

でなければ『自分と戦っても負けるのだからやめておけ』などと言ったりはしない。

ならば彼女を焦らせる原因は何なのか。決まっている。

ステラ・ヴァーミリオンなど比較にもならない脅威が迫ってきているからだ。

「《暴喰砲》……！」

彼女の右手に集まるのは黄金色に輝く魔力。

現《七星劍王》諸星雄大が保有する《魔力破壊》の能力。オリジナルである彼が槍に纏わせることで使用しているそれを、彼女はその奔流を天に向かって放った。

それは今にも命中しかけたステラの魔力を食い破り、天に向かって——より正確に言うのであれば、真っ直ぐ自分達の方へ飛んできている一人の女を喰らおうと迫る。

が、その相手は極めて冷静であった。

この黄金の魔力が諸星雄大のそれと全く同じものである、つまりは『魔力そのものに殺傷力は一切ない』という事を見抜き、あろうことかそれを完全に無視。

重力による自由落下に身を任せ、魔力破壊の光線から完全に脱すると再び魔力によって加速。

葉の眼前まで迫ると、落下エネルギーを自身の能力を用い、一切殺すことなくその全てを蹴りに乗せて彼女の身体を彼方へと蹴り飛ばした。

「……間一髪、って言うには、ちと遅れ過ぎたか」

そう言つて周囲を見渡すのは着崩した派手な着物を纏った小柄な女。

おおよそ戦えそうな見た目ではないが……彼女の強さをステラは知っている。

彼女は破軍学園臨時教師にして、環太平洋圏最強の騎士。

「よく頑張ったな、ステラちゃん。こっからは——ウチに任せときな」

《夜叉姫》西京寧々が、参戦した。

第30話

「ネネ先生ッ……」

空からやってきた和服姿のヒーロー、その到着にステラは歓喜の声をあげた。

そんな彼女を安心させるようにヒーロー——《夜叉姫》西京寧々は笑ってみせる。

「遅れて悪かった。怪我アないかい？」

「え、ええ。アイツら全員、幻想形態で襲ってきたから……」

「そっか。ならマシな方だね。……ステラちゃん、二人連れて後ろに下がってな」

ステラが頷き、葉暮姉妹の身体を持ち下がったのを確認。そして二枚の赤い鉄扇——《紅色鳳》を顕現させ、視線の先へ話しかけた。

「いつまで狸寝入り決め込んでんだ——さっさと起きて来いよ、しおりん」

西京の視線の先にあるのは、彼女が先程繰り出した蹴りによって積み上げられた倒木の山々である。根元からへし折られ、山と形容された通り随分と派手に吹き飛ばされたようだ。

しかし……その一撃は葉にとってなんの痛打にもなっていないことを理解していた。

瞬間、木々の全てが天に向かって打ち上げられ、その全てが切り刻まれる。

「……さっさと起きて来いって、腕の骨へし折られた人間に言いますか？」

軽口を言いながら姿を現した葉は漆黒の甲冑を纏っていた。

連盟最硬の鎧、不屈の甲冑《無敵甲冑》オレイカルコスである。

彼女は西京が蹴りを繰り出した瞬間にこの鎧を顕現。その上で全力の防御姿勢を取り、寧々の蹴りを防いだのだ。……それでもなお葉の身体は吹き飛ばされた上、蹴りを受けた両腕は木っ端みじんにへし折られたが。

「ハッ、すぐに治せんだろ。その鎧はガワだけかよ」

その全ては西京が言うように《不屈》による治癒によって再生しているが、それを味わった痛みまでもなくせるわけではないのだ。骨が砕かれる痛みも、腕の肉がミンチになる痛みも味わった。

それら全てを無視して『さっさと起きてこい』などと無茶ぶりにも程がある。

だが西京はそんなもの知った事ではないと、栞の言葉を鼻で笑い彼女を睨みつける。

「……で、だ。これはどういう趣旨の馬鹿騒ぎだい？ 話、聞かせてくれるよね？」

「お断りします♪」

それに栞は満面の笑みで返す。そこに込められていたのは『誰が答えるかボケが』と言わんばかりの煽りである。

瞬間、

「なあ、しおりん」

空気がびしり、と割れるような音がした。

「大人舐めるんじゃねえぞ」

栞の肉体を……否、西京の周囲二十メートルを『重量』が襲い、地盤ごと陥没する。

西京寧々の伐刀絶技《地縛陣》。《重力》を操る彼女が振るう、対象を拘束する技だ。並みの騎士がこれをくれば、地面に潰された力エルの様に叩き伏せられること必至。

されど彼女はそれをくらってもなお平然と立っている。それどころか、

「《地縛陣》反転」

西京と全く伐刀絶技を展開し、あろうことかそれを反転。地面に捻じ伏せようとするとそれを真っ向から支え切ってみせる。

そして栞は西京を宥めるように口を開いた。

「舐めてなんていませんよ。貴方ほどの騎士を下に見れるほど、私は強くありませんので」

「減らず口ばっかだな。……ならそんな事言えねえくらいぶちのめして聞き出してやんよ。テメエには個人的に聞き出したこともあつ

たしねえ」

「野蛮ですねえ。……しかし、よろしいのですか？」

「ちらり、と栞は西京の背後——ステラ達を見る。

「確かに私は貴方を下に見れるほど強くはないと言いましたが……お荷物を三つも抱えた貴方が圧勝できるほど、弱くもないつもりですよ？」

「……つまり栞はこう言っているのだ。

『私と戦って貴女は無事でも、後ろの生徒達が無事でいられる保証はないぞ』と。

そこに補足をするのであれば、彼女は西京を攻撃するとともにステラ達にも猛攻を加えるだろう。生徒をおともつ守りながら、破軍学園の主力をたつた一人で壊滅させた怪物を果たしてお前は相手にできるのか、と。

彼女の言葉に西京は歯噛みする。

「と言うのも……、

(コイツ……ウチの想像してた以上に強い)

今、自身の周囲に展開している《地縛陣》の出力は通常の重力のおよそ五十倍。現在進行形で出力を上げ続けているが、栞はそれを涼しい顔をして真っ向から受けきっている。

「これほどの力がステラ達に向けられたら、彼女達が無事でいられる保証はない。

「西京先生が個人的に聞きたい事に関しては私に答えられる範囲であれば答えますし、貴方が矛を収めてくれるのであれば、こちらとしてもこれ以上の危害は加えないと約束しましょう。いかがですか？」

あくまでも優位なのはこちらだ、という姿勢を崩さない栞に舌打ちする。本当なら栞の言葉など無視して生徒達に危害を加えたツケを払わせてやりたいが……今の自分は魔導騎士である以前に生徒を守る『教師』である。

敵の方からこれ以上、生徒に危害を加えないと言ってくるのであれば願ったり叶ったりだが……。

「口約束で『自分は危害を加えません』なんて決めたところでテメエは

破るに決まってる。信用できるわけないだろ」

「お言葉ですな……まあ、それだけの事をした自覚はありますが。では、こちらを使うのはいかがですか?」

そう言つて葉が《愚者の写本》のページを繰り、そしてそこから顕現させたのは一振りの剣。その剣を西京は知っていた。

「《テストメント》……」

「ええ、《比翼》のエーデルワイスの一振り。そこに込められた力は……当然ご存じですよな?」

彼女の言葉に頷く。

《比翼》のエーデルワイスの能力は《契約》の因果干渉系。この剣に對して誓いを立てた者の心臓に楔を打ち込み、それに叛する行動の一切を封じるのが、これから葉が発動する伐刀絶技《無欠なる宣誓》である。

互いが剣に對して誓いを立てる必要がある、という使い勝手の悪さはあれどそれを補つて余りある強制力がそこにはある。

「肝心の誓いの内容ですが、私は『西京寧々の質問に答えるまでこの場を去つてはならない』そして『互いの一切の攻撃行為を禁ずる』『相手の質問に對して嘘をついてはならない』……以上の三つでいかがでしょう?」

「……異論ねえよ」

本当なら黙秘権の行使も封じてやりたかったが、それをすると話自体がおじやんになりかねない。それに当初の目的である『ステラ達に危害を加えさせない』という目的は達成している。

そもそも彼女にとつては自分が来た時点で《転移》の能力なりで逃げる事が出来たにも関わらず、自分の話に付き合っているのは彼女の善意以外の何物でもない。

ここが落としどころだろう、と西京は《テストメント》に手を置き、その上に葉も手を置いた。

これで《テストメント》の異能は発揮され、万が一約束を違えれば心臓の杭が身体を食い破る事になるだろう。

「これでよし。……それで、私に聞きたい事と言うのは?」

「……まずは確認だ。破軍学園での七星剣舞祭選抜戦の最終試合が終わって大体一時間後。選手控室の一室で魔導騎士連盟日本支部の倫理委員会委員長……ああ、もう元だっけ。ともかくそこで赤座守が昏睡状態で発見された」

「——ッ、ちよつと待って。アタシそんなの聞いてない！」

栞と西京、そこに割って入ったのは先程まで話に置いてかかれていた《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンである。

元倫理委員会委員長・赤座守。

彼はステラからしても決して忘れられない相手であった。理不尽な言いがかりをつけ、自分の恋人である黒鉄一輝に対して拷問じみた行いをした怨敵。

一輝が栞との決闘において勝利した事、そして彼女の父であるヴァーミリオン皇国王が倫理委員会及び彼らの手足となっていた報道に強い不快感を明言した事で、件のスキャンダルは終結した。

ステラからすれば今までの状況も理解が出来なかったが、西京が栞に対してわざわざ『お前に聞きたいことがある』と切り出し、その件を掘り起こす意図がまるで分らない。その上、元凶である赤座守が一輝と同じように昏睡状態に陥っていたことも、ある意味今回の騒ぎの中心にいたステラは知らなかった。

今回の件には恋人が関わっている以上、事態終息後もアンテナを伸ばし続けていたし、日下部からマスメディアの方でどのような対処を行うのかすら聞いていた。だというのに『赤座守が昏睡状態で発見された』という話は一度も聞いたことがなかった。

これはどういうことか……そう問い詰める前に、西京が答えた。

「そりゃ言っただけじゃなかったからねえ。……これがアタシとくーちゃんが『ウチの生徒に手エだしたツケを払わせた』とかだったら、マスゴミ共にはともかくステラちゃんには教えてただけ……生憎、それやったのウチらじゃないんよ。——なあ、しおりん。それ、テメエがやったんだろ？」

「……その根拠をお教えいただけますか？」

「すつとぼけるんだな。まあ、いいや。ウチがそう考えたのは……テ

メエの能力だよ」

西京は続ける。

「《黒騎士》の《無敵甲冑》に、エーデルワイスの《テストメント》……他人の霊装を顕現させたり、複数個の能力を行使するっつー、《模写使い》にも収まんねえ力を持つてっけど……それでもわかる事はある」
「と言っつー。」

「お前が最初に使ってた《眠り》。アレは他人からパクってきたんじゃないやなくて、元から自分の力だろ。本当の能力の上澄みの上澄み程度だろうけどな。」

……あの狸は黒坊の騒ぎが終息するおよそ一週間もの間眠り続けた。それだけ長い期間昏睡状態に陥らせようと思ったら、最低でも幻想形態でステラちゃんの《天壤焼き焦がす竜王の焰》級の一撃を叩きこまなきゃまず無理だ。にも拘わらずアイツの身体からは赤光の痕跡もなかったし、何よりそんな馬鹿火力を叩きこもうとすりゃどんなに鈍い奴だろうと分かる。なら自然と——」

「対象を気絶させる能力に特化した者の犯行である、と。そういうわけですか」

「そういうこった。あの時確かに黒坊にぶった斬られた筈のお前が、どうやってそんな事を可能にしたのかがわかんなかったけど……《無敵甲冑》を使用できるなら傷はすぐ治る。教師に運ばせた身体は《倍化》で複製したもんだろ」

「お見事。確かに『アレ』を昏睡させたのは私です」

ぱちぱち、と拍手を送る栞。対して西京の表情は釈然としていない。

まるで、

「……腑に落ちない、と言いたげですね」

「そりゃそうだろ。だってお前には、あの豚野郎にそこまでする動機がない」

こうして栞に問う以前から、赤座を無力化したのは彼女なのではないかという疑いはあった。

しかし確信できなかったのはひとえに、彼女が赤座を害する動機が

一切なかったからである。

確かに一輝と葉は顔見知りや知り合いと呼ばれる関係にあるだろうが、それでも彼の窮地にわざわざ動いたりするような関係性ではない。

「だから最初はステラちゃんや妹ちゃんがやったんじゃないかと思って。でもふたりは全く知らなかった。なあ、しおりん……なんでお前はあの豚野郎にあんなことやっただんだ？」

「……なるほど。それが聞きたい事ですか」

『黙秘』するか？」

「いえ、それであれば構いません。ですが……それを話すためには少々邪魔な方がいらっしやいますので」

パチン、と彼女が指を鳴らせば西京の背後から人が倒れた音がした。

振り返ってみれば、葉暮姉妹と同じようにステラもまた地面に倒れていた。

「ッ、テムエ……！」

《契約》の穴を突いてステラに攻撃を行ったのか、と西京は葉を睨みつけるが、葉は西京を宥める。

「勘違いしないでください。話す内容が内容だったので、彼女に聞かれるわけにはいかず。少々眠って頂きました。私がこの場を去ると同時に目が覚めるようにはしたので、どうかご容赦を」

「内容……？」

「ええ、順を追ってお話しします。……まず最初に。私が赤座守を無力化した理由ですが——彼が紫苑さんに手を出したからです」

「——ッ！ 紫苑に、だと？」

西京が目を見開く。

赤座が自分の義理の息子に手を出していた。そんな話を彼女は全く聞いたことがなかった上、赤座もそんな様子は一切見せていなかったからである。

またはぐらかすのか、と問い詰める西京に葉は「流石に今の言い方だと嘘判定で心臓を貫かれますよ」と、苦笑する。

「酷いものでしたよ？」 曰く『百鬼紫苑は裏で選手たちを買収している。不戦勝で勝ち上がっているのはそのためだ』とか何とか。根も葉もない事山ほど書き連ねて、彼を貶す記事ばかり。……ご覧になりますか？」

そう言つて栞が虚空に手を入れ、西京に差し出したのはおよそ半月前のある夕刊。

一輝とステラの逢瀬を隠し撮りしたものを表紙としているのは西京も目を通したが彼女が見た物と違い、そこには百鬼紫苑が現在行っている不正と題して、栞が言った通り資料の数々を捏造して、さも不正をやっていますと演出を行っているページが追加されていた。

「……クソが」

その内容の酷さに西京は思わず雑誌を握りつぶしてしまった。

流星にこの見本誌そのものが西京を騙すための材料であるとは考え難く、その前提がもし正しければ先程本人が言ったように嘘という判定をくらつて心臓を八つ裂きにされてしまうだろう。

「これは実際に刷る前の見本誌ですけど……ひとまず倫理委員会が紫苑さんに手を出してきた、という事には納得していただけましたか？」

「……ああ」

栞は西京からぐちゃぐちゃになった雑誌を受け取ると、それを塵一つ残さず炎で焼き尽くしてしまう。

「でもそれならそれで腑に落ちねえところもある。なんで紫苑の記事が実際の夕刊にはなかったんだ？」

「私が裏で動いて、紫苑さんに関わる企みを全て潰したからです」

「……！」

軽く彼女は言ってみせるが、やっている事は並大抵の事ではない。

新聞や放送などの報道機関にはすべて報道の自由という物が存在する。ここでは詳しい説明は割愛させていただくが、『報道の自由』と名付けられている通り、ある一定のラインは定められているが（赤座のバックには《連盟》がいたのでそんなもの頼りにはなっていないが。実際一輝の場合は全く以て役に立っていない）、そこさえ越えなければ

ばマスメディアは大抵の事は自由に報じていいのである。

それをゴシップ誌とはいえ、一切の痕跡を残さずに上から『報じるな』と黙らせ、その後のネットでの炎上まで防ぎきることは極めて困難である。

だというのにそれを目の前の少女、及びそのバックにいる何者かはやってのけた。

「……黒坊のやつは防げなかったのかい？」

「やろうと思えばできましたけど、やる価値を感じませんでしたので。何せ同じFランクではありますが、紫苑さんと黒鉄さんではまるで格が違います」

「……。確かに格は違うねえ。同じFランクだけど紫苑は——」

「——《魔人》」
デスベラード

「……ッ」

「そういった誤魔化しは不要ですよ、西京先生」

にこり、と葉は微笑むが対して西京の動揺は大きかった。

その言葉が目の前の女から出てくるとは夢にも思わなかったからである。

「……なんで、それを知ってる？」

「簡単な事ですよ。私も《覚醒》直前まで至ったんです」

その後は怖気ついて扉を開けられずじまいですけどね、と葉は困ったように笑う。

そして「まあ、私の話はどうでもいいとして」と続けた。

「《魔人》とただの伐刀者の間には隔絶した差がある事は先生ならばご存じでしょう？　そして考えてみてください。もし紫苑さんが……《魔人》の一人が有事の際に満足のいく形で動けなくなったら。仮に動かせたところで事前準備や、事後処理に手間暇を割かれたら。それがどれほどの無駄か、どれほどの損害を我が国にもたらすか。貴方ならば理解できますよね？」

「まあ……滅茶苦茶無駄だろうねえ」

葉の背後にいる者、それが徐々に輪郭を帯びてきたことに西京ははあ、と大きく溜め息をついた。まず間違いなく彼女も自分がそれを

理解していて話しているのだろう。

こんな話をする者など……国家の運営に携わる者しかいない。

まとめますね、と葉は続ける。

「私が今回の件に関わったのは百鬼紫苑という《魔人》を運用するにあたって、赤座守の企み通りに事が進んだ場合莫大な損害をもたらすと予想されたため。また黒鉄一輝とステラ・ヴァーミリアンの交際問題を防がなかった理由は黒鉄一輝にそれほどの価値がなかった事、また紫苑さんの事態に対応していて満足な時間を確保できなかったためです」

西京の長い、長い沈黙。それは彼女の言葉を聞き、それを脳内で処理するのにかかった時間そのままである。

紫苑という《魔人》の一人を満足に動かせないこと。それ即ち日本と言う国家に莫大な損害をもたらすことが予想されること。

また一輝のスキヤンダルに対応しなかった理由は、言い方は極めて悪いが《魔人》でもないただのFランク騎士に貴重な労力と時間を割くことが無駄であったこと。

破軍学園の一教師としては、事前に生徒を守る立場にあつたにも関わらず最初から助けようとしなかった彼女に一言物申したいところはあがるが……それを言うのであれば、紫苑と一輝の二人に悪意が迫りながら、それを事前に察知できなかった自分達の方がよっぽどだろう。

少なくとも彼女に文句を言えるような立場ではない。

「さて、次は私の番ですかね。ひとつお聞きしても？」

短く済ませますのでと前置きし、葉は西京の返事を待たずに問う。

「彼……紫苑さんの事ですけど。彼——」

『混ぜってますよね？』

「……………」

『混ぜっている』

それが何を指しているのかは西京も理解できた。

——そも《魔人》とは何か。

それは伐刀者が運命という縛りの中で己の可能性を極めに極め抜

き、その上でその縛りを引きちぎって運命の外へと至った者達。『魔』と『人』の境界線上の上に立つ存在である。

故にどちらに転ぶかわからない。

些細なきっかけひとつで、心だけではなく身体までもが『魔』に染まる事も十分考えられる、非常にアンバランスな存在なのだ。

そして紫苑は……身体までもが『魔』に傾いていた。

「しかし彼は『覚醒』するに至って、あまりに無理をし過ぎた」
葉は言う。

彼は本来であれば『魔人』になどなれる筈がなかったと。『魔人』になるには、彼はあまりに普通が過ぎたと。

そんな彼が『『覚醒』に至る』という無理を通すためには、無茶と無謀とそれに見合うだけの代償を払わねばならなかった。

それが——肉体の変容。

変容した部位は髪と左目。共に日本人としては一般的だった黒いそれが、髪は骨のような白髪に、左目は血色に染まった。

肉体全体からしてみれば一割にも満たぬ変化だろう。しかしそんな僅かなものであれど、身体の一部が『魔』に置き換わっているというのは葉からすれば見逃せない事であった。

◇ ◇ ◇

翌日。

暁学園による破軍学園襲撃事件は燃え上がる校舎をバックに全国で報道された。

この未曾有の蛮行を行った暁学園に対し、七星剣舞祭運営委員会はすぐさま暁学園所属の学生騎士の騎士免許剥奪も視野に入れた強力な責任追及を開始。

誰もが彼らは厳罰に処され、逮捕、拘禁されるだろう、と破軍学園理事長室でテレビに視線をやる新宮寺黒乃と西京寧々、そして別室ではあるがニュースに視線をやる黒鉄一輝、ステラ・ヴァーミリオン、黒鉄珠雫、元暁学園所属の有栖院凧も思っていた。

しかし——映像が切り替わり、暁学園の理事長を名乗る人物が現れ

た事で状況は一変した。

暁学園理事長として名乗りを上げ、メディアに出てきたのは月影獏牙という男。現職の内閣総理大臣、即ち日本という国家の最高責任者である。

新宮寺が目を見開き、西京が誰にも聞こえないような声で「やつばな」と呟く中、映像は進んでいく。

月影は責任追及の場で謝るわけでもなければ申し訳なさそうにするわけでもなく、あろうことか清々しい笑顔で……こんな事を言った。

「素晴らしいだろう。吃驚しただろうか？ 連盟所属の学園などまるで相手にならない。これが！ 彼らこそが連盟の走狗である七星に代わり、日本の未来を担う『国立・暁学園』の生徒諸君だ!!」

次の瞬間、会見会場がまるごと闇に包まれ、取材にやってきた報道陣のざわめきが場を席卷していく。

そしてその闇は程なくして取り払われ、先程までは月影しかいなかった場所に黒で統一されたスーツを纏った面々が並んでいる。

豊満な胸部をこれでもかと露出した女性、柔和な笑顔を浮かべる金髪の少年、顔に十字傷のある青年、黒いライオンに乗った少女と傍に控える侍従、個性の暴力のような面々の中では一見埋没しそうな、それどその美貌で視線を引き付ける黒髪の少女、そして——白髪に黒と血色のオッドアイを持つ少年。

「なっ………!」

「はあ?」

「なんで………!」

テレビを見ていた破軍学園の面々は驚愕する。

何故なら暁学園の生徒として紹介された中に——。

《黒鬼》百鬼紫苑の姿があったのだから。

第31話

何故彼が破軍学園ではなく、暁学園の生徒として参戦しているのか。

それを語るためには少々時間を巻き戻さなくてはならない。

◇ ◇ ◇

西園寺栞、改め月影栞は《蒼天の扉》を用いて山形県のとある場所までやってきていた。

その場所とは、つい一日前まで破軍学園と巨門学園が合同で合宿を行っていた宿泊施設である。

その栞が昨晚まで使用していた部屋……即ち百鬼紫苑が眠っていた部屋だ。

紫苑を眠らせておいたその部屋は、室内を丸ごと《幻想結界》でコーティングしており、その部屋からの脱出を封じていた。紫苑が万が一早めに目を覚ました場合の対策である。

と言うのも彼は度重なる限界を超えた修練に加え自身の能力である《努力》が組み合わさった結果、肉体の疲労回復速度や傷の癒える速度などが人間の限界を軽く超えている。

そこに加えて《安息の揺り籠》の魔力回復速度上昇などが組み合わさった場合、栞の予定していた時間よりも早く目を覚ますことも十分に考えられた。

その時外に出られては南郷や施設の人間に『紫苑が合宿し説に残されている』と露見する恐れがあった。そうすれば彼らは間違いなく紫苑を破軍へと送り届けようとするだろう。

そうなれば彼女達の計画は根底から覆されることは必至。

ならば最初からその可能性を考慮しないで済むように『出入口の全てを封じる』というプランに出たのである。

その他にも悪夢を見ないで済むようにストレス軽減の香りなども施してきたが、それは栞の個人的な気遣いのためここでは割愛させていただきます。

部屋にやってきた栞はまず机の上を確認する。

そこには昨晚紫苑が眠ってから作っておいた、紫苑が目を覚ました時の食事（菜からすれば十分な量だが、紫苑からすれば間食にも満たないだろう）であるおにぎりが置かれていたのだが……。

「ん、綺麗に食べてある。……となると」

菜は部屋の中につけておいた真つ白なドアを開ける。

そこには破軍学園の敷地内に設けられている鍛錬を行う場所、その紫苑と菜がいつも使っている場所の風景が広がっていた。

菜が誇る《幻想結界》、そして真の能力たる《夢》の『小さな世界の創造』を組み合わせ空間をいじった『夢の世界』が広がっていた。

ここは紫苑が目を覚ました時に鍛錬を満足に行えるように、と作っておいた空間である。自分の勝手な都合で彼を閉じ込めるのだ、この程度の環境はそろえておくべきだろう。

さて、肝心の紫苑の居場所であるが……この『夢の世界』は菜を主とする小さな世界である。そんな場所である意味では異物である紫苑の場所がわからない道理はない。

彼の元に辿り着くには、そう時間はかからなかった。

「……来たか」

彼は菜の気配を確認すると《亡華》を収め、菜に向き直る。

「……ご迷惑をおかけし申し訳ありません、紫苑さん。そして……ありがとうございます。この場に留まってくれて」

「あんな置手紙があったらな」

そう言って彼がポケットから取り出されたのは折りたたまれた可愛らしい便箋である。

そこには紫苑の現状の説明や、鍛錬場所の使用方法、そして食事や後程迎えに来るので可能であればその部屋から出ずに待つてほしい。食事などはテーブルの上に置いてある、といった旨が書かれた菜からの手紙が置いてあったのだ。

「それにお前は理由もなくこんなことをする奴じゃない。……ちゃん」と説明してくれるんだろう？」

「ええ、それは勿論。では説明をするためにとりあえずはシャワーを浴びてきてくださいませんか？ あ、あと……」

「……？ あと、どうした」

「紫苑さん。今から食べるならお肉とお魚、どちらが食べたいですか？」

一体なんの事だ、と紫苑は困惑の表情を見せたものの、彼女の性格は承知している。ならば何かしらの意味があるのだろう……と、彼は素直な気持ちを口にする。

「肉」

◇ ◇ ◇

東京都のとある路地裏。

路地裏ではあるが、ゴミなどは溢れておらず綺麗なものだ。おそらくは頻繁に清掃が行われているのだろう。

そこにふたりの男女が出現した。

言わずもがな、百鬼紫苑と月影栞である。

そこに到着するや否や、彼は軽く溜め息を吐いた。

「……便利なものだな」

紫苑の拘禁（といってもその手段はあまりに優しすぎたが）を成し遂げた結界の構築に加え、およそ400kmの長距離転移と、彼女がやっている事はあまりに並外れている。

これがたったひとつの能力から派生したものであるとは話を聞いた今でも信じられない、と紫苑は嘆息する。

自分の能力とは比較することすら烏滸がましい圧倒的な力。

今さら嫉妬は覚えたりしないが、それにしただって神はこの少女にどれだけの物を与えたのだろうか。

彼の言葉に栞は苦笑すると、「こちらです」とエスコートをするように手を取った。

路地裏から出ればそこにあるのは、しばらく見なかった人の群れ。街頭テレビは『破軍学園襲撃』の報を発しているが、紫苑はそれに一瞬足を止めただけですぐに栞の後についていく。

そうして辿り着いたのは並び立つ高層ビルのひとつ。中に入り、エレベーターのボタンを押せば程なくして目的地にたどり着く。

洒落た、そしてこういうところ縁のない紫苑であつても居心地

の悪さを感じさせない内装は、店舗としての格の高さを感じさせる。ふたりを出迎えた店員に、「待ち合わせです」と栞が言うと案内されたのは奥まった場所にある個室だ。そこに彼女がノックを数度すると、扉が開かれる。

「お疲れ様、栞。そして……君とは初めましてだね、百鬼くん」

黒のスーツに色の入った眼鏡の奥の瞳には深謀遠慮が宿っている。深い皺が刻まれた顔を綻ばせ、二人を歓迎するその壮年を、紫苑は知っていた。

「……何故、日本の首相がここに？」

「おや、知ってくれていたか。ついでに言えば、その栞の養父でもある。さて……積もる話もあるが、それは食事をしながらにしようか」

「まずは此度の非礼を詫びさせてほしい」

粗方注文した品が届き始めた時、現内閣総理大臣——月影獏牙は百鬼紫苑に頭を下げた。

「が、肝心の紫苑はというと、
「非礼？」

と首を傾げるばかりであった。否、ばかりではなく網の上に乗せられた肉を自身の皿によそい、口に運んでいた。どちらにせよ、彼の言う非礼に心当たりがない事には違いないが。

「君を拘禁し、そして破軍学園を襲撃した事。我々の目的に必要な不可欠な事であったとはいえ、我々の身勝手な都合に付き合わせてしまった事。本当に申し訳なかった」

「ああ……いや、別に気にしていな……いません。俺はただ寝ていただけです。とはいえ……気になる事もある。さいおん……栞、アレはどうやったんだ？ 強制的に眠らせる類の技なら、俺が気付かない筈がない」

「アレはですね……」

栞は彼に説明する。

自分が紫苑に仕掛けた技は身体 of 自然治癒力を底上げする技であり、そこに付随する睡眠欲求を増大を利用して紫苑を長時間眠らせた

事。紫苑の超直感はこの技を自身に対して恩恵のある《回復》であると判断したのではないか。

「なるほど……」

《究極生存本能》カワードインスタインクト——他者の攻撃のみならず、事故や天候の悪化といった自身を害するものに悉く反応するそれを、回復という手段で誤魔化すとは。

「……そういった面ではお前に勝てる気がしない」

「真つ向勝負では貴方の方がずっと強いんですよ？ 得意分野でくらい勝たせてください」

そも葉がこういった策を弄したのは、破軍学園襲撃時に紫苑がいた場合、後の計画を大きく修正しなければならない可能性があったからだ。

破軍学園襲撃計画の目標はただ破軍学園に勝つのではなく、火を見るよりも明らかな圧勝を収める事。

無論、暁学園最強戦力である葉と王馬がふたりがかりで紫苑を相手取れば、勝利する事は可能だろう。というよりも、そのふたりでなくてはそもそも勝負にならない。

しかし彼らが紫苑の対処に回ると一輝やステラ、東堂に貴徳原といった破軍学園最高戦力を充分な戦力で迎え撃てない。彼らを抑えるために戦力を回すのであれば、新宮寺や西京を抑える者がいなくなる。そうなれば当初の目標である圧勝を収めることは難しくなる。

要するに紫苑を戦闘の場に立たせることが、暁学園の敗北条件であったということだ。あの場面だけ切り取れば圧勝したように見えるが、存外綱渡りの戦いだったわけである。

そういったやりとりを微笑まし気に見守っていた月影に、紫苑は「それで」と疑問をぶつける。

「俺を呼んだ理由は何なんですか？ わざわざ俺に謝るためだけじゃないんでしょ？」

「……葉」

彼の言葉に月影は紫苑ではなく、葉に視線を向ける。

「構わないね？」

「……すみません、紫苑さん。少し席を外します」

そういうや否や、葉は誤魔化すように笑って部屋を出て行ってしまふ。彼女があまり聞きたくない話なのだろうか、と紫苑は思うもそれ以上思考を巡らせるよりも早く月影が話を切り出す。

「百鬼紫苑くん、君には私の計画を成し遂げるための協力者となってほしい」

「計画？具体的には」

「《国際魔導騎士連盟》からの脱退、及び《同盟》への鞍替え。……といつてもあまりピンとは来ていないかな」

月影の言葉に紫苑は頷く。

《連盟》《同盟》という言葉の意味はいくら世間知らずな彼でも知っている。

《連盟》と《同盟》はこの世界を三分する陣営のひとつ。《連盟》は小国同士の相互扶助を円滑に行うための機関で、日本やヴァーミリアン皇国もこの陣営に属している。対して《同盟》はアメリカやロシアといった大国同士の相互不干渉の誓いによる結び付きであり、《連盟》ほど組織だつて動くことは滅多にない。

だが紫苑が知っているのはここまでだ。何故《連盟》を脱退する必要があるのか、《同盟》へ参加する必要があるのかといった事には見当がつかない。

なんとなく想像できるのは、目の前にいる男が真剣にそれを目指している事。そしてその理由は私利私欲といったものではなく、他者から見ても筋が通っているだろう事くらいだ。

月影は彼の顔を見、「では少しばかり現代社会の授業をすることにしようか」と言うと、現在の社会状況について説明する。

「現在の国際社会は日本が現在所属する《魔導騎士連盟》、アメリカや中華人民共和国が所属する《同盟》、そして《解放軍》……これら三つの勢力が睨み合いを続けることでなんとか均衡を保っている状態にあった。しかしこの均衡が崩れ去ろうとしている。何故か、百鬼くんは想像がつかかな？」

「……《解放軍》を潰す計画をどこかの国が立てている、とか？」

「《解放軍》がそう遠くない未来に機能しなくなる、という点においてはその通りだ。より正確に言うのなら……陣営の中核になっている伐刀者《暴君》の寿命がそう長くはないからだ」

上記の三つの陣営にはそれぞれ最強とされる伐刀者がひとりいる。

《連盟》には《白髭公》アーサー・ブライトが。

《同盟》には《超人》ザ・ヒーローエイブラハム・カーターが。

《解放軍》には《暴君》が。

彼らの強さが拮抗している事がこの薄氷の上に成り立つ国家情勢においては重要な事だった。だがそのうちのひとりがそう遠くない未来に死亡する。

これが国家同士の結び付きが希薄だった《同盟》ならばともかく、圧倒的なカリスマと圧力で辛うじて組織の体裁を保っていた《解放軍》ならば《暴君》の死亡＝組織の瓦解に繋がるのは必然。

否、組織の崩壊は既に始まっていると月影は語る。

そしてその結果、《連盟》は《同盟》においてある点で致命的に遅れを取っているのだ、とも。

だが、

「組織がなくなるとなればそこに所属していた奴が《連盟》か《同盟》に流れる。しかし《連盟》は《解放軍》に対してはつきりと『お前らは敵だ』って姿勢取っていた。そんな昨日の今日まで自分を潰そうとしていた連中の仲間になろうとする奴はそうそういないだろう……ということですか?」

月影が説明するまでもなく、彼は話の要点を押さえていた。

それに満足げに頷くと、月影は説明を続ける。

「そして《解放軍》という必要悪によって保たれていたバランスが崩れ去った結果どうなるかという……第三次世界大戦だ」

「……そうなる根拠は?」

「ある。まずひとつは考え方の違い。小国も大国もひとつの国家として独立し、必要があれば助け合おうという考え方の《連盟》と小国を大国の元分割して管理下に置こうという《同盟》は決して相容れない。そして私の能力によるものだ」

「貴方も伐刀者だったんですか」

「ああ。といっても私の能力は発現したその時点から国家機密に指定されているからね。知らないのも当然だよ。……すまない、話が逸れたね。私の能力は因果干渉系能力《歴史》。一定範囲内の人物や物の《過去》を視る力なのだが……時たま、《予知夢》といった形で《未来》を見せてくる事がある。そこで第三次世界大戦にて敗北した日本の光景を見た」

「それを今見る事は」

「可能だ。……しかし君には見せられない。葉からは『絶対に見せるな』と釘を刺されているし、私も君は見るべきではないと思う」

あの光景は……地獄だ。

壊滅した東京。そこで燃え盛る炎はその映像を見ている者に確かな熱さを伝え、炎に焼かれ、瓦礫に身体を潰された人間の絶叫が鼓膜を叩き、人が焼ける臭いは吐き気を催すには十分すぎる。

それを紫苑に——重篤な心的外傷後ストレス障害を患っている人間に見せればどうなるか。

「根拠はある。だが君には見せられない。誠意に欠ける対応だとは承知しているが、どうか……聞き入れてはくれないか」

「……わかりました」

元より確かな根拠があるのか確認を取りたかったただけだ。それに彼の態度を見ていれば自分に嘘を吐いていないことも、自分の事を考えたうえで『見せられない』と言っている事はわかる。ならば紫苑としても『絶対に見せる』と言う理由はない。

「それで具体的にどのよう計画を進めるんですか？」

「七星剣舞祭を利用する。そこで君の力が必要になるわけだ。……《黒鬼》百鬼紫苑。君に私が求める事は至ってシンプルだ」

「君には——我々《暁学園》の生徒となり、七星剣舞祭で優勝してほしい」

「君が目指す《最強》へ、私の願いも乗せていってはくれないか。これ

はそういう話なのだよ」

微笑み、月影はそう言った。

◇ ◇ ◇

店を出たときには、もう夜更けとも言っていない時間だった。

あの話を聞き終わり、少しした後には葉も戻り、改めて食事をという話になったからだ。

「……お疲れ様でした、紫苑さん」

「言われるほど何もしてない。タダ飯食って、少し話を聞いただけだ」

「美味しかったですか？」

「ああ」

それは良かった、と葉は微笑む。養父が会計の際に顔を引き攣らせていたが、日本最強クラスの騎士の力を借りようというのだ。その程度は必要経費だと割り切ってほしい。

「……それで、どうされるのですか？」

「総理の話か？ 一旦保留にさせてくれって言ったよ。話のスケールがでかすぎて想像できない」

「でしょうね」

いきなり日本の首相が話を持ってきて、国家の未来のために協力してくれと言ったのだ。その場でわかりました協力しますとも、断るとも言いづらいだろう。

「まあ、協力したくないならしたくないって言って良いんですよ。あの人の言葉に強制力なんてものはありませんし、紫苑さんを脅して是が非でも協力させる、みたいな事はしませんから」

「もしあの人がそういった事をしてきたら？」

「盛大な親子喧嘩が始まりますね」

なんだそれは、と紫苑が苦笑する。

自分の知っている葉は喧嘩をしているイメージがまるでなかったから。

「なあ葉」

「はい、なんででしょう？」

「お前は俺に総理の計画には乗ってほしくないのか？」

「……………ええ、そうですね」

苦笑し、栞は言う。

「その理由は？ お前はあの人の計画に協力しているんだろう？」

「……………貴方にそれ以上何かを背負ってほしくなくて」

姐の剣術を世界最強の物とする——否、しなければならぬという重責。姉の輝かしい未来を奪ったという罪の意識。それらは一人が背負うにはあまりに重すぎる。そこ更にに国の未来なんて物を背負わせたらどうなるか。

それに……………政治の道具として彼の剣が使われるというのも栞にとって嫌だった。

《瀧華一刀流繚乱勢法》が、彼が一途に研ぎ澄ませ続けてきたあの剣技が。彼の目指す夢とはなんら関係ない裏賭博の対象になる事が嫌だった。

「……………前々から思ってたが、お前も大概だろ」

今まで隣で栞という一人の人間を見てきて、思う。

栞はどこまでも『他者』が自身の中核なのだ。

他人のために動く。他人の幸せこそが自分の幸福だというあり方。その姿勢は人より多くのものを背負う込むだろう、と紫苑は思う。

なまじ何でもできる力があるからこそ、そういった力に頼る連中が群がってくるのではないか。そして栞はそういった者達の願いを悉く叶えてしまうのではないかと。

「私は好きでやっていますから」

「なら俺も同じだ。……………それに」

紫苑は《亡華》を顕現させる。

夜の闇よりも濃い霞。それが彼の手の中で一振りの日本刀と成る。

「俺の剣には俺以外の想いは乗っていない」

それが軽いとは思わない。伊達でも十年以上——人生を賭けてきたものだ。

だが自分の剣にはそれ以外がない。

東堂刀華であれば自分を育ててくれた『若葉の家』の子供達。

ステラであればヴァーミリオン王国の国民達。

そういつた自分を大切に想ってくれる人達の想いは、何もないと紫苑は言う。

「そんな事は……」

「あるさ。そもそも『薫姉の剣を一番にしたい』のもただの自己満足だ」

あの人は優しいから、自分が意識不明の状態に陥ったのも紫苑のせいだとは言わないだろう。自分がこうやって戦い続けている事にも負い目を感じてしまうだろう。

そうわかっているにも関わらずこうして戦っているのは、自慰行為にも近いものだ。何かせずにはいられなくて、自分ではどうしようもなかったと諦めるのが許せなくて。

だが、

「そんな自己満足が、他人のになる。自分の想いしか乗せていなかった剣に、誰かの想いを乗せられる。それは……悪くない、と思う。……なあ、栞。俺はお前に助けられてばかりだ」

「……」

栞は黙って頷き、彼の言葉を待つ。その先の言葉を、薄々察しながら。

「それに俺としてはただ学校が変わるだけで、やる事自体は何も変わらない。破軍でなければいけない理由はどこにもないし、暁では参加できない理由も同じくない。もし俺が暁として参戦するなら、ややこしい問題は全てあの人が引き受けてくれると言ってくれたしな。だからお前が変に負い目を感じる理由はどこにもない。……なんて言っても、お前はいらん事で色々頭を悩ませたりするんだろう。だから素直に俺がやりたい事を言う」

「……」

「俺はお前の力になりたい。お前が何度も俺を助けてくれたように、今度は俺がお前を助けたい。俺が戦う理由の一つに、俺の剣に、お前の願いも乗せて振りたい。そして……勝ってみせる。《瀧華一刀流繚乱勢法》こそが最強の剣だと示してみせる。お前の願いも叶えてみ

せる。それが国家の存亡に繋がるとしてもだ」

「……………」

「勿論、お前が俺の力なんて邪魔だっというならこの話は全部無しだ。だから…………聞かせてくれないか？俺がどうこうじゃない。お前自身の願いを。俺にどうしてほしいのかを」

彼の言葉はどこまでも真っ直ぐだ。

嘘なんてどこにもない。彼は本心から自分の力になりたいと願っていている。

それでも…………言葉が溢れた。

「どうして、そこまで…………してくれるんですか？」

「友達の力になりたい。別に変な事でもないだろ」

ただそれだけの理由で国家の未来を背負ってみせる。たった数か月前に出会った人間のために。

それに栞は…………嬉しいと思ってしまった。